

當世春生集

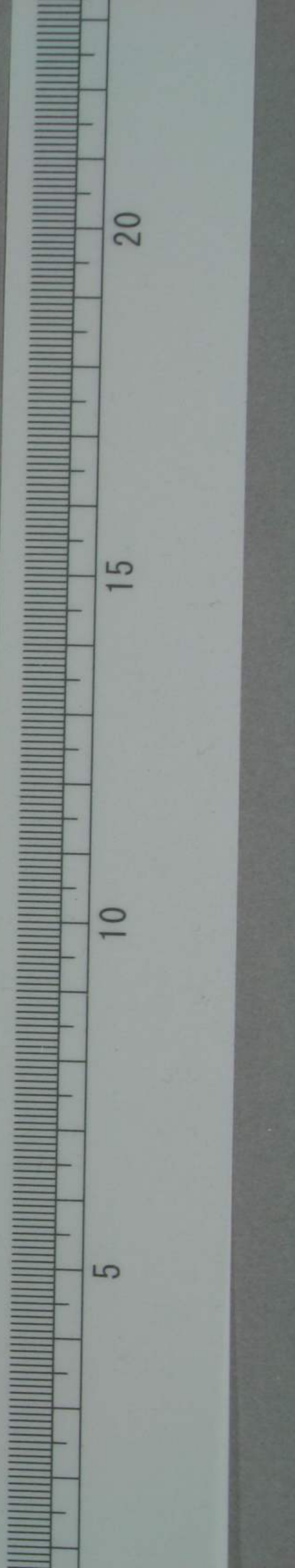
一

三

歎

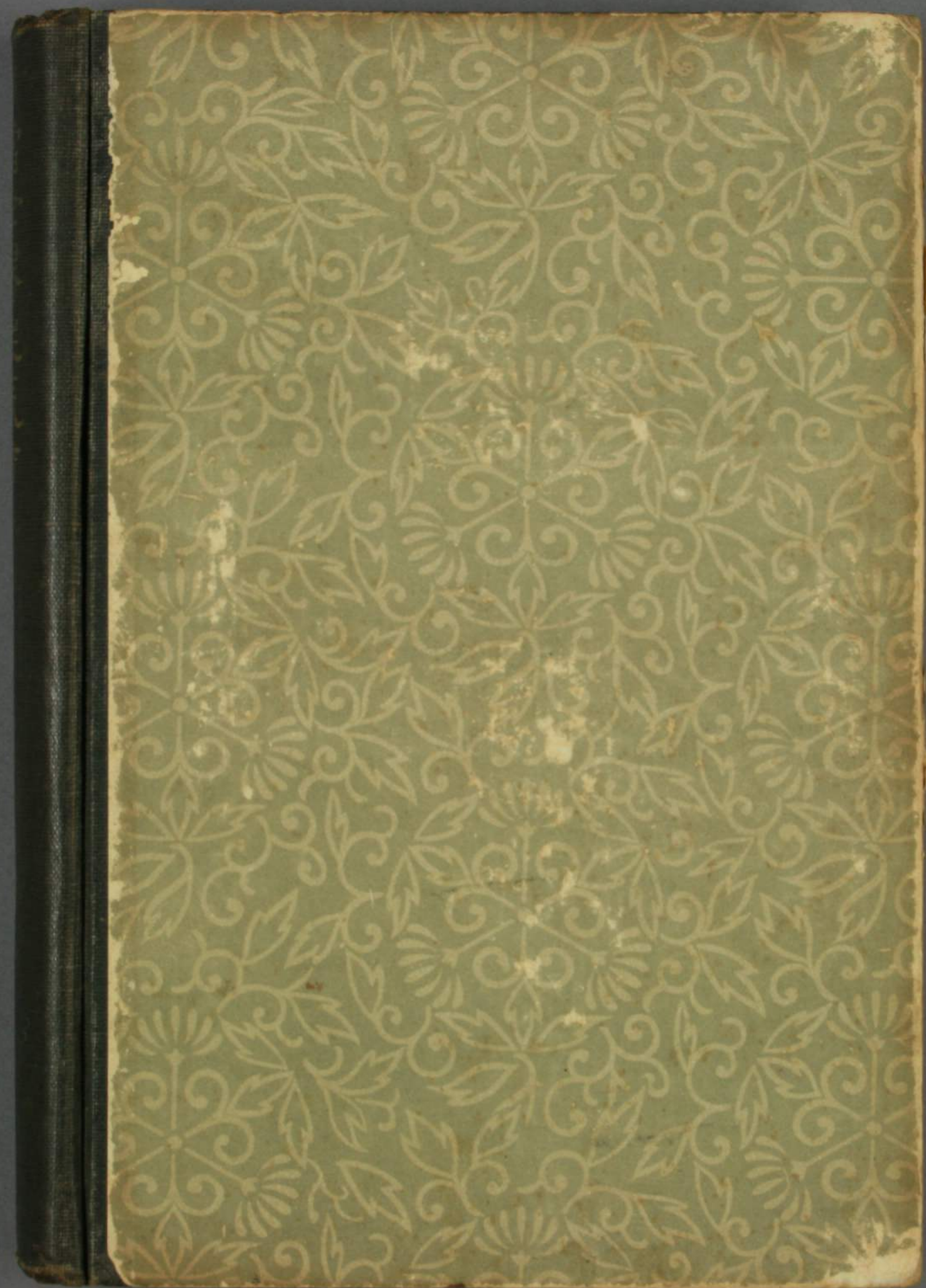
齋

春の世に於ける先生我著



富如農天探贊

聖德宗經世贊全錄(一)





明治文學名著全集

編纂者

木	本	神	山
村	間	代	口
	久	種	
毅	雄	亮	剛

春のやおぼろ戯著

一讀三歎

當世書生氣質全

東京 東京堂 發兌

解題

坪内逍遙補
神代種亮稿

一讀
三歎
當世書生氣質

春のやおぼろ戯著

附錄

當世書生氣質の批評
「梧堂言行錄」抄
「天下之記者」抄
私の學生時代
書生氣質の芝居
讀檄寄一橋同窓會幹事次韵
作者餘談

半峰居士

高田半峰
市島春城
鷗外漁史



口繪

初版本口繪(原色版一葉)

作者畫稿(寫真版二葉)

梅蝶樓國峰畫

挿繪

初版本挿繪(寫真版十八圖)

梅蝶樓國峰畫

葛飾爲齋畫

長原孝太郎畫

武内桂舟畫

口繪

初版本口繪（原色版一葉）

作者畫稿（寫真版二葉）

梅蝶樓國峰畫

挿繪

初版本挿繪（寫真版十八圖）

梅蝶樓國峰畫

葛飾爲齋畫

長原孝太郎畫

武内桂舟畫



一讀
三歎 當世書生氣質解題

坪内 逍遙 補
神代 種亮 稿

一讀「當世書生氣質」は、春のやおほろの雅號を以て逍遙坪内雄藏の著作せる所にして、明治十
三歎「當世書生氣質」は、春のやおほろの雅號を以て逍遙坪内雄藏の著作せる所にして、明治十
三四年頃の東京に於ける一團の書生を寫したる小説なり。二十回を以て結了す。

作者の日記に據れば、起稿は明治十八年四月九日なり。同日記四月二十三日の條下に「中尾に
會ふて書生氣質の豫約を爲す。」とあり。同五月十七日の條下に「中尾失敗し芝區三田臺裏町に移
轉。書生氣質破約となる。間野に譲る。」とあり。(作者自註。晚青堂間野秀俊氏は長谷川如是閑氏
の嚴父山本金助氏と共に淺草花屋敷を創設せし人にして、同時に素人出版業を創めしなり。)「原
稿料は日記に記載なく又記憶もなければ、一冊何程といふ約束なりし。」(作者直話)又同日記五

月二十日の條下に『東京金玉社（麴町區飯田町三丁目十九番地）田口高朗來る。書生氣質印刷を託す。』とあり。同五月二十四日の條下に『中尾直治來り、書生氣質版權讓受を爲す。間野と出版を相談す。』とあり。同五月三十一日の條下に『晚青堂出版豫算を爲す。』とあり。同年六月二十四日の條下に『書生氣質第一號出版。』とあり。又翌十九年三月十七日の條下に『出校（註。東京專門學校へ）。進文學社行。此日逆上頗る酷し。此夜長谷川（註。二葉亭四迷）來訪。大に美術及び小説を論じ、小説の文章論に及ぶ。同子が書生氣質の批評尤も奇妙也。此夜、一事を爲し得ずして寢に就く。蓋し逆上の爲の故なり。』とあり。（自註『其頃は、くだらぬ仕事で時々は息の繼ぐ間も無いほど忙しいので、落着いて瞑想するなどいふ事は殆ど無く、随つて長谷川君の眞價は、まだく知つてゐなかつた。今ではまるで他人の事のやうで思出せぬが、半ば君が與へた印象の爲に腦作用が一時擾れたのもあらう。又何故に「奇妙也」と記したか是も思ひ出せない位だが、慥かこれは「時事新報」か何かの攻撃を一面は僕の爲に辯護し、一面は暗に諷諭的に僕に教へんとしたのであつたかと思ふ。大意は「時事新報」が、文學士ともある者が藝者などを女主人公にして輕薄書生の閱歷を綴るなどは不都合だと、「書生氣質」を攻撃したのに對して、人生は觀察の仕方次第である。「書生氣質」の如きは裏面より見れば人生の悲痛を一層著しく感ぜしむ、悲劇的

の味ひがある云々、といふ論であつたと思ふ。よく呑込みかねしゆゑ「奇妙」と記し置いたのであらうか。』——（「二葉亭と僕」）後年作者「書生氣質」を呼んで戯れに「予の舊惡前書」と謂へり。

異本に三類あり。各内容外形を異にせるを以て大略を説明すべし。

- 一、初 版 本 系
 - 初版本（和装十七冊、間野晚青堂 明治十八年六月——明治十九年一月發行）
 - 合 本（和装二冊、間野晚青堂 明治十九年三月發行）
- 二、別 製 本 系（別製本）
 - （四六判、黒クローリス、間野晚青堂 明治十九年八月發行）
 - （同上再版、背クローリス、間野晚青堂 明治十九年十二月發行）
- 三、別製本第一異版系（別製本第一異版）
 - （四六判、背クローリス、木村晚青堂 明治二十年六月發行）
 - 別製本第二異版
 - （四六判、背クローリス、木村共和書店 第一版不明）
 - （第七版明治二十二年四月發行）
 - （菊判、大和綴、大川屋 菊判より改装か不明）
 - （第九版明治二十五年十一月發行）
- 四、別製本第二異版系
 - 改 裝 本（何版より改装か不明）
 - 覆 刻 本（明治三十年六月、博文館發行）
 - （太陽）三週年記念號收載

(註一)。「↓」は同一版の重刷。「↓」は本文加筆の上組替。

(註二) 別製本第二異版の項、「七版」「九版」等が何より起算せしか不明なり。此系統本の奥附には「明治十九年三月八日合本御届、明治十九年八月日別製本御届、明治二十年五月六日讓受御届」の次に直ちに「何年何月第何版」とのみありて、別製本第二異版の第一版發行年月を逸しあり。

(甲) 初版本

全十七冊。半紙本。晚青堂出版。第一號の發行は明治十八年六月にして、第十七號は翌十九年一月なり。各號版權免許の年月は再版本の末尾にあり。第九號までは一回分が一號にして、其の以下には二回分を一號とせるもあり。奥附には孰れも「出版人間野秀俊」「發兌元晚青堂」とあり。一冊の紙數は五枚乃至十一枚にして、總紙數は本文百七十一葉なり。定價各七錢。印刷部數は不明なれども、種々の點より推考するに一千部を超えざりしは確かなり。

『廣告の事は記憶なし。當時は餘り廣告はせざりき。繪草紙屋の店頭にぶら下けてありしことは明に記憶す。』(作者直話)

表紙は共紙にして二度刷なり。『山東京傳の善玉惡玉を摹して一讀三歎の四字を配したるは作者の案にして、下繪を書きたりと記憶す。』(作者直話) 右肩に「春のやおほる先生戯著」とあり。此書の他、同じ作者の「新磨妹と背鏡」「内地雜居未來の夢」「京わらんべ」「朗蘭夫人傳」同異本「交際の女王」の七書即ち、明治十八年六月より二十年十二月迄の間に著譯せるものの表紙には何れも「先生」の文字あり。『先生の文字は作者の關せざるところ。』『書卸しの長篇小説を分冊して刊行せることは當時にありては異例なりき。』(作者直話)(正岡子規云ふ。『春廼舍氏始めて書生氣質を出版するに冊を分ち雜誌風に發兌せしより、世人皆其簡便なるを知り、終に小説の雜誌の流行を來したり。』『子規全集』第八卷)。同作者の「妹と背鏡」「内地雜居未來の夢」の二作も亦分冊式の發行法を採りしものなり。

口繪は第一號と第九號との巻首にありて木版彩色摺なり。共に梅蝶樓國峰の畫くところ。挿繪は墨摺にして各號に一葉つつあり。署名には、國峯、葛飾、桂舟、長(長原孝太郎)とあり。

本文は清朝四號活字にして振假名附、三十七字詰各葉二十八行なり。組方の特色凡そ次の如し。

- (一)『』。句讀點は一種にして、行中に入れずして行側に出せり。『、』は歐文を音寫する場合の語間にのみ用るあり。
- (二)『○』節を更むる場合、對話中に語勢の一轉する場合、對話の中絶する場合、人名不定の場合、又は伏字に之を用るあり。
- (三)『┘』對話の次に續けて地の文を出す場合、又は引用文の首に之を用るあり。又、引用文は別行一字下げにせる箇所もあり、『┘』にて區別せる箇所もあり。
- (四)『（）』對話は行を更めず、人名の略稱を之にて圍めり。但し隣室の對話を描寫する如き場合には別行一字下げとせり。又、篇中の人物が朗讀する文章は別行一字下げとして、之に對話を挟む場合には行を更めあり。歐文の原語を音寫して挿入する場合にも此符にて區別しあり。
- (五)『〔 〕』本文中の歐語に譯語を附する場合、譯語に原語を添ふる場合、本文に註を附する場合、對話を略して描寫に代ふる場合等に之を用るあり。
- (六)對話中に於ける人物の態度を描寫せる句は六號活字にて二行に組込みあり。
- (七)歐文式の記號は使用無し。但し第十回には「——」を、第十五回以下には『……』を

對話中に用るあり。又『ヅ』は第十回以下に用るあり。

(八)對話中に六號活字にて『引』とあるは舊來の使用法に同じ。但し歐語の音寫には『┘』を用るたるもあり。

(九)欄外に註あり。

第一號卷首にある「はしがき」は「小説神髓」との關係を明かにするものなるが、後の洋型異本に之を闕く。

第九號卷首に附せる一文は、當時の批評界を窺ふ一資料にして、又之によつて作者の用意如何を看取するを得べく、作者が論辯と創作とを同時に併せ進めたりしものなる事を明かにするものなるが、後の洋型異本には省略せり。其語句につきて作者曰く『當時饗庭篁村「ハテサテ馬鹿な事を。」の結句を「これは氣に入つた。」と語りたることあり。自由の燈は自由黨の機關新聞にして、大蘇芳年の挿繪問題にて評判なりき。』又曰く『第一に引用せし批評は時事新報に載れるものを指す。文學士ともあらうものが藝者などを主人公にしたる戯作を書くとは云々との評なりと記憶す。』(参照。「時事新報」に出でたる「書生氣質」の批評の一例を左に抄出す。)

春のやおほる氏戯著當世書生氣質の第十二號は、神田同朋町の晚青堂より發兌す。最初該稗史世に出でし時、或る人々の評には、舊幕時代の空氣に養成せられたる尋常の戯作者と違ひ、苟くも西洋文學の思想に富める人の筆に成りたるものゆゑ、如何なる脚色にて當世の書生を書顯はすや、面白き妙趣もあらんかとて、その出版を待受け、追々閲讀するに、殺風景なる神田邊の牛肉屋洋弓場又はこれに引替へ粹も粹なる待合茶屋から北廓邊の通遊にまた候轉じて、温泉屋の泊り込みなどと、終始同じ情話にて、書生の快樂は情欲に限るもの如し。十七篇の残る五篇は如何なる結末にて讀者を驚かさやは知れざれど、十二篇までの趣向にては讀者果して東京當代書生の氣質を抽出して違はざるもの又遺さざるものとは申し難からん。(明治十八年十一月十八日、新刊紹介)

第一回第三回第六回第七回の末に「作者曰く」あり、孰れも洋型異本に闕如す。

最終卷(第十七號)の末にある一文も、挿繪と共に後の洋型異本に缺如す。其の文中、「目下他の著述」と云へるは「新磨妹と背鏡」なること、其の第一號が明治十八年十二月に出版され居るによりて明かなり。又其文中に「後篇起稿云々」の句あれども、遂に出づることなかりき。第四回第一節の終に在る左の句は洋型異本に闕く所。

近きころ某がいはれし言葉に。官員は娼妓と一般。一トたび官員となりたる時には足をぬくこといとく難し。其故はいかにといふに。官員となれば如何程にても金を貸すものが多かるから。自然に借財が殖え行く譯なり。而して免職となる時には四方八方の高利貸が皆催促に來る事故。いやでもおうでも官員をば止める譯にはゆかぬといはれき。

此の數行を刷り潰しあるは、作者の談話に據れば、發行者が官吏侮辱に依る發行禁止を警戒するに出でたるものにて、第九回第十一節(「人は情慾の動物なり。」云々とありて人々氣質を異にするを説明せる一節にして洋型異本に省かれあり。)に在る左の句。

上見れば及ばぬ事の多いといふ。むかしの謎かはしらせれども。お釜大の高帽子や。高麗人よろしくてふ麥藁帽子で。ヂツト頭を制へつけて。自ら卑屈を表明せる。○○さんがとんだ處で足を知りて。三拾圓で甘心なし。若くは五六圓で満足するとは。さてさて色々なる人心。其情欲に高下はあれども。

の「官員」を「○○」とせるも同一の理由に本づくものなり。但し作者の許諾を得たるものとなり。又「龍○主義を主張」「龍○に溺る」「龍○を周旋」(洋型異本には「龍○」を「何」)と改めあり。)の「○」も發行者の需めに應じたるもの。本解題中、活字の項に述べたる「伏

字」は是等を指したるなり。

(乙) 合本 全二卷。和紙和装。明治十九年三月晚青堂出版。表紙の別表紙なること、下巻末に半峰居士（高田早苗氏）の「當世書生氣質の批評」（讀賣新聞所藏）の一文を附載せること、初版本の版權免許月日を奥附に記せる事等が初版本との相違なり。奥附名義人は初版本に同じ。半峰居士の批評文は後の洋型異本には全文を附載せず。依りて本書の巻末に全文を附載す。但し句讀點は校訂者の新に加へしものなり。

(丙) 別製本 (初版) 全一冊。洋装四六版。表紙は黒クロース、空押し模様。丸背。背文字は「一讀三歎」當世書生氣質、全」と隸體にて金色に印せり。天地に唐草模様あり。明治十九年三月晚青堂出版。初版本より「缺文」「割註」「作者曰く」「第九回第一節」等を省略し、字句に少許の改削あり。半峰居士の批評文は全文を附したり。活字は清朝四號旁訓附、三十二字詰十二行、子持罫にて圍み、本文のみにて三百八十六頁なり。奥附に「別製本御届」とあり、「出版人間野秀俊、發兌元晚青堂木村莊二郎」と名義人を改めあり。口繪は木版色刷にして、初

版本第九號の首にあるものを新に年恒（可雅賤人）の畫ける所。挿繪十一葉（折込み）亦同じく年恒の筆なり。扉は赤紙にして、「日本文學士、春のやおほる戯著」（清朝三號）にて横に、其の下に豎に「一讀三歎」（清朝）とありて、「當世書世氣質」とあり。序文は和紙にして刷込模様あり。小口はマアブルなり。（以下四六版本は何れも小口はマアブルなり。）
同（再版） 背クロースを用ゐる、背文字なく、表紙は金色の草模様を以て四周を圍み、中央に墨ほかしの小判型の中に隸書にて書名を白抜きに現はせる事が、此初版本との相違なり。明治十九年十二月晚青堂出版。再版以上のもの不明。

(丁) 別製本異版第一 装幀は大體丙に同じけれども、背クロースは石目なり。明治二十年六月晚青堂出版。奥附に「明治二十年五月六日讓受御届」とあり、「出版人木村莊二郎、發兌元晚青堂」とありて、間野秀俊の名無し。扉、序文、口繪は丙に同じ。挿繪亦同一版木なれども、之を豎に二分して本文用紙に刷込みあり。活字は清朝四號旁訓附なれども全く新に組替へたるものにして、三十二字詰十一行、罫にて圍まず、本文四百二十七頁（挿繪二十二頁）なり。半峰居士の批評文は「其四」を削りて附載せり。扉の前に赤刷にて四葉の出版廣告を

附せり。再版の有無不明なり。本文は別製本より少許の削除あり。地の文の説明めきたる箇所
の如きは加筆されあり。

(戊) 別製本異版第二 全一冊。洋装四六版。装幀丁に同じ。此れの第一版は何年何月に發行
せしか不明なり。明治二十二年四月届出の第七版に據りて記述すれば、扉は赤紙にして、「當
世書生氣質」の六字は丁に同じけれども、花形にて四周を圍み、豎に三欄に罪を入れ、右欄
に「文學士春廼舍隴先生戲著」(清朝三號)とあり、左欄に「版權免許、東京、共和書店發兌」
(清朝三號及び二號)とあり。扉の次葉に松果模様(上下に) BOOK STORE. BANSEIDO.
TOKYO. JAPAN. TRADE MARK. とあり。)の中に「晚青堂」の檢印あり。半峰居士
の批評文は「其四」無し。
序文、口繪(同一版木なれども印刷頗る粗)共に洋紙なり。奥附には「出版人木村莊二郎、
專賣所共和書店、同積善館」とあり。活字は清朝四號旁訓附なれども、全く組替へたるもの
にして、三十五字詰十二行、挿畫(二十二頁)及び飛丁(二十頁)を加へて四百二十九頁が
本文の終りなり。本文に加筆あり。

同(改装本)同一紙型を用ゐて印刷し、菊判大和綴に改装したるものなり。表紙は石版刷に
して、青地に桐と鳳凰とを現はし、色紙と短冊とを以て作者及び書名を現はせり。「はるの
やおほるあははす」「當世書生氣質」此版の奥附も亦甚だ曖昧にして、別製本異版第二の初
版が何年何月なるやを記さず。明治二十五年十一月に第九版を出せるを以て觀るも、相當に
弘まりしもの如し。

以上諸本の各本文に異同あるは、初版本以來、別製本(黒クロス本)、別製本異版第一(前附
廣告本)、別製本異版第二(晚青堂檢印本)と三たび組替へたるものなれば、其の機會毎に作者の
加筆を経しものならむ。但だ別製本異版第二は、作者と直接の關係なき書店より發行され居り、
作者の「回憶漫談」にも『本文の添削につきては何の記憶も無し。』とのことなるが、「太陽記念
號」に覆刻の際作者の承認を経て之を底本として用ゐたることより觀ても(誤字及び句讀の脱落
等が一々踏襲され居る點より推考)別製本異版第二は作者が加筆せし最後のものと認めて可な
り。

更に二三の例證を擧げて親しく作者に質したるに、『日記にも無く、明確なる記憶も無けれど、多分自身にて加筆せしならん。』とのことなりき。

今茲に覆刻するに方り、別製本異版第二に據ること妥當なるべきも、初版本の面影を保存することの必ずしも無用事ならざるを信じ、且つ印刷上の便宜をも考慮し、初版本を以て底本となし、旁ら別製本及び別製本異版を参照して校訂せり。但し初版本欄外の註は本文の相當箇所に入したり。

本文加筆の箇所は大小を問はず記號を附して明示せり。

文字語格に關しては新に作者の指示を得て之に隨ひたり。但し、旁訓記號句讀等の細に至りては、一々異同を註記すること煩に過ぐるを以て、各異本を参照して其の宜しきに従ひたり。欄外の考註は校訂者の加へたる贅疣なり。

附言 世に「當世書生氣質」を研究せむとする士あらば此の校訂本に就かるゝこと最も便なるべく、又現に如何なる異本を所藏さるゝ士も本書を併せ觀られなば多少の興趣必すや生ず

べきを信す。之を定本に擬せらるゝも作者に於て異議無しと也。

此解題は親しく坪内先生の補訂を経たるものなり。

追記 校正は最後まで校訂者之に當り、力めて脱漏過誤なきを期したり。

大正十四年十二月

装幀説明

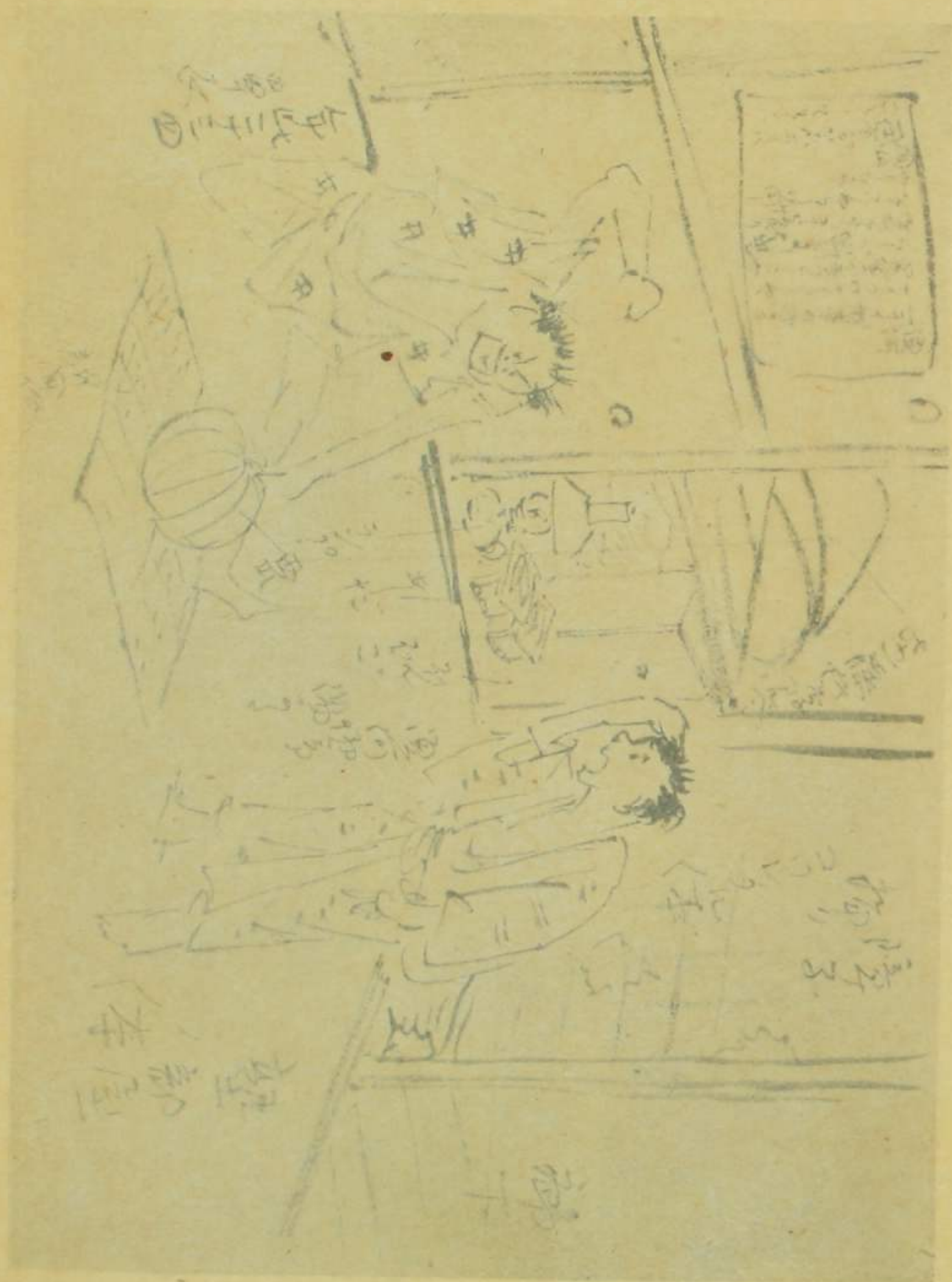
表紙は初版本の表紙を複寫せるもの。

背文字は、別製本（最初の洋型本）の扉文字。

扉の文字は別製本異版第二の表紙より複寫せるもの。

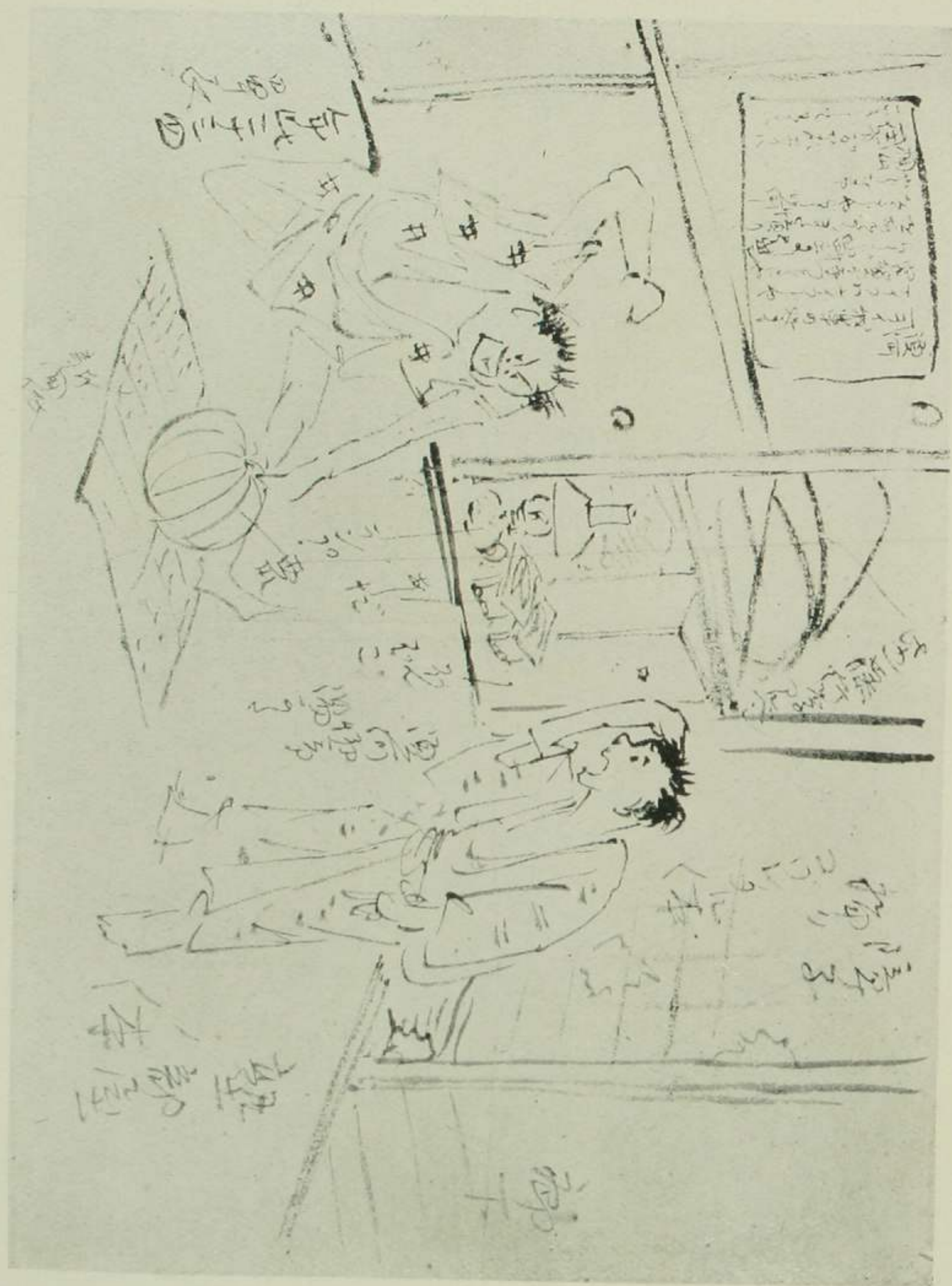
校訂本解説

- 一、本文中に在る「〇」符が伏字なる場合は欄外に註を附しあり。
- 二、「羽織」「愛嬌」の二語が、文字と音訓と一致せざるは、「端折」「愛敬」の假名遣を普通用字に組合せたる、作者の意圖なりしが如し。
- 三、「何々してしまふ」と「何々してしまウ」と同一語を二様に書き別けたるは、方言を寫すに方りて、前者の場合は「シ、モー」後者の場合は「シ、マ、ウ」と讀ましめむこの作者の考案なり。音便にて「何々してしまうた」となれる「う」につきては謂ふ迄も無からん。
- 四、「【】」符中の字句は初版本に有りて後に削除されたるもの。
- 五、本文中「へ」符を附せるは初版本の字句にして、其の改刪せられたるものは「へ」を附して欄外に示せり。

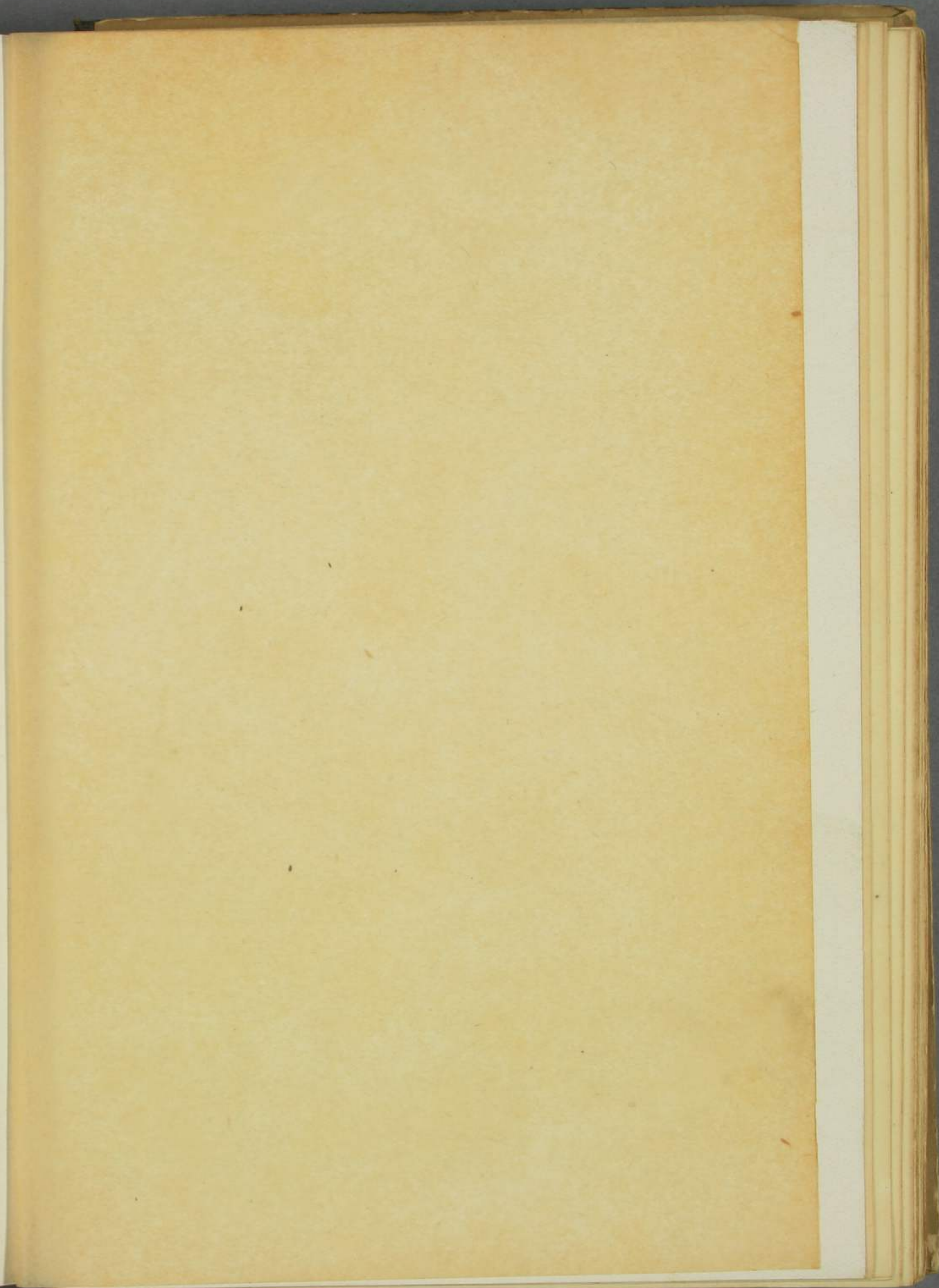


校訂本解説

- 一、本文中に在る「○」符が伏字なる場合は欄外に註を附しあり。
- 二、「羽織」「愛嬌」の二語が、文字と音訓と一致せざるは、「端折」「愛敬」の假名遣を普通用字に組合せたる、作者の意圖なりしが如し。
- 三、「何々してしまふ」と「何々してしまウ」と同一語を二様に書き別けたるは、方言を寫すに方りて、前者の場合は「シ、モー」後者の場合は「シ、マ、ウ」と讀ましめむとの作者の考案なり。音便にて「何々してしまうた」となれる「う」につきては謂ふ迄も無からん。
- 四、「【】」符中の字句は初版本に有りて後に削除されたるもの。
- 五、本文中「へ」符を附せるは初版本の字句にして、其の改刪せられたるものは「へ」を附して欄外に示せり。







一讀當世書生氣質はしがき

英の句レイク翁（イギリスの作家）亞リボン翁（フランスの作家）などは批評家の尤物（尤もな人物）株（株）なり古今の小説家の著作を評して勝手放題なる小言をいひまた非評もいはれたり然はあれ件の翁達にお説の様なる完全なる稗史（歴史）を著てよと乞ひたらんには予には不能と逡巡して稗史は著で頭を搔べし是他なし小説の才と小説の眼と相異なるが爲なるのみ眼ある者必ず才あるにあらず才ある者未だ必ずしも眼あらざるなり予輒近小説神髓と云る書を著して大風呂敷をひろげぬ今本篇を綴るにあたりて理論の半分をも實際にはほと／＼行ひ得ざるからに江湖に對して我ながらお恥しき次第になん但し至篇の趣向の如きは專傍觀の心得にて寫眞を旨としてものせしから勸懲主眼の方々には或はお氣に入らざるべし予は敢て此書の中より模範となるべき人物をば求めたまへと乞ふにあらず他の

行見て我風なほし前の人車の覆るを見て降坂なら降車たまへと暗に
讀者に乞ふのみなり作者は勸懲を主とせざれども此を訓誨の料にす
ると此を奨誡の資にするとは讀者輩の心におり飽は味ひいと美き一
種の食物に外ならねど用ひやうにて孝行息子が親を養ふ良薬にもな
り盜賊が窃盜のすてきな材料にもなりしと聞く作者は皿大の眼を開
きて學生社界の是非を批評し此書の中に納めれば讀者輩は地球大
の智惠の袋の口を開きて是非曲直を分別して陋劣を去り高尚きを取
る實際の用に供へたまはば美術の名ありて微術といふべき予が未熟
なる稗史の中にも人の氣格を高くすとふ自然の効用のなからずやは
あなかしこ心して讀ませたまへ

十八年の五月といふ月漸々に散りてゆく庭前の
八重櫻に落殘る月の下に

春のやおぼろしるす

一讀當世書生氣質

目次

第一回	鐵石の勉強心も變るならひの飛鳥山に 物いふ花を見る書生の運動會
第二回	謹慎の氣の張弓も弛む 不圖だ目に淡路町の矢場あそび
第三回	眞心もあつき朋友の粹な意見に 額の汗を拭あへぬ夏の日の下宿住居
第四回	收穫も絶えて涙の雨の降つゞく 小町田の豊作不作

第五回

心の猿の悪戯にて
縄初し戀の緒のむかしがたり

第六回

詐りは以て非を飾るに足る
善悪の差別もわかうどの悪所通ひ

第七回

賢と不肖とを問はず老と少とを論ぜず
たぶらかしざしきの客物語

第八回

雨を凌ぐ人力車はめぐりくゝて
小町田が田の次に逢ふ再度の緒

第九回

一得あれば一失あり
一我意あれば一理もある書生の演説

第十回

生兵法大きな間違をしでかして
味方をぶちのめす書生の腕立

第十一回

つきせぬ縁日のそゞろあるきに
小町田はからずも舊知己にあふ

第十二回

學校から追出される親父の送資は絶える
どこでたつ岡町に懶惰生の翻譯三昧

第十三回

心の宵闇に
有漏路無漏路を踏迷ふ男女の密談

第十四回

近眼遠からず
駒込の温泉に再度の間違

第十五回

舊人を尋ぬる新聞紙の廣告に
兒鳥ゆくりなく由縁の人を知る

第十六回

黒沼の薄羽織の媒介にて
薄からぬ縁因をしる守山と倉瀬の面談

第十七回

文意を文字通りにみや賀の兄弟
そゞろにコレラ病の報知におどろく

第十八回

春ならねども梅園町に心の花の開けそむる
親と女との不思議の再會

第十九回

全篇總て二十回脚色もやうくに
塾部屋へ倉瀬の急報

第二十回

大團圓

目次終

一讀 當世書生氣質

春のやおぼろ戯著

第一回

鐵石の勉強心も變るならひの飛鳥山に
物いふ花を見る書生の運動會

さまざまに移れば變る浮世かな。幕府さかえし時勢には。武士のみ時に大江戸の。都もいつか東京と。名もあらたまの年毎に。開けゆく世の餘澤なれや。貴賤上下の差別もなく。才あるものは用ひられ。名を挙げ身さへたちまちに。黒塗馬車にのり賣の。息子も鬚を貯ふれば。何の小路といがめしき。名前ながらに大通路を。走る公家衆の車夫あり。榮枯盛衰いろくに。定めなき世も智慧あれば。どうか生活はたつか弓。春めくあれば霜枯の。不景氣に泣く商人あり。十人集れば十色なる。心づくしや陸奥人も。慾あればこそ都路へ。榮利もとめて集ひ來る。富も才智も輻湊

註。ゴツ
サイ。車
夫の掛聲。

註。藤八
五門。藤八
八拳。藤八
妙丸。藤八
に掛けた
るもの。

の。大都會とて四方より。入こむ人もさまざまなる。中にも別て數多きは。人力車夫と學生なり。おのゝ其數六萬とは。七年以前の推測計算方。今はそれにも越えたるべし。到る處に車夫あり。赴く所に學生あり。彼處に下宿所の招牌あれば。此方に人力屋の行燈あり。横町に英學の私塾あれば。十字街に客俵の人車あり。失敬の挨拶は。ゴツサイの掛聲に和し。日和下駄の痕は。人車の轍にまじはる。實にすさまじき書生の流行。またおそろしき車の繁昌。これ併ながら腕づくにて。金も名譽も意の如くに得らるゝからの奮發出精。まことに芽出たきことなれども。若し此數萬の書生輩が。皆大學者となりたらむには。廣くもあらぬ日本國は。學者で鼻をつくなるべく。又人力夫がどれも。しこたま顧客を得たらむには。我緊要なる生産資本も。無爲に半額は費えつべし。されども乗る客少くして。手を空うする不得錢多く。また郷關をたちでる折。學もし成らば死すともなど。いうた其口で藤八五門。うつて變つた身持放埒。卒業するもの稀なるから。此容體にて續かむには。尙百年や二百年は。途中で學者にあひたし。額合せする心配なく。先安心とはいふものから。其當人の身に取ては。遺憾千萬残念至極。國家の爲にはあつたらしき。御損耗とぞ思はれける。斯く書生輩が。志を。得遂げざるには故あれども。其原因の關係鹽梅。頗る隱妙不可思議にて。皆一樣とはいふ可からず。むかし氣質のチョン鬮連中。若しくは地方の親

註。米屋
町。通稱。
の通稱。

（ならん）

達などが。會ておもひ寄らない幕。其隱密なる魂膽をば。寫しだせる物語も。それとはいはず語らずして。讀む人々に悟らしむる。覆車の誠。因果の關係。善きも悪きもあからさまに。作者が自儘の考案もて。いはぬが花か。讀む人が自得るも花歟。「花をいでて松にしみこむ霞かな。其春霞たちそめて。景色とふ飛鳥山。山も麓も一面に。花と人とに埋るゝ。四月なかばの賑ひは。上下貴賤おしなべて。共に樂む昇平世の。めでたきしるし著き。

○毎度ありがたうお静に居らつしやいませ。の愛敬を背にうけて。扇屋の店をたちいづるは。男女七人の上等客。微醉機嫌の千鳥足にて。先に立たる一個の客は。此一團の檀那と見え。素人眼の鑑定では。さる銀行の取締敷。さらば米屋町邊かと。思はるゝ打扮。米澤の羽織に。ぢみな琉球紬の薄綿入。水獺の帽子を眉深にいたゞきたるは。時節柄少し暑さうなり。年頃は四十三四。金時計の鍵を胸の邊に。散々と計り見せたるは。昔床しき通人なるべし。今一個は。年の頃三十五六。これも銀行の役員ならずば。山の字のつく商人なるべし。粧服も相應に立派なれども。前の檀那には。二三目おいた口振なり。残る一個は。年の頃二十六七の好男子。官員とも見え。商人ともつかぬ言語恰好【素人の鑑定では】代言人（歟）とおもはれたり。ときならぬ白チリの襟巻に。臘虎の帽子。黒七子の紋付羽織は。少々柔弱すぎた粧服なり。殊に南部の薄綿とは。

註。松島
屋。片岡
我童。
註。チイ
高。小園
治。
數寄屋町
者。下谷藝
赤襟。雜
妓。田の太夫
田。澤村。田
之助。

ちと受かぬる。とわるくはいへど。中肉にして身幹高く。色しろく鼻筋とほり。俳優でいはば松島屋の兒へ。チイ高の眼を。嵌込んだといふ克容なり。まづ／＼午前的好男子なれども。兎角氣取たがる癖あるのみか。辯舌があまり爽快ならねば。たゞ何となく甘ツたるく聞えて。運がわるいと。とき／＼には。イケ可嫌よの御託宣に。縁がありさうなる人物なり。婦人二個は數寄屋町敷。新橋あたりの藝妓と見え。一個は年頃二十五六。一個はやう／＼十七八。いづれも頗る別製なれども。若きは殊更曲者にて。尙赤襟の色さめぬ。新妓なりとは見えながらも。容をそらさぬ如才なさ。花の巻の尤物とは。其舉動にも知られたり。其容姿はいかにといふに。瘦肉にして背も低からず。色はくつきりと白うして。鼻筋通り。眼はちとばかり過鋭あれど。笑ふところに愛嬌あり。紅はけたれども。紅なる。脣といひ。眉根といひ。故人となりたる田の太夫の舞臺顔に髣髴たり。さればどこやら愁ひ顔に。見らるゝ廉もなきにはあらねど。笑ふ面に愛嬌あるから。結局雙方相照して。趣をなす變化の妙あり。これらは所謂ユニテイ〔統一〕と。ウバライヤテイ〔變化〕とを併せ得たる。有旨趣的美貌ぞとは。とんだ書生風の妄評にて。世間に通せぬ陳腐漢にこそ。藝妓の後邊に引續きし二子装の二個の男は。問はでもしるき箱夫にして。餘計な花見のお荷物ぞと。腹でお客が咳くとは。作者が岡眼の評判なりかし。

○さる程に件の一團は。やをら扇屋をたちいでつゝ。飛鳥橋をば打渡りつ。丘の麓へ來りし時。例の檀那はたちどまりて。若き男を見かへりつゝ。吉住さん御覽なさい。ナント絶景ぢやアないかネ。今から直に還幸とは。ちと残りらしい次第だから。ドウセ車夫の待せついでだ。あの葭簾張のあたりへいつて。更に一喫煙としようぢやアないか。(吉)實に夕陽に映る景色は。また格別と言はざるを得ず。園田さんいかゞです。お伴をしようぢやアありませんか。(園)賛成々々大賛成。幸ひ花見連も。よほど散じた様子だ。一番ずつと若返つて。鬼ごっこでもはじめようか。ドウダ。小年も田の次も。仲間に這入んな。運動になつていゝぜ。(年)チホ、。いかなこつても。此人中で。妾のやうなお婆アさんが。(園)ヘンイヤニ老こんだナ。田の次はドウダ。(田)姉さんがやらなけりやア。妾だつて否ですワ。男三人に女一人では。ドウセ叶やアしませんもの。(吉)チイ／＼田のちやん。行るべし／＼。僕が尻押をしてやるから。且は。妙なまこころへ六かしいいま鬼ごっこをしておくとお座席で轉ばない稽古になるよ。(田)アラ又あんな口の悪いことを。お言ひなさるよ。妾は厭よ。吉住さんの尻押は。當にならないから。(園)さうとも／＼。劍香だぜ。尻の押かたが違つて居るから。(年)チホ、。眞成にさうですよ。吉住さんは平生うまい口さきで以て。處々方々の藝者やおいらんを。(吉)チット大變。大層風向がわるくなつたぞ。チイ梅公

箱夫の助け船引。(梅)へ、、、今日は大層うけだちで御座いますね。(吉)それやア其咎ヨ。三國同盟で攻寄るんだから僕一人では敵し難しサ。(年)あんまり敵しがたい方でもありますまいヨ。甲樓乙樓と喰ちらかしをなさる癖に。(吉)チャ喰ちらかすとは。(年)いひますよ角海老の。(吉)まるつたく。いふべからず。(園)アハ、、、吉住さん頻に敗北の様子だね。(梅)兎角お胸に弱身が有ましては。お達者なお口でも叶ひませんものと見えます。へ、、、。(吉)ナンド此野郎。汝まで僕をいぢめるな。覚えて居ろ。ト箱夫を撃たうとする。箱夫は笑ひながら逃出す。(田)サア〜兎も角もあちらへ参りませう。アラ御覽なさいヨ。三芳さんがたつた一個。いつの間にか。茶屋に腰をかけて居らつしやるヨ。(年)ほんたうにネイ。トいひながら。箱夫の方に向ひ。(年)金どん箱夫の名なりおまへはネ。梅どんと一所にあちらへいつてネ。もう直にお歸になるから。用意をしてと車夫にさういつてお呉れナ。(金)へい〜畏りました。ト麓の方へゆく。(田)サア〜まゐりませう。ト二人の藝者は園田と吉住を急がしつ。言争ひながら登りゆく。○咲亂れたる櫻の木蔭に。建連ねたる葭簾張も。ゆふぐれつぐる群鳥と。共に散りゆく花見客。休らふ人も漸々に。稀なる程の詠こそ。また一層ぞと打つぶやく。しづ心ある風流男あれば。あたりかまはぬ高吟放歌。相撲綱引鬼ごっこ。飲みつ食ひつ此時まで。興に乗じて暮初る。春日わ

すれし一團あり。人数およそ十八あまり。皆十二分に酔どれたる。貌に斜陽の映そふれば。さるに似たれど去りかねて。臥轉ぶ人。扶くる人。共によろめく千鳥足。あしたの課業の邪魔になる。起たまへとの一言にて。いよく書生の花見ぞとは。いと明にぞ知られたる。○此一仲間。さる私塾の大運動會の。居残と見えて。彼方には。空虚になつた菰被褥の記念碑あり。此方には。竹皮包の骸が。杉箸と共に散亂たり。酒を餘りに嗜まぬ者や。深く沈醉さる書生輩は。おほかた歸りざりし跡と見えたり。其中に一個の書生あり。しひて酒をば飲まされたる。其苦しさにや堪へざりけん。遙か離れし古木の根へ。臥仆れしまゝ前後もしらず。此時までも熟眠せしが。春とはいへどさすがにも。黄昏ぎはの風寒み。どや〜歸る足音の。耳に入りてや起あがる。其容姿はいかにといふに。年の頃は二十一二。瘦肉にして中背。色は白けれども。麗やかならねば。まづ青白いといふ。貌色なるべし。鼻高く眼清しく。口元もまた尋常にて。頗る上品なる容貌なれども。頬の少しく凹たる鹽梅。髪に癖ある様子などは。神經質の人物らしく。俗に所謂苦勞性ぞと。傍で見るとさへ笑止らしく。其粧服はいかにといふに。此日は日曜日の事にもあり。且は櫻見の事なるから。貯の晴衣裳を。着用したりと見ゆるものから。衣服は屑絲銘線の薄綿入。たしかに親父からの被讓もの。近日洗張をしたりと見えて。襟肩もまだ無汚なり。

鼠色になつた綿縮緬の尻子帯を。裾から糸が下りさうな。嘉平の古袴で藏した心配。これも苦勞性のしるしと思はる。羽織は絲織のむかしもの。母親の上被を仕立直したものが。其證據には裾の方ばかり。大層痛みたるけしきなり。其服装をもて考ふれば。さまで良家の息子にもあらねど。さりとして地方とも思はれねば。府下のチイ官吏のサン「子息」でもあらん歟。とにかく女親のなき人とは。袴の裾へから推測した。作者が傍觀の獨斷なり。

○去程に件の書生は。驚き覺めつゝ四下を見れば。人も漸く散り行きて。おのが仲間の人々さへ。みな歸り去りし有様ゆる。驚きながらも身づくろひして。麓の方へと行かむとする。背後の方よりあわたゞしく。走り來れる一個の人あり。避くる間なく衝當りつ。○アラ御免なさいヨ。眞平御免なさいましヨ。といふは女の聲なるゆる。驚きながらもふりかへる。書生の顔見て彼方も吃驚。（女）チャ貴君は阿兄ぢやアありませんか。（書）エ。お芳さんか。寔に久しぶりだネエ。（女）ほんたうに久闊でございましたネエ。何もお異りはありません歟。父上はお健康で居らつしやいますか。先々月一寸お目に掛つた計りですから。今月は是非參らうと思つて居ながら。父上の命令つたこともありまうんだから。ツイ〜。（書）わたしはまた一昨年おまへに別れたツきり。いつも〜掛違つて。おなじ東京に居りながら。（女）お目にかゝることが出來ませんへもん

でしたから。尙更お目にかゝりたくつて。（書）僕 けしひか わたしだつて逢ひたくつて。○然し大層に變つたネエ。不意に逢つたら見違へる位だよ。といひながら。つく〜と見る。（女）ほんたうに氣恥かしくつてなりませんワ。ト話談半へバタ〜と。かけて來るは以前の吉住。後れてはせくる藝者の小年が。それとさとして追すがりつ。（年）吉住さん。チヨイと吉住さん引。何ですネエ。お待なさいよ。貴方があんまり烈しく。おつかけなさるもんだから。御覽なさいよ。田の次さんが。餘所のお方に衝當つて。お詫をして居るぢやア有ませんか。そんなに田のぢやんに挑ふと。角海老がコレですよ。ト指で角をこせへて見せる。（吉）ナンダ。衝當つたから理窟をいつたト。かまふものか。書生奴が何をいやがる。僕がいつて掛合つてやらう。ト行かゝるを袖引とめ。（年）アレサ先で理窟はいやアしないが。詫るのは當然でさアネ。ト争つて居る聲が聞える故。（田）兄さん。いろ〜うけたまはりたい事も。お話し申したい事もありますけれど。今日はお客と一所ですから。お名殘惜いけれども。（書）サア〜。かまはないで彼方へお出よ。いつれまた其内に。といひながら。残をしさうな免附。田の次も去りかねて。（田）兄さん。いろ〜久振でお話がしたうございますから。アノウ。といひかけしが小聲にて。（田）ドウゾ妾を。一度呼んで下さいな。（書）エ。呼とは。（田）アレサ茶屋へ呼んで下さいな。一年に一度や二度。兄さ



んにお目
行中ぎやうちゆうです
田たの次じノ
ア。トイ
く。其後そのち
前まへの吉住よしずま
は然さうかと
墓ひまと蛇へびと
サア歸かへる
行くべし
見みかへる
らぬ。中なか
審貌しんがほ。
戴いたいた物もの

○此方こなたに
思おもつたら
のか。ト
(須) そね
お客きやくと鬼おに
さうかア。
て見みちよつ
それはさ
カアド「泥どろ
つた。モウ
んだから。
(須) ひヤ日輪ひりん
俟まちちよるぢ
や。ア、僕ぼく

【作者曰く。須河の言語は如何なる地方の言語なるかと不審をいづく人もあるべし。こは何處の方言と定まりたるものにあらず。書生社會に行はるゝ駁雜なる轉訛言語と思ふべし。蓋し書生中には上方の生にありながら態々土佐方言などを真似る者ありて。一概に何處の方言とも定めがたければなり。】

第二回

謹慎の氣の張弓も弛む

不圖だ目に淡路町の矢場あそび

ぎやう／＼しき人力車のゴツサイ。稚兒の足元あぶなく。騒々しき辻馬車の喇叭。老人は杖や失なはん。晴て風だつ日の土煙には。新購の帽子爲に白く。晏子の御者めく官員も。鼻の上に八字を畫き。結ひしばかりの大島田に。埃がかゝるを苦勞にして。西施の顰をまなぶもあり。是筋違の夏けしき。實にや斯くては塵除に。眼鏡の橋も入用敷。とうちつぶやける田舎人の。あだ口さへも道理なり。頃しも五月の下濼。はや暮初る誰彼時。講武所の横町よりいと急がしけにかけくるは。

註。筋違
平橋より
御成道へ
の小路。
講武所
舊講武所
跡の通稱

年頃十九敷二十あまり。人品のよき書生風。去年の夏買へひしと見ゆる。へこ／＼になりたる麥藁帽子を。あふのけざまに戴き。鼠色になりて。袖口のボタンは。悉く脱走したる。白襦袢を被たる上へ。午後五時頃ともいふべき。偽薩摩の單衣を被て。小倉の袴の。膝のあたり白やかなりて。ひだの形なしになりたるを。裾短かに穿き。日和下駄の。けふ買ひし計と見えたるを。いと荒らかに踏鳴らしつ。風呂敷包を小脇に抱きて。眼鏡橋へとさしよかる。折しも聖堂の方よりして。急ぎ來れる一個の書生と。出逢がしらに克見合せ。以前の書生は聲をかけ。(書)ヤ須河。君も今歸るのか。(須)チ、宮賀か。君は何處へ行つて來た。(宮)僕かネ。僕はいつか話をしたブック「書籍」を買ひに。丸屋までいつて。それから下谷の叔父の所へまはり。今歸るところだが。尙門限は大丈夫かネエ。(須)我輩のウチツチ「時器」ではまだテンミニツ「十分」位あるから。急いで行きよつたら。大丈夫ぢやらう。(宮)それぢやア一所にゆかう。(須)チイ君。一寸其ブックを見せんか。幾何した敷。(宮)おもつたより廉だつたヨ。トいひながら。得意貌に包をとく／＼取出すは。美イトン氏の。普通學識字典なり。須河はあゆみながら。二三枚開いて見て。口の中(で)。ペラペラと。二言三言讀とりつゝ。(須)實に是はユウスフル「有用」ぢや。君これから我輩にも折々引かしたまへ。ヒストリー「歴史」を讀んだり。比ストリカル委ツセイ「史論」を草する時には。

註。丸屋
丸善

これが頗る益をなすぞウ。(宮)さうサ一寸虚喝の種となるヨ。ト話しながら。雉子町邊まで来る折しも。傍の理髮店の内にて。時計の音チン／＼。二人は吃驚見合せ。(須)宮賀いかにぞ。モウ六時を打たぞ。我輩のウチツチはおくれてをるワイ。(宮)エ待たまへ。向うのうちの時器を見るから。ヤア彼家の時計では。モウ六時を。四分過ぎて居らア。これやア困つたネエ。如何しやう。(須)イ、サ。實は我輩は。證書を持ちよるから。コウツト。まづ本日は。君と連名にして。遅刻届をだして置いて。君の本證書は。明日あらためてだせばえいサ。(宮)エ。それぢやア。君はけふ後れる積で居たのか。(須)ウンニヤ。さうぢやないがなア。いつか證人の所で。遅刻の證書をもらうて。歸つた所がなア。存外に早う歸つたぢや。處で届をださいですんだによつて。其證書を其儘にして。取置いたのが。三月とばかりで。目附がないぢやから。三月の三を五に書かへて。本日の斷書にする積ぢや。そこで右の者儀云々の前へ。君の名を書加へれば【それで】えいぢやないか。(宮)なんだか險のんぢやアないか。君も申々するくなつたネ。(須)馬鹿アいひたまへ。あの狭山なんぞにくらべると。我輩なんぞは。眞に正直なもんぢや。狭山なんぞは親父の留守に。親父の印形を半紙十枚計に押して。持つて來ちよるぞ。而して勝手な時分は。えい加減な事を書きをつて。遅刻届や外泊届を出しちよるワ。(宮)チャ／＼非道いネ。よくそれを

學校でしらすにゐるネ。それはさうと。早くいかないと。賄の飯を食ひ損ふぜ。(須)待てイ。けふの菜は。我輩已に見ておいたが。何たらいふ骨の多い。いやアな焼肴ぢや。とても喰はれたもんぢやない。寧ろ後れた位なら。どこぞへ行で。牛でも喰はうかい。(宮)それぢやア然うしよう。ト兩人あたりを見廻はし。半町計先の牛肉店へはひる。(牛店夫)被入しやいまし。の聲と共に。兩人二階へ上る。中働の小婢。火鉢を兩人の前へするながら。(女)お誂は。(須)鍋で飯だ。チイ君。酒のむか。(宮)どうでもい。(須)一本もつてこい。(女)かしこまりました。ト小婢は階子段を降りながら。(女)御新客お二人さま。鍋で御酒引。○程なく牛鍋と酒燻を持來れば。兩人しばらく無言にて。肉を喰ひ酒を飲こと。餓虎の餌を食るがごとし。宮賀は箸で鍋の縁を叩きながら。(宮)チイ生肉の代に。葱の代を持つて來い。(須)序にモウ一燻。酒だ。(宮)相かはらずよく飲むナ。(須)チニ酒はあんまり飲たうもないが。少々癪癢に障る事があるぢやによつて。所謂ヤケ酒サ。(宮)如何したんだ。(須)如何したツて。君聞いて呉れイ。實に倉瀬は。非道い失敬な事をするではないか。先月の末に。少々調べたい事があるによつて。無用ちよるなら。一寸君の。アングルウード「英文大家文章」を。貸て呉れイといふから。貸してやつちよいた處が。今月になつても。返さんによつて。度々迫つて督責をすると。據ない

事情があつて。友人へ又貸をしたというて。愚圖々々して返さん【ワイ】。想ふに又貸とは。ブレテキスト「遁」辭で。セブン「七」へボウン「典」した敷。セル「賣」したに相違ない。實に非道でないかなア。(宮)それやア非道い。非道いといやア。彼の繼原とかいふ奴は。可厭奴だネエ。過般も絹の袴を穿いて。駒下駄を穿きやアがつて。イヤに粧飾して歩いて居たが。(須)其筈サ。彼奴は。姪モウラル波一チイ「放蕩連」の。領袖ぢやものヲ。前の日曜日の晩景なんぞは。門鑑を出さいで。帽子で面を藏しをつて。學校の門をぬけだいて。山谷と一所に。新宿とやらへ行きよつたさうぢや。(宮)然う遊んで計居ながら。能く教場へでられるネエ。(須)へそ(が)彼奴の老練ぢやワイ。繼原は青樓へ行く時にも。課業の書を持つてつて。名代部屋たらいふ所で。間があると。下讀をするといふ風評ぢや。エライ熱心な。勉強家ではないか。アハ、ハ、ハ。(宮)倉瀬も近來彼奴と折々一所に出るもんだから。其故でそろく。するくなつたんだらう。(須)するくなるといへば。實に人間は。當にならんもんぢやなア。彼の小町田を見イ。此頃は放蕩を。はじめたといふ事ぢやぞ。(宮)ほんたうにか。あの勉強家が。(須)ほんたうとも。大事實ぢや。何でも數寄屋町邊の藝妓で。田の次たらいふ女に。迷ふちよるといふ事ぢやが。薄々は校長の耳へも這入りよるといふから。退校になるもしれん。(宮)惜む可しだネエ。あの位。學問ができながら。僕は毫も

へそれが

へが

そんな事はしらなかつた(ヨ)。(須)知らない筈ぢや。小町田は單身でゆくからぢや。單身でゆくだけに。罪が重いワイ。あんな放蕩連は悉く追拂うてしまウがえい。(宮)非道く悪くいふネ。岡焼ぢやアないか。(須)馬鹿アいへヤ。焼といやア鍋が焦つて來たぞ。(宮)チ、夢中になつて人の風評をして居て。酒が來たのも。肉の來たのも忘れてしまつた。サア大に喰ふべしだ。(須)大に喰ふといやア。任那はよく喰ふなア。先日一所に。汁粉店へ行つたらなア。汁粉を十一碗くうたぞ。實に非凡のグラットン「大食家」ぢや。(宮)ナニ任那は。食ふ計が非凡ぢやアない。すること。なす事が非凡だ。まづ常はぶらぶら遊んで計居て。試験に優等の點をとるし。馬鹿な口計たゝいて居るかと思やア。高尚な議論を吐くし。疎漏な人だと思つて居ると。存外に義理は堅し。實に出沒不思議とは。任那の事だらう。(須)あれらがまア。磊落な奇人ぢやらうなア。(宮)任那といふから。支那人の子孫かも知ないが。襖袍をきてかまはぬ所なぞは。何やら由の血統らしいネ。ト且喰ひ。且飲み。且語る。談話なかばへ階子段を登つて來たるは。是もまた二十三四の書生にて。色黒く肥満とふとり。體格たくましく。髪色いと黒く。眼はすこし凹たる方にて。黒眼がちなり。白地の浴衣の。七八回水ツぱひりをしたと。見ゆるのを被て。小倉の袴の。脇の縫目の綻びて。脚のあらはるゝのを穿ち。綿銘線の拾羽織の。襟のあたり。鼠色になりたるを。勘定捨の紐

にて。曲形にひつかけしは。時節がらあつさうなどは。到らぬ素人の考にて。右と左の浴衣の肩に。握拳ほどのな。大きな破穴があるを。知らざる故なり。六七度。太田道灌に出逢つたと見えて。胴と縁との縁がきれて。離れさうになつた古帽子を。故意と横さまに被りながら。肩をいからしてあがつて来り。以前の兩人と兎見合せ。(書)ヤ須河君。宮賀君。勉強黨には珍らしい遅刻ですネ。(須)ヤ任那君。恰ど今君の風評をして居た所ぢやつた。(宮)相替らず飄々乎として。單騎獨行ですネ。(任)然り。チイ姉さん。鍋を二人前に酒だ。(宮)チイ此方へは飯を持って来てくれ。(任)モウ君達は飯か。須らく。更に一盃を。重ぬべしッ。トいふ中。小婢が持いづる。猪口をとつて宮賀にさす。(宮)モウ僕はいかん。(任)然らば君飲みたまへ。ト須河へ回せば。須河は猪口を受取て。なみくと斟ながら。(須)任那君。守山君は如何しちよるかネ。(任)守山は相替らず。ブツク「書物」と首ツ引サ。今日も我輩が。浅草まで遊歩せんか。というたが。翻譯ものを草しはじめたから。といつて。更に出不い。而して其の爲す所を見れば。學校へ通ふのと。東光學館へ行のと。折々温泉に浴するのみサ。(宮)東光學館といふは。(須)君はまだ知らんか。法律家がたてた法學校ぢや。守山君も餘暇に教授しちよるといふ事ぢや。ネエ任那君。東光學館も近來は。追々盛大になりましたらうなア。(任)然さ。生徒の数が。無慮一千八百十人ほど。(須)エ。(任)ナ

ニサ。二千人に足りないといふ事だ。(宮)アハ、、、。それぢやア。百九十人ばかりですネ。(須)それにしても中々盛んぢや。(宮)守山君は如何してそんなに。勉強ができるだらう。實に感服なものだネエ。(須)あれで健康ぢやから希代ぢや。(任)あんまり健康でもないよ。晩近は顔色も憔悴して。肺病の徴候が見えるから。我輩も時に忠告を試みて見るが。毫も用ひぬから仕方がない。(宮)しかし。守山君でも君でも。モウ一月計で卒業だから。羨ましいネ。(須)守山君は卒業したら。何になるぢやらうか。(任)代言人になるとかいつてるヨ。(須)守山君の代言人は。少々適當しないではないかなア。(宮)ナゼ。(須)何故でも。守山君はあんまり謹慎すぎるからなア。(任)馬鹿アいひたまへ。守山がなんでおとなしいもんか。(須)エ。そんなら守山君もブレイ「遊廊などへ行くことをいふ書生の通語なり」するかなア。(任)ナニ。ブレイする譯ぢやアないがネ。中々如才ない男だから。世間の交際は極めて精妙ヨ。畢竟書生のうちに遊ぶやつは。膽の小さい。おとなしい方で。書生のうちに忍耐の強いやつが。却つておとなしくないやつヨ。と語らふ折しも。下よりして。飯と土瓶を持来れば。宮賀は任那に會釋なし。(宮)失敬ですが。僕等は飯としよう。(任)何處かへ行くのか。(須)インエ。學校へ戻るのです。(任)どうせ後れた位なら。急ぐべき要がないではないか。我輩は已に晚餐を了つたから。此酒を飲んだら君達と同伴して寄席へで

考。すま
ぬ。すま
まぬ歟。

註。ぼつ
出。地
方より
出たて。
註。告
口上。

も行かう。(須)コウツト。どうで證書を出す位なら。少々寄席でも聴かうかなア。(宮)イケない
ぞ。遅くなる。(須)ナニイ。大丈夫ぢや。門限は十時ぢやによつて。少々早う戻ればえいワ。
毒くはば皿までぢや。行かう。 (宮) それぢやア。然しよう。トいひながら。宮賀はなんだ
か。すまぬ。食して飯を喰つて居る。此中任那も酒を飲了しかば。雙方共に勘定を済して牛肉屋
を出る。(牛店夫) 毎度ありがたう。

○さる程に。任那「名は透一といふ」。須河。名は「悌三郎といふ」。宮賀「匡といふ」の。三書
生は。なにか互にむだ口を叩きながら。筋違の方へあと戻りして。白梅といふ寄席へはひる。(札
番) イラツシヤイ。

○折しも當席は。燕枝柳枝などの一連にて。さしかはり入かはりて。陸續高座に登るものから。
柳枝が高座にあがりし頃には。はや九時半とも思はれたり。されども此方の宮賀と須河は。まだ
ほつとでの氣味失せねば。つまらぬ前座の落語をさへ。頤をはづして聴く方ゆる。柳枝が頗る輕
妙なる。其辯舌に聴とれつ。時間の移るも知らざりしが。柳枝が得意の釣客告條。(柳) 扱これか
らは如何なりませうか。また明晩の中入前に。トむかしとつたる講釋口調。名残のこして引さが
れば。トタンに樂屋で聲高く。中入つとぞ叫ける。(茶賣) お茶は宜しうございますか。(菓子賣)

菓子によしかア。

○(任) ナイ菓子を持て来い。ナイ茶も要るワ。(須) ナイ。其方にある。餡の這入つちよる
のを呉れい。幾何ぢや。(宮) ソラ四錢やるぞ。(須) 我輩がペイ「拂ひ」するからえいワ。(宮)
それではいかん。僕が拂す。(宮) 同じコツちや。後でアツカウント「計算」をするから。マア
えいといふに。ト兩人争ひながら菓子代を拂ひ。三人相集りて喰ふ。此時。任那のみは平氣に
て。他人の買つた菓子を。遠慮なくムシヤ〜と。取り喰へるは。例の磊落氣性ゆる。とはいひ
ながら。一ツは此席へはひりし折。木戸錢を拂ひし。餘光と見えたり。(須) 燕枝は實に精妙な
ア。(宮) エ。燕枝はまだ出やアしないぢやないか。(須) いま出たではないか。(宮) 馬鹿ア
ひたまへ。あれやア柳枝サ。柳枝と燕枝と。間違へてたまるものか。燕枝の方はあれよりか。ズ
ツト精妙ヨ。トいはれて。須河は間が悪さうに。しばらく無言で居たりしが。俄に心附いて。
懷中時計を見る。(宮) ナイ何時か。(須) ヤ。まだ九時十分前ぢや。存外早いナア。トいひかけし
が。よく〜見ると。時計はとまつて居る様子なり。蓋し此時計は。片側ガラスの銀時計なれど
も。ドルの高いときに。八圓位の代物ゆる。ドルが一圓十錢臺の時には。たかが四圓内外の廢物
なり。(須) ヤ。いかん〜。時計はドンタクぢや。(任) 然だらうヨ。先刻の上野の鐘が。十時

らしいもの。(宮) それやア大變だ。歸らう。(須) 任那君。失敬。といひもあへず。二人はあわてて。寄席の二階を降る。(店番) まだお早うございます。(須) モウ何時ぢや。(店番) モウ十時半でございませう。(須) 早いどころぢやないワ。大變ぢや。早う下駄を呉れイ。ト急がしけに。下駄を穿きて。兩人街頭へ出る。(須) 宮賀。いかなぞ。モウ門を閉てしまつたに相違ないぞ。(宮) いかないネエ。それだから僕は。寄席へゆくまいと思つたものヲ。(須) それを今いたとて。魯スト釵ン「死子」の年ぢや。如何せうなア。(宮) 如何しようたツて。仕方がないぢやアないか。マア。學校までいつて見よう。ト兩人は直走に。駿河臺の方へ向ひて。馳出せしが。一二町走りし時。須河悌三郎は。聲をかけて。(須) ナイ宮賀。待てイ。せつなうて馳られんから。待て呉れイ。今から馳ていんでも。五十歩百歩ぢや。少々のろく歩行かんか。といへば宮賀も。實にもと思ひて。是より兩人足をゆるめて。何かむだ口を叩きながら。淡路町の横町へ這入り。小川町通へ出んとせしに。此横町は俗にいふ矢場横町にて。人素三分化素七分の。自首連の巢窟なり。殊に此夜は閑と見えて。甲處の店も。乙處の店も。みな香箱製造の折柄なれば。今兩人の通るを見て。よき敵ござんなれ。といふ見えにて。ふとく逞しき。ふとツちやうの娘。兩三人。(娘) アレサ。中村さん。渡邊さん。チヨイトお寄んなさいへよ。チヨイトサア。といひなが

註。香箱製造のむり。

(な)

(す) ますます

ら兩側から。バラくと。かけいでつ。(娘) 素通はなりませんヨ。といひもあへず。宮賀の袖を引留むれば。宮賀は喫驚狼狽して。振拂ひつゝ逃出す。此方の須河も仰天して。走りぬけんとする間もなく。向ひの店よりかけいでたる。二十あまりの一個の女が。たちまち緊乎と抱とめつ。(は) や店先へ引立れば。宮賀はへいよく驚きつゝ。抱とめられては叶ふまじと。須河をうちすて逃出すを追すがりたる一個の小娘。お待なさいヨ。の聲もろとも。又もや袖をとりとむるを。離せといへども離さばこそ。宮賀は益々狼狽して。引きつ引かれつ。挑みあふ。それと見るより又一人。紅金巾の湯巻の裾。翻しつゝ。はせくる様子に。捕へられては一大事と。宮賀は覺えず手に持たる。洋書の包をふりあけつ。小娘の面。ハタと撃てば。アツト叫びて。たじろきつ。覺えず握りし手を離せば。得たりと此方は一生懸命。通街の方へと。逃ぬけつ。ホツと一息つき居たり。

○さる程に。須河悌三郎は。身體肥滿の大娘に。後の方より抱とめられ。振離さんとて角力ひしかど。彼方も頗る一生懸命。練馬大根よろしくといふ。左右の腕もてしめつけ。豊うちやん。定あちやん。ヨウ定あちやん引。ト呼はる下より二三の小娘。前後よりはせあつまり。押たて引たて店先まで。竟に須河を引こみけり。中にも素敏き以前の。小娘。あつけに取られて茫然たる。



註。七月の槍。十八棒跳。ホ字。レ字。ト一。北國の雷。北鳴り。著た。無一文。

須河が掛たる懐中時計を。手早く外して。取あけつゝ。(小娘) サア。ヨウ。マア。おあがんなさいヨウ。(須) コレ何するか。時計を取てはいかんが。コレ返して呉れ。友人が待ちよるから。コレ。急いでゆかんければならん。チイ。返せイ。(娘) アレサ。そんなに野暮をいはないで。お登んなさいヨ。(又一人) お連のお方はあちらの店へあがつて。遊んでなさるぢやア有ませんか。(須) ドレ何處に。(娘) ダカラ貴方はこゝへ。マアサ。おあがんなさいヨウ。ト無理に引ずりあける。須河は逃いださんとは思へど。時計を質に取られて。逃るにも逃られず。さればといつて。今更に改まつて。怒る譯にもいかすと。殆ど思案に困じて。當惑して居る。(娘) アレサ貴方。大層ふさぐぢやアありませんか。チットお引なさいヨ。(小娘) ナニネ。妾が時計を取あけたもんだから。屹度腹をたつて居らつしやるんだヨ。ヨウ檀那。堪忍して頂戴な。トいひつゝ莞爾笑ふ。此小娘は年の頃。まだ漸々十四五と見ゆれど。頗るコマツシヤクレタ質にて。容色も人素の多い方なり。俗にいふお轉婆なれども。彼女は活潑だ。などといつて。書生連によるこぼるゝ小娘なり。其名をお豊といふ。須河が先刻より。しばゝお豊の兎を見る様子に。それとさつたお定といふ娘。小聲にてお豊に向ひ。(定) 豊うちやん。(豊) ナニ。(定) 此客はネ。随分七月のお槍の癖に。お前に十八棒跳だヨ。ト一〜ともいかないが。マンザラ北國の雷さまでも

註。半助。五十錢

なささうだ。半助でもとつておやりヨ。トいへば。(豊) ア、トいひながら笑ふ。(須) チイ姐さん。時計を返して呉れんか。(豊) アラまだあんな事をいつておいでなさるヨ。マアお御腰をすゑて。一本お引なさいヨウ。オヤ一寸とお見せなさい。貴方の羽織の紐は珍らしいんだこと。トいひながら須河の膝にびつたり寄添ひ。珍らしくもなき編分の引懸紐を。珍らしさうに見てる。須河は間が悪さうに。尻をもじ〜しながら。たちも得やらす坐るでもなく。上り口に立膝をしたまゝ。無言で居る。(定) ナゼ貴君はそんなに押し尻をして居らつしやるんだヨ。(今一人の娘) キット先刻のお連と一所に根津か何處かへいらつしやる約束だつたんだヨ。(須) 馬鹿アいへ。(豊) イ、エ屹度さうだヨ。それだから。お尻がおちつかないんだヨ。悪らしいネイ。トいひながら須河の膝のあたりをツメる。此小娘なか〜の曲者なり。(須) アイタ、何するか。非道いことをするなア。(定) 思ひきり。いちめておやりヨ。ほんたうに此節の書生さんは。おとなしい兎をして居て。ちつとも油斷がなりやアしないヨ。(豊) 白状しないと。くすぐりますヨ。(須) アまるつた〜。などとそろ〜口車に乗か〜つて。狂ひ動揺めく其折柄。近所の職人とも思はるゝ者。ほろゑひ機嫌にて。入来れば。(定) チャ清ちやん。今晚は。大層御機嫌ですネ。(今一人の娘) お寄んなさいヨ。トいひかけて。彼方へ煙草をすゝめなです。須河は漸く心附きて。

註。根津。根津遊廊。

懐中の蓋口を探り見るに。銅貨は先刻寄席に於て。悉く拂ひ盡せしゆる。残るは壹圓紙幣一枚のみなり。銅貨さへあれば。四錢もやれば澤山だらう。ト思ひながら。銅貨のなきに當惑して。(須) ナイ姐さん。これを細のにして呉れんか。(豊) ハア壹圓ですネ。トいひながら。奥へ這入ると間もなく。彼方も如才なく。二十錢紙幣を。五枚持て来り。(豊) こゝに置ますヨ。須河は再び當惑して。如何はせんと思ひしが。流石に二十錢を。十錢紙幣にして呉れとも。いひかねし乎。(須) ナイ時計を呉れんか。お茶代はこゝへ置くぞ。トをしさうに二十錢をはふりだし。辛うじて時計をうけとり。街頭の方へ走りいづれば。例の小娘は如才なく。後へつゞきて追かけ来り。(豊) チヨイと貴君。あした又おいでなさいヨ。屹度ですヨ。トいひかけて。背後から肩にとまりて。ぶらさがるやうにする。(須) ム、又来るぞ。トいひはなして。小川町の方へ馳出つゝ。彼方此方を見回すに。已に夜も十一時過と思はれ。往來の人も稀々なり。(須) 宮賀は何處へ行をつたかしらん。ハテ困つた事になつたなア。ト獨語をいひく。急ぎあしにて。おのが入塾せる學校の。門の前まで来りし頃は。四方に人力の車の音もなく。犬の吠聲のみ聞えたり。門番も已に熟眠たりと見えて。五ツ六ツ。門の戸を叩けども。答もなし。思案に暮つゝ突立たる。遙向うの方よりして。急ぎあしにて馳來る者あり。月はなけれど透し見るに。たしかに二個と思

はれたり。此方へ来るは疑ひもなく。此學校の人間なるべし。其の爲す山を見し上にて。相談相手となさんものと。其の近寄るをば待居たり。畢竟件の二人の者は。此學校の書生なるや。はた兩人が来りし後。果して何等の。はなしかある。後々の回に説いづべし。

第三回

眞心もあつき朋友の粹な意見に

額の汗を拭あへぬ夏の日の下宿住居

拾疊の間の正面には。一間の床あり。薰りかへりし半切の軸には。精神一到何事不成といふ。八字を大書し。落款には。牛首山人書とあれど。何處の馬の骨の。書いたのやら。辨らぬものなり。一邊に安置せる。新調の机子。引出シのツマミ。已に損じたるは。所有主の使用の粗暴なるによる歟。五六冊の洋書。表紙いたく磨れたるは。折々枕にする加減なるべし。洋燈の空箱。ひとふたみ。やう枝と共に散じ。人情本。上中下。下宿屋の書出シを挿はさへみあへるは。十五日拂の勘定。いまだすまぬと思はれたり。彼方の一隅にも。また一脚の机あり。白金巾もて掩ひ做したる。

秩序さすがに整ひて。硯あり。筆立あり。ウェブストルの大辭典は。ランプと共に書箱の傍に
 竝立し。一卷の洋書は。繙きて机の上であり。但見れば。處々に鉛筆もて。注意の「印」を附した
 るは。まづ讀人の苦學の程。思ひやられて何となく。奥ゆかしき心地とする。書箱のほとりには。
 衣紋竹あり。勸工場で買ひとりたる。出來合物とは。見ゆるものから。壁の折釘へ直接に。衣裳
 を引かけぬ用心は。上方出の書生にや。此社會にはいと希なる。注意家とこそ思はれたれ。羽織は
 午後四時すぎと見ゆれども。とにかく昔物の上黒絹。單衣は。偽薩摩。近日仕立しばかりと見え。
 引臘の光彩の尙残れるも。一度水を濡らせなば。さこそくやしき色をや見ん」と。なか／＼に笑止
 氣なり。]

○寂寞なる下宿屋の。二階の階子荒々しく。走りあがりて會釋もなく。守山君居るかネ。といひ
 つゝ襖をおしひらくは。年の頃二十三の書生風。其打扮は。ちかごろ仕立させしと見ゆる。上
 布のかたばらに。徒歩で王子の稻荷へゆきて。半日瀧にうたれました。といふ程に。草臥きつた
 る本場の博多を。貝の口に結びなし。アンペラ帽子の。まだ新らしと見えたるを。右の手に携へ
 たる。人品さすがに賤しからず。田舎漢の眼で見たらば。さる省の中總の。近所あるきかとも怪
 まれん。そもこの書生は何者ぞといふに。前にもしば／＼風評ありし倉瀬蓮作といふものにて。

註。鮫
 官員。

越後新潟の生れなれども。已に七八年。東京にありしゆるゑに。最早故郷の方言は。大概なほりた
 りと察したまへ。

○(倉) チャ守山も任那も居ないのか。ハテナ。雪隠へでも往つたかしらん。ト獨語いひ／＼片
 膝をたてて机の邊へ坐り。かたへの煙草盆を引寄せて。懷中煙草入を取りだす。折しも下より登
 り來るは。白地の浴衣にへこを締たる。即ち此居間の主人にて。守山友芳といふ静岡縣士族。年
 の頃は倉瀬と。大概おなじ程と思はるれど。何となく威儀ありて。何處となく沈着たるは。家
 庭鞠育の方法の。その宜しきを得たりしに依る歟。はた天然の性に成るか。と。推理家が見たなら
 ば。一寸頭を右左に。もたけさうなる人物なり。(守) チャ倉瀬。いつの間きたのだ。(倉)
 今日島岡の洋行の送別會があるから。今學校から出掛た所だが。すこしお願の筋があるから。
 一寸御資臨いたしたのサ。(守) 然か。丁度うちにくてよかつた。といひながら手をハタ／＼と
 うち鳴らせば。ハイの返辭の聲と共に。二階口から顔をいだすは。此下宿屋の小婢と見えて。十
 三四歳の小娘なり。(守) ナイお茶を持つて來い。そして是で。何か餅菓子。ト拾錢の紙幣を
 わたす。(小女) かしこまりました。ト降りてゆく。(守) 倉瀬。けふの送別會は。何時から。何
 處でするんだ。(倉) 下谷の鳥八十で。六時からといふのだが。例のとほり日本流で。二時間ぐら

註。ヘコ
 兵兒帶

考。恐
れる。歎
ける。

註。正
宗。切
れる。

るは。かならず時間じかんに。掛値かひねがあるだらうと思ふが。實じつに日本人にほんじんの。アンバンクチュアル「時間
を違へる事ことをいふ」」なのには恐れるヨ。時ときにお願ねがひといふは。外ほかの事ことぢやないが。といひかけて。
さすがに口隠りくちごもし體ていなりしが。すこし聲こゑをひそめて。(倉)君きみすこしエム「モネイの略りやくにて貨幣かへ
いふ事こと」」を持つては居ゐまいかネ。(守)何なにの位くらい入用いりようだ。(倉)今日けふの會費くわいひは。壹圓いちげん貳拾錢にじゅうせんといふの
だが。外ほかに車代くるまだいもいる譯わけだから。壹圓いちげん五拾錢ごじゅうせんか。貳圓にげんあらば。貸かしてくれたまへ。此月このつき末すえにはきつ
と返すから。ト餘儀よぎなささうにいへば。(守)此月このつき末すえに入用いりようのモネイだが。それを承知しやうちなら用立もちだ
よう。しかしきつと。當あてにして居ゐるから頼むヨ。(倉)承知しやうち々々。かならず違約ちがやくはしない。とい
ふうちに。守山もりやまは。机つくえの引出ひきだシをあけて紙入かみいれをとりだし。貳圓にげん札さつを出してわたす。(倉)サンク
ス「幸甚あがたし」。これさへあれば。まづ今日けふの義務ぎむはすむといふもんだ。序ついでに君きみ。モウ一ツ願旨ねがひを聽き
いてくれたまへ。(守)イヤニ欲よくの深い人ひとだ。しかし何なんだ。(倉)御覽ごらんのとほり。僕は羽織はせりなしと
いふ次第しだいだから。こひねがはくば君きみ。一枚まい羽織はせりを貸かしたまへ。どんなのでもよいから。(守)あま
り氣きのきいた。羽織はせりはないぜ。これでよければ被かてゆきたまへ。ト傍かたへにかけおきたる。黒緞くろろの羽
織せりをとつて渡す。(倉)ヤ。こいつは豪氣ごうきだ。○しかし。これやア所謂いはゆる正宗まさはら派はだネ。雨傘からかみを肩かたにし
たらあぶなからう。(守)ナンダ此野郎このやらう。他ほかの羽織はせりをかるさへあるに。なまいきに悪わるくいふな。い

(の)

ま一言いごんいふと貸かしやアしないぞ。ダガ倉瀬くらせ。君きみがわるくいふも無理むりはない。其羽織そのはせりは親父おやから貰もら
つたので。品柄しながらはわるくないが。何なににしろ被かふるしたから。そんなになつたのサ。(倉)だうりで
此紋このもんが團子だんご然ぜんと。大おほきいと思つたヨ。しかし五ツ紋いっもんでないうちが有難ありがたい。といひつゝ、紋もんをつくづ
く見て。(倉)チャノ君きみの紋もんは。よつほど珍奇めづかししい紋もんだネ。(守)珍めづらしい筈はずさ。外ほかに類るいなしだ
ものを。(倉)これやア。何なんといふ紋もんだらう。三ツ鱗さんりんが。抱だき合あつて居ゐるへんだから。假かりに命いのちけて。
抱だき鱗りんかネ。(守)マアそんな事ことだらうヨ。(倉)なんにしる。馬琴ばきんの小説せうせつかなにかなら。古事こじ來らい歴れき
がありさうな紋もんだ。といひながら。フウワリ羽織はせりをひつけて。(倉)ドウダネ。男振をとこぶりが上あつたら
う。といへば此方こなたはねころんで。新聞紙しんぶんしを讀よみながら。(守)ヤ。あがつた。五錢せんばかり
あがつた。(倉)エ。五錢せんとは。(守)ナニサ。洋銀相場やうぎんさうばがサ。(倉)チエツ。僕ぼくの男振をとこぶりを。批評ひひやうして
居ゐるかと思おもやア。洋銀相場やうぎんさうばなんぞを。讀よんで居ゐやアがる。そんなら失敬しつげい。(守)チャ。モウ直ただに歸か
るのか。待まちたまへ。今いまに菓子かしがくるから。(倉)菓子かしなんぞはいらぬ。といひつゝ。慌あわてて煙草たばこ
入いれを。懷ふところのうちへおしこみ。失敬しつげいの棄すてりふと共に。階子段はしごだんを降おりんとするとき。以前いぜんの小女こんなが
二階口にかいぐちから。(小女)へいお菓子かし。ト竹皮包たけがはづみを煎茶せんぢやと共に。日光製にっこうせいの丸盆まるぼんにのせてだす。(倉)チツ
トきたり。寶たからの山やまに入りながら。手てをむなしうして歸かるも愚ぐだ。一ツ毒味どくみ。といひかけて。竹皮たけがは

包の傍腹より。はみだして居る蕎麥饅頭を。一箇とつて頼張ながら。(倉)ムグ／＼。ムツケ
 イ／＼。トひすてて。急ぎはしごをかけおりて。逃るがごとくに歸りゆく。(守)實にあきれかへ
 つた。粗忽しい男だ。あれで社會へ出たら如何だらう。兎角世の中には。磊落を粗暴と取違へた
 り。不羈を放縦と間違へたり。はねツかへりを活潑だと思つたり。するいのを大膽だと思ふやう
 な。料簡ちがひが。あるには困るヨ。しかし然いふ御自分さまが。やつぱり世故にはお暗い方だ
 テ。○ア、兎角世の中は。學問ばかりでは渡られない。世才といふものが肝腎だ。それはさうと。
 今日に限つて。倉瀬が忘れ物を。しないうちがをかしい。何か忘れるのが。定式だが。トいひつ
 つフット打見やる。かたへに落散る一通の。書簡にキツト目をとどめて。(守)チャ／＼お規則ど
 ほり。けふは書簡をおとしていつた。封じ袋もなしで。暴露になつて居るが。一體出すのか。來
 たのか。見てやらう。ト手に取あけて。右み左み。(守)エ、ナンダ。拜啓仕候。追日炎暑
 酷敷相成候處。○エ、此様な事はどうでもよい。○陳者不肖儀。前週より脚氣症に相罹り。起
 臥共に。頗困難を覺候故。一時休學致候。只管治療に手を盡居候處。何分にも果々敷。快
 方に不立到。殆當惑致候儘。學校附の醫師にのみ依頼致居候も。何とやらん。心元なき儀に
 被存候故。本日醫學部病院へ罷越。ドクトル「ベルツ」氏之診斷を請候得者。同氏之被申候様。是

は甚敷重症といふにはあらねど。療養其宜を得ざる時には。或は衝心の患無きを保し難し。
 速に入院之上。專に治術を施す敷。否されば伊香保の温泉へでも入浴致候方。最も安全の
 策也と。斯様被申聞候に付。情愚考を運し候に。拮据勉學に餘暇無き身を以て。優遊無爲。
 或は病室に閉籠。或は藥泉に遊候事。實以て好母しからず。存候得共。將來大に爲すあら
 んとする學生之身には。衛生の事も亦。最も忽に難成儀と。存候儘。贅澤なる奴との。御叱
 責を蒙候。哉も難圖候へども。敢て御願申上候は。○何の事だ。人を馬鹿にして居やアがる。
 此後文は讀まないでも。わかつて居る。大方旅費の請求だらう。ト獨語をいひつゝ。四五行さ
 きの。文言を讀むとしるべし。(守)ソラどうだ。何卒三十圓計御送附被下度。○あきれたもん
 だ。成程脚氣でわるいとは。聞いて居たが。ピン／＼はね回つて。遊び歩く事ができる脚氣な
 ら。しれたもんだ。いくら金に困つたからつて。斯んな大業な虚言を吐いて。親父へ心配をかけ
 るといふは。倉瀬にも似合ない見た。ナゼ日本人は斯様に。自立獨行の志操が。乏しいだらう。
 遊びたければ。遊ぶのもいゝが。親父の脚をかじつたり。慈母の脚をかじらないで。自分の腕で
 遊べばいゝに。實に膽ツ玉のケチな奴等だ。○それにつけても。合點のゆかないのは。小町田だが。
 思案の外だとか。俗にもいふから。世間の評判が。眞實かしらん。來いといつて置いたから。

遅くとも。モウ今時分は。来る頃だが。逢つた上で眞偽を質して。(折から下より黄色な聲にて)
(小婢) 守山さん。小町田さんが被入しやいました。ト告る間もなく階子段を。トン／＼と登り来るは。第一回の花見の章にて。已に讀者に知られたりし。小町田といふ書生にて。名を祭爾と呼ぶ少年なり。

○(小) 守山君。先刻は失敬。早く参らうと思つた處が。色々用があつて。ツイ。(守) 恰ど今待つて居たところだ。マア此方へ来たまへ。ト小町田を招じて。先刻の菓子すゝめ。茶をついで出す。(小) 任那君は。(守) 例の如く。飄然去つて。行く所をしらせず。(小) それぢやアまた。播鉢山の上かなかで。演説の稽古でもして居るんだらう。(守) そんな事だらうヨ。(小) あれらが眞の奇人といふのだネエ。(守) さうサ。まづ眞成の奇人だらうヨ。然し奇人もさまざまで。わざ／＼奇人ぶる奴があるから。外面を見たばかりぢやア。わからないヨ。奇人なら奇人のやうに。不羈獨行をすればへよけれど。中には奇人といはれるのを。自分の名譽だと思つて居るのか。わざ／＼非常た所行をしたのを。自分でなんだか自慢らしく。吹聴してあるくがある【ヨ】。非常な事だと思はへないで。非常なことをするから奇人だらうぢやアないか。自分が非常だと合點して。非常な事を行ふのなら。是すなはち平常の好事家(サ)よつほど一調子かはつ

註。播鉢山にあり。

へいゝが

へずして

へだ。

恰も

のが不思議だなく。

た。(小) やつぱり奇人ぢやアないか。(守) アハ、。成程さういやア。やつぱり奇人か。然し。さういふ似而非なる奇人は。あんまり下さつた方ぢやアない【ネエ】。○時に小町田。君はけふ。島岡の送別會へは。行かないのか。(小) ア、。何だか心がわるくていけないから。僕は斷を遣つておいた。(守) さうか。君をけふわざ／＼。呼寄せたのは外では無が。少々眞實に聞正したい事がある。今更改まつて言迄もないが。君と僕とは。どういふ因縁が有のかしらぬが。初めて學校で逢つた時から。互に親く交際をして。恰ど今年で二年ばかり。陰陽なしに情誼を盡して。(小) ながら。兄弟の様にしてきた事だが。合點のいかぬは君の舉動が。此春以來がらりと變つて。唯に學問を怠るばかりでなく。我輩にまで藏しだてをして。何も打明ては。言はないへぢやないか。もつとも亞ヂソンがいつた通り。肚の中で思つてる事を。いゝもわるいも辨別へなしに。さらけだして打明るは。馬鹿のしるしには相違ないが。それは他人に對していふべき事で。信友の上の事ではなからう。亞ヂソンも已にいつたぢやないか。信友と信友との話はシンキング。ラウドロイ「肚を語る」だト。政略といふ字が流行だしてからは。政治上にも社會上にも。無暗に政略といふ事が行はれて。甚しいのは親父にまで。政略を用ひるやつがあるといふが。實に馬鹿氣きつた事ぢやアないか。ボリシイといやア。立派なやうだが。いひかへれやア。手練手管

（だ。）

（開せざる所だ
けれど）

サ。親父や信友の間に。手練手管が行はれるやうぢやア。世も末なりといはざるを得ずへちやア
ないか。君なんぞはもとより。政略を用ふる譯ぢやアなからうが。舉動の變つたのが。一箇の
不審だ。想ふに何か。人に言はれない心配があるんだらう。もつとも心配があつたからつて。君
の精神上に。たいした影響を。及ぼさない事であれば。敢てへ關はないことだけれど。ユーア
セルフ「君自身」には解らないかしらんが。現在學力もさがつたやうだし。リイゾン「道理を辨
別する力」もよつほど狂つて居るヨ。いつか中から。いはうくとは思つて居たが。あんまり面
白い事でもないから。けふまで。逡巡して居た譯だが。いはれる事なら打明て。僕に聞かして呉
たまへな。及ばずながら力にならうし。又時宜によつたら。意見をも述べようから。ト眞實見え
たる守山の言葉に。「守山が言葉中あるひは僕といひあるひは我輩といふは尙我輩といふ言葉を
いひなれぬ故としるべし。」小町田はさしうつむきて居たりしが。漸々に頭をあけ。（小）さう言
はれると。實に君に對して言譯がないが。何も別に藏して居る譯ぢやアないが。ちかごろまたブ
レイン「腦髓」が不健くて。（守）それやアいけないヨ。僕は其腦髓の不健くなつた原因が聞た
いのサ。君は強情に藏して居るが。我輩は已に君の内實をしつて居るヨ。しつて居ながら聞くと
いふは。何だか解らない【仕打の】様だが。マア氣を靜めて聞たまへヨ。君は全體謹慎家【の

（心外で）

（で）

（ではな
い）

方】で。所謂神經質の人間だから。いくら思案の外だからつて。あの繼原や倉瀬のやうな。向う
見をする人ではない。其謹慎な性質で居ながら。五日と尻がすわらないで。兎角外泊をしたが
るのは。あんまり不審な譯ぢやアないか。風評だからわからないが。デット「負債」もよつほど
出来たといふし。學校の評判はすこぶる悪し。信友の身であつて見れば。君の風評を聞いたび
に。僕がへくやくしくつて。堪らないヨ。それやア僕一身の事だから。もとより關つた事ぢやアな
いが。君の家だつて。大してリツチ「金満」といふぢやアなし。二進も三進も。ゆかなくなつた
時には。フハザア「家大人」の耳へも這入るわけだが。然なりやア。大變な心配をかける譯へち
やアないか。斯いへば何だか。僕一個聖人ぶるやうだが。僕だつてフホルリイ「おろかな行爲」が
ないへちやアない。君だから打明て話をするから。笑はないで聞たまへ。恰ど一昨年春であつ
たが。三菱に勤めて居る友人が。三人ばかり尋ねて來て梅見に出掛ようと誘つたので。試験後の
休課ではあつたし。大賛成で散歩にでかけ。龜井戸から向島へ出て。奥山の梅林「茶屋の名」へ
這入つたのは。恰ど日の入の頃であつた。處が此三人の友人といふのは。頗る洒落者の。放蕩家
だから。是ぎり【で】還るのも残念だ。直にグウド、ブレイン「吉原」へ。行かうぢやアないかと
いひだしたのサ。はじめのうちは愚圖々々斷つて見たものの。野暮をいはないでつきやひたまへ



と。無理やりに引ばられるし。酒には酔つてるし。思はず車にのつかつたと表向で。實はいつて見ようといふ。野心が内々はあつたのサ。勿論其時分には我輩も純粹なお坊さんで。今よりも尙とんまだから。彼方へいつても小さくなつて隅に引込んで笑つて居るばかり。洒落も知なれやア藝もなし。身服は相應にしては居たが。誰が見ても純粹書生で。エム「金錢」がありさうには見えないのに。どうした事の間違だか。僕の敵娼のプロスチチュウト「娼妓」は。大層僕を手厚くして。狎客も同様な取扱ひサ。扱は是が所謂手練手管といふものかと。内々で探つて見ると。其娼妓といふのは恰ど一月前に。出勤をしたばかりで。殊に地方者だといふ話ヨ。なるほど。さうきいて見れば。言葉も地方言葉をつくりだし。取做も何だか素人らしいのサ。其兎容はどうかといふと。まづ丸兎の別品で。年は十七か十八位。性質もすこぶる。おとなしさうだから。僕も元來イー、ブロックス、イー、ストンス。「イー、ブロックス、イー、ストンスとは。汝木石にひとしき輩ヨといふ事にてシエイクスピヤといふ英國の狂言作者の臺帳のうちにある臺詞なり。」の。仲間ちやアないから。幾分心が動いたのサ。處が床へ回つてから。「プロ「娼妓」と僕とさしむかひになると。プロがしきりに。僕の羽織の紋を不思議がつて。此御紋はお家の御定紋ですかト尋ねるから。然だといふと。プロはしばらくだんまりで。何かいひたさうにして居るか

〈其女〉

ら。僕もふつと心附いて。ソラいつか君に話した若や。妹ちやアあるまいか。と思つたから。それとなく迂曲に。マザア「母親」の身の上を聞いて見ると。「娼妓がいふにはは。」私は小さい時から慈母さんはなくて。嚴父さんにそだてられたといふし。故郷を聞けば三河だといふし。あんまり方角が違つて居るから。マサカ上野の戦争で母親と一所に見失つた。妹だとも思はれないのサ。殊に慈母さんが一所に居ない所を見れば。全く別人かと思はれるし。又二つには其晩はじめてあつた女だから。何だか押して聞くの間がわるし。ツイそれなりにしてしまつたが。なんだか心がすまないから。其晩床にもはいら(ないで)。連の友人には偽言を吐いて。夜中に別れて。かへらうとする。と。プロが頻に僕をとめて。是非泊つて居て呉ろ。といふのを。やつとの事で振拂つて。店の階子段を降かゝると。「プロ」が後から送つて来て。是非承りたい事があるから。是非モウ一度来てくれる。ト是非を三ツ四ツ。重ねていつたヨ。歸る道も歸つてからも。もしや妹ちやアあるまいか。と思ふ妄想が残つて居るから。どうしても氣がすわらず。マ、ヨ。もう一度いつて見よう。それから四五日たつた後に。たつた一人で出掛た處が。あんまり早く出掛たので。日がまだ西に沈まないのサ。明るいうちから登樓するものも。何だかきまりが悪いから。奥山の中をぶら／＼して。人形なんぞを見てあるくと。ある活人形のまねきに。宮城野信夫の大黒屋の幕が。

〈す。〉

〈彼〉

できて居たのサ。是に於て乎。僕大に感ずる所あり。つくく〜と考へて見た所が。同胞對面といふ事は。むかしからよくいふ事だが。到底大方は假作話で。リヤル「現實」にあるのは稀なことだ。慈母と妹に別れたのは。已にこととして十四五年。人手を頼んで捜したのも。幾度といふ事をしらす。又新聞へも「二十五箇所。五六年あとに」廣告をしたが。それですらも。しれない人が。俄に出て来よう筈はない。それも舊幕の頃であれば。探索が行届かない。といふ事もあらうが。金があるまゝ、金にあかして。其筋の人にも依頼をして。七八年來さがしたのが。ノウ、サクセツス「無効」であつて見れば。母親も妹も流丸で死んでしまつたに相違ない。それが恙なく存命て居て。娼妓になつて居ようなどは。俗に所謂心の迷ひで。アイヂャリズム「架空癖」「架空癖」とは昔の小説や艸冊子にあるやうなる。世の中にありさうにない事を實際に行うて見たく思ふ癖をいふなり。の「頂上」だと。漸く心が附いて見ると。我ながら私に恥かしくなつて。早々下宿へ還つたがネ。【マア】考へて見たまへ【ヨ】。若此時に我輩が。架空癖の奴隷になつて。彼のプロンの處へ行たもんなら。それこそデンゼラス「劍呑」きはまつた話さ。何故かといふに。其時分には。月々家父から。十五六圓位宛學資を貰つて居たから。月に二三度遊ぶ位は。どうとも融通がつか計ぢやアない。先方の接遇が。手厚いときて居るから。萬が一ツ其女が。妹であれば兎も角も。

（甚しきもの）
（と）
（其女）

（もはかりがたし）

若し妹でない時には。我輩が迷つたへに相違なしサ。よしや其女が實の妹であつたにしろ。肝腎の慈母が一所に居ない事なら。暫らく探索を。猶豫して置いたからつて。大して不人情といふ譯でもなからう。殊には娼妓も往昔と違つて。自由營業の有様だから。今直に身脱の手助をしてやらすとも。さまで難儀でもあるまいかと。斯う自分極に定めたのも。舊幕時代の社會とちがつて。今は何事も自由だから。假令三四年たつたればとて。其女の行方が。わからなくなる譯もないから。一本立になつた上で。更に先方へ尋ねていつて。聞正しても遅くはなし。又その前に身受をされて。堅氣の人間になつた事なら。彌聞正すに便利は佳し。兎角急ぐのは無益な事だと。やつと心を抑へ附たが。其ストラツグル「くるしみ」は大變だつた【ヨ】。なか〜今〜で。話をするやうぢやアなかつた【ヨ】。（小）へ、イ。實に希代な事もあつたものだネエ。しかし其娼妓はほんたうに君の妹かもしれないヨ。羽織の紋を不審がつた鹽梅から。【初會から】手厚くした工合なんぞは。實に不審中の不審ぢやアないか。（守）ソラ君さへ不思議がる位なもの。實地に臨んだ吾輩が。不思議がつたのも無理はないヨ。しかし（艸冊子や何か）あるやうに。兎に天然のしるしでもあると歎。守袋の中に黄金の像でもあれば。ちつとは當になるはなしだへけれど。何をいふにも。俄急の騒動で別れたのだから。何様物を持つて出たのか。さつぱりこちらには證據がな

（小説に）
（が）

へて。

いから。慈母が居ないで見れば。どんな偽をつかれても。為様なし【サ】。尤も守袋は古錦爛の截片でこしらへて。始終妹の腰につけてあつたといふ事だが。それとてもおとしましたといはれりやア。それきりサ。生中下手な口を叩いて。女の天一坊でもしよひこんでは。家父に對しても。社會へ對しても。あんまり體裁のいゝ話ぢやないへヨ。ハ、ハ、ハ。(小)なるほど。さういやア然だけれど。何故家大人へ。其事を話さなかつたのだ。君が自身ですりやア。惡からうけれど。家大人にさせれやア。危険な事も。なからうぢやアないか。家大人がよもや。其女に迷やアしまい。アハ、ハ、ハ。(守)アハアハ、それやア然うサ。しかし場所が場所だから。どうも家父には話しかねたの【サ】。又二ツには親父は。吾輩よりも斷念がよくつて。母親と妹は已に死んだものと。極めてしまつて。其命日には。法事を行つて居る位だから。今時分こんな事をいひだすと。却つてお眼玉を食ふばかりサ。○想ふに母親と妹は。親父が考へて居る通り。死んでしまつたに相違ないが。いまだに妄想が残つて居ればこそ。其女の名を覚えて居るヨ。(小)何樓の誰といふ女だネ。(守)角海老の兎鳥といふ【女サ】。孔子は血氣盛なるときは。之を誦むるは色にあり。といはれたが。我輩の考案では。架空癖にありといはざるを得ずだ【ネ】。兎角少年の中には。小説稗史にあるやうなロウマンチック【荒唐奇異】な事がしたいもので。それが爲に。遂に一身を誤ることがあるヨ。下等

の動物と同じやうに。肉體の快樂に耽るのは。飽けば止めるといふ事があるが。架空癖といふ事は。素が無形の想像だから。年をとつて實着な了見が浮ぶまでは。決して厭倦がくるものではない。劍呑な所以。蓋しこゝにあり。と言ふべきなりだ【ヨ】。想ふに君の迷つて居るのも。やつぱりアイテヤリズムに相違はない。我輩がウキイクネツス【恥かしき事】を打明て話したから。君も打明て話したまへ。今までは我輩がいくらか原ノロ【原ノロとはノロケル人といふ意】の位置にあつたが。これからは君が原ノロだ。甘んじて被ノロになるから。コンフヘツス【白狀】してしまひたまへ。ト談諺言葉の其中にも實意を含みし意見の端々。けにもと悟る小町田繁爾は。しばし頭をうなだれつゝ面を赧めて居たりけり。

【作者曰く。本篇中に寫しだせる書生の如きは。概ね書生界の上流を占るものなり。故に其の語らふ所もやゝ高尚なる所ありて。今日市中を渡りあるくガラクタ書生とは大に異なり。勿論左様の書生輩は官立大學の學生に多く。私塾の生徒には稀なるものなり。私塾の書生輩の情態の如きは陋穢にして野卑。殆ど寫しだすに忍びざるものあり。故に余は故意に上流の風儀を寫しぬ。活眼家幸に答むる勿れ。】

第四回

收穫も絶えて涙の雨の降つとく

小町田の豊作不作

小町田はやう／＼に頭をあげ。(小)然う君にいはれて見ると。實に面目ない次第だけれど。實にいろ／＼な。駭難つた事情があつて。(守)それを我輩が察しないぢやアない。謹慎深い君の事だもの。理由がなくつて迷ふ譯はない。我輩がジャツジ「裁判官」になつて。事の當否を裁判するから。マア兎も角もはなしたまへ。(小)僕の話は君の話と違つて。大變にくだ／＼しいから。君が退屈するだらうが。マア聞て呉たまへ。家父の身の上から話すから。トいひつゝ茶碗を引よせ。茶をなみ／＼と斟たゝへて。やをら舌をば濕したり。

作者いはく。以下の話譯は。小町田榮爾が。守山への話なれども。小町田の言葉をもていはしめては。十分に其情實を。述つくしがたきおそれあり。殊には。文の冗長になり行かむかと。おそるゝ故に。わざと平常の物語のやうに寫しだしぬ。【見る人其心して讀ませたまへ。】今はむかしとなりぬ。白山の御社のほとりに。小町田浩爾といふ人あり。維新の際に些少ばかり

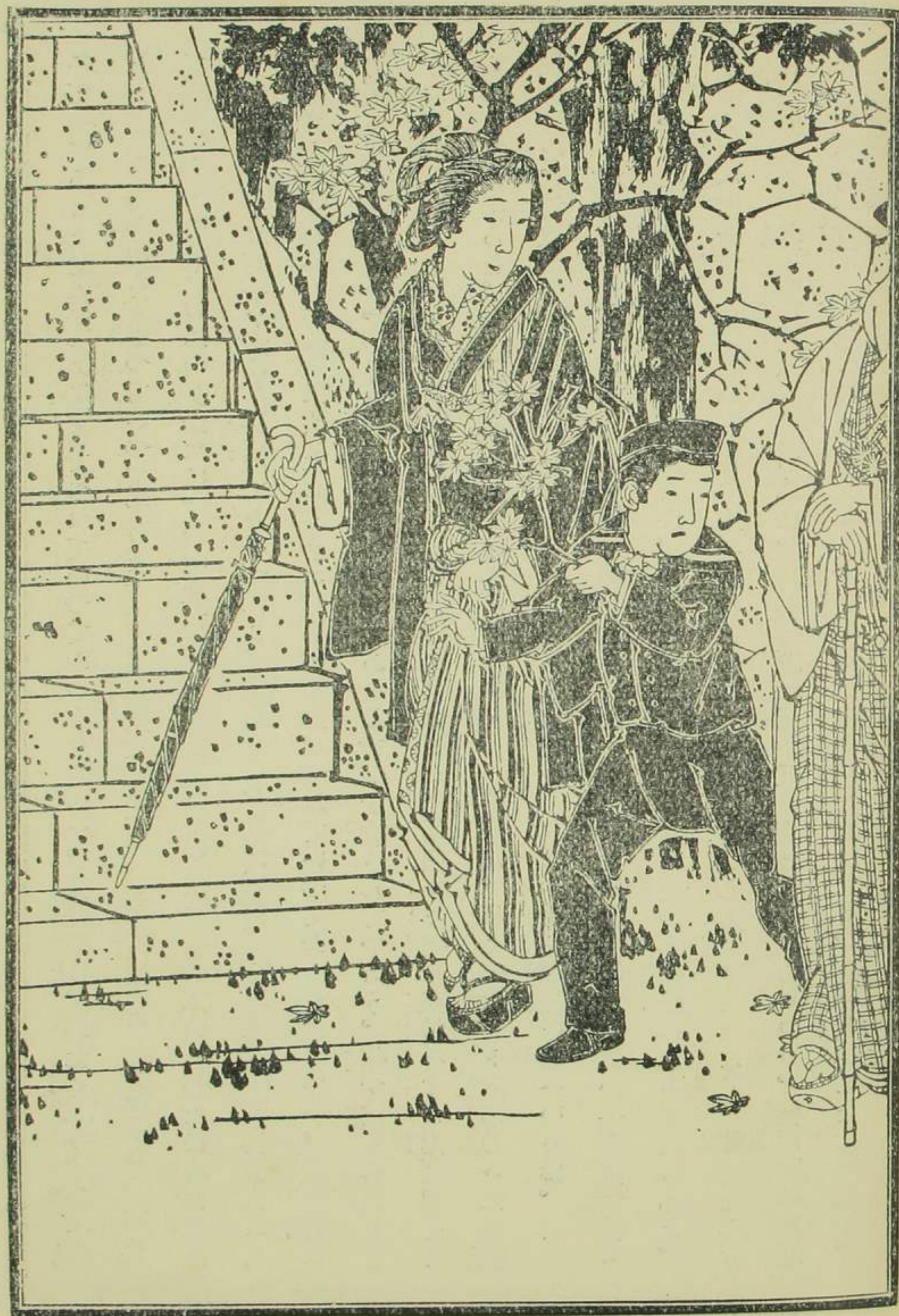
註。此の初版は刷り潰しあり

の功績あり。且は貴顯の方々にも知る人多くて。官海に電信すくなからねば。いつしかさる省へ召出されつ。さしたる才能のあるにもあらねど。年比俸あまた賜りつゝ。過分の榮華に耽る程に。妻妾共に絹布ぐるめ。春は花。夏は納涼と遊びあるきて。外面を飾る黒塗車。あくまで富裕に見えながら。其内幕は火の車。まはしきられぬ苦しさをば。外に見せじとかりそめの。借が高じて高利さへ。借入るゝやうなり行きては。年々歳々借財のみ。たゞいやがへに増かどみ。清く負債を返却べき。見込は絶えてあらざれども。浩爾はすこしも動する色なく。泰然として日を送りぬ。【近きころ某がいはれし言葉に。官員は娼妓と一般。一トたび官員となりたる時には。足をぬくこといと／＼難し。其故はいかにといふに。官員となれば。如何程にても金を貸すものが多かるから。自然に借財が殖え行く譯なり。而して免職となる時には。四方八方の高利貸が。皆催促に來る事故。いやでもおうでも官員をば。止める譯にはゆかぬといはれき。ゆに然事もありけんかし。浩爾が泰然驚く色なく。借金の淵に日を暮るも。其融通のさすがにも。尙おこなはるゝ故なるらし。】

○時しも十一月の末つかた。二月の花をあざむく紅楓葉も。やう／＼に散ゆきて。四面は霜枯の冬景色。ひつそりとした田舎の詠は。また一層の事なるべし。幸ひけふは日曜にて。天氣も頗る

暖かなれば。残の楓葉の遊覧かたぐ。運動のため散歩をなさん。誰か一所に参らぬか。ト主人の言葉に權妻お常。(常) それぢやア坊ぢやんと妾を。お連なすつて。ト言受して。早速に用意を整へつ。小町田浩爾は其子繁爾「此時年十三歳なり」と權妻のお常を携へ。人力車にて飛鳥山の麓までゆき。わざと其處より人力車をかへして。ぶらりくと灌の河の邊をせぐるあるきして。やをら權現の石階をば。降り果たる其折しも。板橋道の方よりして。此方をさして來る者あり。但見れば年のころはまだやうくに七歳敷八歳ばかりの女兒なるが。身には綴合の布衣。一枚のみを被て。足袋も穿かねば草履もなく。跣足にて來るありさま。こゝらの村の。女兒とは見えず。旅するものの子供ぞとは。其草臥たる様子にても。まづ大概は知らるゝゆる。可愛さうにと女氣の。お常は覺えず立どまりて。又つらくと打見やるに。其爪端もじんじやうにて。憔悴たれども鄙しからず。日にやけたれどもあてやかなる。容兒といひ目鼻といひ。愛くるしきこと限なければ。お常はせざるに立むかへて。其方はこゝらの村の兒か。または餘所からきたのか。ト馴々しげに問ひよれば。女の兒は此方へ振かへりて。大人やかに會釋をなし。(女兒) イエ私。こゝらの者ではございません。桶川の方からまゐりました。といふにお常はいよいよ不審り。(常) それぢやアおまへは。連の人達にはぐれたのかエ。(女兒) イ、エ。初めから一

個です。(常) エ。一個で來たのだとエ。それぢやア嚴父や慈母は。ナゼ一個ツきりで。こゝらへ來たの。ト問へば女兒は不審さうに。お常の面をうちまもりて。(女兒) 私はもとから嚴父も慈母もありません。といふに傍に聞居たりし。小町田浩爾も訝りつ。覺えずかたへに進みよりて。(浩) 妙なことをいふ坊だナ。其方は家父はないのか。(女兒) ア。(浩) それぢやア慈母は。(兒女) おつかさんもございませぬ。(常) をかしいネエ。それぢやアおまへは。今まで誰にそだててもらつたのだエ。(女兒) ばあやが。(常) ナニ。老婆だとエ。その老婆は今何處に居るノ。(女兒) お寺のお墓のなかに。トあといひさして泣出し。面を掩ひてふししづむ女兒の姿のいぢらしさに。浩爾はお常と面見合はせ。覺えず哀を催しつ。又改めて尋ぬるやう。(浩) 坊はなんで一人ツきりで出てきたのだ。そして何處へゆくのだ。(女兒) 東京へ參るのでございます。(常) 東京は。何處の何と云ふ人の所へ行くんだエ。(女兒) 神田同朋町の大工で源作といふ人を尋ねてまゐります。(浩) 其源作といふは。坊のしつてる人か。(女兒) ハイ。一年ばかり逢ひませぬけれど。老婆の親類でございます。(常) ぢやア。なんだネ。其大工さんの所へ尋ねていつて。おまへの世話してもらふつもりだネ。といへば女兒はうなづきつ。尙不審さうに浩爾とお常の面のみ見つめて居たりけり。お常は頻にあはれをもよほし。(常) ネエ檀那。かあいさうな



子ぢやアありませんか。お宅までつれていつておやんなさいナ。恰ど明日。わたくしが下谷へ参りますから。神田まで送つていつてやりますから。坊やおまへは。お晝のおまんまを喰たのかエ。(女兒) イ、エ。きのふの夕がたに。餅を喰たばかりです。(常) エ。きのふの夕がたに喰たばかりだ。それぢやア昨宵は何處でとまつたノ。(女兒) しらない家の軒の下で。(常) チャマア。可愛さうに。定めしお腹がすいたらうネエ。アノ檀那。つれていつておやりなさいナ。(浩) 實に可愛さうな事だノウ。どうせ扇屋へ寄るから。あそこで何か喰さしてやらう。何か曰くのありさうな身の上だから。其方よく聞正して見るがい。コリヤ。祭爾々々何を悪戯をするんだ。そこらの樹木を折ると。巡查がやかましくいふぞ。サア〜早く來な。早く來な。ト散のこりたる紅楓の枝を。折取つて居る祭爾を呼たて。お常と共に女兒をつれ。やをら扇屋の店へいりぬ。○かくて扇屋にて食事ななし。女兒にも物を喰させ杯す。此女兒は桶川の者とはいへど動作もしとやかにて。言葉遣ひも鄙しからず。何處となく上品なるは。定めし由緒のある事ならんと。浩爾も思へばお常も思ひて。其身の上を尋ねとへば。女兒はすこしも藏すことなく。片言まじりに物語れる。其來歴はいかにといふに。時しも慶應四年五月某の日の事なりけり。桶川驛の棒端なる。ある一軒の家の前に。聲かるゝまで泣叫ぶ。稚兒の聲聞えたり。尙拂曉のことなりしが。

其家の主人といふは。齡五十ばかりの老女にて。年比洗濯針仕事などをして。微かに其日を送る者にて。年老いたるまゝ。目醒も早く。此號聲に不審を抱きて。表の雨戸を押開きつ。よく〜見れば。こはいかに。思ひかけざる一個の女兒の。年まだ三歳ばかりと思はるゝが。おのが軒下に臥たふれて。聲を限に哭くなりけり。もと此老女は。頗る慈悲深き者なりければ。あな不便やとて其女兒を。急ぎ家のうちへ抱きいれつ。さまざまにすかし慰めつ。其名親の名を尋ねれども。片言のみにて譯わからず。守袋にてもあらば。と探り見れど。衣類の立派なるにも似ず。守袋やうの物だになし。身装も兎容も上品なれば。由ある人の愛子ぞとは。私に推察なすものから。知らせてやるべき便なれば。たゞ拾ひ得し趣のみ。其筋の方へ届け置きて。女兒は其儘に家に留めて。單身なるまゝ此女兒を孫の如くにいとほしみて。假に其名をお芳となづけて。いとまめやかに養育する程に。お芳もいつしか生長して。はや十歳となりけり。これより二年ばかり先づ年より。老女は中風といふ病にかゝりて。起居もむかしの如く如意ならねば。あたり人のすゝめに隨ひ。某といふ養子を迎へて。老後の扶とはなしたりけり。しかるに此年「お芳が十歳になりける年」の春の頃より。老女は俄に病重りて。七月の末つかたに。竟に他界の人となりぬ。かゝりし程に養子某は。もとより老女が此年來。三四十圓の貯蓄をばなしたる由をば

聞知りつゝ。たゞそのみを目的として。其養子とはなりたることゆる。老女が俄に病死せしを。うち喜ぶこと大方ならず。野邊の送はたゞわづかに。式ばかりのみ取行ひて。老婆が死去せし事の由は。親族へだも知らせずして。おのれは只管煙酒にふけりて。老婆が年來丹精して。貯へ得たりし三四十圓をば。三月あまりに費用すてぬ。かゝりし程ゆるお芳をも。餘計な厄介者なりとて。出入ごとに口ぎたなく。罵り叱りて虐使すれど。便なき身のかなしさには。出てゆくべき先なければ。小さき袂にせきあへぬ。涙に冬はひゞ痕の。肌に絶ゆる間ぞなき。其あはれさを近隣の人が。さすがに見るに堪へかねけん。彼の某が出あるきて。家にあらざる折などは。三回も四回も時の食を。お芳は得喰で家にあるを問ひ慰めつゝ。食物などを竊に贈るも多かりけり。斯く餘所人が陰へまはり。お芳をいたはり養ふことをば。彼の某も知るとはいへども。故意と知らざる面地して。よきこととして出あるきつ。冬氣になりても布子一枚。お芳に與へて被せもせず。袁彦道などに身を持崩し。まけて歸れば口汚なく。罪なきお芳を叱り罵り。果はうちたゞく無理折檻。御免くと泣きかけば。エ、やかましいと猿ぐつわ。物置小屋におしこむなど。おとなけもなき無慈悲道は。悉皆本氣の沙汰ではない。ドゞの結局は貸座敷か。暖昧茶屋へ遣るゝのは。今から知れたる彼兒の行末。可愛さうなと老婆氣の或人々が入智慧して。小使錢な

どひそかに與へつ。此月の末つかた「お芳が小町田親子に逢ひし月なり」死したる老婆の弟にて。今東京の神田に居る源作といふ大工の方へ。一伍一十の來歴をば。書しるしたる書面を添へ。ひそかに落しやりたりしが。お芳は元來年にはませて。いと利發なる性なれば。心細くは思ひながら。心を定めて立出つゝ。覺つかなくもたどりく。今日王子まで來りし由を息つきあへず物語れば。聞く事毎に浩爾とお常は或はあはれみあるひは感じ。其薄命を不便がりて。ほとほと見捨てがたき思あり。殊にお常は先刻より。眼を眞赤にして聴居たりしが。此時覺えず膝を進めて。(常)ほんたうにお前は薄命な兒だノウ。實の兩親には棄られるし。お婆アさんには死に別れて。嘸々心細い事だらうが。かならず心配おしでないヨ。斯して妾が。お前に逢つたのも何かの因縁の有事で。他生の縁とやらに相違ないから。妾が出来るだけ力になつてあけるから。ヨ。ヨ。心配おしでない。アレサ泣くには及ばないワネ。若し神田の叔父さんとやらが。居ないやうなら。檀那さまにお願ひ申して。妾の手元に置いて。世話をして上るから。ヨ。ヨ。安心しておいでヨ。トいひなくさむる深切を。聞居るお芳は地獄にて。佛にあひし意外のよろこび。嬉し涙にかきくれて。伏しづみつゝ。伏をがむ。其いぢらしさを傍見せし。まだ子供氣の察爾さへ。かあいさうなと思へばこそ。おのが前なる口取の。肴を彼方へおし向て。是をも喰ナ。ト取てやる。甘

なつとうの豆々しき。其まごゝろを五分切の。蒲鋒よりも尙厚き。深き情とおしいたゞく。お芳のよろこびいかばかりぞや。斯て其日はお芳を將て。小町田親子はお常と共に。誰彼まへに家にかへりて。妻にも事の理由をしらしつ。榮爾が古小袖を取いだして。急にこれを仕立直し。お芳の布衣と被かへさせて。其夜は我家にとめおきけり。去る程に。其夜もいつしかに明はなれて。午前八時比となりける時。權妻のお常は。かねて宿下の許容を。得たりし事ゆゑ。そこく用意を整へ。彼のお芳をば引つれつ。人力車にて立出たり。素このお常といふは。下谷數寄屋町の藝妓なりしが。先年小町田浩爾が買なじみて。竟に根引して。其妾とはなしたりけり。其父母は維新前に世を去りて。只一人の兄ありしのみ。其名を全次郎といひしが。若き頃より放蕩者にて。不良行爲も。しばくありしが。蓼喰ふ蟲も嗜好くにて。下谷の豪商なにかしの圍妾が。人しれず全次郎といひかはして。一人の女兒をさへ産みたりけり。さはあれ豪商はこれを覺らず。我種とのみ思ひとりて。愛鍾みて養育つること。はや三歳ばかりになりける時。俄然に上野に戦争起りて。鐵砲玉の雨霰。ふりかゝりたる不思議の災厄。上野最寄の町人等は。上を下へと混雜して。彼方此方に逃げ迷ふ。そが中に全次郎は。兼て約束せし事ありし歟。妹お常を見もかへらず。ひたばしりに彼の圍妾の家にかけつけ。此騒動を好機會に。日ほしき品をかきあつめ

つ。手早く風呂敷に引つゝみて。彼圍妾の手を引つゝ。何處ともなく落行きしが。妹お常は取殘されて。逃場に迷ふ周章狼狽。已に命も危かりしを。人の情に助けられて。辛く淺草の親族の許まで落延つゝ。死ざることを得たりしかど。兄の行方を案じわびて。戦争全く終りし後。人を依頼みて尋ねさせしに。谷中道の古木の蔭にて。其死骸を得たりしとて。一個の大きやかなる。風呂敷包と共に。其遺骸をかきもて來るに。お常は悲しく淺ましくして。聲をも得あけずし沈むを。人が慰めて。まづ其包を開き見れば。絹布類衣類あまたありて。櫛釵をも包み込たり。全次郎家にあるべきものとも思はれねば。お常に問ふに知らずと答ふ。さては兼々風評ありし。彼の某の圍妾をつれて。走らんとして殺されし歟。棄ておくべき事にあらず。と豪商の方へ知らせやりしに。彼方ははじめて圍妾の。不埒をこゝに曉るものから。人々が正直なるをめでよろこび。衣類などは悉皆押もどして。其手元へは置きも留めず。お常をはじめ人々へ。感謝のしるしにと遣はしつゝ。また圍妾の行方を求めず。其儘にして打過けり。かくて後お常は。下谷徒士町なる常磐津の師匠なにかしに貰はれて。其家の養女となりしが。年頃となるまゝに容兒も醜からねば。竟に數寄屋町の藝妓となりしは。明治四五年の頃なりけり。こは皆過し年の物語なり。

○去程に權妻お常は。亡兄全次郎には似も附ず。心やさしき性質なれば。おのが往時に思ひ比べ

て。お芳が薄命を。いたく憫れみ。いかで難儀を救はばや。と思ふ心の切なるから。頻に車夫を急がしつゝ。まづ下谷の徒士町なる養母の許にいたりつ。時候の挨拶果たる後。お芳が身の上を云々と物語りて。更に其處にて人を頼み。神田の方へ赴かして。彼の源作とか名を呼ばる。大工の住居を尋ねさせぬ。しばらくありて使の者は。歸り來りていひけるやう。お尋ねなさる大工源作といふ男は。昨年までは同朋町にて。細き煙をたてて居しが。昨年の年の暮に。女房が俄に病に罹り。たゞさへ苦しき瘦世帯が。いよ／＼苦しくなつたるより。不良心を起したるものか。こゝかしこにて窃盜をば。働いたことが忽ち知れ。直に二局へ送られしが。それやこれやで心配せし。病疲れたる女房の。病はます／＼重くなりて。程なく他界の人となりしが。さるべき親類もあらざるゆゑ。近所の人の周旋にて。葬式だけはすましたれど。住居も元來借家にて。財産とても大方は。葬費の補助に賣拂ひて。残りし物は一個もなし。さて源作は近きころ。懲役の期が満たるゆゑ。放免されしといふ事なれども。今は何處に住居るやら。同朋町へはさすがにも。恥てや面出しなさざるから。絶えてしらすと斯のやうに。其町内の老婆たちが。いはれました。ト物語るを聞居るお芳は淺ましく。また悲しさに覺えずも。ワット計に泣出すを。お常親子は道理ぞと。思へば不便いやまさりて。さまざまに慰問めつゝ。便に思つて尋ねて來た。其をぢさんに

逢はれぬゆゑ。心細いも道理へながら。かならず心配するには及ばぬ。わたしが附て居るからには。わるいやうにはせぬ程に。大船に乗つた心になつて。ヂツと落着て居るがよい。よしやをぢさんに逢つたればとて。そんな苦しい瘦世帯へ。世話になられたものでもなし。殊には貧にせまればとて。窃盜なんぞするやうな。頼もしくもない。人のうちに。居るのも安心のできぬはなし。これから直に宅へかへつて。檀那にとくとお話しして。其方はわたしの妹にして。これから世話をしてあげよう。キナ／＼思ふに及ばぬ程に。其泣顔をきれいにふいて。檀那にお目にかゝつたとき。メソ／＼してはなりません。何かと要事は残つて居れど。ちつとも早く此事をば。檀那に相談して見たければ。直とおいとまをいたしませう。母さまちつと御遊びに。ト親子中も義理あれば。さすがに世辭もゆふ間暮。かなしうれしさこきませて。泣しづみ居るお芳をはけまし。その日に白山の屋敷へかへりつ。扱しか／＼と事の由を。主人小町田浩爾に語りて。頻にお芳を憫然がりて。義妹にしたしとこひいのれば。浩爾もたやすく承諾きつゝ。まづ人をして桶川にはしらせ。其假の兄なにかしに對面させて。養女に貰ひ受けたき由。おもてむきにいひ入れさせしに。彼方は元來もてあぐみて。追ひだしたる程なるゆゑ。絶えて異議などいふべくもあらず。速に承諾しが。後に故障などいひいでなば。頗る面倒なるべしとて。金子幾千かを差遣

はし。全く兄弟の縁を切て。お芳を此方へ貰ひ受けつ。其筋へも届け置きて。お常の妹分として養育する程に。お芳は不思議の幸福にて。良家の子となりたりける。其喜びは如何なりけん。よむ人みづから察したまへ。お芳は年尚をさなけれど。年にはまして利發なるに。性質もまた純直なれば。子心ながらも小町田夫婦并にお常をわが爲には。大恩人ぞと思へるから。心を盡して忠實々々しく。かしづくさまのいぢらしさに。お常はます／＼不便がりて。閑暇あるまゝ三味線胡弓。又は踏舞をもならはしむるに。何をさせても合點早く。且記憶もさとき方ゆる。お常はいよいよ感心して。實の妹も及ばぬ程に。日毎に根よく教へしかば。二月三月を経しのちには。酒の席へ呼いだして。お常の地誦にて踏舞を跳らせ。客にも見する程となりぬ。榮爾は此比漸々に。年十三の折なりしが。圖らず妹を得たりしかば。よき遊敵できたりとて。うち喜ぶこと大方ならず。小學校より歸り来れば必ずお芳と共に遊び。縁日などへ起くにも。かならずお芳と共にいぬ。睦じきことさながらに。眞實の兄弟に異ならねば。知らざる者はお芳をしも養女なりとは思ふは稀なり。兎角する間に月日移て。榮爾は十五歳お芳は十二歳となりける年。浩爾が奉職せる官省にて烈しき改革の行はれて。官吏などもそれが爲に。免職となるも尠からず。小町田浩爾も此年までは。數度の黜陟にて震殘されて。無異なることを得たりしかど。素が舊幕府の人間

註。書付
免職の
辭令。

にて。此日新の時節柄に適當なしたる人材ならねば。老いゆくまゝに權門貴紳の。愛顧をえれきの引力さへ。次第々々に薄らぎけん。此度の震災をば得も免れず。兎に似たる文字かきたる書付を得る身とはなりぬ。かゝりし程に憫むべし。きのふの榮耀にひきかへて。【けふは】屋敷も他手に渡し。書生はさらなり下女僕まで。俄にいとまを出す程ゆる。飽きも飽かれもせぬ申なれども。權妻お常にも其意をしらして。若干金の離縁金を與へて。永のいとまを遣はせしは。お芳がちやうど十二歳の。秋の末つかたの事なりけり。斯て後小町田夫婦は白山の邸を賣拂ひて。二人の兒子を引連れて駒込のほとりへ轉移しつ。むかしには似ぬ借家住居に質素を旨とくらすものから。坐して食へば山々の費用かさむならひなるに。況てや舊來借財あり。月々毎にはたらるゝ。利子を拂ふに困じはてて。恥を思ふの違もなく。處々方々と奔走きて。再び官途に登らんとて。むかしは人に依頼れし。吾身ながらに今はたゞ。人を依頼の奔走三昧。其度毎に御見舞のしるしまでにと持參する。菓子には折の名はあれど。禮服着用出。頭の折はさつぱり内儀にまで。別て依頼のしるしにとて。浴衣一反贈りたる。其効能も水引の。結び損敷とうちつばやく。移ろひせめし關寺の。小町にちなむ小町田が。運の末こそ是非なけれ。兎角して一年あまりを過るほどに。或人の周旋にて。某銀行の屬吏に傭はれつ。十二三圓の給料をば。月々に得る身とはなりしが。さは

とて樂なる活計にあらねば。妻がはかなき内職にて。足ぬがちな入費の。不足補ふ瘦世帯。苦しき今の身の上こそ。身に學問のなきゆるなれ。たゞ僥倖をたのみとして。榮華に飽きし一生の。不覺なりきと漸くに。悟ればむかし恨めしく。せめて我子の榮爾には。飽くまで學問を修行させて。よしや官途に就かざるとも。餬口の道には懸念のなき。博士學士になさまほし。と思ふ心の切なるから。苦しき中にも融通して。榮爾が十五の春よりして。ある英學の私塾に通はせ。其勤學を獎勵せる。父と母との恩愛をば。子供ながらに推測れる。榮爾は一向勉勵して。稍學力も進みしかば。十七歳の秋といふ頃。ある大學の門に入りて。修學おこたりなかりけり。叔もまた權妻お常は。おのが里方へ歸りたりしが。其養育の親なりける。常磐津某といへる老婆は。家業がらには珍らしくまづ欲寡き性なるから。お常が檀那を失ひつゝ。空しく歸り來りしかど。今までお常にみつがれたる。義理さへあれば心よくお常を我家へ引取つゝ。愚癡も小言もいはざれども。さりとて樂なくらしにあらぬを粹の果とて説くよりも。悟るお常が心の切なさ。やうやく斯うと思案を定め。やがて母親とも相談して。むかしゆかりの人々より多少資本を借うけつゝ。幾ほどもなく數寄屋町へ。自前で再勤のひろめをなし。へい今晚はと若返る。新橋風の大島田。其名も小常と改めつゝ。昔とつたる撥先にて。客の調子をとりがなく。あづまの客も西國の。野暮な客人も

おもしろく。そらさぬやうに遊ばする。粹な小常が腕前の評判ばつとたちまちに。得意もあまた出きしかば。小常はある日久濶にて。手みやけなどを用意なして。小町田の許へ音信つゝ。別後の安否を問ひたりしに。此年夏の初候「是はこれお芳が十四歳の夏の事なり。」よりして。小町田の妻は肺病にて。重き病の床に臥して。枕もあがらぬ有様ゆゑ。お芳一人が甲斐々々しく。勝手元から看病まで。いと實意にたち働き。夜もたちぬふ内職わざ。小腕ながらに小田巻の。絲繰かへしいたづらに。むかしに返す由もがな。と暗きランプの陰ながら。思ひしほるゝ兒心と。思ひはおなじ小町田が。むかしには似ぬ二子の袴。腰辨當の日勤の。日は缺ねども月々の。仕拂資にかくばかり。以前の榮耀の報罰にて。今尙負債に責らるゝ。泥に息つく小鱈の。苦勞さこそといにしへに。思ひくらべて御笑止やと。藝妓小常は覺えずも。涙に袖を濡せしが。それより後は時々。小町田の許を問ひ音信れ。辭するをきかず幾何宛。花客の祝儀の裾分は。お芳坊への寸志の襟代。檀那さまへは内々に。お前が納めておけばよい。といふは律義な兒心をば。見ぬいた小常が俠氣なり。かくて其年の冬に至りて。妻なにかしは養生かなはず竟に位牌となりしかば。浩爾榮爾の愁傷はさらなり。お芳は母にも別れしごとくに。力を落してうちなげくを。小常をはじめ人々が。いろ／＼さま／＼に慰めつゝ。浩爾親子に力を添へて。其野邊送をすましなとす。さらぬだ

に不如意なる。活計がこれより又一層。いと苦しげなる有様をば。小常はさすがに見過しかねて。百方浩爾を説こしらへ。いろふを聴かず無理強に。竟にお芳をひきとりつゝ。おのが妹分の名前にして。名も其儘に小芳と名宣らせ。雛妓のひろめをなしたりしは。是翌年の春の事にて。お芳が十五歳の時なりけり。是しかながら欲心にて。斯やうになしたる譯にてはなく。全く浩爾が此折しも。四五十圓の負債の爲に。頗る急迫なしたりしを。救はんための義心と聞えし。去程にお芳は雛妓となりし後も。しばしば小町田許問ひきたりて。安否を聞くを樂とし。其度毎に手みやけなど。心ばかりと持参するを。浩爾は結句困じはてて。ある時小芳にいひけるやう。昔の恩義を忘れないで。斯して折々尋ねてくれるは。實に喜ばしい事ではあれど。いはばそなたは今日では。小常の家の女にして。籍もあちらへ送つた事ゆゑ。余にはさつぱり縁はない。斯いへば何とやら。瘦我慢の見識めけど。小町田浩爾はこのごろでは。女に藝妓のかせぎをさせ。それで生計をたてて居ると。人にそしらるゝも心苦しく。そなたもあまりたびくしけく。おれの家へ尋ねてくれば。義理あるお袋が思ひ僻めて。貰物でもしおくるかと疑ぐらないともいはれぬ道理。實の子にますそなたの事ゆゑ。あひたいは余も同然なれど。一旦縁を切上は。度々ひきよせるは條理であるまい。そなたもこゝを合點して。只たまさかに音信をして。といふは一ツは小常

への。義理ぞと悟る利發の小芳。それより後は二月おき。又は三月目に音信して。其眞情をあらはしたり。扱此頃より小町田浩爾の。運もやうやくなほりにや。ふるき借財も大方は濟し盡しつ。加之俸給さへ。月々二十圓と増されしかば。家計もさすがに樂になりて。妻が病死の時分より。暫らく休學させおきたる。祭爾をふたゝび入塾させ。つとめて修學させたりけり。後一年を経。今年春の二月といふ月。「すなはち祭爾が飛鳥山にて田の次に逢ひたる年なり。」藝妓小常は年も已に三十の坂を超たりしかば。三味の手前も恥かして。業を廢きしにつけ。妹分小常を二代目小常と名宣らせ。大妓として押出せしに。姉にもまして評判よく。小常々々と四方より。かゝる最眞の口々に。取まはしから容兒まで。故人澤村田之助の。寫眞だくともてはやしつ。ある半可なる通客が。洒落て田の字と呼びたりしが。いつしか普通の名前となり。茶屋のすゝめにおのれもまた。竟に田の次と名をあらため。客の氣合を取なしに。ぬけめなだかき流行妓。全盛たぐひなかりけり。

○(小女)ハイ守山さん。御晩餐。といひつゝ。唐突に二階口から膳をさし出す。守山は一驚して。(守)ヤ何だ。モウ晩餐か。○ナイ。お客さまの分も持ってくるんだ。實に氣のきかない奴だ。トつぶやきながら小町田に向ひ。(守)ドウモ實に君の履歴は稗史小説にありさうなはなしだネ。

チツタア附會があるだらう。トいはれて小町田は打笑みながら。飲かけた茶をのみほしつゝ。
(小)ナアニ浮ヒクシヨン「つくりごと」は毫末もなしサ。イヤニ長いから定めて君は退屈をした
らうけれど。今すこしだ聞いてくれたまへ。是からが僕の昆フヘツシヨン「懺悔」サ。實はいひかね
る次第だけれど。いひかねるのは矢張ウキイクネツス「未練」だと思ふから。思ひきつて君には
なして將來の潔白を表白する。僕のプレツジュ「質物」にしようと思ふが。(守)ライト「詢佳」
それでこそ君だ。(小)そんなに煽動ちやアいやだ。(守)なんの煽動もんか。眞成にさうぢやア
ないか。ダガ待たまへヨ。今にサツバル「晚餐」が来るから。飯を喰つてから聞うぢやないか。
オイ／＼飯をはやく。○ヤア何だ今日の茶は。ハ、ア茄子の鳴焼か。下宿屋先生イヤニ洒落たナ。
小町田。君はこれを喰ふか。(小)僕は大きサ。(守)我輩も嗜だテ。此茶なれば飯が餘計喰へる
ヨ。いつもなら二ゼンか三ゼンだが。今日はアツト、リイスト「すくなくとも」四ゼン歟。折しも二
か(小女)ハイ。ゴゼン。(守)ハ、ハ、ハ、恰ど其位喰へるだらう。

第五回

心の猿の悪戯にて

縫初し戀の緒のむかしがたり

守山は楊枝を啣へながら。(守)サア／＼小町田。閑話休題だ。却説をはじめたまへ。(小)それぢ
やアまた演めよう。シカシ守山君。君も十分プレツジュチス「先入の僻見」を去つて聞て呉なくち
やア困る。これから僕がはなす事は。一は冤罪を雪ぐが爲に。一は悔心を表する爲に。眞の事實
のみを話すのだから。(守)そんな御心配は無用だ。酌量減刑は僕の手には有サ。ビイ、シユア、
ヲフ、エ、フヘヤ、ジャツジユメント。「大丈夫だよ。公平な判決をするから。」(小)オウ、ノウアル、
ジャツジ。「イヨウ判事さま。」(守)駝ニエル、カアムス。「青砥藤綱さまア。」「註。駝ニエル、カアム
スといふ言葉は人肉質入裁判と云ふ院本の中にあり。」が聞て惘れらア。サア／＼はじむ可しく。
(小)待たまへ。モウ一杯飲んで。トいひつゝ煎茶をグツト飲ほし。又もや物語を始めけり。梓弓
春としなれば。若人の心は戀に浮かるゝとかや。 "In the spring, a young man's fancy lightly

註。人肉
質入裁判
の商人

turns to thoughts of love". けにさるものに有けるかし。時しも今年四月のなかば。小町田燦爾は同學の友人輩と諸共に。さかりといへど散やすき。けふか飛鳥の櫻狩。思はず酒に酔倒れて。藝妓の田の次に邂逅せしは。已に第一の條下に於て。詳細にするしたればこゝに語らず。さるほどに小町田燦爾は。此時までは義妹お芳を。實の妹とも思做して。愛いとほしむの心はあれど。さはとて浮たるたはれ心を。毫抱きたる事なければ。お芳が藝妓となりしのは。いつしか疎くなり行きつゝ。二年あまりは兩人とも相逢ふことのなかりしかば。忘るゝともなくお芳の事をば。思ひもいさすなり居たり。蓋し燦爾は入塾して。専ら學校にのみありけるから。田の次がしばし駒込なる。我家に來しかど逢はざるなりけり。しかるに思ひまうけずして。飛鳥山にて邂逅ひつゝ。むかしにかはらず馴々しく。阿兄ですかと睦みよられ。驚きながらに打見やれば。むかしにかはる派手衣裳。新橋形の島田髷。こほれかゝりし愛嬌毛は。風にふかれて戰々と。招き兒なる仇姿。あなうつくしやと我しらず。みとれて燦爾は恍惚たり。賞る心はいつしかに戀ふる心とうちとくる。〔Admiration melts into love.〕實意もふかきお芳が言の葉。聞けば此方も我ながら。怪しきまでに今までは。同胞とのみ思ひ來し。妹戀しく慕はしく。しばし語らふ其間さへ。粹なき客にさまたげられ。いと怨の多かりしに。但見れば件の客といふは。年齢もまだいと若

くて。色白く眼清しく。被たる衣裳も立派なれば。必定お芳の狎の客か。扱こそ世にいふチンく心で。此方の談話をさまたげけん。あな嫉ましやと思ふにつけ。戀ふる心は生憎に。胸ひとつらに増すかゞみ。曇るはおのが迷ひごとは。悟れど尙も悟られぬ。煩惱の犬に苦しめられ。書を繕きては此年ごろ。有形の自由を論すれども。無形の絆を脱しかねて。戀の奴に身を卑しめ。學の窓にありながら。其魂はぬけいでて。花の巷路に遊びやする。書をよみても解するあたはず。文を作るも妙なる稀なり。時に五月中の某の日。燦爾と同學の學生ども。親睦會の名儀をもて。下谷伊豫紋に集會して。一宴會を開くほどに。燦爾も其席に列りしが。藝妓がなくては素然とは。誰が原案をいだしにや。いつのまにやら兩三人。へい今晚はと定規の會釋。心ともなく打見やれば。該宵は客稀なる晩なりしか。但しは幹事の特選にや。今きやくあしの違なみ。かゝる書生の宴會へは。出るは稀ごと聞えたる。彼の田の次さへまじり居たり。ハツと思ひし燦爾の面。見てとる彼方は粹稼業。そしらぬふりに如才なく。はや彈をむる座附歌。なかに緑のいとしらしさの姫小松。二かい三がいごよの松。幾代かさねん〇チャン〇ト四角に堅くるしく。すわつて見ても何とやら。おのが心に咎められ。燦爾は其座にたへかねつゝ。外すをドッコイそれやらぬ。トはや亂醉の友達らの。暴なコツプの悪強ひ酒。此日も燦爾は酔ひたふれて。みだらひを呼ぶ寶丹さわぎ。

人々ははや退散どき。田の次は女中に耳うちして。此お方さまは今すこし後叻車でおかへし申しませう。おかまひなさらず各位には。とインダイレクト「間接」にはしむれば。そいつは極めて有難いが。迷子にされては僕が困るぞ。さうして宿所はしつて居るか。ハイあなたさまと御一所なら。ヨツク存じて居りますヨ。ト田の次が目まぜに女中の氣轉。是ぞ敬して追拂ふ。世辭としらねば意氣揚々。常客がほして歸りゆく。跡は盃盤狼藉散亂。こはれし酒盃が三ツ四ツ。いつものお方が先刻から。あくのを待つておいでですヨ。小蝶さんに豆田さんは。田の次さんより一足さきへ。ト女中の言葉に藝妓と雛妓は。會釋なしつゝ降階てゆく。兎角するまに小町田燦爾も。やうやく我にかへりしかば。女中に介抱を謝しなどし。田の次もうちとけたる口儀あるべし。されどもいまだ世になれぬ。燦爾は斯様にさし向ひて。憚る所もなきものから。尙思ふこと打出していふべき便をしらざるゆる。手持無沙汰の一間の中。女中がもてくる一椀の。茶には薄茶の名はあれど。濃茶の戀と粹な身は。早くも悟る藝妓の田の次。思へばむかし較べこし。振分髪のをさななじみ。おとなしやかでひとがらで。利發なお方と思ひしのみ。縁はきれても忘れぬ。義理恩愛があるゆるに。尙兄さんぞ思はれて。いつかも花見で逢ひし日に。戀ならねばこそ憚なう。いひにくいこと打いだして。時たま呼んで下さいナト。幼稚時とおなじやうに。あまえたことを言ひ

情あれば
水は流れ
ありければ
慕はば
見れば
たれれば
まわれば

たりしが。今さら思へばなかく。にお身の障礙となりたるかも。散くる花にへながるゝ水。慕はれて見れば然はいへど。悪くはあらぬおかたぞと。思ふ心の薄にいでて。呼んで見たさも義理あれば。あんまり遅くなりましては。學校へわるうございませう。チとお氣分がなほつたら。車をやばせて來ませうか。トいはれて燦爾もころづき。身づくろひして立上り。女中を呼んで投てやる。紙の中なる紙幣こそ。手数をかけし禮心。世なれぬやうでも利發など。思ふも田の次が眞目歎。ひきつゞきつゝ降かゝる。おもて二階の階子段。檀那是非と女中の愛嬌。何やら耳に口よせて。さゝやく田の次が兼言を。背にきゝながし小町田は。心残して歸りけり。あひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを面影の。目にさへぎりて是よりは。いよゝ思の水かさます。戀の淵瀬に小町田が。たゞよふごとき浮心。さすがに忍ぶにたへかねつゝ。或夜ひそかに唯一人。ふたび伊豫屋におもむきつ。田の次を聘てやりたりしが。仕舞の客に伴はれて。北の廊にゆきしと計り。其夜はあふことを得ざりしかば。好まぬ酒をきりあけて。歸ればますく残をしく。又の日ふたゝび忍びいでて。また伊豫屋のもとにおもむきつゝ。ふたゝび田の次を迎へたるに。折よく家に居合しけん。急がはしけに二階口。あがりもはておさしのぞき。あなたと聞いて急いできました。うれしいこと。トの一言は。賢と不肖の差別もなく。男をとろかす文句にこそ。かくて其夜

は夜深るころまで。過去し方の物がたり。聞きつ問はれつうちとけて。酒よきほどに酌かはして。察爾は學校へ歸りたりしが。

(小)ア、もう止さう。あとはつまらない話だから。【君察して呉れ給へ。】いくら笑はれてもしかたがないが。今ではモウ／＼思ひきつて。一昨夜以來大に感ずる所あつて。僕は志を決したから。今までのフホルリイ「痴情」は君。寛大に見て呉たまへ。(守)ナンダまあいゝぢやアないか。裁判の宣告は後でするから。口供をフヒニツシユ「完結」したまへ。(小)モウ御免だ。しかし最一條。話す事があつた。斯いふと何だか自分の非を飾る様だが。僕がある時。ある茶屋へいつて居たとき。【(守)その藝妓も一所にか。(小)マアさうサ。】その時に【ネ。大變】悪い奴にでつくはしたのサ。(守)誰に。(小)ナニサ。吉住潔とかいふ奴でネ。學校の榎森。これはかくかうのブラザア「實弟」サ。そいつが久しく。そのシンガル「田の次の事」の顧客であつて。ひどくあつくなつて通つて来るんだが。男もよし金もあるが。イヤみなへ人だとか云つて。いゝ加減にあしらつて居たと(の事サ)。ソラ僕が飛鳥山で逢つた客といふのは即ち是さ。處が茶屋で折あしく落合つたので。ヒイ「彼奴」がネ。變にチン／＼を起して。随分失敬な事をきこえよがしにいやがつたけれど。此方は何分にも修學中の身の上だから。ヂツと忍耐して歸つてしまつた。それから後二三

奴だか
がかいふ

か。

日もたつと。今まではしれなかつた。僕の風評がバツとたつて。學校中で僕の一件を。しらない者もなくなつた位。中には大層な附會をつけて。僕の事をうはさするので。僕も大に後悔して。斷然絶つてしまふつもりで。トいひかけてさしうつむき。さすがに悄然として居る。(守)君の言を疑ふのぢやないが。それでも二三日まへにも。學校に居なかつたぢやないか。(小)サアそれサ。あれは全く親父から呼に來て。駒込の家へ宿つたのだ。ダケレド他人は然うとは思はず。矢張遊ぶんだと思はれる。シカシ是も前に馬鹿をしたからの事サ。(守)それほどの來歴のある戀でありながら。流石は君だ。斷然絶つといふのは感心だ。イヨ／＼其藝妓が君のいふやうな氣概のある女なら。よしんば君が學問の爲に絶つといつたからつて。憾むわけは毫もあるまい。而し果して實があつて。君を思ふ心が深い者なら。履歴もあたりまへの者ぢやアなし。卒業後に家父に話して。細君にしても不可はなからう。其時にやア實否をたゞして。我輩が藝妓の兄になつて。君の處へ嫁入らせよう(ヘヨ。)(小)馬鹿アいひたまへ。一旦決心した上は。そんな未練があつちやア到底だめだ。思ひきりやアまるで思ひきるんサ。(守)それやア君の一時の考へだ。今まで持つて居たブレジユア「快樂」を奪はれた上に。ホウブ「將來のたのしみ」まで無くなつてしまつちやア。人間はとて。立行もんぢやアない。彼の聖賢にあらざるよりは。それやア impossible「難行」

だ。(小)これやアをかしい。人間のたのしみは豈セツクス「情欲」のみならんやだ。アムビション「功名心」を以て。(守)それやア不可行く。あんまり今潔白なことをいふと。後篇になつて困ることが出来る。(小)エ。後篇とは。(守)ナニサ。小説を氣取つたのサ。將來の事をいふのヨ。(小)ひどいネイ。僕を小説視するのは。折から下よりらんぼう(任)ヤア丹次郎子。御入來だネ。(小)チャ任那君。お歸りですか。君までが僕を小説視するヨ。(任)否小説視するにあらず。小説の人物視するなり。(小)そしてナゼ僕が丹次郎子です。(任)それでも道路風して曰く。小町田に愛妓あり。其名を田兒といふ。なかつけいへば小町田はまのわるさう(守)相かはらず口の悪い男だ。時に任那。君は今朝から。何處を漂泊して。あるいて居たのだ。(任)本日ばかりは漂泊にあらず。信義の爲に半日の光陰を費したとは。我輩の事だ。(守)チス、ストレンジ「そいつは希代だ。」道理で空がくもつた。何をして居たんだ。(任)餘の儀にあらず。昨宵我輩と同伴して寄席へいつた。宮賀匡なる者。歸る遅うして學校に入る能はず。百計こゝに盡て。竟に友人某の家に行たり。一夜の宿をお願ひ申し了んぬ。却説其翌朝六月二十日。ザツト、イス。くはしくいへばネイネムリイ。羅甸でいへばイド、エスト。もひとついへばツウ、ウキツト。それでも足らばウビデリセツト。獨語でいへば。(守)エ、うるさい。モウいよヨ。(任)すなはち今朝の七時半ごろ。ゼ、スチ

詩の六義
一。風

ユウデント「該書生」すなはち同人宮賀匡が。證人許おもむきつ。昨夜おんすまひにやどりしてふ。御證書たまはれとて。ひたぶるにこひいのりしかど。保證頑然聽おして曰く。ユウ、マス、ト、ハブ、ビン、イン、サアム、パブリックハウス「どこかへ登樓したのであらう」ト、匡こゝに於て乎。進退是タニマリ。正當にいへば是谷まり。(守)ア、可厭。モウわかつた。それで君が仲裁にはひつて。證書をもらつてやつたのだ。ナンダそんな事位に。信義も糞もあるものか。(三人)ハ、、、。

第六回

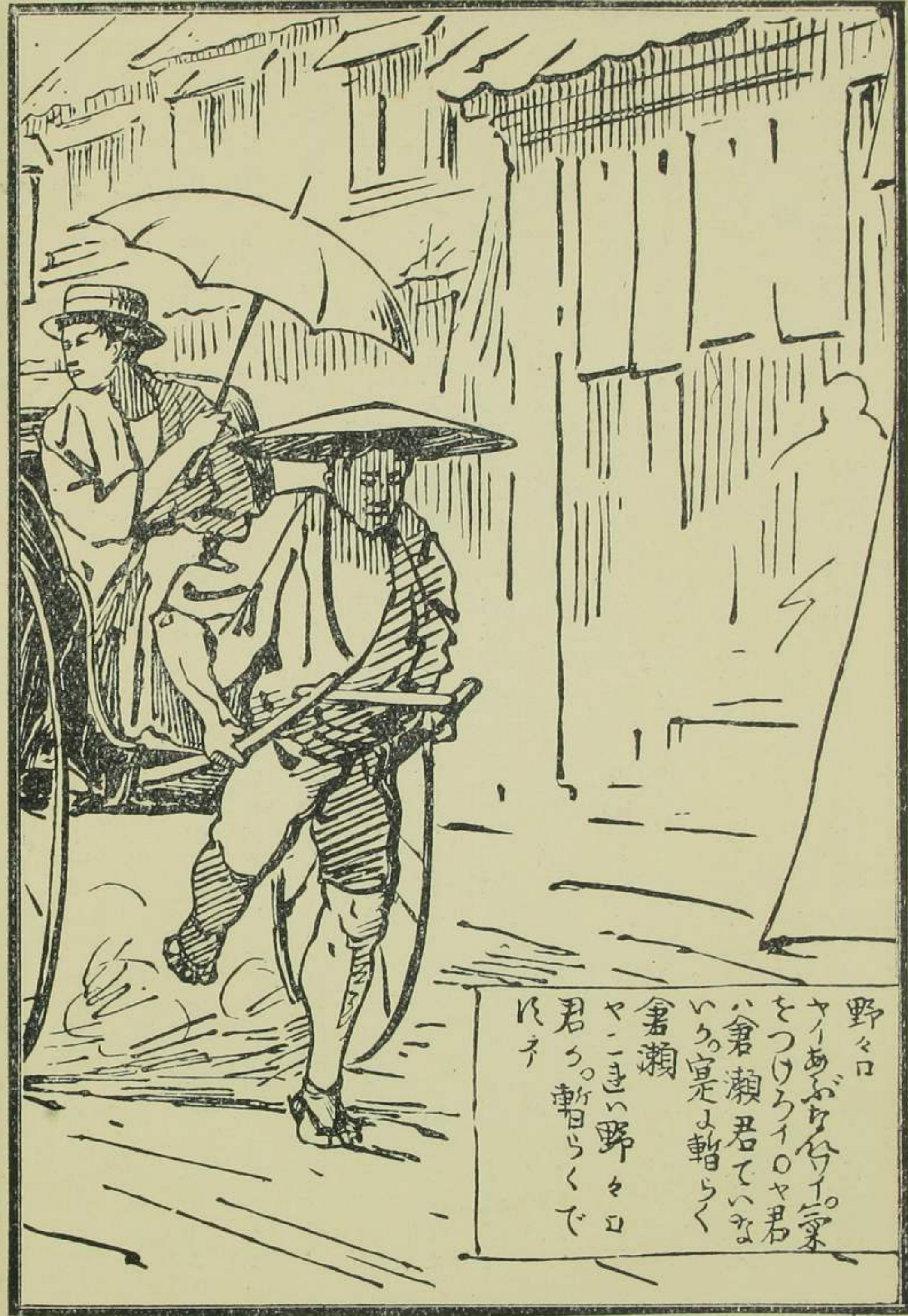
詐は以て非を飾るに足る

善惡の差別もわかうどの惡所通ひ

人間終極の目的は快樂なり。お愉快筋が目的なりとは。今の學者の唱ふる所。もし此説をもて是なりとせば。文明といひ開化といふも。皆此筋の媒介にて。世が段々に開けゆけば。便利な物も次第にふえ。重寶な事もます譯なり。さすれば未開の時代と違ひて。御愉快筋の機械媒介。數限もなく備はるから。自然と世間が奢侈を好みて。三度の食物臨時の宴會。住居の結構調度まで。鬼角

贅澤になりふり恰好。我劣らじと飾りたてるも。餘裕があつての道楽なら。けに御もつともな事なれども。素寒貧な書生の身分で。不了見な外容坊三昧。五十錢の壘附に。一圓の麥藁帽子。四圓以上の博多の帯が。キウ／＼と鳴くを喜ぶども。臍栗をうばひとられたお袋が。蔭で打泣くの物とも思はず。亂暴に被ならした上布の葛衣が。日々皺になるを嫌ふと雖も。年々歳々送金する。親父の額の皺。ふゆるを厭はず。未熟な書生は斯でもなければ。チト學問が出来てくると。忽地自分極の木の葉天狗。自惚の鼻は高けれども。根性は矢張本の木阿彌。窮すりや鈍つくの布子もきて。旦那眼鏡までと落魄たる。前の人力車の轍を見ても。尙さとりかねた外容坊主義。馬子にも衣裳とはさることなれども。錦に包みてもストーン「石塊」はストーン。ダイヤモンドはダイヤモンド。襪襪にくるんでも一目瞭然。みなりでおキリヨは下りやせぬ。また上りやせぬ自然の優劣。そこらにお氣ばしつかれたなら。見容専門に飾るよりも。智識大事に研く方が。グツト身の爲に徳川時代の。敝袍主義書生の風を學び。チト外容主義を廢しては。というた所が馬耳東風。鯨氣取の生意氣書生が。ます／＼輩出する今の時勢に。さりととは珍らしい感心書生。年の頃は二十二三。ある醫學校の生徒にして。モウ一二年で卒業する。野々口精作といふ田舎男。井の字飛白の單衣はゆきたけきはめて短く。三ツ紋の麻羽織はさすがに近頃の仕立と見えて。ゾベ

ラ／＼とはまるらねども。當世風とぞ思はれたる。ヘコは大巾一反の白金巾。尻のあたりから幾重となく。巾廣のまゝに巻つけしは。どういふ本心かさつぱり解らず。西洋の辻地藏が被りさうな。大きな麥藁の帽子をいたゞき。握あまるやうなステッキを振回して。會釋もなくブラリブラリ。折々口先を尖形して。人觸ればアと。言たさうにすれど。さすがにクヤ／＼が下さらぬと見えて。ヂツト我慢するは笑止といふべし。時しも日曜日の四時半頃。野々口は唯一人。友ぼしさうな面附にて上野の三橋から仲町へいで。守田の店先まで来りしとき。切通の方よりして。ゴツサイ／＼と駈てきた威勢のよい一人乗。(野)ヤイあぶないワイ。氣をつけるイ。といひつゝ覺えず車上の人と面見合せて互に吃驚。(野)ヤ君は倉瀬君ではないか。寔に暫らく。(倉)ヤこれは野々口君か。暫らくですネ。お國へお歸省だと聞いたが。モウ歸つてきたのかネ。(野)一昨夜歸京つたばかりだ。君はこれから何處へゆくか。(倉)僕は送別會があつて。鳥八へ行くのだが。マア兎も角も降よう。オイ車夫。モウ此處でよいから降してくれ。かほし車をくだりて。(倉)マダ會へ行くには早いから。久振だ。何處かで一盃やらうぢやアないか。(野)オウライト。(倉)ハ、英語を覺えたネ。(野)可愛さうに。いくら我輩だつて。オウライト位は知つてをるワイ。
○是より兩人池の端の蓮玉。そばやなりへあがり。しばらく盃のやりとりあり。(野)時に倉瀬。



野々口
 ヤイあぶぢぢの家
 をつりろイロヤ君
 の倉瀬君ていな
 いら寔は暫らく
 倉瀬
 ヤーまの野々口
 君の暫らくで
 けり

君はあひかはらず行くか。(倉)君は如何だ。(野)我輩は閉口頓首再拜の秋だ。(倉)どうして。(野)どうしてツて。君聞て呉たまへ。我輩が今度國へ歸つた所が。ソラ御存知の如く我輩は謹直方正の人間だらう。(倉)さうサ。逆から。(野)マア聞たまへといふに。○ダカラ親類の野郎共めが。皆々我輩を信用して。俵共を三人まで今回我輩に委託したぞ。蓋し東京へ歸つて後も。同じ所に下宿をして我輩の薫陶を受させたいといふ請願サ。(倉)オヤ／＼其親達やア。子供に放蕩學を研究させたいといふ請願だらう。それでなけれやア。君のやうな横着者に。誰が大事の息子を託するもんか。(野)黙れ。我輩が横着なら。君の如きはどろばうだ。ダガ困るせ察してくれ。義理にも當分は外泊をすることが出来んから。(倉)ハ、ハ、ハ。自ら求めた災とは其事だ。アンマリ人を瞞着からわるい。(野)人聞がわるいぞ。何時我輩がゴマカシをしたか。此謹直先生を捕へて失敬千萬な。(倉)惻れもしない。去年の僞病の手際なんぞは恐れ入つたヨ。○ソラ三十圓病氣だといつて。佐藤病院から電信で取よせた手際サ。(野)さう／＼彼時やア窮したぜ。親父へゲルト「金幣」を請求するに全く口實が種切になつたので。據なくあの窮策を用ひたのサ。今ぢやア。マサカあんな暴な事はできないワイ。(倉)いくら病氣らしく見せる爲だからといつても。酒を六合も飲んだ上に。下谷からお茶の水まで。息をつかないで駈たなぞは。實にカンスンと言さ

るを得ずだネ。(野)併し苦しかつたぜ。我輩は殆ど死るかと思つた。氣は逆上つてしまふしなア。動悸はひどくするし。醫師が診察して入院しろと言つたも。無理でないはなしサ。(倉)あれぢやア如何なドクトルでも誑されるヨ。シカシ二日もたゝないうちに全快して。病院から下つた時には。醫師も流石に驚いたらうネ。(野)をかしいのは電信で取にやつた爲替サ。證人が今届いたからというて。病院へ持參して呉た頃は。乃公殿下。御不例已に。御全快のおん有様サ。(倉)じつに非道い男だ。身體髪膚これを毀げざるを孝の始だといふぢやアないか。ア、澆季の世の中だ。ア、／＼。(野)トおいひなさる愚殿はどうだ。人から預つた十五圓の金を使ひこんで。とう／＼ムツテル「おふくろ」に尻をぬぐはせたではないか。君は我輩の事を横着だといふが。マア／＼我輩なんぞは。品行方正の頂上だぞ。其内實は兎も角も。親父やお袋に心配をかけないから感心なもんだ。加之我輩は親父の金はつかうけれど。別にたいした外債も醸さないぞ。それでも五十圓位はあるが。(倉)五十圓ありやア澤山だ。我輩なんぞは。纏つたのは僅に三十位だ。最も散しが二十位はある。(野)せんたい君の學校の者は。外債は尠いなア。外債で思ひだした。昨夜斧山が來てなア。斯な物を製していつたぞウ。トいひながら懷中の古墓口から。四ツ折にしたる半紙を取出し。押展べて見せる。(倉)ナンダ相撲の番附のやうなもんだネ。(野)これやア何サ。我輩

の學校の。生徒借金競争。 (倉) ヤ驚いた。東の大關は二千圓の借金だネ。トいひつゝ段々おし
べて見る。

シガヒ			
前頭	小結	關脇	大關
七百六十圓	壹千圓	壹千五百圓	貳千圓
臍栗	強岡	野良倉雄太	中江 秋信
朝泰	次郎	同	前頭
同	同	同	四百圓
三百圓	三百五十圓	三百七十圓	永歌 脩
根津町 溺	厚川 連世	圖留井根藏	

借金くらべ

(倉) やア大變だ。一番妙いのが百圓だネ。實に恐るべしユビヤスの噴火山だ。ドウシテこんな
借金ができたもんだ。(野) ナニサ。三ヶ月毎の書替の手数料と。利子が其儘に元金の中へ加入つ
ていくから。二三年もたつうちには。ツイ千圓位にやアなつてしまふワイ。(倉) 恐ろしい借金
だ。ナゼ君の學校の者は。そんなに放蕩に熱心するだらう。結局君のやうな奴が。薰陶教唆する

が爲なりかネ。(野) 馬鹿アいへ。我輩なんぞは放蕩をすればからというて。大抵しれたもんだ。
蓋し我輩の如きは。尋常の放蕩家のやうに。區々たる衣服に拘泥せぬから。第一贅なゲルト(金
錢)を費すことがないワイ。斯いうたら或は。君の局面に障るかもしれないが。ドウモ當今の書生
は忍耐に乏しいと言ざるを得ずだ。到底書生をしてをらうちは。親父の脚をかじつてをるのだけ
ら。例へば優遊をすればというても。多少忍ぶところ無からざる可らずサ。然るを生意氣に絹の
衣服を被たり。博多の帯を結たり。駒下駄をはいて出掛たりなんかすれば。第一頑固黨の目にも
とまるし。證人には疑はれる。随つて親父への聞えが悪くなる。請求もだん／＼に無効にな
る。小言の郵便が来る。學校の評判はわるくなる。校長にやア呼つけられる。借金取にやア責られ
る。學校にをれば賄屋がきて。先月分の辨當料を請求するし。外へ出りやア八方ふさがり。洗濯
屋に食麴包やに唐物屋に牛肉店。皆な借金の爲の故に。其店先がとほれんから。二町も三町も迂
路して。横町の新道へはしりこんで。犬の糞をふみつけるは實に馬鹿氣きつた事ぢやアないか。
我輩夙にこゝに見あり。狂と呼び。癡と喚ぶ敢て管せず。卓然獨立して獨行するから。見たま
へ。校長も證人も親父も阿兄も。各我輩を信用して。曾て疑ふもの一人もなしサ。金を送つて
よこせというてやれば。安心して送つてよこすし。證人の所へ頼んでも。疑はないで貸てよこす

ぞ。如何だ我輩の忍耐は。實に感々服々だらう。(倉)ダカラ横着ものだといふんだ。其位忍耐があるなら。今一步進んで。卒業後まで忍耐してしまへばいい。君の如き忍耐は何の益にもなりやアしない。五十歩百歩の違ひだ。寧人をだますだけ。罪が深いと云ざるを得ずだ。(野)君なんぞは外容主義だからドウモ不可。蓋し女に惚れられようといふ野心があるからだ。止たまへ。到底だめだから。娼妓でも藝妓でも。金のある方へ轉ぶ世の中だ。餘程古風な奇人でなければなりやア。いくら容姿が佳からというて。寒書生にやア惚はせぬぞウ。(倉)處が僕には惚るから奇態だ。シテ見ると僕だけは例外かしらん。(野)イヤハヤ相かはらず自惚が強いなア。君に惚たのは初縁とかいふ一斤五十錢に縁のありさうな。根津の娼妓一人ツきりだワイ。(倉)へん嫉む可しツ。初縁の如きは疾に放擲。今ではズツト大籠サ。(倉)其放擲した理由原因。古事來歴は。茶屋への不義理と無心の請求。當らずと雖も遠からずだらう。(倉)憚ながら請求なんぞは外の客野郎へ申チマツ事。ワタイなごへは御心配をかけないんですヨウ。(野)アイタ、如何するか。ノロウキング傍聴の上に。捻られてたまるもんか。御心配を懸た所が。到底だめだから。止ませうというたらう。(倉)ハイ、何となくおひなハイ。好男子人に嫉まるトは。萬古の原則だ。ドリヤ會へゆくのが遅くなる。僕は失敬するぞ。(野)待々。我輩も同伴にゆくから。時に君は是非とも。會

へゆかなけりやならんのか。(倉)ナアニ。是非ともといふ。譯でもないが。(野)ナンナラ。我輩につき合へしだ。久振で進撃しよう。(倉)何處へ。(野)何處へって根津か中廊サ。(倉)根津は八方ふさがりだ。(野)しからばいよく。九郎芳原稻本の。(倉)ヲツトどっこい。稻本はお三度目。(野)チヨツ。仕方がない。それぢやア何處だ。(倉)僕に原案を出させりやア。角海老だが。すこし大藏があやしい。(野)大藏は我輩が承知だ。君は角海老になじみがあるか。(倉)ウン。(野)それぢやア確定だ。我輩も實は舊知己ありサ。だが君の方が初會では。ト粹に稻本と。いつて見たのサ。(倉)そんな事は如何でもよい。善は急げだ。直に出發よう。(野)チイ姉さん。勘定だ。

作者曰く。さきに第三號の紙尾に於て。「本篇中に寫しだせる書生の如きは。概ね書生界の上流を占るものなり。(中略)私塾の書生輩の情態の如きは。陋狹にして野卑云々。」と記したりしは。専ら第三號「校訂者註。第三回」に關したる註釋なりしが。其文宜しきを得ざりしから。さながら全部に關係せる註釋のやうに思れしと歎聞にき。作者が件の註釋を添へしは。彼の守山と小町田とが相語らへる事の趣や、高尙に渡る所ありて。世人が常に聽く所の書生の内幕話に異なる由あり。故に活眼家に怪まれんかと。些と分解を添へたるなりしが。本

篇「第五號をいふ」中の書生の如きは。決して上流の書生にもあらねば。看客其積にて讀みたまへ。最も最下等の書生の如きは。尙これよりも甚しきものあり。それを作者はわざと寫さず。之を看客の推察に任しぬ。作者が目して最下等となすは。卑屈卑劣なる者をいふなり。苟も自由の志ある者は。其行ひに些瑕ありとも。まづ中流に置かまく思へり。看客もまた此意をもて此書中の人物を檢査し。上中下の位附を定むべきなり。今や學に東京に遊ぶもの其數幾萬人。上中下の割合は大概匹敵すと想像せらる。作者の微意は其三分の二を化して上に加へまく望むに他なし。本書中の人物に。玉すくなく瓦多きは。即ち此比例を示すものなり。書生は悉く卑劣陋野なるにあらず。地方の父兄誤つて。瑕なきの玉に瓦礫の冤名を負はしむるなかれ。

第七回

賢と不肖とを問はず老と少とを論ぜず

たぶらかしざしきの客物語

某の【記者の】所論にはあらねど。男尊まれ女卑まる、世の中とて。公然貸座敷の設置あ

りて。同じ人間の女子をもて。男の玩弄に供ふる事の。世にあからさまに許さるゝは。いと歎く可きの限になん。とはいへ是もまた。時世々々のしからしむる所。西洋の開明の國々にも。姪賣といふ陋習のみは。尙禁じがたき弊とぞ聞く。今あらためて此弊あるをば。獨りなげかんと愚癡なるべし。只憾むらくは我國にては。彼のいやしむべき娼妓に迷ひて。身の破滅をも顧みざる。嗚呼のたはれをの多かることを。是しかながら我國には。娼妓の容克を買ふのみならず。其情をしも買はまくする。嗚呼のふるまひのある故なりけり。素かしざしきといへる者は。彼の禽獸と一般なる。肉體の欲を漏らすに由なく。空閑の無聊にたへかねたる。妻なし男の便宜にとて。是非なく設けられし者にしあれば。若し劣情の抑へがたくて。彼の一夜妻に逢はまく思はば。宜しく只管に色を愛でて。色專一に目的として。樓に登ること當然なれ。しかるを人情の然らしむる所歟。間事理を知る男にして。尙此道理を悟る能はず。まじめに説をなしていへらく。色を專に目的とするは。他の禽獸の行ふ所。人間のすべきわざにあらず。娼妓といへども人間なり。其情をしも酌量せずして。之を弄ぶに忍ぶべきやは。情を買ふものは情を知るものなり。人にして情なくば。彼の禽獸に劣るべし。と道理らしくいへるものありと歟。是豈甚しく誤らずや。人にして人を弄ぶは。往古蒙昧の遺弊にして。其手段の是と非とに係らず。其

行たる已に非なり。情を酌みて弄ぶも。色のみ愛して弄ぶも。弄ぶの理は同一にて。開明の眼をもて之を見れば。共に禽獸の情ならずや。されば生中に高尚ぶりて。娼妓の情を買はまほりして。身の害世の害を醸さんよりは。寧ろ劣情の忍びがたくは。自ら禽獸の心をいだきて。花の巷に浮かるゝこそよけれ。若しまた禽獸に身を卑すを。流石に口惜と思ふものは。宜しく劣情を禁め制へて。みづから守りなばますゝ可らん。夫娼妓のものたるや。明日は奥羽の人に。比翼の契をなし。けふは越路の人に。同穴のかたらひをなす。夕は町人の妻となりて。晝は武士の妾となるとは。是いにしへの情況にて。今はこれにしもいや増りて。宵に官員を客人となし。また町人の機嫌をとり。眞夜中に軍人を迎へまた書生に逢ふ。一夜にして換へる枕の數多きは十有二三に及び。少きは二三四五に及ぶ。泣てひそかに笑む屏風の外あれば、笑みて陰になく廻床あり。千變萬化虚々實々。喜怒哀樂の七情をば。臨機應變に弄びてもて。嫖客の氣稜をとる。客數かくの如く多かるから。【供給需用相當らず。一舉一動一進一退。】娼妓に誠實の原素なきは。素其管の事なりかし。さはいへ娼妓も元來人なり。生來情なきにあらずと雖も。情はあらかじめ限ありて。客の數は限がたし。此限ある情をもて。彼の限なき夜毎の客に。いかでか實意の盡さるべき。娼妓に手練あるは當然にして。是をのゝしるは抑非なり。遊廓は詐譎の世界にし

註。偽の
なせばい
りかばり
かげの言
人の言の
葉うまし

て。娼妓。幫間。藝者。をばさん。新造。娼婢。妓夫。若者。二階廻は。皆うそといふ無形の者を。假に人にしたるまでの者なり。蓋し前段にもいへる如く。章臺は情を賣るの場所にあらず。色をひさぐべき場所なればなりけり。されば娼妓は成べくだけ。手練手管を是研きて。いかほど厭ふべき客といへども。飽くまで惚れたる面地なし。偽で堅めて世辭でまろめ。可憐言葉をかけられても。莞爾笑みて見返の。柳にうけて接ふが。是傾城の賢なる所以。うそは正則の本分にして。實意は怪しからぬ心得ちがひ。よしや娼妓には損はなくとも。社會には大害を及ぼすものなり。其故は抑いかにといふに。娼妓に例外の實もなくば。客も元來偽口點。手練承知で通ふべければ。假令其色には迷へばとて。其情には迷はざるべし。色に迷ふは嬋妍なる。其兇容を愛するなり。所謂一旦の快樂「ラスト」なるから。他の禽獸の欲にひとしく。迷ふも淺く悟るも早かり。しかるを其情に溺るゝものは。所謂戀情「ラブ」に迷ふものにて。愛惜の絆に長く繋がれ。一生迷津に流轉して。竟に浮ぶ瀬を得ぬもの多かり。およそ容兒の花の色は。老行くまゝに衰凋へども。心の花は年經るまゝ。いよく其艶をますよしありとも。衰ふる事のあらざるから。迷へる者の身にとりては。斷念がたきもまた宜なり。昔古人は浮世を歎じて。偽のなき世なりせばといはれたりき。作者は之とことかはりて。たとへ晦日に月いづるも。角なる鶏卵ができればと

て。毫末たはれ女にまことななどのなからんことをば望むになん。嗚呼たはれ女や娼妓や。汝をさく／＼偽を力めよ。若し偽に倦來らば。速に偽譎の世界を脱籍して。浮世の義理をしろうとの數にいるべし。若しからずして花街にあらば。あくまで偽を吐きとほして。四方の嫖客を馬鹿にすべし。客もし汝の情を求めず。たゞ花香のみを買ふにいたれば。貸座敷の害も大に減じて。野合を防ぐ一個の機械と。世に尊まるゝやうにもなりなん。あなかしこ力めよや」とは。是また作者の放題なり。まじめで信るは野暮なり。野暮なり。野暮なり。○ナイ倉瀬。もうスリ來る歟疲勞に。やう／＼と。客ねしづまる眞夜中すぎ。名代部屋の障子の外。○ナイ倉瀬。もうスリイブしたか。といひつゝ、障子を押開けば。(倉)ウ、繼原か。はひりたまへ。(繼)はひつてもいいか。娼はアブセント「不在」か。(倉)然り。まづ蚊屋のなかへはひりたまへ。(繼)ヤアどうも。今度ばかりは我輩も失敗したぞ。君達が來ないと。實に窮迫を極める所だつた。(倉)ぜんたい如何したんだ。先刻チイ、ハウス「引手茶屋」で聞うと思つたが。傍の都合が悪かつたから。演説中止としておいたが。源太氣取で一騎がけたア。君にしては珍らしいネ。(繼)處が一騎がけでないからをか。しい。實は斯様さ。昨日の晩。山村と一所に。富岡の處へいつた所が。(倉)フン例の翻譯の一件でか。(繼)さうサ。(倉)いよく／＼願意通りエム「貨幣」になつたか。(繼)これからが話だ。マア聞てく

註。濱
横濱。

れ。アット、リイスト「少なくとも」フヒフチン「十五」だけはたしかに出來るだらうと思つたから。二人で押かけていつた所が。あやにくに濱へいつた留守との事で。例のデビリツシユ、ワイフ「外道面の女房め」が出て來やアがつて。明朝でなくツちやア。歸りませんヨといやがつたから。正可待つて居る譯にもいかすサ。癢に障つて仕方がないから。何處かで一盃やらうぢやないか。トそろ／＼叛逆を企てたが。揃も揃つて御兩人とも。いつも相替らすヌウ、バア「一錢無し」サ。さうかといつて此儘で。たち分れてしまふも残念だ。明日になりやア。十五だけは大丈夫だから。どうか周旋をしようぢやアないか。スリイ「二」か。スリイ、ハアフ「三半」もありやア澤山だ。今夜一晚の事だ。何處かで製造をしようぢやアないか。トそれから二人で甲地乙地と。眞地目の面でかけ廻つてネ。とう／＼四圓だけゲット「得領」したのサ。(倉)相替らす借出し方は甘いナア。何處で借た。(繼)一ヶ所にあらずサ。ツウ「二」だけは東光學館の小使に借して。外の二は山村が改文堂の貸本屋なるべし。で臨時借用と云ふ次第サ。(倉)どうも恐れた。小使先生の臍栗を借用するたア。いよく／＼君は放蕩博士といはざるを得ずだ。(繼)處でまづ四圓だけの金が出来たらう。(倉)ウン。(繼)其四圓を提げて。(倉)何處へいつた。(繼)天神と出掛た。(倉)キヤット「猫」は誰をコウル「聘」したかネ。(繼)どら吉にころ太サ。(倉)君はよつほど。

考。恐
つた。入
歟。

どら吉にきてゐるな。(繼)馬鹿アいへ。而して夜の十時過まで。スツチャン騒ぎをして居つたが。先達ての事もあから。今夜は一旦歸らうぢやアないかと。○尤もエムもないからだけれど。神妙に學校へ歸つた處が。(倉)門限已に後れたりツ。チエ、残念ナ位が極りだらう。(繼)恰も然りサ。いつもなら弱りやアしないが。昨晩ばかりは弱つたぜ。(倉)ナゼ。(繼)なせだつて門鑑がチャンと出してあるから。中乗をしたツてむだだらうぢやアないか。二人で閉口して立て居ると。人あり我を呼んで曰く。(倉)へ、イ。それやア誰だ。(繼)當て見るべしツ。(倉)ハテナ誰だらう。學校の者か。(繼)ウン。下の級の者だ。(倉)下の級の奴ア。大概腕力黨や頑固連や。世間見ずの坊チャン派だが。誰だらう。夜中に後れて歸る奴は。○ハ、ア解つた。外田だらう。(繼)ノウウ。(倉)それぢやア解らん。誰だ。(繼)須河の頓痴氣サ。(倉)へ、イ。彼奴が何して。(繼)任那に引ばられて。寄席へいつた處が。ツイ門限に後れたといつて。將に泣出さんとする顔色サ。(倉)こいつア妙だ。それから。(繼)それから我輩が例の慈悲心を興して。(倉)例の字がお耳障だ。例外のト改むべしツ。(繼)マア聞けイ。我輩は別に知己でもないが。兎に角山村は知つてるから。うつちやつてゆくの可愛さうだから。それぢやア我輩等と一所に來たまへ。何處かへ往て泊らうからツて。(倉)外面になさけの様子を見せ。(繼)何サ。はじめは別に惡意も

なしで。(倉)後では惡意を興したのか。(繼)ウンニヤ。別に惡氣でした譯ぢやアないが。ヤブレカブレと思つたから。竟に再び野心を興して。酔つたあまりに車に乗じて。一も二もなく須河を引張つてリイブ「住吉屋の事敷」へ登樓たと假定せよ。(倉)須河はい、面の皮だ。(繼)須河より我輩がい、面の皮だ。(倉)それでも。君の面は痘瘡があるぜ。(繼)此野郎。人の話を茶にしやアがる。(倉)失敬々々。それぢやア何故。(繼)何故ツて。翌朝アツカウント「計算」の段に至つて。三人併せてオンリト「たつた」一圓六十三錢といふ準備金だらうぢやないか。而して不足はいくらだといふと。凡五圓七十八錢強サ。(倉)イヤニ高いぢやアないか。(繼)蓋し山村のノロマめが馴染金の請求に應じたからサ。(倉)ヤレ。(繼)チイ、ハウスに貸せといつても。我輩のオールド、デット「舊債」が十圓近くになつて居るから。如何しても貸さんといふ。須河めは慣ないもんだから。頻に學校の方を心配しやアがつて。是非先へ歸りたいといふ。實に困つたぞ。仕方がないから。須河だけを還すことにして。跡でまた談判に取かゝつたが。どうしても貸しやアがらん。是非テン「十圓」だけ渡してくれずば。なんとかかんとかいやアがるんサ。手強く切ぬけてかへらうとしても。今までが今までだから。先方も頑張つてきかないんサ。據ないから。山村が。お定まりのホウス「馬」に乗かつて。一旦出陣と出かけたのは。已に十時半といふ頃だつ

た。已にして。午後二時半といふ時刻になつて。(倉)やうやくエムを持て來か。(繼)さういきやア 誂 向だが。オン、ゼ、コントラライ「反對」ときてしまつた。ホウスばかりが御歸館さ。(倉)山村はどうしたんだ。(繼)レッタア「手紙」の中にエムを三圓半だけ包みこんで。圖留をきめてしまやアがつたんサ。(倉)ハ、、、。それやア非道いなア。何とてよこしたネ。(繼)其略に曰く。第一着に富岡方へ。翻譯料の請求に參 候處。いまだ歸京致さざる 趣にて。閉口頓首也。其外色々と奔走すれども。暗夜の鐵砲と一般。毫も的なく候故に。據なく須河に迫つて。強てヒズ、ウチツチ「其時器」をボルロウ「借用」せり。ボーン「質屋」となけこみ候處。オンリイ「わづかに」三圓半を得たるのみ。後は何卒宜しくかしくサ。實に失敬極まるぢやアないか。モウ我輩は山村と絶交しツちまウ積だ。(倉)成程それやアあんまりといふもんだ。底で君はどうした。(繼)どうして仕方がないんさ。逆も三半位ぢや。承知しないのは知れて居るから。今度は自分で馬に乗て富岡の處へ出掛ていつて。翻譯料を請求した處が。彼奴めまだ歸つて居ないのサ。明朝になりやア歸つて來るといふから。せめてそれまで五圓ばかりと。四方八方かけまはつたが。どこも越中犢鼻褌。(倉)ツツヤ。(繼)處で我輩も度胸をすゑて。富岡の野郎が歸つて來るまで。平氣で御旅所に居る積で。例のスリイ、ハアフで以て。外道どもの機嫌をとつ

て。明朝の晝までと約束して。チイ、ハウス「茶屋」に居續とは。随分淡泊で洒落てるだらう。鱈のどんぶりか何かを取つて。澄して夕食を喰つた所へ。恰と君達がやつて來たのサ。實アネ。富岡の一件だつて。尙しつかりときまつたんぢやアなし。半信半疑といふ工合だから。若し君の仲裁がなけりやア。危なくチイ、ハウスの子になる處だ。君さへ請合つて呉りやア。半月位はチイ、ハウスでも。待つて呉るに相違ない。イヤどうも苦しかつた。(倉)随分君も氣樂な男だ。當にならない事を當にして。居續をするたア恐れた。〇時に君。おもしろい話があるから聞給へ。(繼)相替らず自家製造のノロウキングだらう。眞平々々。(倉)イ、ヤさうでないんサ。情痴に似て情痴にあらざる。一種奇妙不可思議の話だ。マア聞たまへ。餘程稀代だから。(繼)どういふんだ。(倉)斯いふんだ。今日は君も知つてる通り。島岡の送別會があつたもんだから。僕は守山の處へいつてネ。エムを二圓と羽織を借てネ。池の端まで出掛た所が。途中で野々口に出會して。俄に心が替つたから。こゝへ登樓と進化した譯だが。其羽織の紋に關して。不圖一條の物語ありサ。そもく僕のプロ「敵娼」といふはエイジ「年齢」凡そ二十あまり。娼妓名克鳥。本名は。(繼)つる女とまをしはべるなりツ。(倉)ダカどうだか。其處まではまだしらんが。兎に角圓助の眞價はあるんサ。但し氣性は張がなくツて。少しグウタラの方のやうだが。マア随分いゝん

百

サ。(繼)へい。大層鼻の下が長いナ。(倉)マア聞たまへといふに。そいつが如何いふ間違ひだか。僕に北野の天満宮。(繼)敬して遠ざくるといふ。謎々だらう。(倉)處がさうでない。但し今までは斯うでもなかつたが。今日は非常に。エヒ、、、。僕の側に居たがつてネ。(繼)ケチな笑ひ聲をだすぢやアないか。マアいゝサ。それから。(倉)僕もあんまり大事にするから。こいつ變だと思つて居ると。ひけてからやつて来てネ。プロが僕に尋ねるには。貴郎はア。○あとはなんといつたか。當て見たまへ。(繼)さうサ。自惚がつよい人だヨウといつたらう。(倉)大違ひ。今夜は羽織を借被してきましたネサ。(繼)ハ、、、。そんな事だらうと思つた。(倉)處が名に負ふ僕のこつたから。少しもおめたる顔色なく。従容として答へて曰く。おれは羽織を質にはふりこんでしまつたから。今夜は友達のを借て来た。お察しの通りだといふと。プロめが氣の毒さうな兎をして。ナニネ貴君の穴をあばかうと思つて。さういつた譯ぢやアないが。貴君のお羽織の紋について。少し因縁のある事があるから。ほんたうの持主をしへて下さいといふんサ。コイツ不思議だと思つたから。チャそれぢやア此所有主を知つてる歟といふと。一昨年の春一度お目にかかつた事があるが。外にためしのない御紋だから。大方おなじ人だらうといふんサ。守山がプレイ「放蕩」しようとは毫も思ひよらんことだつたから。僕も流石に驚いたが。色々様子を聞いて

百一

見ると。こゝに奇々妙々の事實ありサ。○プロがネ。いよく僕にきてゐるヨ。(繼)アイタ。何するか。非道い事をすらア。なんだか話の脈絡が。つどかんぢやアないか。(倉)イ、エサ。爰に至つて。プロが僕に惚てる證據が。現然あらはれたといふ譯は。今まで梳櫛のお秀にさへ。話さなといふシクレット「秘密の事」を。みんな僕に話したがネ。其大略は「折から廊下を。ゴロンボタン。ゴロンボタン。ゴロンボタン。ボタン。サラ／＼」。障子を開て入くる兎鳥」(繼)ヤア花魁がきた。大きに失敬。ナニサまた来よう。おいらんお邪魔さま。○兎鳥はねむさうな眼をこすりながら。(兎)チャ。お客さまがあるノ。マアいゝぢやありませんか。おはなしなさいナ。○ア、ねむいこと。

○月落烏啼て。下湯場へ降る上草履の音かまびすしく。観音の鐘聲客人に到りて。煙筒を叩く音更に高し。いつしかと明はなれゆく東雲とき。歸をいそぐ官員客は。髪を梳るのいとまなき歟。斬髪さかさまに起て。清玄が墮落のありさまも思ひいでられ。客を送るうかれ女は。いかにはまはし床の多かりけん。今なほねむたけに目をしばたゝきて。草履ひきするごとく穿もてゆくは。朝兎のごぜめきていと危険し。日和下駄でかけいだす書生客は。生意氣に茶屋の迎ひにいであひ。帽子眉深に色白きは。藝人が忍びの遊びと見えて。店口からひとりひそかに歸る。たつ鳥

の跡を濁すふられた客は。果報者の所謂をさとらず。情人ぶりてすましがほの持てた客は。粹が身を食ふべき因果にくらかり。笑うてかへる機嫌客あれば。泣てをしむ後朝あり。けに戀こそは情のみなもと。彼の百八の煩惱も。これより起る事ぞかし。

○チヨイと吉さん。アレサお待なさいなネエ。それぢやアどうしてもおけいなさるノ。チヨイとおいらん。おけいしまをしても宜うございますか。(吉)かまふもんか。おれが勝手に歸るんだ。おいらんに聞くに及ぶもんか。○イケませんヨ。貴君はよくツても。お送りまをさないぢやア。内所から叱られまアネ。チヨイとおいらん。トいへども娼妓は上の間の屏風の中に引こんだるま。グツともスツとも返辭をせざれば。梳籠のお秀といへる女。強て客の袖を引張ながら。上の間の屏風の中へつれてゆく。此客人といふは。已に第一回に出たる吉住といふ代言人にて。學問は随分ある方なれども。些と輕躁なる性質にて。あまり沈着かぬたちなる故。社會の信用は宜しからず。肝心の代言事務は。頗る振はざる方なれども。元が相應の身代なるから。其邊にすこしも對酌なく。屢花柳を遊蕩れあるきて。放蕩家といふ名は高かり。其本性はおろかならねど。自惚の原素が多いだけに。たやすく娼妓の餌食ともなり。自然爲にもなる客人ゆゑ。娼妓もまんざらでないのと見えて。其取扱ひも別仕立なり。されば吉住も乘氣になつて。ズット情人に

なりすました了見。やゝともするとチン／＼筋にて。お荷物主義を擴張なし。廊下へとびだすこと間あるなり。此座敷の娼妓といふは。其名を兎鳥といひ。年の比は十九位。少しふけたる損な質ゆゑ。二十か二十一に見られるれども。當世風の圓顔にて。色白く口ちひさく。舉動もしとやかなれば。大籠にすむけだものには。まづ正當なりといふとも可からん。其性分はすこしくお心よしの方にて。意氣地もなければ張も弱く。萬事萬端梳籠お秀が。いひなり放題。お秀が娼妓か。娼妓が梳籠敷。どちらが主人か別らぬ程にて。傍で見れば笑止氣也。さはとて無神經の人物でもなければ。兎角氣の小さい性分なるゆゑ。よけいな處に遠慮をして。いふが當然の事をさへに。いはずして我慢をする。溫柔な質で。僞が商賣の身でありながら。僞を吐くことが極めて拙にて。やゝともすると中途にして。地金と化の皮をあらはす風あり。然し敵手が吉住なれば。此一段は上出来なり。「兎鳥は上間の三重布團の上につぶしに打臥して。エ、ジレットタイといふ容體。(秀)モシおいらん。吉さんがけいゝとおいひなすツて。しやうがありませんヨ。(兎)よいヨお歸りなさるなら。お歸し申すがいゝわナ。あれほど譯をいつても不解で。お腹をおたちなさるんだから仕方がないワ。ト少しうるみゝゝの愛想づかし。(秀)あれですものヲ。マア貴君。よツク御相談をなすツた上で。おけいりなさるならおけいりなさいヨ。あんまりおいらん



に氣をもませると。おいらん冥利につきますヨ。イ、エほんたうにサ。わたしが困りまさアネ。
このお荷物め。トいひながら破れかゝつた人力車のやうに。かへりさうで歸りさうにない。吉住
の手をとつて屏風の内へおしすゑつ。自分は次の間へ退りいでて額に八の字をこしらへ。(秀)
ホンタウにうるさい甚助だヨ。ト口の中でつぶやきながら。又大きな聲にて。(秀)吉さん。吉住
さん。おけいりなさるにしても。モウよつほど遅いんですから。一盃めしあがつておけいんなさ
いな。昨宵のお酒をつけますから。(折から茶屋のむかひの女)おはやうございます。吉住さんは
まだおよつて入つしやいますか。(秀)チャおかつさん。マアおはひりなさいナ。〇おいらん。ヨウ
ございますネ。今朝は直しておきますヨ。それぢやアおかつさん。吉さんはお直しになるヨ。
〇お秀はやをら膳立をして。銅壺の中へ徳利をはふり込ながら。(秀)サアノ、吉住さん。今にお
燗がでますから。マアお楊枝でもおつかひなさいヨ。お常んの名どん。あちらへ持つていつ
てあけるんだヨ。エ、氣のきかねえ。そんなものの掃除はあともいゝやネ。〇チヨイとおいら
ん。吉さんはお休みなすつたんですかエ。なんですとエ。へ下へいつてお面をお洗ひなさるッて。
それぢやアお常どん。おつきまをして。〇一寸上の間の掃除をするから。なんならさうなさ
いヨ。おいらん。おめえさんも次の間へお見だしですヨ。「此うち吉住は機嫌がなほりしと見え

て。楊枝をくはへたまゝにて。廊下へいづる。(秀)お常どん。おつきまをしなヨ。
〇お秀は吉住のあとを見送りながら。上の間へ来り。屏風をかたづけける。鳧鳥も起いでて楊枝を
つかふ。(秀)おいらん。吉さんは何で又はじめましたエ。(鳧)ナニサゆんべネ。少し氣に懸るこ
とがあつて。二番の名代でネ。(秀)二番とは。倉瀬さんでしたネ。(鳧)ア、少し氣にかゝる譯が
あつて。眞身の話を居たのを。悪く吉さんが勘づつてネ。(秀)ですか。惘れもタイらないね
エ。吉さんの甚じるしにも困りきるヨ。倉ちゃんなんぞを誰が情人にするものかネ。馬鹿々々し
い。(鳧)例のチン〜が始まつたから。いろ〜に譯をいつても。どうしても聴かないんサ。
(秀)ぜんてい倉瀬さんと。何を話して居たんですエ。(鳧)その事はネ。まだお前にははなさな
つたが。ワタイの身の上の事で。(秀)チャ〜。お前さんの身の上の事だとエ。(鳧)お前は昨今
だから。まだ知らなからうがネ。ソラあの簞笥の中にある脇差の紋がネ。(秀)さう〜。わたし
は疾からあの脇差の事を。聞かう〜と思つて居たが。さういやアあの紋と倉瀬さんの。(鳧)ゆ
うべの羽織の紋とおなじだらう。(秀)なるほど。へ、イ。さうしてあの脇差は。(鳧)あれはネ。
わたしの實の慈母さんの形身で。(秀)チャ〜それぢやア倉瀬さんは。(鳧)もしや親縁ぢやない
かと思つて。よく〜聞いて見た所が。(吉)親と親とがいひなづけの。大事の夫といふ譯だらう。

トだしぬけにすつとはひる。(鬼)チャ。マア。ワタイはびつくらしたヨ。ア、びつくらした。な
んとか斷つておはひんなさいヨ。さんざ人に氣をもましておいてサ。いゝ加減におしなさいヨ。
にくらしいネエ。(吉)アイタ、、、、。そんなに平手で叩かれてたまるものか。(秀)思ふまゝ
いぢめておあけなさい。くせになるから。(吉)ア、まゐつたノ。

作者はいはく。本篇は全篇の脚色に必要ながために。餘儀なく描きいでしことなるから。情
態の盡さざる者最も多かり。はじめ友人痴蜂子によりて。花柳の景況を問ひたゞして。もて
想像の助とはなせしが。百聞も一見にしかすとやら。耳學的の力をもて。其情態を盡さんこ
と。元來無理なる事にしあれば。一向趣向を主眼として。たゞ皮相をのみ寫しいでつ。脱稿
の後痴蜂子に示して。多少の改削をなさまくせしに。痴蜂子故ありて。ちかき地方にたちい
でしまゝ。いまだ歸らず。是非なく原のまゝにて印刷せり。看官作者が苦心を察して。其想
像の到らざるを痛く咎むるなかれと云爾。

第八回

雨を凌ぐ人力車はめぐりくつて
小町田が田の次に逢ふ再度の緒

鳥がなく。東の京廣しといへども。夏の炎暑を凌がんには。向洲にまされる場所は稀なり。向
洲の堤ながしと雖も。山媚水明かねそなはり。且納涼に便利よきは。彼の植半の樓上なるべし。
さればにや。風薫る夏の中半となる頃には。【市中の紳士富人たちは。】我もくと夕暮時より。
或は船に或は車に。おのがじしなる準備をして。此旅亭には登るへなりけり。【中には絃妓を携
へつゝ。月を待乳の山を望み。夏白髯の森をこえて。隅田の流を溯るもあり。船をきらふ山だし
の夫人たちは。途中で八字髯の旦那に分れて。言問の店のななりやに休らへども。敢て都鳥の昔
を忍ばず。色を好む嫖客ばらは。歸路に花燈を見まくほりして。風ひかぬやうに召ませ猪牙と
やら。などと敵娼めがいひましたト情癡半分序開きして。まづ三叉の古事を談ず。其目的はいろ
いろなれども。落着くさきは大方皆。此八百松の樓上樓下。】けふはことさら賑々しへき。客の出
入に水神の。杜のあたりは宛然に。港にまがふもやひ船。家形屋根船こきまさせて。彼方此方に

へも多か
り。

へく。植
半樓の畔
には。

へあらぬ
にに
へしきり
るに

たゞようたる。中に一艘此時しも。着いたばかりの屋根船あり。中よりやをら立出るは。孰も黒
絹の紋附羽織。一人は年の頃二十三四。商人でなく鯨でなく。新聞屋でなく書生でなし。鼻の下
にチヨツピリと鬚鬚を生したれども。あまり威厳ある兎にもへあらねば。寧ない方がと思はる
れど。當人は頗る得意と見えて。摘むやうへにして捻るもをかし。今二人は年の頃二十六七。
色黒く口大きく。鼻は俗にいふ獅子鼻にて。天に朝したる形なるゆる。横ぐはへにしたシガレッ
トの。煙はまつすぐにたちのほりて。蒸氣の煙筒も宜しくなり。前の男は棧橋を渡りながら。ふり
かへりて船のうちを覗きこみて。○ナイ／＼吉住子。いくら足下の風流男兒だからって。これしき
の動搖で船に酔ふんざア恐れ入つたネ。君の孱弱なる事。婦女子にも尙劣れりといふべしだ。
その體ぢやア明年の米洲行も。まづ／＼お廢止となさざるを得ずだネ。ハ、ハ、ハ、ハ。シカシ村高
さん。此様子では到底。歸路にも船はだめだぜ。(村)なんなら。船はこゝから歸さうではない
か。風がこれツきりで静ればよいが。先刻のやうな鹽梅式では。歸船には益小間物が繁昌する
ぞ。よしんば。婦人達は大丈夫とした處が。吉住は矢張怪しい方だヨ。マサカ歸路に吉住はか
り。腕車でかへす譯にもいくまい。(前の男)大いに然りだ。舟遊の準備が。むだになるのは遺憾
だが仕方がない。歸すべし。(村)歸期にはちやうど月も出るから。住人を挈けて逍遙する

へし

も。また豫想外の佳興でよからう。それぢやア岸邊。さうきめるヨ。(岸)いゝとも。萬端
君に全權委任だ。(村)それぢやアいよく斷行々々。○このうち船の中より。藝者と共に立出る
は例の吉住潔にして。本來船嫌ひの性分なるに。此日は酒にも酔ひたりし故にや。頗る波風の荒
かりしたために。甚しく船に酔ひて。さらぬだに青白き兎が。まるで血の色を失ひつゝ。菊五の
清玄そつくりといふ兎附。藝者二個は例のごとく。數寄屋町の賣出し猫。一個は讀者もおなじみ
なる。彼の柳村屋の田の次にして。いつもかはらぬ愛嬌もの。シカシ此日は幾分か。吉住のお相伴
をしたりと見えて。ア、苦しいといふ眉の鹽梅。太眞が渴に堪ざる時。西施が心を患める折も。
かくやありけめと思はれて。【ト作者が馬琴風を氣取るなれば。まづ】形容へ詞を下し。たし。
今一個は。千歳屋の辨吉といふ大姐かぶ。さまで上等といふ兎容にはあらねど。所謂仇ッほき中
年増。衣服こしらへがイナセなるゆる。いくらか卑しけなる處もあれど。割合に舉動はしとやか
にて。客あつかひの調子もよき。當時日の出の有威けいしや。【其性質はいさしらねど。まづ一
篇のヒロイン「立おやま」には。何やら斯やらなりさうとは。作者がひとり極の鑑定ぞかし。
此一團が八百松の樓に上りて。いかなる面白き物語や生ずる。そは數丁の後にゆづりて。しばらく
く樓上の話にうつらん。支離滅裂と嘲りたまはず。筋がわからないヨとジレたまはで。活眼家た

〔此樓〕

ちも。兒童しゆうも。あとで結了るのをまちたまへや。】
 ○（八百松）の二階の一間に人待兎の三個の客は。浴後と見えて浴衣がけなり。一個はお熟知の任那に小町田。今一個は老人にて。年の頃は五十三四。舉動はどうやら商人めけど。尙かたくるしき口氣の失ぬは。たしかに維新後の士族あがり。是なん守山友芳が實の父守山友定といふ静岡縣士族。舊幕の人には珍らしい機變家にて。世と共に推移りての商法三昧。着眼點がよかりしにや。七八年來静岡にて。某會社の社員となり。頗る繁昌なる身の上となりぬ。其商賣は何なりけん。作者も模糊に聞たるのみゆる。いましもこゝには告得ざれど。正しく外國へ輸出すべき。日常必需なる品とぞ聞えし。今日しも任那と小町田を伴ひ。この樓上來會せしはそもまた如何なる故ぞと問ふに。此友定が嫡子なりける。彼友芳が卒業して。已に代言の官許をさへ。四五日前に得たりしかば。商業上の取引かたぐ。我子の卒業を祝するため。久し振にて出京なし。むかし幕府に仕へし頃より。兼々親しくなしたりける。三芳庄右衛門を訪ひたりしに。同人が妻の甥なりける。任那透一といへる者も。友芳と共に業を卒へて。此度庄右衛門が助力によりて。洋行なすとの話を聞き。さらば親睦の宴會かたぐ。其送別をなさまほしと。友定親子の發案にて。今日しも午後の四時頃より。守山友定は任那を伴ひ。ならびに友芳透一等が。年來別て

懇意にせし。小町田榮爾をも誘ひつゝ。一足先に此樓に來りて。三芳が來るを待居たり。三芳庄右衛門の家といへるは。むかしは下谷邊に店を張りて。いと時めきたる劍刀商の老肆なりしが。明治一新一の變に遭うて。家運俄に衰へつゝ。一時は閉店の様にもなりしが。三芳は頗る活眼ありて。機を見るの才に富たるゆる。翻然志をふり興して。明治二三年の頃なりけん。ある横濱の商社に仕へて。重手代とまで成昇りつ。例の機頃の慧眼もて。當つて碎ける一六主義。危険ながらも洋銀相場に。内々二三度手を出せしが。三芳が運の向く時なりけん。洋銀の相場はにはかに騰貴し。三四千圓の利を得しかば。三芳はひそかに喜びつゝ。兼て思へる由あるから。商社を辭して身を退き。再び東京へ歸り來りつ。斯て後機を察りて。こたびは米相場に手を出せしが。是又意外なる成功にて。トン／＼拍子の首尾精妙。まだ一年も経ざる間に。巨萬の富を致せしかば。こゝらが手を退く時機ならんと。自ら悟りて相場を止め。何か實着な商業をと。工夫を凝して居たりし折。もと相知れる人々等が。某銀行を創立せんとて。其商議に來りしかば。是屈竟ぞと賛成して。其建設を助けしかば。竟に人々に推選せられて。當今は其銀行の社長を勤めて。いと富豪なる身の上なり。此日しも守山と約束して。任那の送別の宴を兼て。友芳が卒業を祝さばやと。其時刻までも定めしかど。少しく要務の出來せしかば。後より屋根船の用意をして。友芳と共に

行くべしとて。さてこそ友定透二等を。まづ植半へ送りしなりけれ。

○さる程に友定等は。三芳の來るを待兼つ。流石に宴を開きも得やらす。浴湯しはてても所作な
ければ。互に四方山の物語して。空しく時間を過す程に。午後七時前ともなりける頃より。天色俄に
一變して。黒雲墨の如く渦き起り。風向かはりしよと覺ゆるはじに。疾風颯然と吹起りて。雷おど
ろくしくなりはためき。はや落しくる臂笠雨。さながら河を倒になし。盆くつがへす意外のふり
こみ。コリヤ堪らぬと縁側から。避る客人。はせでる女中。額合せしてア、イタ。板戸ではな
いアノ雨戸を。はやく鎖てとゆふ間暮。うろたへさわぐ男女の聲々。いとかしましくぞ動揺めきた
る。任那はふりこむ雨をも厭はず。二階の欄干にたちよりつ。川の面を打ながめて。小町田榮爾を
さしまねき。(任)ドウダ小町田。實にサブライム「跌宕」極るといふべしだ。○吹折。崑崙引山
頂の樹。喚醒す東海の老龍君引。○ア、快絶々々。(小)どうもいへない景況だネエ。バイロン
「英國の詩人の名」得意の天とは。サッチ、シンネリイ「此般風景」をいふんだらう。(友)任那さん。
何か名吟でも出来ませんかナ。急がずはぬれざらましを旅人の。それとは反對で。後れずはぬれ
ざらましを。恰ど今時分。吾妻橋邊へ乗だしなすつた頃であらう。いゝ加減に歇めば宜しいが。
(任)雨計りなら驚くに足ませんが。風が頗る非常だから。(小)さうネエ。事によると船が出され

ないかもしれないヨ。(任)時に守山さんお聴なさい。拙者が三十一文字を製造しました。(友)ハ
ハ。何と出来ましたな。(小)守山さん。老實でお聴なすつてはいけません。任那君の三十一文
字は。腰折處でない。骨折ですから。(任)餘計な横槍を入れるべからず。まづ其緒言に曰く。
(友)ナル。(任)來ぬ人を待ちくたびれて。(友)へ、い。(任)無聊にたへかねける折。白雨棒を
ならべたてたるが如くふりいだしければ。(友)ナル。(任)エヘン。徒然の茶うけにせよと空
からも盛いだしたる雨。棒かな。(友)ハ、ハ、此はおもしろい。なか／＼狂詠氣があります
ネ。○それはさうと。三芳さんや倅は。如何しましたか。モウ程なく七時過になりませう。(任)
若し夕立の前に。出掛てさへ居れば。早晚やつて來てありませうが。事によると此雷雨に辟易し
て。因循したかもしれないヨ。(友)それぢやア甚だ残念だが。まさか斯やつても居られますま
い。兎に角盃盤を命じませう。○ナイ／＼姐さん。用だ／＼。ト女中を傍へ呼寄せつ。酒食の
用意を命ずるうち。任那は頻に川の面を。打みやりつゝ舌うちして。(任)ア、船は一片も來る
様子も見えない。守山さん。コリヤアいよく來ませんヨ。雨は大に小降になつたが。風が依然
として烈しいから。(友)お出なさらぬかもしれませんが。宜しい。今夕は臨時の納涼會と致し
まして。別宴は更に開くとしませう。幸ひ料理もできました様子。マア兎も角も開宴ませう。

(任) 何だか夢を見たやうな次第ですネ。(友) ナ、夢を見るといへば任那さん。ナニ先生。貴君に少
 しうけたまはりたい事がある(ヨ)。(任) へ、イ何ですか。(友) なにサ。随分舊弊めいたお話です
 が。ト云ふ折料理が整ひしと見えて。女中が酒肴を持出づれば。互に盃を取りあけつゝ。しば
 らく無言にて酒事あり。やゝありて友定は任那に向ひ。(友) 今お話をしかけました夢の話といふ
 のは。外の事ではありませんが。○兼て倅から。幾分かお聞なすつたであります。私の妻
 と末女とは。不慮の事で生別れをいたして。(任) たしか上野の戦争の際に。お別れなすつたやう
 に。(友) さやうサ。圖らず行方を見失ひまして。尤も私は故あつて。彰義隊にも加はりませす。
 恰ど彼の戦争の際には。舊君の御膝下に仕へて居りましたゆゑ。下谷の宅には。妻と子供のみで
 ございましたが。俄然の異變に。狼狽いたしたものと見えて。下男は倅友芳を背負ひまして。淺
 草の由縁の方へ逃ます。妻は末女を抱きまして。同じく一所にかけ出しましたが。扱何處へ落
 ました事やら。一向に行方がわからず。程經て其凶報を得ましたゆゑ。百方色々と手を盡して。
 心當りを尋ねましたが。トント手掛を得ませぬから。到底死んだ事と諦めましてネ。全く思ひ斷
 えて居りましたが。六七年も後でありました歟。ある晩思ひ寄らぬ夢を見ました。其夢の大略を
 申しますれば。妻はあの折金杉の親戚の方へ落逃げようといたして。末女を抱きて逃ゆきました

處。圖らず流丸に中りまして。敢なく其處へ絶命をいたし。小兒は一個取残されて。是も命が危
 いところへ折よく通かゝつた人があつて。末女を拾ひあけて立去りましたが。(小) へ、イ。實に
 奇妙希代。演戯にでもありさうな夢ですネエ。(友) 處が其拾ひあけた男といふは。あまり本性のよ
 ろしくない人物で。末女を十三四歳までは養育しましたが。竟に金銭に窮迫いたして。たしかに吉
 原敷と思ふ遊廓へ。娼妓に賣つたといふ來歴をば。まざゝと夢に見ましたゆゑ。(任) へ、イ實
 に奇々怪々ですネ。(小) それちやア或は友芳君のはなしたのが。(友) エ。(小) ナニ。友芳さんも
 いつか。そんな事をおいひなさいましたヨ。(友) ナニ倅にも此話は致しましたが。倅は頻に笑
 ひまして。心理學上から考へても。夢のしらせなぞいふ事は。あるべき筈の譯でない。それやア
 謬想だと説破しましたが。どうも心がすみませんから。處々の新聞紙へ廣告を致して。百方さが
 しました。解りませんのサ。さては倅が申す通り所謂神經の迷であつたか。ト吾ながら赤面に
 存じましてネ。全く斷念して居りましたが。寔に不思議希代といふのは。一昨晚の事でありまし
 たが。またゝ末女が存命いたして。吉原の娼妓になり居る様子を。まざゝと夢に見ましたから。
 再び心が迷ひましてネ。如何なる道理とも解し兼ますが。全體支那で申すやうに。正夢なぞとい
 ふ事がございますかナ。任那さんは。哲學家だとうけたまはつたから。不圖御質問をいたす譯

ですが。(任)なるほど。それやア甚だ。希代なお夢には相違ないが。シカシ古來其例はあまたある事で。何も奇怪な事ぢやアありませんヨ。正夢の如きは元來毛頭ある可らざる道理で。抑夢といふ者は。如何なる者かといふに。蓋し我心の作用に外ならずデス。夜になると人間の身體は。晝間の疲で寝入つてしまひ。全然で感覺がなくなりませんが。脳は全く身體と異つて。夜間と雖も休息せずして。晝の通りに働きますから。脳が穩でない時なんぞは。殊に色々な事を見るんであります。且や感覺が休んで居るので。外部からの刺戟が少しもないから。随つて目前の事を考へる必要もなく。自然思ひよらんむかしの事など夢では見る事がありますのサ。是他なしツ。總べて人間といふ者は。幼少の時から経験のば悉皆腦髓の中に納めて。常に貯へては居りますのサ。晝は見聞する事が多くて。甲事乙事に取紛れて。目前の事に無用な思想は。自然奥の方へ引込がちになつて。容易に思ひだすものでありません。譬喩を以て之を申せば。楊柳陰暗うして。螢火の燦たるを見るが如く。夜色沈々として。始めて蟲の聲を聴くと一般。螢は晝間居らぬものでもなく。蟲は晝鳴かんものでもないが。晝は萬籟蒼然たるゆゑ。外の刺戟に障へられて。吾人が氣がつかん道理であります。デスから夢といふ者は。兎に角曾て思つて居つた事を見るもので。決して思はない事を見るものでありませんヨ。斯白したら貴君は。私は女が娼妓にな

つて。吉原に居よう杯とは。曾て思つた事もないと。必ずおつしやるでありますうが。およそ人間といふ者は。毎に何事にも。知覺があるといふ譯にはゆかんもので。思はないと思つて居つても。尙思つて居る事があるもんで。今度友芳君が。卒業をなさつたにつけて。ア、亡妻が存命で居つたならば。と知らず識らず。細君の事を。お思ひだしなすつたにつけて。御自分には覺りませまいが。自然に令嬢の事なんぞも。其時腦中に浮んで來て。所謂アツソシエイション「連感」といふ心の作用で。ア、いつか見た彼夢は。或は正夢でありはしまいかなどと。妄信が起りますのサ。處で今も申した通り。晝は外事でさわがしいから。毫末其邊に知覺がなければ。夜になると次第々々に外部の刺戟が靜まつてくる。外部の刺戟が靜まるに隨つて。既往の疑團が浮んできて。一度見た夢をまた見るわけで。何も不思議な事ではありません。尤も斯申したからツて。細君と令嬢が。御存命でなからう。と申す譯ではないが。唯夢のシラセと稱する事は。甚しい謬信の然らしむる所に。相違ないと申すのみです。或は果して令嬢には。娼妓になつて居らるゝかもしれません。が。よしや其事があつたとした所が。それらは所謂偶申といふもんで。貴君の想像に。不圖暗合したといふまでで。決して正夢といふもんぢやありませんヨ。(友)へ、イ。デスカナ。さう承つて見ると。いかにも道理上。さもあるべきやうに思はれますが。あまり思ひ寄

らぬ折に。思ひ寄らん夢を見ましたから。(任)イエサ。矢張幾分か不知不識思つてお出なさるのだ。羽織の粧飾に巻いて居つた蜥蜴を見て。夢に背中へ蜥蜴の登つたと見た人もあります。但し其男は全然蜥蜴の粧飾を見た事は。忘れてしまつて居つたからして。一時甚だ不審に思つて。其原因を考へましたが。あとで羽織を再び見て。さては是だナと心附いて。大笑をしたといふ事があります。デスから思ひ寄らん夢を見るのも。随分ありがちの事ですよ。(友)ナアル。○時にお話
が理に落ちて。どうも盃が流行ませんナ。サア〜小町田さん。一つさしあけませう。チャ如何な
すツた。大層面色が悪いではないか。(小)ヘイ。少々頭痛がしまして。(任)チャ又。持病の腦病
賊。少し横になつて居ればいゝ。(小)ナニ大した事ぢやアないが。(友)ドウモ。季候が不順だか
ら。弱いお方は實に大事だ。かまはないで寝てお在なさいナ。時に今晚は何といふ變な天氣でせ
う。いよ〜風が強くなつて。コリヤアまう兎てもお出はないやうだ。(任)時にモウ何時ごろ
でありますか。○友定は懷中時器を開いて見て。(友)ヤレ〜もう已に九時半。イヤ十時五六分
前になりました。(任)それやア大變。それではもう。決して参りませんヨ。(友)任那さんには甚だ
お氣の毒であつたが。又出直しと致しまして。いつそ食事をして歸りませうか。(任)どう致して。
三芳が大變に失敬を致した譯です。此小休になつて居ります中に。早速歸る方が上策でありませ

う。(友)それでは。彌さうと斷行致しませう。ナイ〜女中。それではネ。大急ぎで御膳の用意
をして。そして車を三臺。先生も小町田さんも。今夜は最早遅いから。私の旅寓へお泊りなさ
い。(任)御遠慮なく。さう願ひませうか。(小)失禮ですが。私は。宅へ何とも申置ませんで
したから。(友)宜しいヨ。外ではなし。私の處へお泊りなさるのだから。(小)デスが私だけ
は。(友)守山さん。矢張小町田君は。お宅へお歸りなすつた方が宜しいでせう。假令後でわかる
にした所が。榮爾君は少々故あつて。當分外泊しては。親父さんへ宜しくない譯ですから。(友)
さういふ譯では。強て申すは宜しくない。○それぢやア女中。車は結句二臺でよろしい。一臺は二
人乗をいひつけてください。(女)ハイ〜。かしこまりました。
○しんみりとした守山が。座敷のさまに引かへて。樓下の一間の底拔さわぎ。調子外れの長唄断え
て。釜あぶなけなる都々一繼ぐ。粗暴といやみで持切りたる。客のお幫間にもてあませど。金で
買ふ身のかなしさ。客に當八の權あるゆる。藝妓は五分の蟲拳をば。グツトおさへて柳でう
け。坊ちゃんお利口ともてはやせば。お山の大将おれ一人。こゝまでおいでトあべこべに。誘ひ
かゝれる自惚根性。かつ惚れましたも危険ゆる。容易に口から出しかねつ。メツチャ騒ぎによ
き程に。今宵の座敷を切あけんと。辛氣甚句のヤケ三味線。耳かしましきドタバタ躍り。寔に四

方の迷惑なりけり。(吉)ア、モウ退陣だ。田のちやんと辨將軍は其行倒れをかつぎだしたまへだ。(岸)ナンダト此畜生。吾輩を以て行倒れとは是如何に。(吉)ハ、ハ、ハ、猶村高を以て。酒の土左衛門と見做すが如しかネ。(村)エイどうしたと。ケツプウ。土々。土左。衛門たア。失。敬極るツ。(田)アレサ。そんな事はどうでもいムンぢやアありませんか。サア私と一所においでなさいナ。(吉)早く車にのせてしまふべしだ。イ、カ。今の事は承知だらうナ。辨將軍たのんだぞ。(辨)ハア先刻承知ですヨ。サア。岸ちやんもお起きなさいヨ。口程にもない弱蟲たア君の事だ。(岸)なんだおれが酔つてるもんか。○馬鹿野郎。(辨)チャ私は野郎ぢやアないワ。サア。起給へ。岸)イヤニ生意氣な語を吐くなア。(辨)ハ、ハ、ハ、生意氣でもなんでもいムから。マアお起きなさいといつたらヨウ。ト藝妓二個は無理やりに。酔たふれたる二人の客を。引すりおこしてたち出れば。(吉)チイ。たのんだぞ。イ、ヨ。跡は承知だ。マア早くのるべし。○折しもまたも降り来る雨。植半亭の表門は。桐油をかけた人力車の。山をなしてぞ雑沓せる。此方に女中が口々に。お静にいらつしやいまし。左様ならツ。○チヨイト車夫さん。一人乗の方ですヨ。(又一人)深川のお車引。(女中)おしづかに。左様ならツ。二組三組の客人が。一時に退となりたるゆる。表口は非常の混雑。小町田繁爾は守山任那の後ろ

につきて。はや門口にたちいでしが。頭痛がいよくたへがたさに。片手に蠅傘さしかけつ。片手に額を押へながら。(小)チイ。一人のりは。どれだ。○(車夫)へい。是へお召なすつて。(小)ドツコイ危ない。一寸此傘を持って呉れ。(車)宜しうございますか。○チツト。ゴツサイ。ト引出し。門前の車夫に向ひ。(車甲)サアよしだ。だしねエ。(甲乙)サア。手前だしねエ。(車甲)イ、カラ出しねエといふに。おらア前がわからんからヨ。(車乙)それぢやアやるぞで。ガラ。ガラ。ガラ。○はや吾妻橋もうち渡り。浅草前ぞと思はるゝに。車は下谷に向はずして。北の方へと向ふに似たれば。小町田繁爾は審りつ。ひそかに桐油を掲げあけて。あたりをしぼく見回せども。文目もわかぬ暗の夜なれば。こゝを何處としるよしなけれど。如何にも様子が變なるゆる。(小)チイ。車夫。道がちがやアしないか。(車)へ、へ、へ。大丈夫でございます。(小)何處へいくんだか。しつて居るか。(車)へい存じて居ます。こちらから参りました方がちかいのでムいます。ガラ。ガラ。ガラ。○(小)チイ。ダガ何處だかして居るか。(車)へ、へ、存じて居ます。ガラ。ガラ。ガラ。○(小)ぞんじて居るぢやアわからない。どこへいくんだ。(車)へい。ガラ。ガラ。ガラ。○(小)コレ待て呉れといふに。○ガラ。ガラ。ガラ。



○韋駄天の如く雨をも厭はず。互にまけじ劣らじとぞ。都合四臺の人力車が。競て走る一生懸命。其真中にはさまれたる。小町田繁爾は聲ふりしほりて。しきりに車夫をとどむれども。耳にもかけずかけ行く程に。いつしか幾町も通りすぎて。いと寂しけなる巷にいでぬ。アナ心得ず。ト小町田繁爾は。あたりを屢見回せども。四方眞暗にてわけわからず。暫らくあつて何とやらん。いと賑やかなる巷に出ぬ。ふたゝび桐油を掲げあけて。右と左をかへり見るに。絃歌さながら沸くが如く。太鼓鼓の音かまびすく。ひるをあざむく球燈は。雨にも散らぬ夜の花。花の巷の吉原とは。此時はじめて悟るものから。何とて守山任那等が。かゝる處へ立寄りけん。雨でもふらぬ夜であれば。燈籠見物もさる事なれども。雨夜にわざ／＼來るべきやうなし。さては先刻植半にて。ウツカリ車を間違へしか。コハ鈍ましき失策せし。と再び車夫を止めんとする。程なく四臺の人力車は。ひとしく車の進を止めて。トアル引手茶屋の店先へ。横附になん着たりける。チャ被入いまし。の聲と共に。まづ車より立出るは。村高岸邊の兩人なり。(岸)サア來たぞ來たぞ。(茶)チャ／＼おめづらしい事。吉住さんは。(村)ドウダ此雨にくるタア。實があるだらう。タイ／＼吉住でるべし／＼。「此うち後の人力よりやをら立出る藝妓の田の次。あわてて車を飛下りたる。小町田繁爾と面見合せ。思ひよらねば流石にびつくり。(田)チャあなたは繁さんぢ

やア有ませんか。(小)おまへは田のちやん。」折から後れてガラ／＼／＼。
○今しもこゝへかけつけしは。すなはち吉住潔なりけり。【潔繁爾と邂逅して。果して何等の珍事がある。】「馬琴を氣取て」そは後回にときわくを聞ねかし。】

第九回

一得あれば一失あり

一我意あれば一理もある書生の演説

【人は情欲の動物なり。有情なるが故に相聚合し。有欲なるが故に相協力す。若し情欲を蟬脱して。皆仙人となりたらんには。社會はたちまち滅烈て。世は蒙昧のむかしに退歩らん。寡欲を一箇の美德となし。知足を修身の規矩となせしは。封建時代の方便教。われのみよかれの身勝手主義より。時の政府が賛成して。卑屈な儒者に唱はせたる。一時便宜の道德論なり。此文明の世の中には。兎ても不可適教なれども。稍ともすると寡欲々々と。仙人主義を再興して。今の人間の失望をば。制へんとする輩もあり。はてさて間違つたはなしならずや。形體の自由を求むるも欲なれば。色を好むもまた欲なり。精神の自由を欲するも欲なれば。食を食るもまた欲なり。句ロウエルを氣取る

慷慨家。彌ラボウを眞似る扼腕黨。美スマルクぶる自稱紳士。比ツトめかす政治家と雖も。皆是欲の動物にて。欲あればこそ起つても働き。骨をも折り。情あればこそ慷慨なし。また奮發もするなりけれ。若し此欲がなからんには。人は木偶人と一般にて。寝ると食ふとで一生をば。空しく夢の如く終りつべし。且又寡欲を可とすれば。欲の境界が狭くなりて。大きな望は出來ざる事ゆゑ。自然卑小なる欲に迷ひ。専ら肉體の快樂に耽りて。空しく一生を誤ることあり。大欲なければ小欲あり。精神の欲に溺れざれば。かならず肉體の欲に耽る。さて厄介な人間世界。たゞ希くは誰もく。皆高尚な欲に耽りて。他の卑むべき情欲をば。些幸抱して貰ひたいと。思ふ作者の氣もしらすて。上見れば及ばぬ事の多いといふ。むかしの謎かは知らざれども。お釜大の高帽子や。高麗人よろしくてふ麥藁帽子で。チツト頭を制へつけて。自ら卑屈を表明せる。〇〇さんや書生連が。とんだ處で足を知りて。三十圓で甘心なし。若くは五六圓で満足するとは。さてく色々なる人心。其情欲には高下あれども。到底は欲でたちゆく世の中。社會がまるツきり豹變つて。耶穌が天堂から來降なし。今一度馬糞にひつくるまりて。吁呀をきめたらいざしらねど。さらずは路程なほ遙けき。道理一統への進開道。心猿意馬をやとはすては。容易に足が進まぬ長旅。いやしき欲はうツちやつたト。いふも當にはなら坂や。兒の手柏の二面。口と心はあべこべ

註。〇〇は官員。

なるから。道理ばかりで持切る譯には。まだいかもの達磨大師。面壁九年の修學をば。なほ終ずして早く已に。尻が裂れたる書生もあるべし。以下の物語を讀む人々は。情欲の種類のいろ／＼なるをば。些と氣をつけて見たまへかし。】

〇九尺二間の障子は。腰板あさましう破れ碎けて。坐角力の古跡いちじるしく。縁無八疊の琉球表は。處々摺れ破れて。柔術のお温習の盛んなるを示す。夜被はたゝますして。押入の内に投入れ。衣服は洗はずして。久しく藤行李の内にをさむ。足駄は他の穿去るを恐れて。ランプの傍にかくし。ビールの酒罎は酒氣已に絶えて。方今は冷水のいれものとなりぬ。てんぶらの香尙窓前の竹の皮に残り。景物の酒盃。かけて文机の邊にあり。「三五郎物語」は。誰が丹精の謄寫に成りし歟。洋書と共に本箱のうちに交る。屢取出して讀むと思しく。其の摺れたること洋書に優れり。顧て壁の一方を望めば。たてかけたる竹刀兩三本。握り太のステツキと相連なる。中には血の痕の斑なるもあり。想ふに罪もなき近所の犬をば。叩き殺したる記念にやあらん。こは抑何處の景況ぞといふに。是なん。某學校の塾舎へにして。其部舎主の性質の如きは。以下の物語にて察したまへ。

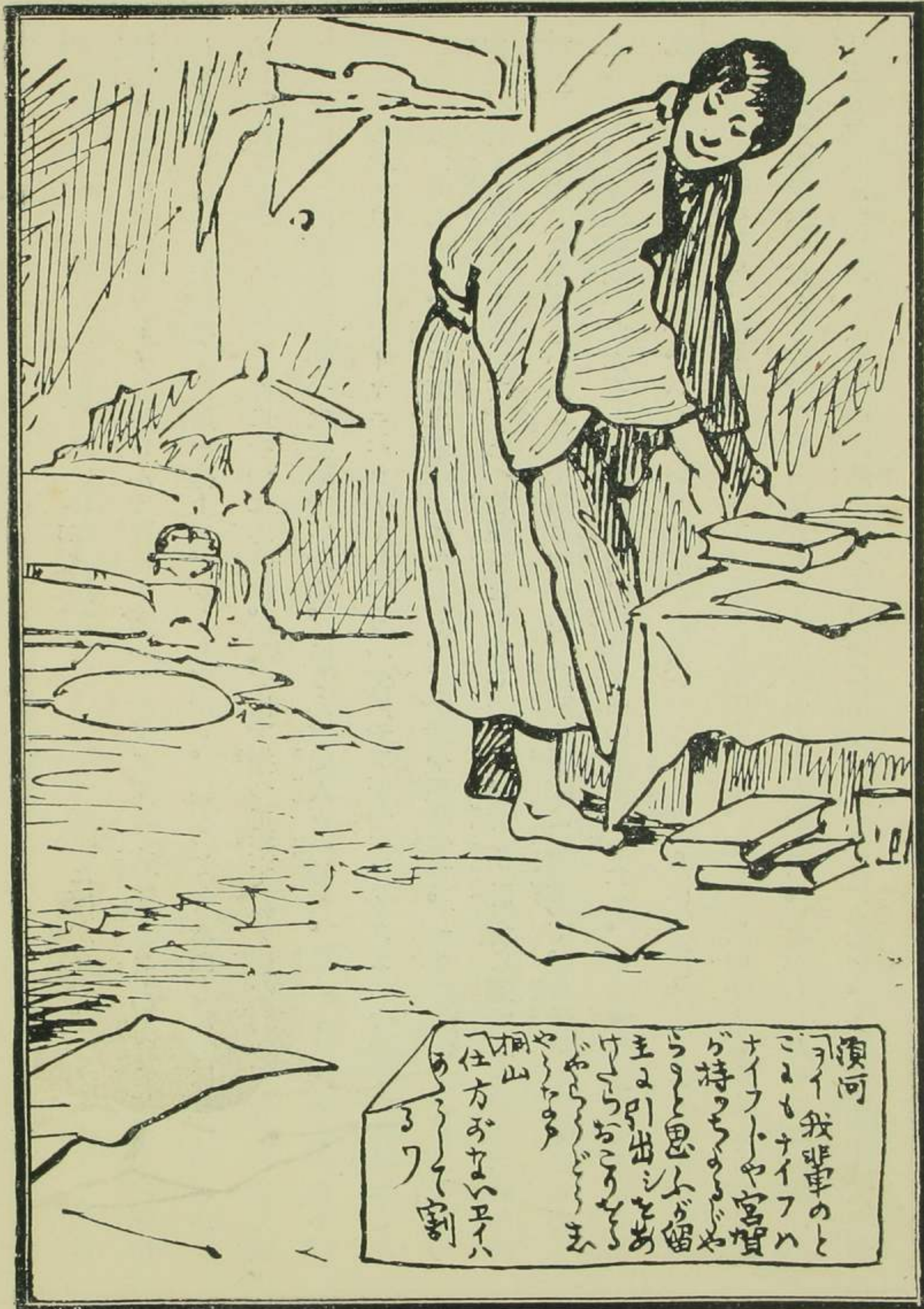
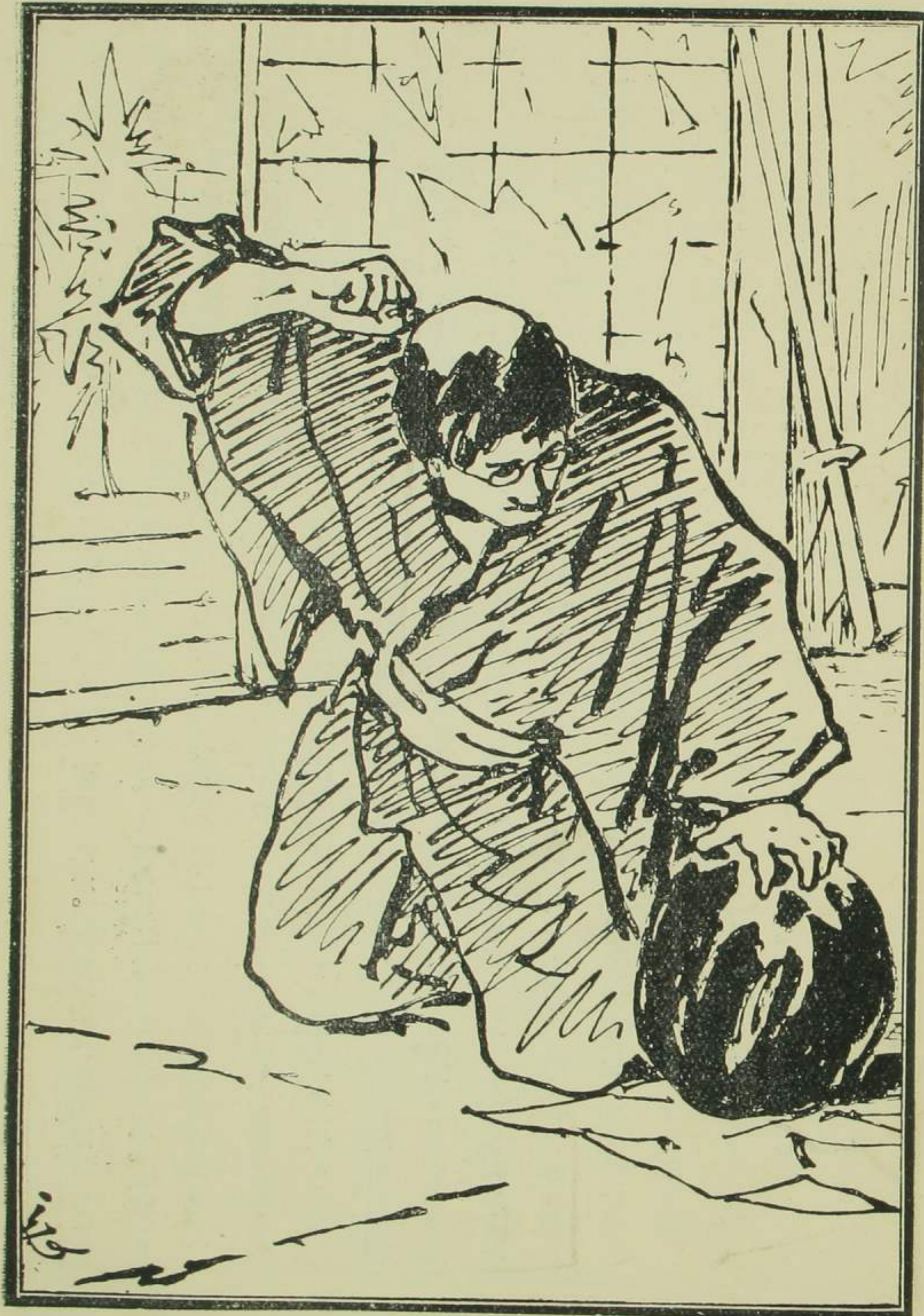
〇年の頃二十三四。近眼と見えて鐵欄の眼鏡をかけた書生。尻のあたり赤くなつた。白地の單衣

(なり)

を被て。白木綿の尻子をまきつけ。腕まくりをしたる容體。見た所からして強さうなり。胎毒の記念と見えて頭の後はまるではけたり。背後から見れば藥籠を肩の上にのつけたやうなり。

○ア、暑うてたまらんく。ヤイ須河マアおれの部屋へ来いといふに。マア来いヨ。甘いものがあるぞ。(須)なんぢやア。また菓子パンぢやらう。我輩の部屋へ来いみイ。えい桃を買つて來たぞ。チイ桐山こちへ来いヨ。(桐)なんだ桃だ。おれは西瓜を一ツ買つて來たがなア。切るもんがなうて困つてをるがなア。ナイフ「小刀」があるなら桃と一所に持て來いヨ。(須)西瓜か。そいつはえい【ワイ】今直に行ぞ。まてく。といひながら。暫くあつて須河悌三郎は。兩方の袂へ桃を一杯入れてぶらさけつ。桐山の部屋へ入り來りて。(須)チイ。我輩の處にも。ナイフはナイフぢや。宮賀が持てるぢやらうと思ふが。留守に引出しを開たら。また怒りをるぢやらう。如何しようなア。(桐)致方ない。えいワ。斯うして割るワ。といひながら握拳をふりあけて。西瓜の眞中を一ツくらはせる。(須)ヤア非道イことをするなア。ヤア凹んでしまつたぞ。(桐)これから之を引割けばえいワイ。おぬしも手を貸して。ソレそちらの方を引張れ。えいか。引張るぞ。ドッコイ。ウーント。ハ、ハ、ハ、ハ。そらどうだ甘く眞二ツに割れたぞ。これからは適宜に割るべしだ。其半分はおぬしに遣らう。かじりついて食へヨ。(須)しかしまぢたまへ。これや

ア何だか暖いではないか。(桐)暖いのは當然だ。買つて持つて來たばかりで。ウチータア(水)に浸んからぢや。(須)ヤレく冷さんで西瓜を喰ふのか。これやア古今未曾有の方法だなア。○桐山はむしやりくと。兩手で西瓜を持上げて。かじりながら。(桐)どうもおぬしたちは贅澤をいふからいかんワ。おれなんぞは國にをつた時分は。兎を山で捕つて來てなア皮を剝いて丸煮にして喰うたぞ。どうも東京邊のやつは柔弱でいかん。ほとんど婦人と一般だ。食もんばかりぢやない。被るもんでもさうぢや。イヤニペラくしたもんを被やアがつて。メカスのを男子の本分だと思つちよるかしらんが。實に笑止千萬なはなしぢや。學者や理學者で。一生を終らうといふ了見の奴は。暫く論外としちよいて。まづ我輩等とおなじやうに。此活社會に運動して。大に政治の改良でも。おこなはうといふ志で居りながら。無暗に學問に勉強して。身體を不健康にしてしまつたり。或は婦女子なんぞと交際をして。益々文弱の風を養つたア。正に慨歎に堪へざる次第ぢや。何新聞ぢやツたか。いつかいつた事があるぞ。ア、何たらいつたワイ。さうく斯うぢや。方今の書生輩は。皆顔色が生白うて。恰も日陰の唐茄子。イヤ冬瓜のやうぢやといつたぞ。實に失敬な誹謗ではあるが。これも事實だから辯駁のしやうがない。おぬしなんぞは如何思ふちよるか知らんが。おれは是等の誹謗を聞くと。實に憤懣に堪へんによつて。頻に腕力主義を擴



須河
 我輩の
 こゝもナイフハ
 ナイフトや宮賀
 が持つてゐるや
 うと思ふが留
 まり出しを
 けらちこゝ
 へ
 桐山
 仕方がない
 三ツ割

張して。おぬしも已に知ツとる通り。研劍會といふ會を創立したが。何ぢやぞ。此頃は非常に會員が殖て來たぞ。(須)さうかア。我輩も脚氣が全快したら。また會員になるつもりぢや。(桐)さうせい。撃劍をする。第一に身體の爲にもえいし。又將來の爲にもえいぞ。腕力は野蠻ぢやな。んぞといふ奴があるが。蓋し社會の事情に暗い奴ぢや。駝アウキンがいつとる通り。優勝劣敗の世の中ぢやから。強は弱を壓し。小は大の食となるは。元來當然のはなしぢや。而して如何なるもんが。一番強にして且大かといふと。所謂マイト、イズ、ライト。「マイト、イズ、ライトとは腕力は權利也といふ意」ぢや。萬國公法があらうが何があらうが。まだ。道理ばかりでは勝つことができない。ワイ。國と國との間の事は元來論するまでもないが。一個人の場合ぢやから。矢張腕力が勝を得るぞ。試におぬしが。ある政黨の領袖になつたと假定して見イ。反對黨の論者に。如何なる粗暴な奴が居らうもしれん。議論では負ても腕力で以て勝つと思つて。おぬしに切か、つて來るもしれん。えいか。斯うなつた場合に於て。おぬしが腕に覺えがありやア。毫も臆する譯もないが。若し其覺がない時には。對手の猛威に呑まれてしまつて。見す。御無理御もつともで。遂に巡しなければならぬ道理ぢや。板垣の岐阜一件のやうな事があつたら。おぬしはどうしようと思ふちよるか。板垣はあれでも。幾分か戰場をふんだ男ぢやから。頗る膽力はすわつて居るし。且

は腕力もあるさうぢやから。容易に犠牲にならんぢやつたが。あれが柔弱な人間で見イ。刺されただばかりでも。驚いて死んでしまふぞ。腕力の利益はこればかりぢやアないが。ボジチイブ「表向」の利益は。マアこんなもんぢや。○ア、喋りながら喰ふちよつたら。種を半分喰うてしまつたワイ。(須)腹の中へ西瓜が生えるぞ。(桐)馬鹿アいへ。西瓜の種位は驚くに足らんワイ。種をくうたにつけて思ひ出たがなア。おれが東京へ來た最初になア。或官員の處へ尋ねていつたら。恰ど三月の中旬ぢやつたが。櫻餅たらいふもんを出して。おれに喰へといふワイ。ハテナ妙な體裁のもんぢやがと思つたが。如何して喰ふもんぢやと聞くも残念ぢやと思つて。他が食ひはじめのを俟ツちよつた所が。容易に誰も喰ひ始めぬワイ。おれは腹がへつて來たもんぢやから。かまふもんかと思つて。櫻の葉の着いちよるまんま。口の中へはふりこんだが。サア喰へんワイ。こいつしまつたト氣はついたが。今更はき出すのも口惜いから。とう。ムシャ。とやつてしまつた。然し其時やア苦しかつたぞ。(須)ハ、、、。どうも君もまけをしみの強い人ぢや。非を遂るに熱心すること。猶王安石其人の如しぢや。(桐)ハ、、、。(須)たしか明智光秀にもそないな事があつたぞ。ソラ粽を葉ぐるみに喰うたといふ事があつたらう。(桐)さうぢやツたかのう。どうもなんぢやぞ。戰國時代のもんは。概して學問の力は乏しいが。氣性は總て活

濃ぢやなア。假令學力がどの位あつたからとて。活潑な氣力がなうては。何の用にもたゞん道理ぢや。而して最も人をして文弱にならしむるもんは。彼の女色といふ奴ぢやワイ。女色を避けんとするにはまづ第一婦人に嫌はるゝやうにせんで叶はん。斯ういうたらウイキク「氣が弱い」な事をいふといふぢやらうが。人間は元來バツシヨネート、アニモル「情のある動物」ぢやから。如何にウキル「執意」が定まつて居つたからとて。向から持かけてこられた時には。斷然排斥する譯には。或はいかんこともあるぢやらうから。なるべく此方で以て威嚴を張つて。女子を近づけんやうにするが。上策の上乗ぢやとおれは思ふが。(須)さうぢや。實に君の言の如しぢや。我輩でさへもなア。過日淡路町の楊弓店でなア。トいひかけしが俄に心附きしと見えて。(須)我輩が見ちよつたらなア。ある堂々たる大丈夫が。ガル、「小娘」に戯れて居つたぞ。(桐)兎に角女子と交際するは。男子をして文弱に流れしむる原因ぢや。然らば如何したら女子を遠ざくる事が出来るかといふに。今もいうた通り威嚴を保つのが上策ぢや。而して威嚴を保つには。専ら腕力を研いてなア。鹿服を着するが肝要ぢやぞ。腕力のニゲチイブ、アドバンテイジ「裏面の利益」。はすなはち此點にありといふべしぢやワイ。(須)ヒヤ〜。そこで君は龍〇主義を主張するぢやな。(桐)女色に溺るゝよりは龍〇に溺るゝほうがまだえいワイ。第一互に智力

註。龍〇
龍陽。

を交換することも出来るしなア。且は將來の豫望を語りあうて。大志を養成するといふ利益もあるから。(須)然しながら。之を徳義上から論じたらどうぢや。アンチ、ナチュラル「天に背」ぢやアないかア。(桐)馬鹿いふな。之を實際に行うたら。アンチ、ナチュラル「天に背」でもあるぢやらうし。イムモーラル「不道德」でもあるぢやらうが。唯理論上に行ふのぢやから。毫も破廉恥の理由なしぢや。(須)果して理論上ぢやか如何ぢやか。容易にビリイブ「信用」は出来る。(桐)馬鹿いふな。大丈夫ぢや。時に山村と繼原は。今日も居らんやうぢやなア。(須)たしか先刻出掛けていきよつた。(桐)きやつ擲べしだなア。あゝいふ奴が本校に居つては。到底本校の體面を汚す道理ぢや。倉瀬は此頃謹慎しちよるやうぢやノウ。(須)ウン。此間の試験には落第をするし。親父からは小言をいはれたし。何か守山にも言はれたさうぢやから。(桐)守山はあれでも放蕩はしなかつたといふ事ぢやノウ。しかし卒業もせんうちから。生意氣にゼントルメン「紳士」ぶつて居やがツたなア。(須)さうサ我輩なんぞもあいつは大きらひぢやツた。(桐)それはさうと幫間は何時頃に出掛たか。(須)幫間たア誰の事ぢや。(桐)山村の事ぢや。あいつは學生ともいふ身分で居ながら。淨瑠璃語の眞似をしたり。假聲たらしいうて。役者の身振をするではないか。實に破廉恥極まつた奴ぢや。本夕また青樓へいきをつたらう。(須)なんでも六時頃ぢやつたぞ。(桐)

それでは登樓しをつたに相違なしぢや。門鑑はだしていきよつたか。(須)たしか門鑑は部屋にあつたぞ。(桐)フンそれでは今夜は戻つて来るぢやらうノウ。(須)また中乗をして。ソツト歸宿するに相違ないワイ。(桐)實はなア。あいつは實に失敬極る奴ぢやから疾から打擲て呉ようと思つちよつたが。近日賄改革の一大暴動を起さうと企てたによつて。其序にしようと思つたが。例の官賀の小弟の事に就て。おれを嘲弄した演説をしをつたから。最早一日も許されんワイ。門鑑を監事の處へ持つていけば。一も二もない事ぢやが。そのやうな卑劣な事をするのは。所謂女子の行ふ所で。堂々たる丈夫の恥る所ぢや。寧ろ彼奴めがシクレットリイ「ひそか」に戻つて來るところを俟うけて居つて。窃盜と思ひ違へたやうな風をしてなア。思ふさま打擲つて呉よう。(須)ハ、、、。そいつはえいが。いづれ十二時過ぎやなうては戻つて來んぞ。(桐)起て俟つちよるワ。(須)怪しいもんぢや。君の寢坊が。いつも十時まへに寝るぢやアないか。(桐)それには少し窮したなア。加之今日は晝寢をせんぢやツたからノウ。(須)それでは益イムボツシブル「行ひがたし」ぢや。(桐)えいワ。おれは今からして寢からノウ。おぬし寢る時分に起して呉れい。おぬしは十一時頃まで起ちよるぢやらうが。(須)よし。承知々々。(桐)それでは頼んだぞ。チイ〜須河までヨ。もうおぬしは行くか。(須)一寸外街までいてこんければならん。(桐)

何しにゆくか。(須)インキ「洋墨」を買うてくるんぢや。(桐)約束を間違へてはいかんど。(須)諾々。

○さる程に須河悌三郎は。桐山「名を勉六といふ」にたちわかれ。おのが入塾せる學校をたらいでつゝ。納涼かた〜ぶらり〜と。近所の街頭を逍遙して。インキ、ペンシルなど買ひ求めつ。やをら學校へ歸らんとて。水道橋「お茶の水」を渡る折しも。後の方より聲を掛けて。チイと呼ぶものあり。驚きながらもふりかへれば。是なん繼原青造なり。繼原はいそがはしく進みよりて。(繼)チイ須河君。いゝ處であつた。(須)ヤ繼原君。いまお歸校ですか。トいつたつきり。少し鑑定が違ひし故。ヘンテコナ兎をして居る。(繼)どうも君に對しては。いろ〜濟ない事だらけだが。第一失敬をしたと思ふのは。いつかの君のウチツチ「時器」ネ。(須)ナニイ最早あれは入用でないぢや。證人の處へさういうて。更に買うてくるつもりぢやから。(繼)さう君に憤られては困る。僕は全體君と親い中といふ譯でもなし。圖らず一所に會合つた所からして。君がいやがるのも管はないで。強て登樓した譯だつたから。元來君にエムを出させるといふ譯はないんさ。それを山村が獨斷でもつて。強て君をバルシユエイド「説得」して。一時時器を借りたのもいゝが。借ツばなしたア實に失敬さ。僕も山村の所置に就いては。頗る不平な事ばかり澤山

あるが。他の關係は暫く措いて。ウチツチの一件に關しては。僕最も不平だから。君が督促をしない前から。屢山村に談じたけれども。ウン／＼承知だといつては。些少も埒があかないからして。覚えず今日まで長延いたんだが。君よく考へて見て呉たまへヨ。僕も一人の大丈夫だ。僅か四圓や五圓の金を。人からだまして取るやうな事はしないんさ。それを誰がいひだした事かはしらんが。繼原と山村は。折々朋友を強誘して。貸座敷なぞへ出掛てゆき。其ベイメント「勘定」を自分でしないで。其朋友にさせるなんぞ。ト實に聞くに堪へん臭評をされては。切齒慷慨に堪へないぢやアないか。今日山村を引張だして。思ひツきり譴責した上で。此通りウチツチを請出して来たから。君たしかに受取つてくれたまへ。今まで延引したのは失敬だつたが。僕が借用した本人でないから。君も斟酌して可なりぢやアないかといひつゝ。懷中より時器を取出し。やがて須河の手に渡せば。須河はきまりが悪さうにモジ／＼しながら。(須)ナニ。君に對しては憤る理由もないぢやが。あんまり山村が不義理な事をしたから。遂に君にまでも失敬な事をいうた譯ぢやが。君に斯いふ心配を懸ては。實は我輩が濟まん。何も君を悪く思つていうた譯ぢやないから。(繼)マアいゝさ。君にウチツチを渡した上で。僕の本心さへわかりやアいゝんさ。僕は是でも學問をした人間だ。随分放蕩もするけれど。人の物を竊取つて。それで遊ぶやうな

事はしないよ。それぢやア確正にわたしたヨ。トいひはなしたまゝ行かんとする。素この繼原青造といふ書生は。頗る懶惰なる人物ではあれど。さすがに數年間學問を修行しただけに。廉恥のデフヒニシヨン「定義」ぐるゐは十分會得したる男なるゆゑ。過般山村須河と共に。中廊に遊びし折。其會計に窮せしあまりに。一時須河の時器をかりて。之を山村が質屋に投じて。三圓半のモノイとなし。繼原の手許に送りし後。彼の時器をば請も出さず。其儘にして棄置ししかば。須河は屢兩人に逼りて。これが催促をなすと雖も。右に左に遁辭を設けて。二月あまりを経る頃まで。何の返辭もせざりしかば。須河は痛く憤りて。繼原山村兩人をば。それとはなしに學校中にて。いとあしざまにいひ觸らして。暗に憤を洩したりしを。繼原青造が聞きつゝ。いと口惜き事に思ひて。須河の舉動を怒ると雖も。源は身からでたさびなる故。あからさまに之を辯駁せんやうもなければ。まづ彼の時器を返せし上にて。名譽恢復を圖らんものと。獨私に心を定めて。之を山村に相談せしかど。山村はたゞ打笑ひて。少しも取あふ氣色なければ。繼原は彌憤懣して。今日しも山村に強てせまりて。幾分か割前の金をいださせ。非道工面して彼の時器を。受出したる事にぞありける。書生中には。往々繼原の如き人物あり。蓋し廉恥を知る性質なれども。其執意の堅からざるから。時に劣情を制しかねて。懶惰放逸にながるゝのみ。年齢

漸く老いきたりて。血氣少しく静まるにいたらば。或は有用の人ともなりなん。【是等は所謂多血神經質の人間といふべし。】閑話休題さては須河悌三郎は思ひがけなく繼原より。懷中時器を受取つゝ。さすがに氣の毒に思ふにつけ。又今更に何とやらん。きまりも悪く氣味も悪くて。立去らんとする繼原が袖を。いぞがはしく取留めて。(須)チイ繼原君。マア待たまへ。君はこれから何方へいくんぢや。(繼)僕はまだ少々用があるから。辰岡町までいくんだ。(須)それでは本郷まで同伴しよう。(繼)君もあちらへいくんか。それぢやア一緒にゆかう。ト口にはいへど。あまり面白くは思はぬ兎附。須河は頻に繼原の機嫌を直さんとして。(須)山村は何處へいきよつたネ。(繼)何處へいつたか僕ア知らない。(須)山村は今でも放蕩をしちよるなア。あいつは實に精神の定まらん男ぢや。(繼)さうさ。随分フワフワとした人間さ。しかしあれでも花柳の事情には通じたものだ。淫蕩學の博士にすりやア。黄金賞牌を與へても可なりだ。道徳上から論じちやア。全然話にならんけれど。社會上からいやア。何かの用にたつかもされない。校長に詔媚をしたり。學校中のアラをさがして。人に觸散らしてあるいたり。又は人のいひなり放題になつて。所謂放蕩連の中間にもはひつたり。又は腕力黨の賛成者にもなつたり。あちらへベツタリこちらへベツタリ。内股膏藥の主義を執つて。龍〇の周旋なんぞをする奴に比べりやア。まだ

山村の方がいゝかもしれない。落第して改心したと言はれちやア残念だが。實ア僕なんぞも大に悟る所ありだ。以後も放蕩はするかもしれないが。人のお世話にやアならない積だ。ト何だか筋袂の合ぬ議論を述立るは。蓋し須河への當コスリなり。須河はギツクリト徹へる所があると見え。さすがに面を赧くして言句もなし。さはいへ本性が卑屈にして。相應にズウ〜しい性分なるゆる。尙も機嫌を執らんとして。(須)ヤ噪々りながら來よつたら。モウこゝは本郷の通ぢや。非常に腹がへつた。繼原君。君夜食の相伴をしたまはんか。(繼)僕は用があるから失敬としよう。(須)さう言んでつきあひたまへ。少々廻道になるかしらんが。二丁目のビーフ「牛肉店」まで来てくれたまへ。(繼)今夜は眞平だ。且は君も食後だらうぢやないか。(須)ナニイ。賄の食は喰うたが。四時過に喰うたんぢやから。已に消化してしまつた頃ぢや。マアえいからつきやつて呉たまへ。ト無理やりにすゝむるにぞ。繼原もあながちにいなみかねて。引かるゝまゝに後にしたがひ。二丁目邊の牛肉屋へはひる。

〇さる程に繼原青造は。須河悌三郎に誘はれて。ビーフ、シヨップ「牛肉店」に昇りしかど。胸に不平といふ塊があるゆる。酒を飲めどもおもしろからず。肉を喰らへども甘しと思はず。はじめの程はろく〜に。談話の應答もなさざりしが。已に前にもいひける如く。此繼原といへる男

は。兎角執意が定まらずして。氣が替り易き性分なるに。元來酒を嗜めるゆゑ。酔へばいつしか意が變じて。仇敵の如くに思ひし者をも。信友の如くに遇する癖あり。此般なる人。思ひの外。我日本國の。社會には多かり。是等は一合の酒にかへて我ウキル「我意」を賣る人物なり。ナント廉價たましひならずや。お買ひなさいといひたけれど。斯んな駄卸の安魂は。幾千萬箇買入れても。何の益にもたちそになし。およしなされたが徳用とは。餘計な悪まれ口。本文のとんだ「お邪魔さま。御めんなさいヨ。といひながら。年の頃十五ばかりの少女。須河の前を通りながら。歸り跡の火鉢をかたづけける。須河は何心なく。風と此娘の兎を見れば。何處かで見たことのある兎なり。娘もふりかへりて見て居たりしが。俄に思ひだせしと見えて。(娘)チャ貴君は。いつうか。アノ何んで。お目に懸つた事がありましたネエ。(須)なんでもあうた事があるやうぢやと思ふちよる所ぢや。おまへは誰さんぢやツたかなア。(娘)ホ、ホ、ホ。ホラ貴君のお時器をネ。無理にわたいが強奪つてネ。(須)さう〜。やツと思ひだした。お前はお豊さんたらいうたなア。(豊)アラマア。よツく覺えて被居るヨ。(繼)チイ〜須河これやア恐れた。黙り者の何は何とかだ。牛肉のおごり位ぢやア許されんぞ。(須)ナニイ。馬鹿いひたまへ。さういふ譯ぢやないワ。此婦人はせんだつて淡路町でなア。(繼)どつこい〜。そんな甘口な分説では。此繼原は承

知しないぞ。姉さん。マア兎も角も一盃飲むべし。(豊)ハイ有難う。(繼)イヤニ氣取つたネ。アリイといはないうちが千兩だ。成程須河が迷ふのも無理はない。眼は二重まぶちにして色白く。(豊)アラようございますヨ。澤山お弄んなさいヨ。(繼)どつこい。擲るのは願ひ下けだ。これでもいきてる身體でございます。チイ〜須河。久しぶりであつたやうな風をしたツて無要だ。此處の亭へは君が誘引つてきた所を見りやア。疾から出来て居たんだらう。ネエ豊ぢやん。然だらう。(豊)アラ恐れ入つたヨ。もうワタイの名を御存じだヨ。(繼)一旦耳へ挿んだら忘れられたもんぢやアない。(豊)あんな調子のいゝ事ばかしおいひなさるヨ。(繼)處が酒嚙がさつぱりよくない。(須)なるほど。これやア。ヴエイカント「空虚」ぢや。(豊)チャこれは失敬。おあついのを持って來ませう。(繼)あんまり熱くしちやアいかんぞ。夏は六十度以下に限るツ。(須)姉さん序に肉の代もいるぞ。鶏卵も三ツ四ツ持つて來い。(豊)ハイ〜。といひながら階段をおりてゆく。(繼)口留の積敷。非常におごるぢやアないか。(須)馬鹿をいうてはいかん。彼ガル、は我輩の知己でもなんでもないワ。(繼)分説をするだけ可怪ぢやないか。君も中々やつてるナ。(須)然でないといふに。彼はなア。もとは楊弓場の女で。(繼)それを君がラブ「いろ」にしたんか。(須)馬鹿ア言たまへ。たつた一度逢うた事があつたんぢやが。如何してこゝへ來ちよるのかしらん。(繼)

すこしじやうる。この本郷の牛店に逢ふも不思議。○これぢやア淨瑠璃には語呂がわるさうだなア。リノふしにて。一年宇治の螢狩といふ。君がなれその物語を。きり／＼白狀してしまひたまへ。チイ須河。一年宇治の螢狩といふ。君がなれその物語を。きり／＼白狀してしまひたまへ。(須)馬鹿いうてはいかん。そないな深い譯はないんぢや。(繼)さツまから幾度馬鹿を云なが。でるかしれやアしない。僕だつてさう馬鹿ばかり。いふもんか。白狀しないと。歸校つてから皆人にいふぞ。(須)いはれてたまるもんか。外の奴は事實ぢやと思ひをるから。(繼)事實に相違ないぢやアないか。(豊)ハイお酌を致しませう。(繼)チツトきたり。チイ姉さん。デはない豊ぢやん。須河めがノロケていかんぞ。些と謹めといつておきな。(豊)デスカほんとに此方は浮氣さうですネエ。(須)馬鹿アいへ。(繼)どうも馬鹿アいへが好だ。ナニサ。お前のノロケをいつて居たのヨ。(須)うそぢやぞ。(豊)どうで然でせうサ。ワタイのノロケなんぞを何の因果で。ネエあなた。(繼)そりやこそ夫婦喧嘩のはじまり左様ツ。僕はしらんぞ。などと興に乗じて繼原は。頻に須河を挑弄ふにぞ。須河はほと／＼困じ果て。眞地目になりていひわけする。其容體がかしければ。お豊も共に口をそろへて。さま／＼におもちやになし。夜の深行くもしらざりけり。

緒言にかふるに。嘗て自由の燈に投じて。
某が批評に答へたる文をもつてす。

はじめ隠居が件の小冊子を公けにするや。褒貶の評四方に起る。或は曰く。陋猥卑俗文學士の著作に似ず。ト或は曰く。學者はおほむね思想に乏し。政事を談ずるの必要を餘所にして。如斯クダラヌ戯述をなす。實に贅勞の極といふべし。寧ろ政事小説を翻譯するの有益なるに如す。ト或は曰く。件の小冊子に載る所は。三四年以前前の書生の情態にして。方今の書生の情態にあらず。方今の書生何ぞ斯の如く遊蕩にして懦弱ならん。ト或は曰く。本篇に載る所は。悉皆作者自身の經歷なるべし。文學士の履歴果して斯の如き歟。誠に恐る感心なり。ト其他是非の批評も／＼いであたり。要するに隠居を以て無要の事に貴重の時間を費し。益なきの戯れをなすものといふに過ぎず。隠居これらの評判を聴くや。一たびは世に稗史眼の無きに驚き。一たびは美術の衰へたるを憾み。一たびは小説家の迷惑を感じぬ。請ふ一々に次を逐うて。其の然る所以を説明せん。



鳥賊の
まきり
此の
五



橋
橋
橋
橋

(第一)拙著書生形氣を以て卑俗なりと譏れる批評は。小説の何物たるをしらざるもの言なり。下等の情態を寫し。卑俗の言語を用ふるは。元來稗官の得意とする所。よしや。如何程に情態言語に卑俗陋野なる性質ありとも。其精神だに野卑ならずは。之を陋猥と罵るべからず。英のヂッケンスはいふも更なり。近來の小説家の著述にも。下流の様を寫せしもの頗る多かり。中には密賣女の情態を寫したる者もあり。巾着切の内幕を穿ちたる者もありて。脚色もをさく近俗にして。且文句さへも卑しげなるあり。但し其意匠の存する所は。専ら情態を寫すにありて。彼の爲永派の作者の如く。一向淫靡なる時好に媚び荒みて。野卑をかたるにあらず。是れ東西の小説作者が。下流の情態を描くに當りて異なる所以の一點なりかし。拙著書生形氣の如きも。其行文は花なく。其脚色は淺劣なれども。主意の眞成に存する所は。全く此意味に外ならざるなり。能く小説の主意を解して後に評判を賜らんに。隱居は満足して之を受けん。さらすは甘心する能はざるなり。

(第二)の評言は。小説を以て「ユウスフルアート」(實用技)と同視し。美術を以て専らに政事家の機械となさまくする。實用専門家の妄言なり。是蓋し小説の眞味

をしらざるものなり。佛のユーゴの稗史を讀み。英のヂスレリの小説を閱して。之に心醉せる者の言なり。所謂模型主義の小説論者なり。カフラの生えた勸懲主義のみ。政事といふ字は形容辭にして。特別小説の名たるを悟らで。一向小説を政事に求むる實用主義の人々なるのみ。隱居は此人々の爲に。答辯するを厭ふにあらねど。貴重の新紙を埋めんこと。最心なき業に似たれば。暫く之を他日に譲る。論者もし小説の主意を知らんと欲せば。乞ふ其疑ひのある所を表示せよ。億百萬言の答辯と雖も敢て辭せざる所になん。

(第三)は。時代違ひなりといへる批評なるが。是又昔風の讀者の言なり。其故は何となれば。隱居は表題に當世の二字を冠したれど。話譚は明治十四五年の事に起せり。故に書生の情態の如きも。はじめ十二三回の其間は。おほむね既往に屬する者多く。末篇にいたるに及ばば自然情態の變遷して。更に局面の新なるを見ん。讀んで結局にいたらずして。已に善惡の批評を賜ふ。讀者の眼の鋭きこと。彼の離婁の明にも優れり。誠におそろ感心なるかな。

(第四)は。本篇の話譚をもて。悉皆作者の經歷より成れる者なりといふ評判是な

り。是また。小説家の何物たるを知らざるが故の妄言なり。昔し英のデホウは。遠く龍動の外に客となりて。尙能く想像の筆を弄して。龍動大火災の情況を寫し。眞に逼るといふ好評を博しぬ。京傳が章臺に入浸りて。娼婦の内幕を穿ちしが如きは。是京傳がジニヤス（天才）にあらざるの證なり。知らず論者は。自家が實驗せざる事實は。決して穿ちがたきものとや思へる。デッケンス翁は。巾着切の態度を寫して。其妙ほと／＼眞に迫れり。論者はすなはち翁をもて。拐賊の實驗ある人とするや。嗚呼なるかな／＼。隱居元來菲才にして。デホウの達筆。デッケンスの英才に比ぶべうもあらねど。さりとて感覺の存する限は。一を見て二を察し。三を聞て五を悟るの力はこれあり。況んや久しく學生となりて。書生社會に浮沈せしをや。耳に觸れし所。目に見たる所。積つて想像の材料となりしは。敢て怪むに足らざるなり。豈自家の實驗を俟て後に之を知らむや。ハテサテ馬鹿な事を。（下略）

春の屋隠居臆述

第十回

生兵法大きな間違をしでかして

味方をぶちのめす書生の腕立

却説 繼原青造は酔うては私憤もごこへやら。須河と共に酒酌かはしつ。お豊を對手に夜深るまで。彼の牛肉店の二階にありしが。須河は痛く酒に酔ひて。さきに桐山と約せし言葉も。今は全く打忘れて。頻に興に乗るものから。流石に時刻が後れんかと。學校の首尾を氣づかひつ。屢歸りを促せごも。繼原はお豊をワキに使ひて。ゲタ／＼ガラ／＼。日和下駄で。銀座街頭を走るやうな。奇怪な聲して笑ひながら頻に須河に挑ひつ。容易にかへりさうな氣色もなし。西の學者某がいはれし言葉に。俗人は笑ふ人を見れば。あの方はお嬉しい事があると見えるといへご。こは大なる間違ひなり。笑は喜より出るにはあらで。多くは自慢からでるものゆゑ。笑ふ人をば誇るといふこそ。寧ろ當然の事ならめ。と鹿爪らしいはれたりしが。けにさる譯のものにやあらん。此時繼原が面白けに。須河に挑ひて打笑ふは。何も喜ばしき譯あるにあらねご。須河が世間に馴れざるゆゑ。百舉動がハンマにして。いかにも馬鹿氣て見ゆるを見て。我が世にな

れしを心に誇りつ。口から出任せの抑揚頓挫。日清葛藤の時のドルの相場も宜しくといふ鹽梅に。あけたりさけたり挑へごも。其いひかたが巧なるゆる。ウツカリの須河は少しもさとりず。お豊と色だらうといはれたのを。結句賞典でも貰うたやうに思ひ。真面目でいひわけをする中にも自惚の原素とノロケのエムブリヲ「萌芽」を含むもをかしく。兎角する中に。近所の醫學校の書生とも思はるゝ連中。二三人連にて。少し隔ちたる向うの座敷へ入れば。兼て常得意の客と見えて。お豊はこなたの席を外して。やがて彼方へ赴きつゝ。其詠を聞なごす。(書)タイ姉さん。オムレツで酒だ。後はビフテキといふ註文だよ。(又一人)序に豊ちやんおまへの愛嬌を一時間分借用だよ。

○(須)タイ繼原。モウ戻らうではないか。(繼)お豊がひつこんだつて。直に歸るといふはあんまり野暮だ。さう甚助を起さないもんだサ。(須)エ。(繼)ナニサ。そんなに焼餅を起したまふなといふ事ヨ。(須)甚助といふは。そんなら怒ることか。ジンく〜ビヤが沸騰するやうに怒るといふ談話か。(繼)ハ、ハ、ハ。マアそんな事サ。實に君は校中の色男だよ。小町田と匹敵するぞウ。(須)馬鹿いうてはいかん。小町田といやア。如何したかなア。久しく下宿して居るなア。(繼)ナニサ。宅に居るんだとサ。(須)ナゼ。宅へ歸つたかなア。(繼)チャ〜君はまだ知らん歟。あの

一件を。(須)あの一件とは何ぢやネエ。(繼)ソラ。吉原の珍事ヨ。(須)吉原で何うしたのぢや。(繼)あの珍談を知らないたア。迂々潤々といふ次第サ。サラバ。それがしが物語らん。ヤ。デバンデンく〜。(須)ハハハハ。ソリヤ。息繼ぎの酒を獻すぞ。(繼)チツト、有々。○頃しも秋の八月中旬。戀に心はうばたまの。黒船の袂吹返す。——風ぞ涼しき夕涼み。植半樓ののののののの。の。ア、いけない。淨瑠璃風に話さうと思つたが。即席には文ができない。やつぱり真面目で話すとしよう。時にもう一盃くれたまへ。チツト、サンクス「幸甚」。エヘンく〜。○僕もネ。人傳手の又聞だから。委しく原因も結果もしらんが。其大略は。アズ、ホルロウス「左の如し」さ。ちやうご今月の上旬だつたらう。任那が洋行をするについて。守山の親父の發案とやらで。向島の植半に。送別會を開いたと思ひたまへ。○タイ。黙つて居ちや不可。ウン。思ふとかナントかいひたまへ。(須)エ。なぜ。(繼)ごうも君は話せないなア。思ひたまへと洒落りやア。ウン思はうといふなア。定規だアネ。マアい、サ。處が其晩は風雨でネ。ト第八回の大略をば。事實八分。附會二分にて物語れば。須河はほとく興に入りて。時刻の移るも忘れ果て。そぞろに膝を進ませつゝ。(須)へ、い。それは希代なことぢやなア。それかち茶屋へいんで。ごうしたかネ。(繼)扱これからが本文だテ。去程に小町田榮爾は。思ひがけなく我が思ふ。藝妓



田の次に出會して。——打驚くこと大方ならず。——(須)ハ、ハ、ハ。中々君は小説文のやうに喋口ることが巧ぢやなア。(繼)エート。さすが思慮ある少年なれども。——かゝる里には慣ざるから。エート。——如何はせんと氣をもみぢ。——あからむ兎で車を降り。イ。イ。ア。いかん。やつぱり眞地目ではなさう。(須)眞地目の方がわかりよつてえいワイ。それから小町田はごうしたかネ。(繼)それからネ。ごうも車の乗ッ放して。無言で逝るといふ譯にもいくまい。だもんだから。小町田がネ。おづ。一所に來た客に向つて。いろ。其粗忽を詫たさうだ。(須)向うの客といふのは。全體何もんぢやネ。(繼)たしか代言人だと歎いふ事だ。スルト向うの客野郎は。圖部七圖部八の連中だから。別に怒るべき理由はなくても。何か理窟種が生いてきたら。ト待つて居る處だからたまりやしない。酢だのこんにやくだのと管を巻いて。色々面倒になりかけたを。田の次と辨吉といふ藝妓が。うまく眞中へ割つてはひつて。一先段落になりかけた處へ。(須)フーン。其田の次たらいふ女が。小町田のラアブしちよる女ぢやネ。(繼)さうサ。處へ吉住といふ男が。○此男が小町田のライウバル「競争者」でネ。ホラ。樫森のブラザア「同胞」ヨ。(須)ウンあいつか。我輩も一度見たことがあつたやうぢや。(繼)後から人力車に乗かつてネ。韋駄天の如くに。其場へ馳着たと想像したまへ。(須)ヤアそいつは面白かつたなア。(繼)吉住は非常に

ドラケンになつては居たが。頗るクキツク「鋭敏」な男だから。忽地小町田に目をつけてネ。(須)小町田を藝妓のラブ「狎客」ぢやとしつちよつたのか。(繼)已に其以前に知られて居たさうだからたまらない。忽地ジエイラシイ「やきもち」を興し來つて。無理に小町田を引張つてネ。茶屋の二階まであがつたさうだ。(須)ヤレ。小町田は困つたらうなア。(繼)それからが大變だつたツ。はじめはお知音になりたいとか。ヤレ奇遇だとかナンだとかいつて。無暗に酒ばかり強つけて居たが。段々おしまひにやア激しくなつて。「チイ小町田さんとやら。實に君はお浦山吹。花も實もあると申したいが。花あつて實のない好男子だヨ。まだ親の脚をかじつて居ながら。已にキヤット「藝妓」なごを色にするとは。實に花やか極まつたはなしだ。然し花柳に名聲が高いだけに。校中の評判は不印ださうだネ。放蕩卒業のサルチフヒケイト「證書」と。マスター色男の爵位を以て。學者の尊號に交換するたア。感々服々土瓶の煮音。蒸氣の沙汰とはいはれないとか。ヤレ「承知るところに因れば。近來益御學力が。君には御進歩の御様子とやらで。但し後の方へ。ヤ。これは失敬。已に近々に御退校。イヤ御卒業になるさうで。誠にお樂みなお身の上だ。流石放蕩に熱心なだけに。君は萬端に如才がないヨ。だから田の次的が戀着するヨ。ドウデス。田の次的を廢業してしまつて。九尺二間へ引込んぢやア。僕が家賃だけ貸さうかなんぞと。そりやもう續々

にやツつけたさうだ。(須)非道く小町田はやられたなア。それでも小町田は黙ッちよったかなア。
 (繼)可愛さうに。斯うなツちやア仕方がないヨ。向うは三人と来て居る上に。ドラケンといふ
 便宜がある。此方はソウバア「まじめ」の一本だちだらう。(須)田の次たらいふ女は黙ッて見ちよ
 ヲたのかなア。(繼)そこがサ。如何いふ呼吸であつた歟。實地に臨まんから解らないが。想ふに。
 ぜ、キヤツト「該藝妓」も窮したらうヨ。何故かといふにネ。已に先刻もはなした通り。田の次よ
 りも古い兒の。辨吉といふ藝妓が居るから。其姉藝妓をさしおいて。あんまり口を出す譯にもい
 かんし。又一つにやア吉住潔に。すツかり内幕を知られて居るから。下手に取做を試みた日にや
 ア。いよゝ焼餅の火の手を増して。小町田の身に害になるとも。毫も應援にやアならないと
 か。なんとか漢とかリイゾン「道理」があつて。切なき思ひ忍指。亂れ苦しき心の中や。デ、ン
 デン〜。(須)ハ、ハ、ハ。また淨瑠璃語の真似か。君もよつほご山村に似て居るなア。(繼)だか
 ら君は天保。イヤ。ほかアんとして居ると人がいふヨ。山村の義太夫は習つた淨瑠璃。所謂本場の
 調子だアネ。僕のやらかすなア。無茶苦茶の自得流で。節なんざア臨機應變だ。僕と彼とを同視
 するのは。月とスツボン。ウツテンバツテン。龍動のニウスに東京の新聞。日本の書生に英國のスチ
 ユウデント「學生」。須河君に繼原君。ハ、ハ、ハ。これやア失敬。(須)君も實によく喋口るなア。

それはさうと。肝腎のストリイ「はなし」がどうかなつてしまつた。○我輩が想ふになア。ごうも
 解らんと想ふ事があるぞ。(繼)ナニが。(須)なぜというて。何たらいふ今一個の藝妓の事ぢやが。
 なぜそいつが中裁をせんぢやつたかノウ。(繼)イヤニ生意氣に先察をするネ。これから其キヤツ
 トの傳になるんだ。マア引こんで聽て居たまへ。そも〜藝妓辨吉と聞えたるは。こいつ頗るのお
 轉婆キヤツトで。随分もてあましの古大姐サ。しかるにこいつめ吉住潔に。多少をかほれの氣味
 圍子。一本めしあがれと饗應して。已に怪しむべき中だとかいふンサ。しかし吉住の本心ぢやア。
 例の田の次といふヤンガア、キヤツト「若手の藝妓」を。是非ともオウ、ライトといはせる積で。
 其尻にばかしついてまはつて。自然辨吉をウドンじたとか。ソバンじるとか。底にやアいろ〜
 な蓋があつて。○い、かい。蓋といふ字は蓋とよむだらう。底といつて蓋といふ。暗に理由とい
 ふ意味もありサ。ナントウまツこいバンリング「口あひ」だらう。(須)エ。なんぢやか。話がわか
 らんやうになつてしまつた。(繼)ア、〜。話せない〜。○處で辨吉の方に於ては。チ、ンチ
 ン〜ブイのおんたから。腹から尻尾が出たのぢやアないが。焼芋大の角をはやして。常に田的
 を敵と見做して。仇吉もぎきの悪言なんども。時々いひかけた事があるツサ。て。しきりにいつし
 やうのちふをふるつて。だじやれづくめで。はなしをすれども。已に平生がそんなだから。なんぞい、

穴でも見つけたなら。スツバ抜して田の次をこまらせ。恥をか、せてやらうと思つて。兼て待か
 まへて居たもんだから。此一條の時なんざア。天の賜とおしいたゞき。我時至れりと喜んでネ。
 しばらく様子を窺つてると。田の次はますます困却してネ。たしか辨吉に請願して。彼お客さん
 がとんでもない。つまらん濡衣を被せられなすつて。困つて居らつしやるが惘然だ。わたしが口
 をだすと面倒だから。大姐は、かりだが何とかいつて。ト依頼んだと歎たのまんと歎。その所
 は曖昧だが。兎に角兩藝妓の間に於ても。同時にクヲレル「口論」がはじまつたとサ。辨吉め。こ
 こそと思つたと見えて。赤い唇を引くりかへしやアがつて。「なんだとエ。チャ、惘れもかへ
 らないヨ。あの書生さんはおまへの情人だとエ。働のある藝妓衆は異つたもんだネエ。面のい、の
 を鼻にかけて。三味線なんざアそつちのけで。ベタツキ専門で客をとるのに。平生腕なれておい
 だけに。摘喰ひの種も御前だとか。ヤレ麴麴だとか何だとかいつて。連に嘲弄をはじめたので。
 吉住もモウ破れかぶれ。斯うなつて來ちやア敵役だ。田の次も恥をか、されちやア。意地にもい
 ふことを聴なからう。さうで手に入らないお庭の花なら。存分悪口のストウム「あらし」をおこ
 して。二人を思ふさまいちめてやらうと。辨吉猫と一所になつて。色氣なしの罵言讒謗。酔に乗じ
 て喋りつけると。外の野郎共も岡焼半分。面白半分。野治馬になつて助太刀をする。イヤハヤ。

一時は騒ぎだつたつて。○小町田も生來癡癡持だし。田の次も蟲のある人間だから。斯うなつ
 ちやア黙ツちやア居す。田の次はズツト起上つてネ。なるほご此方は妾の情人です。定めしお眼
 ざはりになりませうから。妾は今からお座敷をお貰ひまをして。情人を連れて歸りますヨ。ハイ左
 様なら御免なさいヨ。ゆつくりとかお静かとか。コウルド「あいそのない」棄せりふを跡に残して
 突然小町田を引張つてネ。二階の階段を降てしまつた。其劍幕の鋭いのと。其すばやいので一座
 のものは。彼方あつけに取られてしまつて。留も得いしないで。面見あはせ。暫時は言葉も。ヤ。
 なかアリ。○けエエリイイ。(須)ハ、ハ、ハ、うまくやりをつたなア。しかし小町田めは。えら
 い恥をかきをつたなア。それで此節は學校へ出てこんか。(繼)サアそこまでは。探訪が届かんが
 ネ。なんでも此事の關係では。校長へも呼ばれた様子だ。人の風説する所に因れば。已に退校に
 もなる所だつたを。誰とかが取做に周旋したので。ヤツト命脈を維いだとかいふヨ。實に小町田
 は校中の好男子にやア相違ないが。あ、柔弱になつても困るヨ。さうも女に好れると不可。餘程
 志のあるものでも。概して氣力が挫けるもんだヨ。(須)さうぢや。實にさうぢや。我輩なんぞ
 が考へるにはなア。苟にも事業をせんとすればなア。まづ婦女子輩を遠ざけるが第一必要かと思
 はれるぞ。而して婦人を遠ざけるには最も如何したらえいかといふに。成べく腕力を研いてなア。

威嚴を保つちよるが上策ぢやワイ。威嚴さへ保つちよれば。女子もおのづから近づかんワイ。人間は元がバツシヨネイト、アニモル「有情動物」ぢやから。向うからラブ「惚る」してくれば。まさか排しがたい事もあるぢや。ト先刻桐山から聞いた事をば。全然鸚鵡石で喋りたてる。もと此須河といへる書生は。彼の桐山とは同級にて。書物も數あまた讀んだ身なれど。所謂思想のない男なるゆゑ。讀んだ事だけはさうやら斯やら。月夜の螢ほごに記えて居れども。サア自説はと問ひかけると。一句も考案の出ざる質なり。たまく新説を吐く敷と思へば。昨日讀んだニウス「新聞」に基き。折々議論めかす事ありと思へば。是又受賣の論説にて。自分の持説にてはあらざるゆゑ。一本グット突込まる、と。跡は一言も梨の實の皮。はなはだ薄ッペラなつけやきばなり。須河の如きは極端にて。世間に其人は稀なるべけれど。之に類似せる人は多かり。看客氣をつけて見たまへかし。繼原は嘲笑ひて、(繼)さういふ卑屈な考へだから不可んだ。女子に好るべき性質あつて。尙且亂れない人間なら。はじめて有爲な人物だらうが。力めて嫌はる、やうにして居て。ヤット情慾を忍ぶやうぢやア。到底大業はなしたがたしだ。東洋でもむかしツから。文武兼備を良將だといふし。西洋でもシバリイ「武官制度」成立以來は。武あつて文備なきを野なりといつて。大に卑しんでる譯ぢやアないか。ゼントルメン「紳士」といふこたア取も直さず。文武兼備

の人といふことさ。女に好れると劍呑だから。威嚴を保つために武骨にするたア。あんまり自惚の極まつた話だ。よしんば武骨にしくつたつて。大丈夫女は惚りやア。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、これやア失敬。○そんなウキイクな「よわい」性根だから。ツイ龍○なぞを愛したくなるんだ。龍○の害を説明したいが。あんまり猥褻に涉るとわるい(で)。マアおあづかりとしておかうヨ。腕力を研くは極めていゝが。如此目的なら止した方がいゝ。假令武骨にして居たからつて。女が惚ないともいはれないから。惚れたら忽ちグニヤ乎となつて。有爲の志を失ふだらう。底に到ッちやア我輩なんざア。婦人に平生交際をして。美婦をお茶漬にして居るから。よしんばウビイナス「辨天」さまを見たからつても。メレイ、スチュアルト「蘇國」の美しい女王に惚られたからつても。河童のフハアトとも思やアしないヨ。ナントさうだ。經驗の功こゝにありッ。ヲホン。○ヤア豊うちやん。さうしたんだ。尙一度位出て來たつていゝぢやアないか。さア〜お酌を願はう〜。○ソラ須河。さうだ。まづこゝに適例があるぢやアないか。君は武骨主義で居たからつて。此お豊といふ一個の美人が。已に正に北山時雨。ぬれてほしやの。ネエお豊さんさうだらう。(豊)いやですヨ。しりませんヨ。(繼)ト言のはスツト表門。人に心を奥の間の。ヤ。デン〜。(豊)ハ、ハ、ハ、ハ、それでも貴君。さうで僕なんかリイベン「戀着」したつて無効ですものを。(繼)チャ〜。生意氣

な言語をしつて居やアがる。何處の醫學校の情人に教えて貰つた。白状しないとかすぐるが。
(豊)アラいけません。ハ、ハ、ハ、ハ。トイひながら。お豊は下へと逃てゆく。須河は繼原にやりこめられて。酒も次第に醒たと見えて。(須)ヤ。大變ぢやく。繼原君。かへらう。我輩のウツチは。已に十時半。チャク。今夜も止つてをるワ。(繼)當りまいさ。質にれる時分巻いたま。だ。○須河は手を鳴らしてお豊を呼び。時間をきけば十一時なりといふ。須河はたちまち面色をかへて。ソリヤ大變ぢやく。トあわて騒ぎ。急ぎ牛肉店の拂をなし。無暗に繼原をせりたつ。やがて牛店をたちいでけり。

○話前に戻る。さても又桐山勉六は。須河が外出なしたる後。いそぎ寢道具を取いだして。床をのべ。蚊帳を釣りて。已に就眠らんとする折しも。部屋の障子を外より開きて。入来る一個の少年あり。但見年の比へ十五歟十六。色白く鼻筋通り。眼はバツチリとして唇紅なり。唐様にいへば。風流瀟洒。彌子瑕の幼兒へ。董賢を細末にして加へたといふ容色。ズツトやはらかに之をいへば。秋の夜長の梅若丸。または業平のわらは姿。尙一ツ景物にほめていへば。バツキンハムの侯となりける。英のジョウジ、ウビリヤアスのボイフウド「童兒の時」も。斯くやありけめと見らるゝとは。些とほめ杉の彈正大彌タルトル「海龜」入道とおツ月さま。あまり比べかたが大

十四歟。十五。

への事

註。第二號 第二回。

業なれども。兎に角愛くるしき兒だちにて。氣性も頗活の方へなるゆゑ。女人禁制の高野主義で。専ら腕力を擴張する。色中の餓鬼其人には。多く慕はるゝ性質なり。其衣服は如何にといふに棒縞の單物に。金巾の尻子帯。所謂猫じやらしに結び下けて。ツカクと部屋に入來り。(少年)チャク。モウ寐たのか。暗いネエ。タイ桐山。居ないのか。(桐)だれぢやく。(少年)僕だヨ。タイ少し依頼にきた。(桐)チ、宮賀殿。何ぢやく。(宮)タイ此プロブレム「問題」を一題教えてくれんか。(桐)また數學歟。阿兄に教えて貰へ。おれは眠うてならんから。(宮)阿兄は急がしめてツて教えんから。來たんだイ。教えて呉れヨ。○いやかア。い、ヤイ。をせえて貰はんでも。外へいつて聽てくらイ。トいひすてて荒々しく障子を開きてゆかんとする。此少年は第二號に出たる宮賀匠の弟にて。其名を透といふ學生なり。桐山は聲を掛て。(桐)ヤイ宮賀待ちよれ。今起て教えてやるワイ。そないに怒らんでもえいもんぢやく。(宮)それぢやくア早く起玉へヨ。まだ外にコムボジション「作文」をか、んけりやならん。タイ早くヨ。(桐)さう急迫ない。桐山はかやよサアぢれぢやく。宮賀は本をひらきて。(宮)これだ。如何しても僕にやア出來ん。矢張此フホウミユラ「定式」をアップライ「應用」してい、のか。(桐)馬鹿いふな。そないな事して出來るかイ。ソレ。此法式ぢやく。これでやりやア直に出來るワ。こないないイ。ジ「たやすい」プロブレム「問題」が。おぬし

にやア獨りで出来んか。(宮)ナニ。未だ毫末も考へて見なかつたのサ。トいひつゝ、莞爾と笑ふ。桐山は其兎をながめて。ニコニコと笑ひながら。(桐)そなにいに懶惰では不可ぞ。(宮)ナニ懶惰けやアしない。(桐)なまけんもんが。なんぜ。トライ「やつて見る」せんか。(宮)ダツテ君。今日は忙しいと僕がいつても。君が聴かないで畫の中は。まるで外へでて居たぢやアないか。君が往け〜と言はなけりやア。僕ア王子なんぞへ往く氣はなかつた。畫の中をウエイスト「むだにくらす」したちんだから。とう〜下讀の間暇がなくなつちまつて。兎ても自分ちやアやらりやアしないワ。(桐)さうか。それではおれは責任がある譯ぢやなア。マアえいワイ。外には難解點はありやせんか。(宮)ウンもう澤山だ。サンクス〜「ありがたう〜」。(桐)ナイ〜マア待ヨ。遊んでいけヨ。(宮)まだ作文があるから遊んで居る譯にはいかん。(桐)えいワイ。作文はこゝでかけヨ。(宮)こゝでかくと君が話をするから。邪魔になつて書かりやアしない。(桐)ナニ。話をするもんかい。おれが甘い文を案じてやるから。(宮)話をせん位なら。こゝでも彼方でも同じこつた。また來よう。失敬ツ。トいひ棄つゝ。バタ〜彼方へ走りゆく。桐山はあとに口あんごり。(桐)中々彼奴はアクチイブ「活潑」な奴ぢや。ト獨り口の中でつぶやきながら。マッチをとりいだして。紙巻煙艸をすひつけつゝ。何やら暫し思案兎。折から響く上野の鐘ボーン〇〇ボーン。

註。〇〇
間のあ
る記號

〇はや深渡る秋の夜に。月はあれども雨催ひ。浮雲多き空景色。暗きは結句たよりぞと。時得兎なる二個の少年。私塾を圍ふ板屏をば。そつと乗越え校内の。庭へひらりと飛下りつゝ。塾舎をさしてゆかんとする。此方に窺ふ一個の少年。たちまち木陰を走りいでて。泥賊まで。ト呼とむれば。彼方の二個は吃驚仰天。中にも一個は身を翻して。すばやく傍の木の蒼蒼へ。入るよと見る間に逃足早く。いづこともなくのがれさりぬ。残る一個は狼狽して逃んとするを逃しもやらず。走りかゝりし此方の少年。ウヌごろばうめと一心不亂。拳骨を堅めてハタとうつ。彼方はキヤツとさげびながら。尙も逃んと身をもがくを。ドツコイさうはともみあひしが。此方の力や強かりけん。難なく件の少年をば。傍へドウと投げつけつゝ。〇ヤイ泥賊ごうしてくれう。ヤイ名前をなのらんか。此畜生。おれを誰たと思やアがる。桐山勉六といふ豪傑だぞ。うぬらのやうな卑屈卑劣。無氣力な人間たア人間が違つてゐるワイ。へたつもりにてげんこでホカ〜なぐる。ヤイ白状せんか。うぬ〜〜ボカ〜。〇ア痛い桐山ア。痛い僕ちやア。痛い我輩ちや。アイタタ、。須河ぢや許してくれイ。ア、イタイ〜。須河はしきりになきたつれど桐山はかちほこつてむ(桐)なんぢや。うぬ偽を吐くな。おれの學校のもんが屏を乗越えるわけはないワイ。うぬ姓名をなのらんと。うぬ。うぬ。なぐり殺すぞウ。(須)アイタ、僕ちやといふに。(桐)僕も糞もあるか。うぬ

うぬ。ボカくくく。(須)桐山ゆるせ引。(桐)うぬ。おれの名を知ッちよるな。いよく怪しいぞ。ボカくくく。桐山はひたすら須河を山村と思ひこみて何をいつ。(須)ア。イタ、。(桐)ボカくく。ボカくく。(須)アイタ、。(僕)ちやア引。(桐)うぬく。ボカくく。(須)アイタ、。(桐)うぬ。ボカ。(須)アイタ、。(桐)ボカ。(須)我。(桐)ボカ。(須)アイタ、。(桐)ボカくく。

第十一回

つきせぬ縁日のそゞろあるきに

小町田はからずも舊知己にあふ

「若き時は血氣内にあまり。心物に動きて情欲おほし。身をあやぶめて碎けやすき事。珠をはしらしむるに似たり。殊に愛着の道は。其根深く源遠かり。六塵の樂欲おほしと雖も。みな厭離しつべし。其中にたゞ。彼の惑のひとつ止めがたきのみぞ。老たるも若きも。智あるも愚なるも。異なる所なしと見ゆる。」されば榮爾が愚ならぬも。一度此道に迷ひてより。田の次が實意の捨てたさに。人目の關を忍びくくに互に「深くも」語りひしが。人の言の葉さななき世は。殊に惡事のもれ

註。若き時。徒然草の句。

やすくて。いつしか浮名たちまちに。父浩爾さへ事の由を。人の風説に傳へ聞て。以ての外なる大腹立。榮爾を我家へ招き寄せ【て】。きびしく異見を加へしかば。榮爾は且恥ぢ且悔みて。いよく心を改めつ。土用休課の其中さへ。たゞ謹慎を專一とし。駒込の宿に引籠りて。書を繙くのみ餘念もなく。父の心を安むるをば。其本願とはなし居たり。しかるに守山の請待に。さきの日植半に昇りし折。はからぬ事の間違より。他人の仇車に乗違へて。中廊の引手茶屋にひきこまれつ。思はず田の次に邂逅して。まづ其胸を冷したりしに。かてて加へて吉住等に。あくまで嘲弄されたりしを。さすがは世なれぬ少年とて。堪へかねつ。其席にて。已に争ひともならんとせしを。田の次が機頓のはからひにて。早くも榮爾を伴ひつ。其場をうまくも外せしかば。事穩にすみたりけり。其夜はあまりに夜ふけしかば。竟に田の次に誘はれて。【ある待合に】夜を明し【て】。翌朝朝まだきにたち別れて。我家へ歸りたれ。おもなれば。父へは事の由を告も聞えず。たゞ思はざる雨風にて。歸路は殊の外夜深けしゆゑ。すゝめらるゝまゝ。任那と共に。守山の家に泊りしとのみ。何氣なき體に告聞えぬ。さはあれ此事は逸早くも。友芳の耳へは入りたりけん。或日小町田の家に訪來つて。ひそかに小町田に意見を語りて。其將來を警誡たり。斯て一句ばかり經たりし程に。已に開校の期も來りぬ。榮爾は駒込の家をいでて。やがて學校に赴きしに。校長よりの呼出

しあり。何事ならんと行て見れば。校長榮爾に告ていふやう。足下は學才も乏しからず。且品行もあしからねば。是まで頼母しく思ひ居りしが。近頃何故にや學校内にて。頗るよろしからぬ評判あるゆゑ。段々事の源を探り見しに。いかさま種のある事とぞ思はる。左様な不品行な所行ありては。外の學生へのしめしにならねば。退校勿論の筈なれども。又退いて視察すれば。足下の性質の沈着なる。唯一旦の卑情に溺れて。素志を挫くべき人とも覺えず。今より退校を命ぜんこと。いとをしむべき次第なれば。情實幾分を酌量して罰一等を輕減なし。休學命すべし思へるなり。此旨承知なされよとの。いと平らかなる申渡しに。榮爾もかへすべき言葉もなく。覺えず其兎を根うなして。其日に學校より歸りたりしが。藏しおほすべき事ならねば。父にも其子細を語り聞えて。身の誤を詫たりしに。浩爾は思の外痛くは叱らず。たゞうつけ者といひたるのみにて。他に一言もいはざりけり。寸鐵人を殺すとはこれらの謂にや。なか／＼に口やかましく罵わめくよりは。人を感じしむる力は強かり。榮爾は其年は少けれども。生來センシブルな「感じ易き」性質にて。一度恥辱を蒙るときには。年を経ても忘るゝ能はず。恥を雪がんずる心あるゆゑ。一ツは父の氣を安むるため。一ツは我汚名を潔くせんとして。是よりますく身を謹み。奥のおが部屋に閉籠りて。年頃手馴れし政書を繙き。苦學に餘念へなきものから。往る日朝とく別れしま

ま。事の様子を露程だに。田の次の許へは知せぬゆゑ。さぞ此頃では苦勞にして。案じもすべく怨みもせん。郵便なりとも送りやりて。事の始終を告しらせて。思ひきるやう諭すべきか。否なまなかに便をせば。互の未練がます譯ゆる。かしこい様でも女の淺はか。我がこゝに在る由をしば。事にかこつけ訪ねて來ん。それでは却つて面倒なり。遠ざかるものは日々に疎し。古人の金言まことならば。打棄おくが上策ならん。素人ならばいさしらね。牽手あまたの浮氣稼業。ほかに心移しもせば。我身の爲の幸福なるべし。とはいへ日頃の眞實をば。思ひもやらで心強く。理由もしらせず遠ざかるは。あまりに不實な仕方なれ。大功細謹を省みず。小義に泥むは愚の極なり。あゝさりながら田の次こそ。我身に取ての善知識。あの守山が説ではなれ。人若き時は架空の癖あり。たゞ一向に奇を求めて。身を忘るゝに至れる事。まことにおろかなる振舞なり。架空の癖はもとよりして。色戀にのみ限らねども。最も恐ろしきは架空の戀なり。兼好法師が徒然草にて。「身を惜しとも思ひたらず。たふべくもあらぬわざにもよくたへ忍ぶは。たゞ彼の色を思ふゆるぞ。と穿ち兎にて宣たりしは。是通常の戀の上なり。常の戀だに尙且然り。況んやアイデアル「架空的」の戀情をや。佳人才子の奇遇を羨み。そを身の上になぞらへたる。我身の行のおごましさを。さもあらばあれ架空の病は。行はずしては悟るに由なし。行つて後に非を悟るは。

已に後れたるに似たりと雖も。智慧淺はかなる凡夫の身にては。之を如何ともすべきやうなし。経験は智識の母。蹉躓は覺悟の門。あゝ田の次。我身もろとも汝の身は。わがおろかなるアイデアヤリズム「架空癖」の unfortunate victim 「不便な犠牲」でありけるぞや。今は不實といはるゝとも。結局そなたの幸なり。また我爲の幸福なり。 Pardon me. 「ゆるしてたまへ。」と小町田が。自問自答の獨語。洋語まじりにつぶやきたる。其語氣ながら西の國の。稗史を學ぶごとくなるは。尙架空癖のすつかりとは。脱ぬしるしと思はれて。聞く人ありなば笑止と思はん。

○かくて四週間を経たりし頃。にはかに學校より書狀來りぬ。披き見るに入舎さしゆるすとの文言なり。思ひしよりは早かりしを。心に深く喜びつゝ。父浩爾にも理由を語りて。再び學校へ入塾なし。以前にましたる勉勵出精。もとより才學凡ならねば。程なく級中の上位をしめ。人にも漸く推尊され。講師校長にも愛せられて。あしき風評も日を経るまゝ。いつしか薄らぐに至りしかぎ。いかなる故にや小町田繁爾は。其頃よりして顔色おとろへ。兎角鬱閉勝の様子あるを。倉瀬其外の信友ばら。こは腦病の再發ならずは。肺を病みせめしにあらざるかと。いろ／＼さまざまに心配して。頻に療養をすゝむれども。小町田は敢て之をきかず。別に替りたる事なしとて。其儘にして打過ぎけり。此頃小町田が莫逆なる。守山友芳は校を辭して。代言事務に従事せしが。

一月あまり以前なりけん。父友定に伴はれて。静岡地方へ赴きたり。さらば代言の事務をかねて。おのが近き頃入黨せし。ある政黨の用向をも。整理せんが爲の旅とか聞えし。

○時は十月の初つた。處は下谷上野町。佛は摩利支尊天。日柄の縁日といひならぶれば。清少納言の口眞似めけきも。けに東京の市街に限りて。あきるゝまでに數多きは。彼の縁日とかいふものなりかし。今晚は稻荷明日は天神。又その次は琴平なごと。無間斷に縁日のみ引續きて。ほと／＼三百六十餘日。縁日ならざる日は稀なり。埃及國の多神教も思ひ合されていとかしこし。想ふに我國の神佛は西のゴッド「上帝」には立まさりて。ズット開化主義でましますゆゑ。かくは幾柱にも分身して。おの／＼分勞して人間をば。護らせたまふにあらんすらん。斯る有難き神々たちが。日夜毎に目をくばりて我皇國を護らせたまへば。かきはにときはに家内安全。國土太平。人智開暢。學藝進歩。農業振起。商賣繁昌。武備擴張。政治改進。秩序整然。日新月化疑ひなし。南無亞アメン。陀波羅美陀波羅美も白す。

【あだしごとはさておきつ。】はや暮はてし暗の夜も。街をてらす露店の。星をあざむく燈火に。あたりまばゆき夜の市。一山二錢の翫物店には。さとり兎の達磨。今戸焼のおいらんと膝相摩し。二本八厘の簪釵店には。馬爪なまいきに鼈甲を氣取りて。象牙の芳町形。本名鹿の角と肩をなら



細君
 へんヨイトお清
 きまはトやれいおエ下女



おのう書斎は閉ざして思案よんき
 いやくいつそ一画を志らしてやらうら。○あはら
 其書下見賞。あ金の裁とこらん大層
 先えとるわあうや。あの新標うのりトア

讀書

ぶ。カンテラの油煙に熏ぶりは。菊も隱逸の名空しく。打水の露にうるぼうては。石榴も紅玉を包めるに似たらん。七艸も已に時過ぎたれば。華ある艸もいと稀にて。同じさまにて趣なき。秋蘭蘇鐵なき鉢植にして。こゝにもかしこにもするならべたる。中には根のなきものありぞと聞にき。さるは縁日の艸花には。常に定まれる値のなきをば。暗に悟らしむる悪戯にやあらん。かく計りはかなき物のみ。うち集ひたる所に。かく計り人あまた集ひ來りて。男女老幼袖ふりあひ。拐賊の餌食となるはいかに。街の狹隘なる。空氣の不潔なる。遊歩に便宜なる場所とも見えねば。衛生の爲にとて。人々群集ふわけにてはあらじ。けだし摩利支天のいやちこなる。御靈徳を慕ひまつりて。斯くは蟻集ぞと推測れば。我ながら畏う覺えて。掌おのづから合さるゝに。但見れば賽銭は壹厘錢のみ。それだに奉加するはいと稀なり。あな不思議なる事もあるものかな。然れば蟻集る老若男女も。みな信心家にあらざるにや。かゝる不健康なる空氣を侵して。おのが夜業をも打忘れて。この横町に逍遙するとは。智識に長じたる東京人には。ふさはしからざる振舞にこそ。此原因は那邊にあるか。歸納法にて推理せん歟。將た演繹の法に因らんか。咄々奇怪と。うちうめくは。作者に似たる屁理窟論者。年比二十二三と見えたる。色の生白き書生風。庭前の梧桐搖落して。涼風だしぬけにたちたるゆる。まだ移換ができぬと見え。隨分被ならした薩摩の

飛白へ。綿南部の羽織を引かけ。爪先ばかりイヤに磨た。古い疊附を穿けたるは。問はでもしるき北國そだち。氷にすべらぬ用心から。習慣第二の性をなして。足の爪先に力があるなり。件の書生と相並びて。何やら語らひつゝ、行く書生は。是又年比二十一。肺病が胃病の情人と見えて。顔色は人並より青ざめたれど。瘦肉にして男振よければ。浮氣な娘なごはすれちがひて。度々ふりかへりて見るもあるべし。下被は白地の單衣。上へ被たる南部の袷は。古色蒼然として襟垢つきたり。袴は縫直したばかりと思はれ。ひだシヤンとして折目正しく。夜目遠目もて之を望めば。立派な嘉平治と思はれたり。第二の書生を誰とかなす。是なん小町田繁爾なるが。胸に心配のある故にや。たゞさへ鬱氣性の人間が。此日は殊更に不樂氣にて。ろくろくに口もきかず。ぶらり〜と逍遙して。やをら廣小路へ出たるとき。連の少年にうち向ひて。(小)ヂヤア倉瀬なんだネ。いよ〜山村と繼原は。退校になつたんだネ。(倉)エ。唐突にヂヤア「E」といふから。Jar is an earthen vessel.「ヂヤアは瓶なり。」といはうと思つた。さうヨ。退校になつちまつた。しかし山村は。到底ホウブ「のぞみ」の無い男だから。ヂス「ヂスミツスの略にて退校といふ事」は結局正當の話だが。氣の毒なのは繼原だヨ。彼奴はネ。放蕩懶惰にやア相違ないが。幾分か取ごころのある人間で。山村なんぞたア同視しがたしサ。君も知てる通り。スピーチ「演説」なんざア甘し。

さうして中々あれで慷慨家だヨ。只惚むらくは。ストロング、ウイル「不拔の決心」が無いばかりサ。(小)詢に然りだ。さうして繼原はさうする積だらう。(倉)工部へ入學とか言つてゐた。彼には工部は不適だ。(小)山村はさうした。(倉)山村はたしか銀座の。ア、何とか言つたヨ。さうさう東都新報とかいふニウスのエヂトル「記者」に備はれるとかいふはなしだ。(小)へ、い、新聞屋ができるだらう。ハ、ハ、ハ。(倉)君は桐山の風評を聞たか。(小)イ、ヤ。(倉)あいつは奮進黨へ入黨したといふ事だ。(小)此節ア。政黨へ加入する事が流行だネ。守山なんぞもたしか。魁進黨へ這入つたといふ事だ。それはさうと繼原は今何處にゐるか。(倉)山村と一所に本郷に下宿して居るんサ。なんでも龍岡町邊の下山とかいふ新しい下宿屋だ。(小)けふは君は學校へ歸るだらう。(倉)ア、。(小)それぢやア眼鏡の方へ行かうぢやアないか。(倉)さうハ、。(小)話でうかれて上野の山へ這入さうになつた。時に小町田。君は大層兎色が悪いぢやないか。如何したのだ。(小)ナニ。例の如しサ。(倉)ノウ「否」。例でないヨ。僕は君に忠告する事がある。(小)エ。(倉)斯言ふと何だか臭い物身知らずで。生意氣なやうな言分だが。君は一體ネルウバス「神經質」だから。(小)チイ、倉瀬。モウ御免だ。神經質の講釋も久しいもんだ。守山にも聞かし。誰かにも聞かし。(倉)マアサ。聞たまへといふに。君はネルウバス「神經質」だもんだから。何かすると無益こ

とに心配して。自分で身體を不健するヨ。よしんば頑固連や石部黨が。何といはうがノウ、マツタア「かまふもんか。」時々やア酒も飲むサ。プレイ「放蕩」するもい、ぢやアないか。人の憤鼻禪で角牴をとりやアしまひし。浩然の氣を養ふのに。何の憚があるもんか。尤も僕の一身の如きは。あんまり立派にも威張ないが。近來斷然非を覺つて。自立特行を決心したから。それで斯な事もいふんだけれど。(小)それやア君のいふ通サ。實に君の行爲の變つたのは。僕も感服に堪へない所だ。君が屢プレイ「放蕩」する時分に。僕が意見した事があつたが。今ぢやア汗顔と思ふ位だ。(倉)棺を蓋うて知るといふから。容易に贊辭を下すべからずツ。しかしフレンド「朋友」となつた以上は。互に思ふ事を明しやつて。長短相助けて奨誠するが。眞の情誼だらうと。僕は思ふが。(小)それやアいふまでもない事サ。(倉)それぢやアいふがネ。○酒を飲みにゆかう。(小)エ。妙な發案を提出したネ。ナゼ。(倉)何故でもないが。積鬱を散する爲に。(小)何處へ。(倉)何處か此邊で。(小)をかしいぢやないか。何故俄にそんな事をいふか。(倉)大丈夫區々として物を思はんやだ。例のシンガア「藝妓」を聘ばう。(小)ハ、ハ、ハ。それぢやア了解つた。ヂヤアなんだネ。君は僕を以て花風病的の人物だと思つたんだネ。(倉)ナニサ。さういふ譯でもないが。僕ア君のラアブ「意中人」のレッタア「てがみ」を見たヨ。(小)エ。(倉)サア。きのふ來たレッタアをネ。偶然

僕が拾つたから。開いて讀んで見た所が。實に僕ア感服した。あの氣性なら君の迷ふのも無理はないヨ。僕アこれまで多少人情を解して居るから。君の心中を察するヨ。ウーマン「婦人」は所謂 soothing agent 「心を和らぐるもの」だ。誤つて之を濫用すりやア。或は人をして懦弱ならしめ。其大望をも挫かしむるが。我ウキル「執意」さへ定まつて居りやア。決して恐るべきものぢやアない。否六尺の男兒をして能く其偉業をなさしむるは。屢佳人の力にあるヨ。笠頓が編た莉延自外傳を讀んで見たまへ。莉延自程の英傑でさへも。レデイ、ナイナ「那イナ姫」のあるが爲に。其回天の素志を貫く。勇氣を維持し得たといふぢやアないか。ウエスタル、カントリー「泰西」で中古にシバリー「武官制」の盛えたのも。また近代の社會に於て。レデイ「貴女達」が財囊を與へるなんぞは。皆是佳人を善用して。士氣を振はしむる方便だアネ。是に因て之を觀れば。佳人を愛するは人情の常だ。我ウキルさへ確定してりやア。毫も憚るべき譯はないんサ。例の君シンガアなんざア。氣性も中々快活だし。あのレッタア「てがみ」の文言で見りやア。君に對して眞實なるのは。毫も疑ふべき所なしだ。假令藝妓をして居たからつて。其スピリット「氣性」さへ高尚なら。君のコンキユウ「コンキユウバインの略にて妾といふ事」位にやアしたつてもい。大丈夫時に太白を引て。鬱悶をやらないぢやア。長く大志を養ひ難しだ。鳥八十か何處かで。一杯飲まう。

註。莉延自
外傳、作者
の譯あり

エム「かね」は僕のとこにあるから。マア兎も角も來たまへ來たまへ。「倉瀬は少々酒機嫌と見え。頻に獨斷の議論をならべて。無暗に小町田を誘ひひか、れど。小町田は打笑ひて。たゞよき程にあしらふのみ。ノウ「否」イエス「應」ともに分明ならねば。倉瀬は少々じれこみて。(倉)「チイ小町田。さうも君は優柔不斷だからいけない。一旦ラアア「愛」した位なら。飽くまでラアアするかいぢやアないか。頑固黨が二三度攻撃をしたからつて。それで恐れ入つてしまふ位なら。斷然絶念してしまふがい。腹ではクヨクヨ思つて居ながら。只外面ばかり聖人ぶるのは。君にも似合ないウキイクネツス「未練」だ。馬鹿氣切つた話ぢやアないか。小町田はすこ。(小)「チヤ妙な事をいふネ。僕が腹の中で思つて居るたア。それやア何を思つて居るんだ。(倉)「へん知つてるヨ。田の次の事をサ。(小)「ハ、君も馬鹿な事をいふ。僕だつて男だ。斷念した上は未練は無い。成程レツタア「てがみ」は此間もよこしたが。返辭をやつた事は曾てなしサ。尤も彼方は女だもの。それに色々の事情もあるから。今尙あゝいつてよこすもの。Frailty, thy name is woman. 「脆きは女子の心かな。」さ。頼になるものぢやアないヨ。僕が快々として居るのを。君はイヤニ邪推を下してシイ「あれ」を思つてると思ふかしらんが。僕が心中は大に異なりだ。僕不肖なりと雖も。年來私に志を立てて To be something 「有爲の人たらん」と盟つたからには。豈一人の女子の爲に終身

の業を誤らんやだ。只憾らくは僕があんまりアイデアルとは。世の中に行はれさうになきことを現に行つてみたと思ふ癖をいふ。佛のウビクトル、ユウゴウ翁なごも政事上の事に關しては頗るアイデアル主義なりと云々。だもんだから。時々妙な妄想を興して。西洋思想を日本の社會へ。fallacious「馬鹿氣た工合」に應用するから。それで失策をとる事があるんサ。しかし此弊は僕ばかりぢやアない。日本全體がさうだ。君なんぞも矢張さうだ。今君が莉延自の例を引たが。なんであれが處世のエキザムブル「模範」になるもんかネ。回天の壮志を抱きながら。美人のお蔭で勇氣を維いで。ヤツト其功を奏すたア。ウキイク極まつたはなしぢやアないか。あれやア笠頓が才筆で以て。人情の隱微を穿つたまでで。元來ほめられた事ぢやアないのサ。將來に害がなけりやア構はないが。兎角婦女子なごに親んで居ると。思はぬ入組が興る者で。義理人情を捨ざる以上は。爲に種々な困難が生るヨ。たとへば時と場合によりては。相應にベキユニヤリ「金錢上」の心配もしなくてはならず。フヒジカル、アツシスタンス「形體上の助力」もしなくてはならず。其是心配をする中には。人に嫉まれる事もあらうし。人に怨まれる事もあらうし。苟にも人情を有する限りは。所謂意氣地と張で以て。喧嘩の種をまく事もあらうサ。是等は決して色に溺れて。それで醸した害ぢやアないが。其遠因をさぐつて見りやア。終極は女子に歸せざる

を得ずサ。百般の出來事其底をたゞけば。毎に婦女子をいだすべしとは。誰やらがいつた確言だ。實に女子は恐るべしだヨ。それも身を立てて後であれば。いくらか進退に都合がよけれど。未だ天下に我家なき。漂泊書生の身の上では。第一時を浪費すると。注意を餘所に散るといふ。此二ツの害があるから。非常非凡の人でなくては。重にdangerous「危険」といはざるを得ずだ。政黨なんぞに加はるさへ書生の爲には有害無益だ。蓋し其思想を二三にして。空しく漁名家となつてしまつて。輿論の方針を左右すべき。學者の本分を誤るからサ。政事に參るさへさうだもの。況んや色に泥むに於ては。(倉)プー。ヒヤ／＼といひたいが。失敬ながら申チマセン。君は立派らしい議論を吐くが。言行相違としかいはいれないヨ。其位斷念したなら。ナゼ。其様に鬱閉で居るんだ。悟れないから。未練があるから。それでふさいで居るんだらう。僕ア何も君の非を許くmalis「惡意」もなし。また遊蕩を勧めるでもないが。あんまり君がふさいで居るから。又脳病にでもなりはせんかと。それやこれやが心配だから。〇トいつたら餘計なお世話だ。自分の頭の蠅を追へト。世間の奴輩はいふか知らんが。僕ア眞實から忠告するんサ。ほんたうに君はネルウバス「苦勞性」過るヨ。チツト磊落にやらかしたまへ。(小)君の眞實は深く謝するヨ。成程苦勞性にやア違ひ無いから。此defect「缺點」を除かうと思ふが。さうも性質はしかたがない。今

も明にいつた通り。僕ア未練なぞは少しもないが。たゞ人情に束縛せられて。實は心の中で struggle〔戦闘〕して。(倉)だらうと僕ア洞察したのサ。何もそんなに苦むに及ばないや。月に二度づ、逢へばいい。(小)馬鹿アいひたまへ。僕は逢ひたいと思やアしないが。(倉)それちやア如何したんだ。(小)實はネ。君も聞いたであらうが。例の Good〔中廊〕一件では。she〔あれ〕に多少迷惑をかけたし。それから愛顧客も減つたといふから。是が普通の人情からいやア。打棄るのは義理ぢやアないのさ。それに she〔あれ〕も色々な因縁からして。眞實僕をくだまけてしばら瀬はおのるけちやうだいおそれいつたお。思つて居るから。兎に角今までと同じやうに。聘んでやる位は當といひたいのをちつとこらへてゐる。思つて居るから。兎に角今までと同じやうに。聘んでやる位は當然だが。こゝをさすどくして。かう思ふのはウキイクネツス「氣の弱い」さ。馬鹿極ると自ら笑つて。已に斷念をしたけれごも。いくらか良心が安んぜんから。持病の苦い顔が見えるんだらうさ。ごうも人間はウキイク「氣の弱い」なもんさ。アハ、ハ、ハ。「倉瀬は又も何事か。いはむとしたる其折しも。松坂屋の前よりして。こなたをさしていできたれる。二人連なる婦人あり。一個は年比三十三。當世風の權妻仕立。をしや眉毛はそのおとして。衣裳も野暮に被なしたれご。ナギヤアの時から今日まで。まるきり素人で通したとは。ちと請取られぬ取做恰好。殊に左の手が何とやらん手持無沙汰に思はる、は。小褌とりたる昔の癖の。尙残りたる故にやあるらん。下女と見

えたる一人の小女に。萬年青の小鉢を持せながら。こなたをさして歩み來しが。圖らず榮爾と顔見合せ。女はたちまち聲をかけて。(女)チャマア貴方は。小町田の榮さんぢやアありませんか。「榮爾もびつくりつくく」見て。(小)チャ寔に暫く。其後は大層打絶えまして。(女)こなたよりでございますヨ。御親父は。(小)相替らず達者でをります。○今は何處にお住居ですか。(女)ちき近所でございますヨ。よい處でお目にかゝりました。是非あなたにお話がございますから。御不都合がなければ。一寸宅まで。「折から人力が六七臺。お成街道の方よりして。まけじおとらじと先をあらそひ。ゴツサイく。ガラ／＼く。(女)ア、こはい。チホ、ハ、ハ。

第十二回

學校から追出される。親父の資送は絶える
 ぎこでたつ岡町に懶惰生の翻譯三昧

本郷辰岡町の下宿屋。下山といふ家の奥の一間に。足踏延してはらばひ臥したる繼原青造。讀さしたる時事新報をはふりだしながら。(繼)ナイ山村。如何したネ。いよく一件は確定したか。(山)ナット、エツト「尙」だ。然し別に金儲の口ができた。(繼)ごうして。(山)ナニサ。汗牛堂

の翻譯がネ。一葉十行二十字で以て。トエンチイ、フハイブ「二十五錢」といふ約束さ。ツウ、チイ
 プ「あんまり廉い。」だから嬉しくはないが。千里の能ある駿足と雖も。之を知るの伯樂なければ。
 餘儀なく平凡の駑馬と伍して。我多々馬車を牽かざるを得ずだ。我々の勞力を廉價に賣ツちや
 ア。いくらか見識が下る譯だが。是も勢のしからしむる所。財政危急の今日に在つては。是
 非に及ばぬといふ次第さ。それゆゑ其價値で甘心して。やつてやる積に約束した。(繼)そいつは
 甘さうな口だネ。原書は何だ。(山)エンサイクロペヂヤ「百科通覽」の中から。政事に關する事と
 農工業に關する事を抜粹して譯するんサ。工業上の事にやア。中々テクニカル「科學的」の言葉が
 あるから。解らんポイント「ところ」も屢あるが。大概い、加減に意譯して。早速エム「かね」に
 する丁見さ。今もいつた通り價値はツウ、チイ「あんまり廉」には相違ないが。只便利なのはエム
 の點さ。原稿さへ持てゆけば。直に引換にそれだけの代をよこすから。我黨にやア至極便利だ。
 尤も翻譯者は僕ばかりぢやアない。外にも二三人はあるんだが。さうだ君もやつて見ないか。名
 前は僕の名義にしといて。譯料は相當に分るとしよう。(繼)そいつは我輩の願ふ所だ。親父の供
 給が絶えてからは。我輩も實に窮したから。何か金儲をしくつては。下宿のベイメント「拂」
 もできやアしない。早速周旋してくれたまへ。それぢやア今朝ツからやつて居るのは。即ち其

translation「翻譯」か。(山)さうヨ。見たまへ雜と如斯體裁さ。(繼)ぎれく。ト言ながら山村が
 譯しかけたる原稿をとつて見る。(繼)ヤア随分亂暴な翻譯だナ。エートなんだ。○是ニ因テチ
 觀レバ。陪審裁判トイフ制度ノ。因テ以テ原因セシ。所以ノ道理ハ。蓋シ遠隔ナルサキソン時代
 ノ。王政ノ頃ニアリシヤ。決シテ疑フ可キ事ニ非ザルナリト。余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザ
 ル可ラザル事トイフ可シ。○ハ、ハ、ハ、ハ、イヤニ冗長な曲りくねツた。變に讀悪い文章だナア。
 羊の腸よろしくしたア。如斯文體をいふんだらう。就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんざ
 ア。實に重複極るぢやアないか。ナゼこんなな文を延すんだらう。反語ばかりいやに重なつて。
 讀悪くツて解りにくくツて。是ぢやア素人にやア解りやアしないぜ。(山)ハ、ハ、ハ、ハ。ぶツつけ
 がきだものを。文はさうせ無茶苦茶さ。しかし長くしたは此方の策さ。反語を澤山つかつたり。
 同じ事を繰返して居りやア。骨がちつとも折れないで以て。直に一枚だけ出来るだらう。何々せ
 ずんばあるべからざるなりと歎。それ然り豈それ然らんやなぎとやつて居ると。十行二十行は二
 十分位に。一枚かけツちまふ。是之を economy of labour「はねをりの儉約」といふ。(繼)ヤレヤ
 レ。斯いふ翻譯者の手に成た。翻譯書を買ふ奴は可憫だ。しかし我輩も其法でやらかさう。二三
 枚原書の散亂になつたのを貸たまへ。(山)ヲット承知だ。それぢやア。ベイジ、トエンチイ「二十

葉」から〇コウツト〇ベイジ、サルチイ「三十葉」まで。君にやらう。汗牛堂へは明後日ゆくからなるべくせいでして譯したまへ。十枚で二圓五十錢にやアなるから。(繼)急にエム「かね」の要ることがあるから。それぢやア直にやらう。時に山村。例のイヂオツト「愚人」のシクエンス「後談」はさうなつたか。(山)それに附て實にリヂキュラスな「をかしい」話があるのさ。一昨日の晩。僕がネ。馬鹿野郎を引張だしてネ。例のト印を引率して。若竹の寄席へいつた所が。豈圖らんや思はざりき。桐山宮賀と同伴して。同じ席亭に來會せんとは。(繼)へー。そいつは珍的。妙不可思議だ。須河め。定めし弱つたらう。(山)弱つた所の騷ぢやアない。彼奴の。さらぬだに眞赤な面をば。丸で猿のやうにしやアがツてネ。物をもいはないで逃出すのさ。僕ア君の知つてる通り眼の力が弱いんだから。(繼)ハ、ハ、。少々と副詞を附るうちがい、。七八度の眼鏡をかけても。ちつと遠方は怪しい位だ。(山)馬鹿アいへ。僕ア十一度だ。僕より桐山は餘程非道いゾ。いつかも須河を僕だと思つて。さんざ擲りつけた位なもの。(繼)しかし君も随分ひさいぜ。いつか新宿へいつた時に。プロ「娼妓」の座敷を取違へて。平氣で上の間へ這入つていつて。しきりに馳酒落を言ちらして。プロに抱つかうとするだんになつて。はじめで間違へたと氣がついて。泡を喰つてかけだすとて。火鉢の鐵瓶をひつくりかへして。夜中に僕にまで口をきかせて。やつと詫言

をしたぢやアないか。(山)アリヤア酒に酔つた爲の故だ。僕の近眼の故にあらず。(繼)なんの canのと負惜みをいつて。眼鏡をかけないで。見えをするから。時々失敗をやらかすんだ。それはさうと。話が横へまぎれてしまつた。(山)といふ譯だから。僕は桐山の居るのもしらすに。平氣で前の方へいつた所が。桐山め。さすがに眼鏡をかけてるから。忽地僕に眼。イヤ眼鏡をつけたが。彼奴め。例の通り意地悪ものだから。ツーンと。しらん振で居やアがるんさ。僕もやうやく氣は附たが。此方も意地で挨拶もせず。暫らく睨競ですまして居ると。向うが居苦しくなつたと見えて。宮賀に何やらホキツスル「耳うち」して。いつの間にか歸つてしまつた。(繼)須河は其間何處に居たのだ。(山)何處へいつたかわからなかつた。サア是からが僕の幕さ。しかし君。嫉んぢやアいかんぞ。(繼)イヤハヤ。惘れカイロウのシチイ「都會」でござい。誰が君なんかを嫉むもんか。敵婦はたかが豊印だ。それさへ空情痴ときてゐるもの。(山)ヲホン。空情痴には侍らさかしツ。マア氣を静めて聞たまへダ。愚邊も兼て知らるゝ如く。彼の豊印といへる少女は。とくより僕に氣あり名古屋。鯨魚だちしてテーライト。と命に應じたけな素振があるから。岩木ならねば僕もまた。(繼)だれが岩木だと思ふもんか。カンテン野郎ごんにやく男兒たア。君の事だ。(山)よいヨ。なんとなといつて頂戴。しかるに須河のトンチキめが。あの豊印に戀着して。逆上

て居やがるのが可笑いから。わざと須河奴を玉に遣つて。しばし牛肉屋へ出掛たがネ。是にやア深い因縁ありさ。そもく豊印の親父といふのは。所謂天保度の古薬罐で。イヤニ頑固的人物だから。一旦人にすゝめられて。矢場へあのガル、「娘」を出した所が。矢場においちやア娘の風儀が。わるくなるだらうとしんばいして。たちまちつれて歸つた奇人だから。たましく豊印を當込にして。牛屋へやつてくる客があつても。決して外へは出さないとサ。但し二個以上連があれば。シブくしながらに出すといふから。こいつ乗すべしと工夫を凝して。あの須河めを主唱にして。ゆんべ始めて連出したが。元が斯の如き因縁だから。何とかプロペアル「ほん」とらしい口實を設けて。須河を退除うといふ望であつたを。圖らず今話した一件で以て。須河が求めずして歸つたから。いよく満願の時到来りと。そろく小當りに當つて見ると。シイ「彼奴」は元來ニツ返辭で。チン「願」でブレスト「胸」をたくやつさ。サアかうなつて見る日になつて。見る日になると。モウ寄席なんぞは間氣もなく。それぢやア斯うくと相談して。○チイ繼原寝てしまツちやアいけない。是からが肝心だ。○チイ。チイ。(繼)エイやかましい。ウン聞いてるヨ。(山)ネ。それからな。(繼)チイ涎が垂るぞ。(山)馬鹿アいへ。これやア唾だ。(繼)唾もよだれもおなじこつた。(山)それからナア。急いで二個手に手を取り。(繼)イヤハヤ。いやな道行だぞ。

(山)寄席から街道へ馳けて出ると。出逢がしらに。(繼)犬の糞敷。(山)そんならまだしも増だけれぬ。須河の頓癡氣めが待て居てネ。(繼)チャく。それぢやア其時まで。須河は街頭に待て居たのか。(山)向うの汁粉屋へ這入つて見たり。又はアち此方歩いたりして。根よく出てくるのを待て居たとサ。(繼)ヤレく。馬鹿忍耐の強い男だ。それから何した。(山)僕は先に失望したがネ。忽ち一策を案じたしてネ。モウ九時過だと思はれるからお豊はこゝから歸さうぢやアないかと。内々眼で以て其意を知らせて。二個ともお豊に別れたのさ。さうすると須河めが。俄に何か思ひだしてネ。先へ歸りたいと吐いたから。こいつ上都合と承諾して。須河に別れると直に轉じて。牛屋の通までかけてゆくと。誰か半町ばかり前の處を。女と話してゆくやうだから。何の心もななくふつと見ると。女は其聲で判断するに。さうやらお豊の様であるが。男は無言で歩いてゆくから。僕の近眼にはわからんのだ。足を早めて近よつて見ると。イヤさうも驚いたぜ。中々頓癡氣も馬鹿にならん。其男は即ち須河さ。チャといふとさすがの須河も。よほご駭然としたやうであつたが。馬鹿に鐵面な野郎だから。平氣で僕の方を向きやアがつてネ。ヤア山村君も何か忘れもんをしたか。我輩は牛屋へ手拭を忘れてきたツさ。實に後生恐るべしだ。(山)ハ、ハ、ハ、ハ。それぢやアつまり雙方が御失望だ。(山)さうさ。其晩はそれで牛屋へ歸つて。再びいくらかの散財

して。空しく二人ともかへつてしまった。(繼)とんだ遊學膝栗【毛】だ。ハ、ハ、ハ、ハ。

第十三回

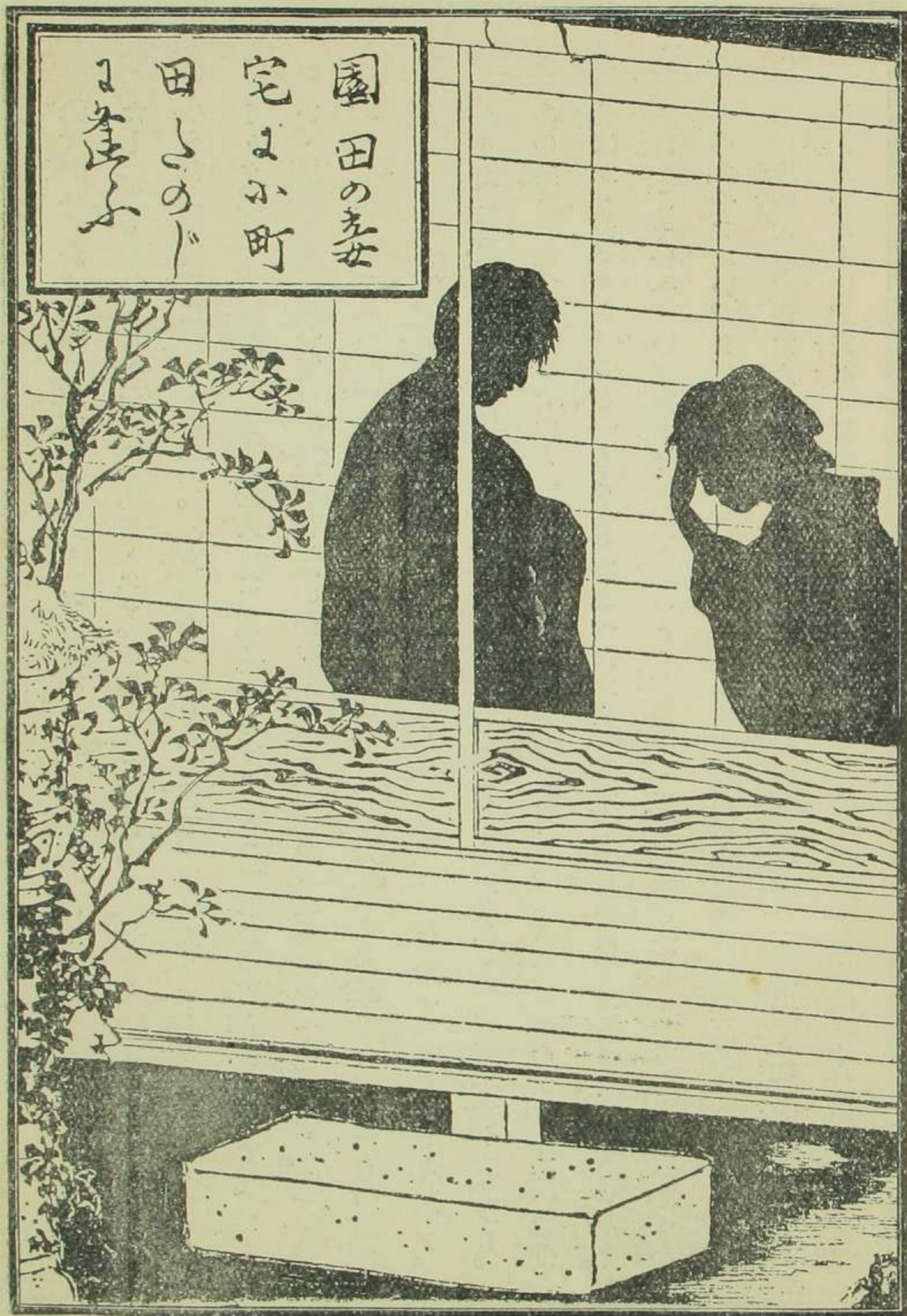
心の宵闇に

有漏路無漏路を踏迷ふ男女の密談

美女の眉かどぞ見る新月は。已に西の空に傾きつゝ。四下もやうく昏うなれば。一しほ秋風の身に染むめり。爰は都會の中といひながらも。繁華な通筋にあらざるゆゑ。夜は往來の人も少く。ひきとゞろかす人力車の。ゴロ／＼も稀に聞ゆるのみ。心にくき格子戸つきは。いかなる人の住居なるか。此方は一面の黒板屏。松おぶさつて姿をかくし。彼處に一基の石燈籠。蔦だきつきて形洒落たり。艸葉にすだく蟲の音のみ。いと悲しけになきつれたる。小庭へだてし小座敷こそ。主人の居間かと思しくして。疊六ひらはぎ敷たるべし。燈火あやにくにおほろけなれど。障子に移る影法師はまだとしわかき男女と思はる。清少納言に見せたらんには。これにくき物のうちに加へん。女は心地あしきにや。細やかなる手もて額を押へて。うつむきたる面に。ほつれ髪がみのふりかゝりて。影さへもいとやつれしさまなり。男は年の程いかばかりか。頭は今様の斬髪せんぱつ

にて。姿は瘦肉の方とぞ思はる。折々頭の後邊の方を。手もて押へもし搔きもするは。脳に病のある人にやあらん。やゝありて女に向ひて。ひそかにうちさゝやく聲をきけば。

(男)今いつたやうな譯だから【ネ】おまへが郵便をよこした事もまるきり知らないで居た所が。先月學校へ歸つてから。倉瀬があづかつて居たといつて渡してくれたので見たけれども。今更返辭でもなからうか。とサア斯いへば不實なやうだが。とても今いつた情實ゆゑ。末の約束をしたからつて。果して其通りに送られるか。又は送られぬか。分らぬのに。なまなか返辭をして未練をますより。○それも親父さへしつかりして居りや。たかが一二年の事だといつて互に辛抱も出来ようけれど。何をいふにも近頃では。親父もめつきりと弱つたやうだし。内は相かはらず火の車で。いまだに借金がぬけない位さ。わたしが卒業をしたからつても。まづ二三年の其間は。中々思ふやうになるごころか。自分の志も腰もまけて。官員にでもならなけりやア。とても立行かんと思つて居るんさ。なまなか互に未練氣をだして。末の約束なぞした所が。到底苦勞種がます計で。容易に樂をする譯にはいかず。尤も六七年たつうちに。すこしかんがへそりやア自分極の考だから。キットさうなるかさうならんか。今から定められた話でなし。殊には身體が弱いからして。さういふ思ひ寄らん病氣にかゝつて。中



へよるこぶ
人がある。
ダカラなる
べく)

へはない話
だ。)

途で倒れるかもしれない譯。それやこれやを考へると。斷然今のうちにきれておくのが。わたしは兎もあれおまへの爲には。イ、エサ。ほんたうにおまへの爲だ【ヨ】。斯いふとをかしいやうだが。東京に藝者も多いが。氣性がしつかりして居て。男の魂のある女は。【恐らく。イ、ヤ。】たとへ官員にやア氣に入らないでも。キツト「へうれしがる」人があるんさ。早くい、旦那に身を任せて。脱籍しまふのがおまへの徳だ。おまへは親父への義理を思つて。エ。サア。わたしへの義理。ナニ。實かもしらんが。たとへ六年でも七年でも。わたしの都合がよくなるまで。藝妓でおしとほしてやつて見ると。さも手輕さうにいふけれども。それやア。おまへにも似合へはん話だ。よしんば養母でも假親でも。お常さんへの義理があるから。あの婆さんはつまる所。おまへが厄介にしなくちやアならん。その老母はごうでもよい。自分ばかりが。サア。そりやもとよりおまへだから。其邊にぬけめはなからうけれど。六七年と口でこそいへ。いざ實際となつて見ると。存外長くつて。もごかしくつて。辛抱ができたものぢやアない。まるきり逢はずにはゐられぬゆゑ。月に一度とか二度三度と。しらないうちに度重なり。また人の口にかゝるは必定。むかしは随分情郎が。其情婦と約束して。五年十年とたつた後に。夫婦になつたといふ例もあるが。今時そのやうな者はすくない。よしあつ

たとした所が。たつた一個の女に迷つて。其と夫婦にならうといふのを。只一心に目的にして。それで勉強をするやうな奴なら。到底益にたつ人間ぢやアない。かういふと何だか不實らしいが。何も水くさい不實なしうちを。わざと好んでは爲やアしないが。人間萬事まはり燈籠。時宜によつては浮世の義理で。ま、にならない事もあらうさ。中廓の一件ぢやアおまへもわたしも。いくらか面目をそこねたから。わたしはかういふ氣性だから。實にくやくしくつて爲やうがないが。さうかといつて無暗矢鱈に。敵手にしかへしを爲ようと思へば。却つて恥の上塗同様。馬鹿氣きつた話だから。チツト三四年辛抱して。まづ一身をたてた上で。あの吉住とかいふ奴には。きつと返報をする積さ。おまへはわたしよりかあの事では。此時。女はうるみ聲にて。

(女)わたしはあの時の事を思ふと。まことにくやくしくつてなりませんヨ。てがみでさう申して上た通り。あの辨吉の意地わるめが。あれからわたしを敵にして。陰でいろくとわたしの事をば。さんざわるくばかしいひますので。お客はだんくと減て來るし。お茶屋でも元のやうに聘招てくれず。家母さんにやア愚癡をいはれる。あなたからは音信はなし。わたしや悔やくしくつてならなかつたから。斯なりやア。モウ破れかぶれ。思ふさま辨吉さんを叩

き下して。赤ッ恥をか、せてやらうと。胸をすツかり極たけれご。此家の姉さんに意見をいはれて。成程辨吉さんとけんくわをすれば。つまりは榮さんの名の出るもとぞと。あなたのお身の上を思ふばかりで。十分こつちに理はあるけれご。ちつと我慢をして居ましたうち。人の風評も七十五日。こつちで念を入れて勤めるうちには。段々新しい得意客もでき。古い客人もいつとなく。呼聘でくれるやうになりましたが。サアさうなつて見る日になると。今まで癩癩の蟲で以て。やつと押へつけてこらへて居た。未練がごうしても我慢ができません。あんまり水くさいと心で怨んで。度々郵便をあげようにも。學校の首尾がごうかと思へば。それが心配であけられもせず。いつそ駒込へと氣ははやれご。ごの面さけておとつさんに。と思へば出掛けてゆく義勢もなく。よもや御病氣ちやアあるまいのに。端書の一本も下さらな。いと。あんまり水くさいとたつた一個で。じれてばツかし居ましたうち。段々からだが変わらなくなつて。座敷へ出る譯にもいかないから。多田さんの御世話になつて。薬をたべたのも一月あまり。わたしが休業して居ました間も。この姉さんはしげく来て。おまへは氣が勝て居過るので。自分でいろくな苦勞をこさへて。求めて病氣にもなるのだから。チツト心持を大きくして。餘計な心配をしないがよい。それほご榮さんが戀しけりやア。随分逢せて

もやらうけれご。又時宜によりやア旦那はなして。添はれるやうにもしてやらうが。今は榮さんも御修行中ゆゑ。今といふ譯にはとてもゆかね。せめて三四年は辛抱して。心で逢て別れて居て。末のたのしみを俟がよい。繪入新聞で名高かつた。若鹿のよし江のはなしを御覽。しがない藝妓といひながらも。今の薄情の世の中には。實にめづらしい眞實もの。それなればこそ末を遂て。岩桐といふ情人と一所になつたとかいふぢやアないか。三年我慢をする氣があるなら。きつと二三日に逢せてやる。必ずクヨク思ふなとて。過日おつしやつたが約束通りに。今夜このやうに思ひがけなく。お目にかゝる事ができようとは。ちつとも思はない事でしたから。わたしやあんまりの嬉しさに。御話申すことも後や先で。怨もいはないで居りますものを。貴方はあんまりな不實なお心。しばらく別れて居た間に。ごういふい、處ができたかしらねご。お爲ごかしに斷縁ようとは。そりや水くさいにも程がある。否なら否と。〇もし見棄てさへ下さらなけりやア。六年でも。また十年でも。わたしが心はかはりません。イ、エ。餘所外の藝者衆の。心持はごうかしりませんが。變人藝妓といはれるまで。人にも笑はれたわたしの氣性は。あなたも御存じでありながら。今さらいやだ。斷縁ようとは。そりや水くさいあんまりです。あなたがいつかおつしやつたに。

藝妓を女房にするもよけれぞ。第一素人の手業をしらねば。世間體が見ツともない。ひまがあつたら時々には。縫物讀書もならふがよい。何處へ縁附くにした所が。それが第一に入用だ。おいひなすつたのを忘れないで。間暇さへあると机に向つて。内密で手習を勉強したり。單衣から拾綿入。もう此節ではさうやら斯やら。袴もいがみなりに仕立るのも。みんなあなたへの心中だ。なんだねんねえのやうな事をと。嚙御笑ひでありませうが。わたしや種々に考へると。ほんたうにくやくつてなりませんワ。みかほをそむけてさしうつむく。

男はしばし黙然にて。手をこまぬきて居たりしが。

(男)だん／＼のおまへの眞實。けつしておろそかには思はないが。おまへも今一度氣を静めて。よつく後先を考へて御覽。わたしは兼ても知ての通り。妙に偏屈な氣性だから。たとへ如何やうな事があつても。是が餘所外の女であつたら。今までこれほごにも迷ひもせず。恥もかゝないですんだであらうが。何云不思議の因縁だか。おまへと。らいひかけてしは。○自分で自分の氣がわからぬまで。度々友達にも嘲弄たり。または意見された事もあれぞ。さうしても思ひきれず。今日が今日までも迷つて居たが。これでは行末の爲にもならねば。第一親父への不孝だと思つて。斷然決心して縁を斷つと。已に親父へは誓つたものを。今更其舌も

乾かぬ間に。其志をひつくりかへして。よしんば行末の約束ばかりで。當分逢はないにした所がおまへと斷縁ないで居た時には。親父は勿論友人にも。實に面目がない譯だ(ゆゑ)。(女)サア。それが貴方の勝手ばツかし。斷縁やうといふはなしなんぞは。わたしに露ほごもしないで居て。自分獨りでだしぬけに。

(男)サア。さういはれて見た時には。わたしが悪いには違ひないが。是も自分の身の爲のみぢやアない。おまへの行末が氣の毒(ゆゑ)。

(女)イ、エ。そんな逆口は聞ません。なんぞといふとお爲ごかしで。○わたしやぎのやうな苦勞をしても。○よしんば十年が二十年でも。俟て居る積で居りますものを。そりやあなた水くさい。トいひかけてひざにすがりつき。てぬぐひだ

男は又もやさしうつむき。愁然とせし體なりしが。しばらくして聲を勵まし。

(男)おまへもあんまり解らんぢやアないか。常はこんなでもないと思つたが。これほごいふ事が解らんだア。ア、何だネ。わたしを困らせて遊ぶつもりだネ。イ、エ。さうに相違ない。なる程今更に斷縁るといふのは。實に不實にやア違ひないが。行末の爲にやア換られぬ。わからざア如何なとするが、や。今斷縁てさへ呉れるなれば。行末までも妹と思つて。交

際もできるわけだけれぎ。それができなけりやア是迄だヨ。勝手にごうでもするがい。うせ名が汚れたおれのこつた。何をされたツてかまふもんか。モウおれア歸るヨ。ついにたんとする。

女はあわてて押とめながら。覺えずワツとなかんとせしが。手拭かみしめ。身をふるはし。

(女) 榮さん。○解らんとはあなたの事。御修行なさる其間に。呼で下さいといふのぢやなし。六年でも七年でも。辛抱しますといひますものを。○何も欲徳を目あてにして。斯なつたといふ中ぢやアなし。貴方も大概わたしの心を。○考へれば考へるほぎ。飛鳥山がうらめしい。○あなたは邪見にさうあつても。トすがる女をつれなくと面うち守り。

悄然として燈火が。うつす姿もかすかに。男女の影ながら。なまめかすしてあはれなり。男は覺えず膝まづき。泣臥し居たる女の背を。撫擦んとしてまた突立。

(男) 話にうかれて気がつかなんだが。お常さんはさうしたのか。大層歸家が遅いやうだ。わたしは心を決したから。何とも勝手に思案をしな。もしお常さんが歸つたなら。宜しくいつて。トいひはなし。たんとしたる襖の外。

(女の聲) 榮さん。大きに遅なりました。チャク。もうお歸校なさるの。

男は不意に驚きながら。答をなさんとする折しも。下女と思しき一個の女。臺所からかけて来て。(下女) モシあなた。旦那さまがいらつしやいました。(女) チャ。今晚は土曜日でないのに。さうしてお出なすつたらう。早くあちらへランプをつけて。(下女) あちらのランプは火屋がございません。(女) チャまたおまへが碎したのかエ。ナゼ碎したなら碎したやうに。わたしに斷をいはないんだヨ。こんな時に困るぢやアないか。(男) それぢやア此行燈をお持ちなすつて。(女) それでも此處が。(男) イ、エ今直に歸りますから。「折から彼方の一間の中にて旦那と思しき男の聲。(旦那) チャ清やあかりを早く。(常) ハイ、只今。それぢやア直にとりかへますから。清や。かけていつて買つておいでヨ。二個も一度期にはすんだもの。爲やうがないぢやないかネエ。「此間にあわてて下婢が。行燈ひさけていでゆけば。後は一面暗の幕。はなしと共に影法師も。消えて跡なくなりけり。

第十四回

近眼遠からず
駒込の温泉に再度の間違

社會とかたぐるしくいふときには。さうやら政治くさくきこゆれども。浮世とやわらけていひかふれば。おのづと色氣づきて聞ゆるぞかし。されば英吉利の婆ジエホットも。浮世の目的は談笑なり。ふざけて遊ぶのが眼目ぢやなごと。變に粹めかしていはれたりき。いかさま面倒なる政治の社會や。野暮に堅くるしい。宗教社會はズツかけはなれた別物として。浮世は浮世として考ふれば。男女老若相集まり。たがひに冗言をたきあひて。樂しみ戯るゝが道かもしれねご。其遊樂にもさまざまあり。【彼の】色戀の道なんごも此世の中には必要なる。一個の要素でその盤外。思案の外なる戀あるゆる地球も正則り運轉して。おもしろをかしく立行けごも。もし結婚が一變してたゞに生殖の手段とならん歟。それこそ所謂百發百中。男女相逢へばかならず子をうみ。麻ルサス頓死。溪レイ仰天。狹き世界は數年にして。雖おつたてん餘地なきまで。人口増加するは保證なり。こは犬猫の特例から。歸納推理したけふの屁理窟。ちと匆卒なる斷定なれごも。兎角色好むは人情にや。玉の盃底所敷。高い脚のついた高脚杯をさゝけて。さはると痛さうな髻ツ面を雛妓の芳顔にすりつけながら。ノウ小ぢやら。おのしは年齢はなんほごぢや。可憐な容貌をしちよるノウ。今晚わいごもと同伴して。猫本へ一所に來う。なんのかんのと託宣する。英雄豪傑が多い世の中。雙ヶ岡の坊さんでも。今ならニツ三ツ首をふりて。原の艸稿をばなほしたかも

しれず。遮莫色事にも階級あり。假に其種類を分て見れば。上の戀中の戀。及び下の戀の三種なるべし。意氣相投じて相愛する。此等は所謂上の戀にて。莉延自の那以那に於る。慨世士傳のその例とも見るべきなり。こは其人の韻氣の高きと。其稟性の非凡なるとを。景慕するより起れる戀にて。御前上等。上々吉。戀の座頭ともいふべきものなり。所謂中の戀は之につぐ。男女互に相愛して。生ては人力車に相乗なし。死しては蓮臺にて一所にすみ。ならう事なら比翼の鳥。儘になら連理の枝。妾は時々呼吸器となつて。郎が浮氣なる口元を塞がん。僕は折々に帶留と變じて。卿が解やすき下紐を押へん。郎と一所に暮すなら。憂を深山の詫住居。ぬひ針仕事繰ぐるま。苦しき賤の手業をも。何のいとしい郎ぢやもの。死んでもわたしが女房ぢや。といつたやなもの即ち是なり。世間見すのわかうごたち。血氣剛らしい面をして。とかく迷ふのは此戀なり。およそ中の戀に溺るゝ輩は。意氣相合ふを主とせずして。まづ其色をめづるがゆゑに。はじめは其情切なれごも。一月二月相むつみて。其意氣合はざるを覺るに至れば。自然相思の情も薄らぎ。其交情冷淡しく成行く事あり。英の詩人彌ルトン翁は。曠前空後の英才なりしが。血氣定まらざる其頃には。一旦の痴情を得も忍ばず。詰らぬ苦勞種を蒔かれたりき。詢や中の戀といへるものは。開けざる世の遺弊にて。わるくいへは獸類流義。たゞ其皮相の毛並を愛して相交る

ものとは何ぞ選ばん。咄々野蠻とうちわめれば。さうやら岡焼の風聴めげごも。作者は生來無垢潔白。秋毫も其様な野心はなし。たゞ我國の少年男女が。みだりに結婚の儀を棄りて。浮氣で結婚離縁るをば。いたく歎かはしく思へばなりけり。愛縁機縁は見てわからず。しかるを梅屋舗の腰掛にて。一寸見た計で縁談沙汰。なんと無造作なる夫婦にあらずや。又戀初るといふ事をば。見初るといふ言葉をもて。わからせるといふも奇態な習慣。か、れば我國の男女は。互に相慕ふは名のみにして。其實其人をば慕ふにあらで。其峨眉。其星眸。其容姿。其腰附をば慕へるなり。豈あさましき極ならずや。さてこそ夫婦となりたる後にも。終始家の内に仇浪騒ぎて。結局はおさだまりの三行半。巡查の御厄介もよくある事なり。たゞ此手の野合夫婦は。西洋にも仕入高が多いと見え。如ンソソ翁が寓言の中に。Marriage has many pains, but celibacy has no pleasures. 「女房持には苦勞多く獨身者には樂なし。」と穿ち見にて述べられたり。「妻といふものこそ。男の持まじきものなれとは。やはりこの邊から推測した。コロラリイ「條論」かも圖られねご。こは是浮氣ものの獨斷論。作者はヒヤ／＼といはぬ積。さりとして細君の味しらねば。匆卒團扇をあけかねれご。土俵にのぞんだ。妙齡諸君は。互に氣合を見やつて／＼。ヨイショヨまつこい。配偶たまへや。扱尙一ツは下の戀なり。こは肉體の快樂をば。唯專一に主眼として。男女相慕

註。妻といふもの徒然草の句。

ふ情をいふ。すなはち鳥獸の慾これなり。五圓金を與へてニヤア／＼を聘す髭の旦那。一圓金を投じてゴロンボタンを待つ田舎紳士は。些申兼た。いひぶんなれごも。やはり此クラス「仲間」のお仁にこそ。是等は淺ましき下戀ゆゑ。葛西の背見も鼻つまみて。是ハア柄杓にかゝらぬとて。タマイキ吐くびやアぞ思はれ侍る。扱はや思はぬ長談義。いざや本文の戀のおはなし。上中及び下戀のうち。いづれに之を列すべき歟。そは讀人の評判／＼。

○草津とし云ば。臭氣も名も高き。其本元の藥湯を。こゝにうつしてみつや町入せん。に。人のしりたる温泉あり。夏は納涼。秋は菊見遊山をかねる出養生。客あし繁き宿ながら。時しも十月中旬の事とて。團子坂の造菊も。まだ開園にはならざる程ゆる。この温泉も靜にして浴場は例の如く込合へごも皆湯錢並の客人のみ。座敷に通るは最稀なり。五六人の女婢手を束ねて。ほんやり客俵の誰彼時。たちまちガラ／＼とひきこみしは。二人乗の人力車。根津の廓からの流丸ならすは。權君御持參の高帽子。と女中はてん／＼に浮立つ。貯蓄のイラツシヤイを惜氣もなく異韻一齊さらけだして。急ぎいでむかへて二度吃驚。男は純然たる山だし書生。座敷へ通るだけが殊勝なれご。とても若干の御祝儀なごには。お氣が附さうにもない客種。年齢は二十一。二。色は淺黒く鼻は低く。三十二相の三分の二は。首尾よくかけ損じた百人並。世間にありふれたる

駄面附なり。衣服は結城敷。絲織敷。シツケの絲が處々に残りて。此頃仕立ました。ごうですネ。イヨがらにないお廢止なさい。南漢といふ袷衣なり。帯は廉價の本博多。まだ角帯にはなれぬと見え。貝の口には得も結ばず。娼妓の寢巻姿よろしくといふ鹽梅に。グル／＼巻にして挟みたるもをかし。一個はチヨットふめる白首女。年比やう／＼に十五ばかり。尙肩揚は下されども。ある一種の能力のみは。格外發達せし事と見えて。物のいひぶり腰のふりかた。お半跣足といふお轉婆娘。衣服はあやしのベンペラもの。綿仙の半纏で藏かれてわからず。帯は赤い唐縮緬と紫緋子の腹合せ。だらしなく下けたる端。すこし痛んだとは女中の悪評。矢場か二階敷なごさ、やく聲。耳にはいれど恬然の平左。洒落手として男にしたがひ。奥の客座敷へ打通りぬ。(女中)よく被入しやいまし。只今お浴衣を。(客の娘)今夜は御厄介になるんですから。ごうか其積で。(女中)ハイ／＼。それではお夜食は。(男)おまへ何くふか。えいもんをさういうて遣るがえいぞ。(客の娘)それぢやアあのウ。口取とネ。そして何かうま煮とネ。それからエート。何に爲ようか。(男)マアそれでえいワ。あとからまたさういへばえいワ。(女中)それではお口取にうまにを御二個前。御酒はさういたしませう。(男)酒も要る。(女中)畏りました。てゆく。男は娘の方に向ひて得意さうにニコ／＼しながら。(男)よう今夜は親父さんが出していこしたノウ。(娘)ア、い、

加減な虚言を吐いてネ。やつとぬけだして来たがネ。といひながら生意氣に小釵で。前髪をチヨイトつゝき。(娘)モウ／＼アタイは内の頑ちやんにやアくさ／＼するワ。一晚でもうちをあけると。ほんとにやかましくツてならないのヨ。嗚呼また淡路町へかへりたくなつた。(男)さうか。それはえい工合ぢやツたノウ。しかし誰か知ツちよる奴に逢はんければえいが。(娘)菊の頃ぢやアなし誰がこんな處へくるもんかネ。アタイは氣をもんだせるか。何だか汗がでたワ。早くお湯へ這入たいネエ。(男)なんせ浴衣をもてこんなかなア。なりから女中がゆかたをもちきたる兩人て。(女中)お大切なものはお預り申しませう。(男)そんならこれをあづかってくれ。(娘)アタイの衣服もお序に。すツかりあづかッておくんなさいナ。(女中)ハイ／＼。といひながら腹の中では。なんだこんな柳原を。イケ洒落つくな女だと思ひながら。そしらぬ顔で娘の衣裳を。一寸たゝみてもちゆくにぞ。あとにつゞきて男も娘ものやがて浴室へとおもむきけり。

○天下無雙の正直者。時を違ぬ親玉として (The sun, the most punctual servant of all works.) 時刻となれば用捨もなく。日は西山に入相の。點火ごろとなりける折。俄に人力車の音かまびすく。ガラ／＼ガラ／＼とひきこみたるは。これこそ擬ひもなき上等客。たしかに根津から来た客と申し。藝妓三四人。としま二三人。茶丁前に進み。茶主後より来る。旦那はなんでも田舎の紳

燈火明滅
少女怪異
く又おとろ



多氣
柱
急

士の其數は正に三四人なり。「お客さまツとの車夫の掛聲。心得たりと此方の女中は。被入いと受とめたれども。不意の襲撃に狼狽騒ぎて。(女中)「チャイト三いさん。お二階ですか。(三)「ナニ下の方がよからうヨ。(女中)「ハイ、只今御案内。マアこちらへ。とあわてふためき。お茶やお浴衣よとたちさわぎて。景氣づきたれば陽氣づきて。已にひきだしたる藝者の三味線。酒なく肴もでぬ其前から。いくら飲あきたる上とはいへ。ちと急進なるジャンジャカ好き。此客もまた變人歟。さらすは夕暮にこんな場所へ。なんでのこくと乗だすべき。はてさて人心はさまざまなるかな。

○それは扱おき以前の男は。彼のあやしけなる娘と共に。浴あみする場所におもむきつゝ。男女互に立別れて。浴衣をぬぎすてかたはらなる。衣服戸棚にいれんとせしとき。男は覺えず其隣の戸棚の中よりさがりたりし。浴衣に其手をふれたりしが。浴衣はたちまちすべり落て。あやしやカチャンといふ音してけり。されども男は心も着かずや。落たる浴衣を拾ひあけて。もとの所へをさめおきつ。いそぎ湯にいらんとかけける爪先。おほえず蹶とはしものこそあれ。遙に陸湯のほとりへとびさり。再びカチャンと音してけり。男も此時心附きて。あな心得ずと思ひながら。浴衣の中よりいでたる物とは。今尙心のつかざりしか。其儘尋ぬる心もなく。やがて板の間へと

すゝみいりぬ。

此時一個の男あり。漸くお掃除ができしと見え。婆さまがお賓頭盧を撫まはすといふ容體にて。むやみに手拭をふりまはして頭や面はいふもさらなり。四肢五體をふき了りて。やつとこごと上りし人品。衣裳を着てからはいざしらねど。裸體姿を評する時には。實にone cent「一二錢」の價値もなければ。車夫だか職師だか。はた官員だか。すこしもわからず。花繡あるものはわれ其職師たるを知る。腕と脚とのたくまじきものはわれ其車やたるをしる。而して八の字のお鬚あるをわれ官員とぞ心得たり。しかるに此男は花繡なく。また八字鬚あらざるゆゑ。さては車やかといはんとすれども。腕のたくまじきに不似あひなる。色の白きのが一ツの不審。たゞし雪の如く白きにあらねど。他の車夫にくらぶるときには幾らか白ツほき肌の色なり。扱は書生にやと又よく見るに。此人頗るの近眼らしく。始終眠るがごとき細き目をして。探り足にて歩むありさま。按摩の杖なきにも鬚髻たり。此壯年にして此病あり。書生にあらずしてそも何ぞや。トいつたやうな少年なり。扱探りくあがり來りて。此方の端から一二三四と。衣服戸棚の順序を數へて。第四番目の戸棚の中より。やがて借浴衣をとりいだしつ。また越中の事なりをとりいだして式のごとくにしめ了りて。棚向の中をかきさぐりて。何やら不審さうな兒附して。頭に手拭を卷附ながら。また浴衣をきて小

首をかたづけ。暫時思案する體なりしが。再び柵の中に手をさしいれ。残る限なく撫まはして。また不審さうな兒附なし。首を三ツ四ツふりまはして。浴衣をふるへぎも別條なし。はなはだ困り果た顔色にて。(男)コリヤ不審ぢや。さうも奇怪ぢや。たしかにいれちよいたに相違ないが。コリヤ實に困却ぢやワイ。さうも奇ぢや。實に希代ぢや。ハテ如何しつらう。ト面色かへ。頬に當惑せる書生の様子に。番臺に居る此家の細君さすがに捨てもおかれぬゆる。此方に向ひて書生に聲かけ。(妻)モシあなた。何かおなくしなさいましたか。(書)チウ。眼鏡がなくなつたワイ。(妻)なんですとエお眼鏡ですとエ。臺を下りて来て。何處にお置なさいました。(書)此四番目の戸柵の中へ浴衣と一處に入らしたたがノウ。(妻)希代ですネエ。おめしは。(書)浴衣はこれぢや。(妻)それぢやアお眼鏡ばかりが。アノございせんので。(書)さうぢや眼鏡ばかりぢや。それもなア。えい眼鏡ではないワ。鐵の柵のついた籠末なもんぢやが。(妻)それぢやアきつとそこいらにございませうヨ。(書)ウンニヤ。この邊にはないワイ。(妻)もしやお座敷ぢやアありませんか。(書)ウンニヤ。這入る前までは掛ちよつたから。(妻)それぢやアなくなる筈は。(書)ない道理ぢやがノウ。もしや其邊に落してはをらんか。(妻)希代ですネエ。トいひながら其邊まんべんなく見廻せども。それかと思ふ物もなければ。(妻)ほんとお氣の毒さまですネエ。戸柵へお入なすつたに相

違はございせんか。(書)眼鏡がなうては一步もあるかれんからノウ。湯にはひるまでは除んぢやツたが。浴衣の上ののせて。犢鼻褌と一所に。たしかにこへ。(妻)もしや入所が違ひはいたしませんか。(書)ウンニヤ。四番目と覚えちよるが。(妻)それではお取れなすつたのではございませうか。(書)ナニイ。そないな事は決してない。新らしうて三十錢程の眼鏡ぢや。盗んでも何もならん。それに柵は損じちよるし。玉も右の方は碎ちよるのを。紙ではりつけておいた位ぢや。但し近眼の泥坊がはひつたかもしれん。(妻)チホ、。、。(書)をかしようはないぞ。眼鏡がなうては歸られんワイ。屹度詮議してくれイ。(妻)ハイ、。、。畏諾りました。今直にさがしますから。マア奥へいらつしやつて。(書)それでは頼んだぞ。なうては實に困るぞ。えいか早う探索して。(妻)きつとこの邊にございませうから。(書)それではえいか。頼んだぞ。(妻)ハイ、。、。○書生は眼鏡をなくせしかば。ほとんご盲目もよろしくにて。一尺さきさへも見えかねれど。根が負をしみの氣性なるにや。ズント平氣なる顔色にて。習はじめの女禮式。三舍を避るといふ足の運びで。廊下をそろくあゆみゆきて。やうやく客座敷の縁側までは。まづ別條なくたどりつきしが。何處がおのが部屋であつたる事やら。眼を細うして見回せども。皆同じやうな結構なるゆる。容易に判然とは見分がたく。暫時佇立つ、躊躇せしが。さりとておのが部屋は何處だなき

と。女中に尋ねるのも不見識なり。殊にはいそがしい取込最中。女子を呼たてるも氣の毒だト。とんだ所で氣がねをして。たしか三番目の部屋ならんと。まづそろ／＼と入て見るに。爰には行燈をつけ置たるが。油が盡ぎはとなりしと見え。數行虞氏の涙。四面楚歌の聲。と後へ附付したき明滅あかり。たゞさへ近眼にて目がきかぬに。さりとほ惘然なる行燈め。と口の中にてつぶやきながら。そつと燈心をか、けあけて。まづ其あたりを見回すに。かなたに最前かけおきたる。おのが裕衣服かゝりてあり。其下にあるは帯なるべし。少し置ごころが違つて居れども。女中が置かへたるものぞと思へば書生ははじめて安心して。覺えず吐息をほつとつきて。頭に卷たる手拭を取て。窓の闔になけかけおき。其儘そこに横になりて。(書)ア、非道い目にあうたぞ。眼鏡をさがしだしてくれ、ばえいが。それはさうと。宮賀めは如何しをつたか。あれほご堅う約しちよいたから。今まで來ん譯はない筈ぢやが。モウ何時ぢや歎。ハア今鳴ちよるのは。ヤア七時ぢや。五時までといつちよいたに。コリヤもう來んかなア。失敬な奴ぢや。是非に後からいくといひをつて。ハ、アおれをだましをつたナ。可愛さまつて憎さぢや。ウヌさうするか見をれイ。ヤ。また行燈が昏うなつたぞ。○それに眼鏡はごうした事ぢやか。女子を呼んできいて見よう。ナイ姐さん ト手をうちならして女中をよべどもおくのさしきのおほいぢやがまだばかさわきのさいちゆうゆぢや

(書)オイ姐さん。糞ウ。まただまつていきをる。えいワ。もうちつと寢て居てやれイ。はごろりとまたたふれてなにかぶつ／＼つぶやきぬる。

○かゝるところへ以前の娘は。此時漸く湯あみし果て。浴衣がけにて座敷へ歸りつ。障子ひらきて入らんとして。(娘)チャなんたるあかりだらうネエ。須河さん。モウおあがんなすつたの。トいひつゝ向うをうち見やればゆかたぎのまゝにてねいりたる體なり。(娘)チヨイと風ひきますツさ。ふんとに此人は氣樂な人だヨツ。トいひながら障子をハタとたてきりつゝ。一足二足すゝみ入る。此時たふれて我しらす。いまうたゝねせし以前の書生は。はじめてハツと心附きて。扱は座敷を違へしかと。驚きあわててふりかへるを。娘はたちまち見て仰天。(娘)アレ引と一聲たてたるのみ如何なるゆるゑにや正氣をうしなひ。ウンと其まゝのけぞつたる。意外の珍事に書生は仰天。手をうちたゝきて女中を呼び。水よ薬とたちさわけば。女中は如何なる譯ともしらねぎ。客の娘がのけぞりたふれて。齒をくひしばりし不思議のありさま。只事ならずと周章狼狽。まづありあはせの寶丹をば。渡せば書生は受取つ。蓋うち開きていそがはしく。(書)ナイおまい。些と手を貸て。ナイ抱いちよつてくれイ。ナイえいか。おれが飲ませるから。(女中)マア如何なすつたんですネエ。お可愛さうに。アラあなた不可ません。それやア蓋の方ですヨ。(書)ヤ。こりや薬がはひらん。成程これは蓋の方ぢや。

こちらが薬か。ツイ眼が見えんもんぢやから。トしよせいほうたんのいれものをそのまゝ娘の水ぢや〜。早う水を飲ませなければいかん。(女中)サア〜。おひや。(書)ごこぢや〜。(女中)アレサこれですヨ。(書)忘れぢや〜。ヤ。しまうた。こぼした〜。(女中)アラまあ。高盃へ手を突込んでさ。チヨイト三さん。(書)えいワ。こぼれたのを吸ふワ。さうで口うつしぢや。えいぞ〜。ト云ひながら盃へこぼれたる水をふくみて娘の口へ口うつしにのます。(書)サアしめたぞ〜。チ、イ引。(女中)お名をお呼びなさいなネエ。(書)名はしらんぢや。(女中)チャ〜。あなたのお連さまぢやアないの。(書)ウンニヤ。おれの連ではないワ。チ、イ引。「此中娘もやう〜に息を吹返す。(女中)モシお氣をしつかりとなさいまし。サアおひやをもう一口。(娘)ア、こはかつた。ナニもうようございますワ。(女中)全體如何なすツたんですエ。(娘)ナニネ。今お湯からあがってネ。座敷へはひらうとするとはせキヤツといひてにげかけるな。(書)チイ。姐さん。こらへてくれ。氣の毒なことをした。おれがノウ。近眼でよく見えんもんぢやから。ツイ座敷を間違へてなア。平氣でこ、へ這入ッちよつた所へ。(女中)チャ〜。それではお座敷が。(書)チウおれが間違へたのぢや。トいふ面つく〜娘は見てすこし安心せしやうすなりしが。(娘)それにしても不思議な事があるワ。(女中)さうなすツたの。(娘)さつきアタイが座敷へ這入らうとするとな。向うに誰やら寝て居るのを行燈が消か、つて居たも

んだから。連の人だらうと思ツちまつて。さつさと這入らうとした時にネ。フツと其人が寝がへりしたのさ。さうするとネ。〇ア、思ひだすと今でもこはいワ。(女中)エ。(娘)其人は後にも面があるのさ。(女中)うそをお吐なさいナ。(娘)イ、エほんたうだヨ。後の面は此方によく似て居たヨ。(書)やつぱりおれぢや。(娘)エ、。(書)おれはおまいさんが這入つて来た時には障子の方を背にして寝て居つたぢや。おまへさんに呼れてふりむいたのが眞成の面ぢや。(女中)エ。それぢやアあなたはお面が。(娘)アレ引。やつぱり二ツあるヨ。(書)コレ〜馬鹿いうてはいかん。これは面ではないワ。ソラよく見イ胎毒ではけて居るんぢや。兩人はつく〜見えて(女中)チャ〜。まるで薬カ。トいひかけて。(娘)チャ〜。さうでしたか。さうとは知らないもんだから。アタイは。〇ふんとに馬鹿氣さがたまらないワ。ハ、ハ、ハ、。(女中)でしたか。ハ、ハ、ハ、。「書生は間が悪くてたまらねごつきあひに。(書)アハ、ハ、ハ、。〇是より先。此娘の連の男は。何か思ふ由のありしと見え。わざと湯の中からあがらずして。出て見てはまた引込。引こんで見てはまたたちいで。かくすること一時間ばかり。やツと浴衣をきて四下を見廻し。そろ〜我座敷へ歸り來しが。此爲體にうちおごろき。そのまゝ部屋のうちにかけいりしが。彼のはけあたまと面見あはせ。ハツト當惑せし様子なりしが。思ひきつて度胸を

する。(男)ヤ。君は桐山君ではないか。「書生は目を細くして眉をしかめ。奇妙變的なる容貌をしてこなたを見やり。(桐)さういふ聲は須河かア。(須)イエス「然り」君はさうしてこゝに居るか。(桐)あのおれか。アノおれは。あのなんぢや。國の者と一所に來た。おぬしはまた今時分。さうして來たか。(須)我輩かア。あのなにさ。親類と一所に來た。(桐)さうかア。それでは此ガル、
 「娘」はおぬしのリレイション「しんるる」か。(須)ウン。さうぢや。(桐)此ガル、と二個きりか。
 (須)ウン。ウンニヤ。あのなんぢや。まだあとから來るんぢや。(桐)さうか。おぬしは未かへらんか。おれはなア非道い失策をしてなア。(須)さうしたのぢや。(桐)おれは眼鏡を失うてなア。ト部屋を取違へし一伍一什ならびにいまがたの騒動まで。かいつまんでものがたれば。須河も覺えずふきいだして。一同大笑となりたりしが。桐山は再び須河に向ひて。もし別段に用がなくば。共に歸校せよとす、むるにぞ。須河ははなはだ困り果て。あとより親類の者が來れば。今から歸る事能はずとて。いろくにごとわれぢも。桐山はいつかなきかず。おれは眼の玉をなくしたゆゑ。到底ひとりには盲目も同様。一步もあるきだすことできねば。おぬしの用向のすむ頃まで。隣の座敷にて俵をるべし。先刻國の者と同伴して。來たというたのは。眞赤な偽なり。實は宮賀のモール「小弟」とこゝにて話談をする約束なりしが。今尙來らざる所を見れば。宮賀は到底來な

いと思はる。用濟次第に同伴してくれ。遅うなつてもかまはぬ。とてしきりに頼めばもてあまして。須河は失望限なけれぢ。怪しの娘をつれだしたる。事の始終を氣取られては。いよく以て都合なり。一旦こゝをたちいでたる後。又直して來るこそよけれ。とひそかに思案を定めしかば。伴ひ來りしお豊を呼出し。此グリハマの次第を語りて。我紙入をも渡しおきて。やがて再び座敷に歸りつ。さて桐山を急がしたてて。竟に温泉をばたちいでしが。其後の事は作者もしらす。嗚呼好事多魔佳期易阻。須河の失望いかばかりぞや。まことにお氣の毒さま見たやうなはなしになん。

第十五回

舊人を尋ねる新聞紙の廣告に

兎鳥ゆくりなく由縁の人を知る

○アレサ源さん。マア待ネエといふに。(源)ナニサ。出來ざア出來ねえでもいゝのヨ。その代りにやアお氣の毒だが。(女)マアサ。おいらのいふことを聞かないといふに。何もおめえの請求を聞かぬといふぢやアないが。尙おめえ。考へても見ねえな。成るか成らぬいかも解ら……(源)だからヨ。できなけりやアいゝといふことヨ。都合がわるけりやアそれでもとはいはねえ。

(女)サア。さういはれちやア困るぢやないか。おめえだつて知つてらうぢやアないか。此節はお客もみんな狡猾になりやアがつて。容易に請求なんざア聞いてくれずさ。かてて加へて此不景氣でもつて。座敷なんざア。二三日お茶のシキつゞけといふ始末だから。(源)コウお秀さん。たのむぜ。じやうだんいつちやアいけねい。おれやアおめえの泣言の聴聞にやア來ねいぜ。都合ができなきやアそれまでのこつた。ゆんべ立聞した一件は。河竹に賣つてやつても。乃至は新聞屋へくれてやつても。いくらか種にやアなりさうだが。まだそれよりかおれの方にやア。チツト耳たぶな當りがあるから。(秀)だからヨ。聞かねえといやアしないのさ。さうともするから待ねえナといふのヨ。今に花魁が歸つて來たなら。何とか相談をきめた上で。イ、エサ。座敷被を曲たつても。おめえのいふ位はさうともするから。マアこゝへすわんなせいヨ。

小聲ながらに言ひあらそふ。二個の男女は何者にて。そもまた此處は何處と問はん。讀人已に推したまはん。こは是角海老の樓上にて。彼の兒鳥が座敷なるが。一個はすなはち梳櫛お秀。男は此樓の中ごんにて。其名を源とか呼なしたる。年比四十を六ツ七ツも。越えたりと見ゆる新髪あたま。其争論の事の由は。何事ならん歎しりがたけれご。源はしきりにうちはらだちて。なだむるお秀を耳にもかけず。袖を拂つて去らんとするを。お秀がやうやくおし留めて。火鉢のほとり

へすわらせつ。何やらひそくうち私語く。其聲きはめて低かるから。話の子細を知る由なし。此日はちやうご検査日にて。娼妓は大方打揃ひて。先刻検査場へいでゆきたるが。尙歸り來ぬも多かるゆる。晝が夜なる貸座敷の樓上樓下人氣妙なく。二階へあがる上艸履の。バタリくの聲に和して。ベタリくと樓丁が。長き廊下を雑巾にて。押拭ふ音の聞ゆるのみ。晝あそびの客のあらざるにや。いづれの座敷も静寂として。三味の音色なごは絶えて聞えず。已に検査場よりぬけがけして。歸り來りし娼妓もあれごも。多くは昨晚の疲勞に得堪へで。色氣はなれし容體にて。眼を貪るも妙からず。さはあれ人心のさまぐなる。同じ泥水を飲みながらも。其たちふるまひ一樣ならねば。或は上の間に閉籠りて。唐机に面づるつき。高尾薄雲の跡を慕ひて。生に風雅めかす娼妓あれば。屏風一面にたてめぐらして。ひそかに不恰好な手つきをして。頬に木綿物をひねくりまはすは。虱をとらうといふためにあらで。自身に素人被を縫ふにぞありける。揚出しこしらへんと罵るあれば。おしるこたべたいヨとうめくもあり。千状萬態いろくなれごも。多くは船底の枕をかつぎて。横にたちたるが多きぞかし。つかれさこそとはいひながらも。中には愛素もつきはつきべき。滅天倒地寢像もあり。辛氣辛苦のくの字形。可愛々々のIの字形は。まだしも女らしき寢像なれごも。大の字尤の字なんごの如きは。ほとく論外ともいふべきなり。

うつぶしたる豆ごん。尻度外れに巨大く、其様凸の字もよろしく。あふむきたる梳櫛兩脚まつすぐにおつたて。眞正面より望むときは、Mといふ字にも似たらんかし。之を要するに十中八九は。栩栩蝶に化して黒甜郷裡に。遠くうかれいでしことと見えて。とかく樓中がしづかなるゆる。ひそく語るお秀が言葉も。多少戸の外に洩れたるをば。今かいつまんでかきしるせば。左のきれぎれなる言葉にして。如何なる意味ぞともわからねども。讀人とこしなへに考へたまはば。或は罪もなきゆんでの膝をば。はたとうちたまふ事もあるべし。

(秀)ダヨ。……イ、エネ。中々承知しないんさ。今時おめえそんな馬鹿正直なことをいつて、たまるもんかネ。……ア、さうさ。中々〇式はあるといふはなしさ。しかしネ。其人は書生だからはなしたつてわからねいんさ。エ。だからさ。其おやちさんといふのへ。……ウンさうさ。ぢかにかけやつて見ようといふんだが。エ。……ア、こちらにやア居ないといふはなしヨ。エ。なにエ。エ。……へ、イ。あのそんならあのおまへが。……チャチャきたいだネエ。さうしてあの子は。今ここに居るんだエ。なにエ。死んだかどうしたかわからんとエ。チャ／＼これやア不思議だ。……ア、さうさ。それやア。おめえの胸しだいさ。……さうとも／＼外にやアおめえ。此譯をしつてる者はあるやアしやないやネ。

……ア、承知だヨ。夕方においでな。さうさ六時過でなくちやアだめだヨ。それちやアたのむヨ。まだ甘くゆかごうだか二番目の筋書がきまらねえから。何エ大丈夫だつて。さうネエ。まあ／＼外れない積だがネ。それちやアこれだけでい、ネ(トゆびをばちほ)。ア、承知だヨ。六時すぎだヨ。なにかに、さうしてネ源ごん。例の深川一件はおめえにたのんだヨ。承知だらうネ。○チャ／＼おいらんが歸つて来たやうだ。なんだまた内の餓鬼が。いやにさう／＼しくかけて來やアがる。それちやアその積で。ア、。

折柄バタ／＼いきせきと廊下ならしてかけくるお常きのこともり(常) お秀さんお客様ですよ。アハ／＼。(秀)なんだネ。イケさう／＼しい。お客さまがなんでをかしい。(常)だつてもネ。吉住さんが朝ツばらから。ふざけて／＼。(秀)ナニ吉さんがおいでなすつたつて。トいふうち兎鳥も歸りきたる。後より微酔機嫌で入來るは。例の吉住潔なり。兎鳥はあ、窮屈だといひながら。上の間へ走り入りて。検査被の帯をとく。(秀)チャ吉さんお早うございますネ。よつくお出なさいまし。何樓のおあまりですエ。(吉)なんだ今時分きたのがわるいか。(常)わるいからお歸んなさいヨ。トいひながら。後から走りかゝりて。帽子と煙艸入をひつたくり。(吉)うぬぎろばう引。(常。兎)ハ、ハ、ハ、。(兎)ほんたうにしやうがないヨ。此ひきやくは。(兎)なんだひきやくだ。

へん憚ながら天下の郵便夫だ。天下の眠をさまさんもの乃公を除いてまた何處にかある。(常)チ
 ンブンカンブン。チンブンカン。アハくく。(吉)うぬおれを馬鹿にするな。此めらう。トイひな
 がら。お常をなぐらうとする。お常は廊下へ逃出す。吉住はつゞいて追かけようとするを。鳧鳥
 がひきするながら。(鳧)エ、さうくしい人だネエ。マア下にお出なさいナ。おまへさん昨夕は
 何處へいきました。サア白状をしておしまひなさい。チヨイトとお秀さんお聞ヨ。今ネ検査場か
 ら歸つて來るとネ。清さんをつれてほんやりした鳧をして。(吉)ナニ今朝岸邊と一所に淺草で飲
 んで。今こちらへ來たばかりだ。(鳧)へ、イ。そのお手々はたべませんヨウ。たしかに大文字へい
 つた歸りかと思ふヨ。(秀)チャく吉さん。またですかエ。サア今日はゆるしませんヨ。それに清
 さんも清さんだヨ。思ひつきりた、きおろしてやらなけりやア。「折から廊下をバタく。(常)お
 いらん新聞がきましたよ。トなけこむ新聞。(吉)ヤ生意氣に繪のない新聞をとるうちがをかしい。
 讀賣新聞たア。イヤニ素人じみるぢやアないか。トいひながら新聞をとりあける。(秀)そんな事
 でいひわけをごまかさうと思つて。おいらん。なぐつておあけなさいヨ。(吉)それにやア及びま
 せん。(鳧)にくらしいネ。ピシヤン。(吉)アイタ、。あいたさ見たはとびたつばかり。チイテ
 イ一寸まつたく、暫時休戦條約だ。イヤア。こゝに希代な廣告があるぞ。(鳧)偽事をお吐きなさ

い。(吉)そらこゝに。(鳧)こゝに。○それやアなんの廣告ですエ。(鳧)なんだかこれから讀むと
 ころだ。ハテナ。妙な廣告だぞ。(秀)御自分ひとりで承知して居ないで。早く讀でおきかせなさ
 いヨ。(吉)さらばこれより。エヘン讀み○あけ引ますヨ。

静岡縣士族舊名

守山良右衛門妻

お か く

當時年齢二十七歳

同 女 お そ で

當時年齢三歳

右ノ者事明治元年五月上野戰爭ノ當日不圖見失ヒ候儘今以テ行衛知レズ萬一御心當リ御仁有
 之候ハ、何卒下名マデ御通知被成下度懇願致候或ハ兩人共存命致居ラヌ哉モ難圖候ヘバ
 假令同人ニ面會ハ得致シ難ク候トモ其成行ヲ確定スルニ足ルベキ御報知ヲ賜ハリ候ニ於テハ相
 當ノ御禮可致候也

湯島梅園町○○番地

鈴代つね



(秀) チャ一寸おみせなさい。(吉) ナイ非道いなア。お客さまの御覽なすつて居らッしやるのを。ひつたくる奴があるもんか。(秀) チャ〜。いよく〜おいらん。(鬼) あれかエ。(秀) ですヨ。〇一寸御覽なさいヨ。ホラ守山。ネ。守山でせう。(鬼) さうネエ。それぢやアいよく〜うれしいネエ。トいひつ、鬼鳥は莞爾と笑ふ。(吉) なんだ〜。その守山が何したト。(鬼) ハ、ハ、ハ、ハ、何でもないんですヨ。(吉) ハ、アおいらんの情人と言筋か。(鬼) ハ、ハ、ハ、ハ、人ですヨ。上野の戦の时分に二十七のお神さんのある仁ですから。ちやうごおいらんに似ッこらしい。ハ、ハ、ハ、情人でせうヨ。ネエおいらん。(吉) ヘン。さう利口にやアされたくないヨ。朝ッばらから登樓つてくると。ごうせかういふ目にあふのだ。岸邊があたりで待てるだらう。おれやア今から歸るとするぞ。(鬼) チャ何でお歸んなさるノ。(吉) 何でもい、や。おれが勝手に歸るんだ。(秀) をかしいちやや有ませんか。さうなすつたの。(吉) ナニさうでもないのだ。たゞ歸るのだ。(秀) チャ〜。變ぢやありませんか。今おつらへがきまさアネ。ト二個がしきりに不審がりて。呆氣にとられてと、むれごも。吉住はいツかなきかす。手早く帽子を頭にかぶりて。はや廊下へと飛いだすを。お秀はあわてて追すがりて。引留めんとて悶着せり。もと吉住といへる男は。きはめて嫉ぶかき性なるゆゑ。些細の事をも聞ひがめて。智慧がついた洋犬の子同様。むやみにチン〜をしたが

る質なり。久しく兎鳥の許へは通ひて。多少わるくなく遇られた事ゆへ。自然足しけく通ふうちには。いくらか花柳界の情にも通じて。例の持前の氣取だけは。ちかごろめつきりと減りたりしが。まだ生得の甚助ばかりは。さすがに止められぬ事と見えて。お秀と兎鳥の話の様子を。少し變だと疑念を起して。あるひは守山といふ男は。内々情人か何かであるのでわざと其名前をかっぎだして。聞えよがしにおれの前で。斯くは馬鹿にしていふのであらう。其手はたべぬ。と邪推をなし。歸る〜とジャ〜とばれごも。其實歸りたくもないのと見えて。わざと紙入を忘れた手際は。廊下で立留らむ寸法なるべし。お秀はやう〜に追すがりて。(秀) お待なさいてッたら。マアおいでなさいヨ。晝日中。なんですネエ。(吉) なんですアなんだ。ア、しまつた。紙入を忘れた。取てきてくれ。(秀) サア。紙入をあけますから。マア兎も角も。エ、お出なさいといふに。「折からいでくる以前の源。(源) ハ、ハ、ハ、ハ、吉住さん。大層おはようございますネ。(秀) 源さん。わたしの倅は。實にわんぱくでうはきで。ほんに〜困りきるよ。今もネ外へゆかうと思つて。だしぬけに歸らうとするんだヨ。惘れかへるぢやアないか。おめえ後からおししておくれな。わたしが引張つてつれてゆくから。(吉) 馬鹿ア。おれを山車かなんかだと思つて居やがる。(源) ハ、ハ、ハ、ハ、。方々の藝者衆が引張ますから。なるほぎ山車かもしれませんヨ。

さういはれると恥入る譯だが。實はネ色の困難があつて。(友)ナニ其理由を聞にやア及ばん。僕が却つてお氣の毒だ。(倉)まだ此外にも借用があるが。(友)マアそんな事は廢止にしたまへ。二三ヶ月ばかり逢はなかつたうちに。イヤニ義理堅くなつたぢやないか。(倉)ナニさういふ譯でもないが。トいひかけてなんだかいきほひなく。いつもほどにうきたゝねは。いぜんぼうたうのしりがわれのもちまへにもにすさうおうにくらうして。ほん「守山はもとよりして。頗る Keen eye (慧眼) 人物なさうする故それやこれやにてふさぐとみえたり。早くも倉瀬の腹を洞察し。さすがに笑止なりと思ひしかば。ひそかに臺所へ退きつゝ。下女に酒肴の用意をさせ。また元の座にたち戻りて。學問上の議論より。轉じて時の政黨の得失を論じ。いつしか學校の物語にうつり。繼原の風評。山村のはなし。又は小町田の事なきを論じて。しばらく時刻を移す程に。下女は酒肴の用意を了りて。やうやく盃盤をもちいづれば。(友)サアサア倉瀬。ほんの有合せの不馳走といふんだ。一杯大きいので傾てくれたまへ。これでも君。家内でこしらへた不馳走だヨ。(倉)コリヤさうも。トいつたきりに一寸會釋して盃をうけとる。およそ書生界の人間は。政談もしくは學術上の議論となれば。さながら堅板に水もよろしく。滔々よごみなく演舌すれども。少し世辭が、つた事になると。妙に儉約する癖あるなり。それ交際には社會の大事なり。而して交際は挨拶より成る。挨拶を儉約するは。交際を儉約すると同じこと

なり。交際を儉約して世を渡るは。さうやら人間の名に背くかと思はる。
 ○(あだし)ことはさておきつ。さても倉瀬連作は。守山友芳と酒酌かはして。己に二三行に及びしかば。次第に持前の氣象をあらはし。興に乗じてしやべりたてる。(倉)ナイ守山。君に話して驚かせる事があるヨ。(友)エ。何だ。(倉)此事は早速君に知らせようと思つて居たがネ。財政困難の一件から。君の御羽織を典じてしまつて。持つてくる事が出来ないもんだから。ツイく話までも爲おくれたがネ。其物語の筋といへば。實に妙奇的烈珍。不可思議だヨ。(友)トいふのは。(倉)君白狀してしまひたまへ。(友)チャ何を。(倉)何をなごととほける可らずツ。角海老樓の兒鳥といふプロを。君はいつか見た事があるだらう。(友)ハ、ハ、ハ、何をいふかと思つたら。ハ、ハ、馬鹿な事を。(倉)馬鹿な事があるものか。其プロの身の上に關して。君に密接なる關係があるヨ。(友)はてな。如何いふ關係だらう。成程二年ばかり前の事だが。一度ある人に引張られて。中廊へ遊びにいつた事があるが。(倉)へ、イ。君がいつたか。(友)ハ、ハ、ハ。我輩がいつちやア可笑いかネ。(倉)ナニ然ぢやアないが。それぢやアいよく事實だネ。(友)何が。(倉)兎鳥がいつた事がさ。(友)我輩の行たのは一度ツ切だヨ。(倉)それではいよく疑團氷解。(友)ナイナイ。一個で承知して居る計ぢやア。我輩へは秋毫もわからん。全體如何いふ譯ですか。ト友芳が

不審がりて。倉瀬の面をうちまもれば。倉瀬は覺えず小膝を進め。(倉)すこしノベル「小説」めいた
 説話ですが。トこれより第五回第六回の経歴をかたり。角海老の娼妓克鳥が身の上の事に及ぶ。
 ○元克鳥といへる女は。如何なる素性の者なりやと問ふに。其實の父母はたしかならず。養父は
 往る年世を去りしが。其名を水野貞七といひて。三河豊橋在(吉田と云)の豪農なり。貞七が若か
 りし頃。豊橋驛の遊女と深く契りて。父の勸當を受けたりしが。かくても其迷を得も悟らず。竟に
 其遊女を盗みいだして。遠く江戸表へ出奔なし。前後の辨へも内々に。夫婦氣取にて暮し居り
 しが。元來貯金の多かりしにもあらねば。程なく必至に困窮なし。貞七は或家に下男となりてい
 りこみ。女もある家の下女とはなりしが。不幸の重なるべき時にやありけん。女は其比より病氣
 づきて。梅毒ことごとくふきいだして。もはや奉公もなしがたければ。谷中三崎町の宿元へ引退
 りて。病氣の療養をなすうちにも。貞七は獨り身を粉に碎きて。其藥代はいふも更なり。二人が
 雑用をもまかなひたり。されども其辛苦の驗もなく。女はますます病重りて遂にあへなくなりし
 かば。貞七はガツカリ力を落して。たゞさへ利發つかぬ田舎男が。氣拔の如くになりたるから。今
 まで眼をかけて使ひし主人も。これでは用向が足らねばとて。竟に貞七に暇を出しぬ。されば貞
 七は活計を失ひ。空しく宿元に歸り來りて。更に奉公を求しかぎ。頓には住こむべき家なきの

みか。妻が野邊送の物入なんども。大概宿元より借たりしを。今尙支拂ふべき都合にゆかねば心
 苦しき事限もなし。いつそ再び夜逃をして。一先國元へ立戻りて。父へ身の勘氣を詫てや見ん。
 いかゞすべきとさまぐに。思ひなやめる折しもあれ。明治元年五月十五日俄に上野の義隊と
 官軍の間に戦争起りて。谷中あたりの市人等は。上を下へと騒動なし。其兵難を避んとして。あ
 なたこなたと逃いづれば。貞七きつと思案を定めて。こは屈竟の事にぞある。此混雑に取紛れ
 て。ひそかに出奔なすものならば。宿でもなか／＼悪くは思はじ。親父の勘氣のゆりたる後。世
 話になりたる此人達に詫もいふべく報いもすべし。さうぢや／＼と心を定めつ。まづ宿元を馳出
 しが。身に一錢の貯なければ。一先王子の近在なる知人許尋ねゆきて。いくらか路用を借受け
 んと。又一頻りふりいだせる。さみだれ空をいとひなく。狼狽まどふ老若を搔わけ衝のけ急がは
 しく。谷中下まで走下りしは。恰ど中堂の焼たる頃にて。朝の五ツ前の時刻にやありけん。硝煙
 空に漲りて。彈丸は霰と飛違ふ戦闘最中の事なれば。此處あたりも遠近に。打合ふ及の音聞えて。
 すさまじなんといふ計なし。貞七は一生懸命。とびくる彈丸を避くよりて。落ゆく前に憫むべ
 し。さるべき武家の妻女とも思しき。二十五六の中年増が。彈丸にやあたりし瘡やおこりし。齒を
 くひしばりて古木の根へ。あふのけさまに倒れたる。其傍には女と思しき。三歳ばかりなる一

(思はず)

個の女の子が。臥轉びつゝ泣きてぞ居る。思ひ懸なき有様のいと無残なるに見すごしかね。へ覚えす。傍に立寄りつゝ。見れば婦人は項のあたりを。深く流丸に貫かれて。已に全く息絶えたり。扶けて介抱したればとて。また蘇べくも見えざるから。南無阿彌陀佛と念じすて。心急くまゝ其儘に。去らんとせしが泣號びて。まつはる女の子に憫を催し。さすがに棄てもさりたさに覺えず片手にだき上たる。折しもどつと人波うちて。彼方よりして逃くる落人。鐵砲の音はけしく聞えて。丁々發矢と打あうたる。刃の音さへ聞えしかば。あなやと計にうち驚き。女の子を其處になけいだして。身を翻して逃んとせしが。またもや泣きだす聲きゝては再び起る惻隱心。此儘にして打棄おきなば。人に踏れて殺されやせん。憫然と思へばしかすがに。棄るに忍びず掻き抱きて後の證據と件の女が。帯にさしたる短刀をば。奪ふがごとくぬきとりつゝ。後をも見ずして貞七は。王子の方へと逃ゆきける。恚て王子の近在なる某の許へいたりつきて。事しかく物語りて。はじめて女の子の姿を見るに。身には玉川染とかいふ單衣を着て。平縫の紐長くしめたり。如何なる人の女にやあらん。其容貌も上品にて。愛らしきこと限もなし。また懐劍をも取でて見るに焼刃の可否はわからねども。さるべき業物と思しくして。黒地に鱗形の紋つけたる。塗鞆もまた並々ならず。さては彌由緒のある。武家の妻子ぞと。心に覺れど。手懸りは只そののみ

にて。外に探索せん便もなければ。今更其始末に困り果て。由なき事をせしと後悔すれども。元が慈悲深き性分なるゆゑ。女の子がいつしかに馴れ慕ひて。離れがてにする様を見れば。置去りにして去るにも忍びず。重荷に小附とは思ひながらも。竟に將て行かんと心を定めて。其後五六日過たる頃。王子の知人には辭しわかれて。女の子をほところにかきいだきて。本國三河へと旅立ち。斯て故郷へ歸りて見れば。父は其年のはじめ世を去りて。母のみ病ほうけて在りぞと聞て。胸まづ潰るゝ事大方ならねど。さてあるべきにあらざるゆゑ。人を頼みて詫事なし。家に入ることを許されしかば。それより全く心を改め。頻に家業に出精なし。一年二年と暮す中に。母親は次第に病重りて。明治六七年の頃なりけん。竟に黄泉の客となりぬ。其後或人の周旋にて新に妻をさへ迎へしかど。よくく不運なる性質と見えて。程なく其妻にも死別れつ。そののみならず連年の不作つゞきに。田畑大方は賣しろなし。借財なども次第にふえて。村にも居にくくなりたりけん。家産田地をはじめとして。餘れる家財道具までも。皆悉く賣盡して。三四百圓の金子を得て。またもや故郷をひそかにぬけいで。ことし十三歳になりたりける。養女と共に出京なし。しばし横濱にかり住して。一商法せん心なりしが。是又心に思ふに任せず。爲す事もなく。一月二月。濱に旅寝してありける折しも。俄に西南の騷動起りて。物價の亂高下を生ぜ

し際。こはくながらもすゝめられて。些と米相場に手を出せしが。偶中敷一舉にして。一二百圓儲けしかば。はじめて生たる心地をなし。是なか／＼に。親と子が。困窮なさん緒ぞと。神ならぬ身の悟るに由なく。それより後も機を圖りて時々相場に手を出せしが。流石に運のよかりしにや。利得と所損と比較すれば概して儲が多かりしかば。益相場をやめかねつゝ。一敗一勝一失一得。かくて一二年を過す程に。今より三年さきつかたより。次第に拍子がわるくなりて。爲る度なす度に損失のみ。また、くひまに千圓あまりの。財を空しくなしたるのみか。他におびたゞしき負債を生じて。首もまはらずなりたるより。餘儀なく女を吉原なる。角海老樓へ出かせぎさせ。一時のしのぎをつけたりしが。それより後は浮む瀬なく。貧苦と辛苦に身も衰へ。病むこと半年あまりにして。竟に空しくなりたりしは。二年以前の事とぞ聞えし。恠て後は。兎鳥は是地に由縁の人を失ひ。たよりなき身となりしにつけ。いや慕はしき眞實の。親の由縁のなづかしく。明ても暮ても其事のみ。心に念じて居たりしかど。證據となるは母親が。最期に残せし短刀のみ。其短刀の紋所は外に例を見し事なき。六ツ鱗の紋章ゆる。是をたよりに血筋の人に。めぐり逢はんと此年頃。心に念じて俟折から。圖らず守山友芳が。其友人に誘はれて。角海老樓に登樓なし。此兎鳥を敵娼とし。一夜の客となりたりしを。心ともなく氣をつくれば。不思議や羽

織の紋所が。彼の短刀の紋に似たり。さてはと思ひて尙よく見れば。擬ふ方なき同紋なれば。ひそかに心に喜びつゝ。外に類なき此紋をば。附たるからは此人こそ。いづれ由縁の人なるべし。身の上話をうち明して。尋ねて見ばやと氣ははやれど。流石初會の口重くて。ためらふ中に友芳は急ぎ歸りの支度をして。床にも入らず夜を冒して。止むるも聴かず歸りしかば。手に入る玉を落せし如く。今更おのれが手後れをば。頻に後悔なしたりしが。さて詮方もなき事なれば。只其人のまた來ん日を。神や佛に祈願をして。俟てども何の音信なく。いつしか今年となりたりしに。倉瀬が不思議に同じ紋の羽織を着して來りしかば。こゝに再びたよりを得て。其紋所の來歴より。其持主の素性をさへ。迫りて倉瀬に問ひたゞせど。倉瀬は元來守山とは。さまでに親しき中ならねば。委しき素性をしる由なく。たゞおほろけに返答せしを。兎鳥はいたく本意なく思ひて。何卒守山友芳に。今いちど登樓なさるゝやう。傳へてくれとて手紙をさへ。倉瀬に渡して頼みしかど。例の萬事に放縱なる。氣質なるから其儘にて。今日まで延引なしたりしが。ト語り了りて蓮作は。かたへの酒盃とりあけつゝ。ちよと其舌をばうるほしたり。

第十七回

文意を文字通りにみや賀の兄弟

そとろにコレラ病の報知におどろく

倉瀬は再び言葉をつぎ。(倉)君には全體シスタア「令妹」があつたのか。僕アそんな事ア聞かないから。よもや偽言だらうと思つて居たのさ。手紙は即ちこゝに持参だ。マア兎も角も読んで見たまへ。トいひつゝ懐中かきさぐりて。封じたまゝの手紙をいだして。守山の前にさしおけば。先刻よりして且怪しみ且おどろきつゝ聞居たりし守山友芳は太息と共に手紙をとりあげ。封きりひらき走り読みして下にさしおき。(守)實に思ひ寄らんハンド「傳手」からして思ひ寄らん事を聞くもんだ。成程君のおはなしで見りやア。どうやら其女が妹のやうだが。○君は此事件の來歴をば。まだ御存知でないからして。定めし合點がいきますまい。實は斯くいふ次第でネ。ト上野戦争の際母と妹とを見失ひし其あらしを物語りて。(守)かういふ來歴がある譯ですから。先年新聞にも廣告して。屢其行方を尋ねたがネ。到底無効だらうと斷念して。十分あきらめて居つた所。輒近何事に感觸したのか。ちと舊弊めく話では有が。親父が不可思議なる夢を見て

ネ。それも一度ならば珍らしくもないが都合二度までも見たもんだから。さすが開化主義に化したといつても根が舊幕府の人間だから。親父はいろいろに不審を起して。たとへ廣告損になつてもいゝから。尙一度廣告をして見ようと思つて俄に我輩への相談さ。あんまり馬鹿氣きつた話だからして。いろいろ止だてはして見たものの。實は我輩の心の中にも若しやと疑うてる事があるゆゑ。無効なまでもやつて見ようと一昨日廣告をだした所さ。(倉)へ、い。それぢやアいよゝ事實だネ。こいつア奇妙珍不可思議だ。シテおとつさんの夢といふのは。(守)それやア斯々。斯いふわけで。ト「第八回(八百松)の條にて友定が任那に語りたると同様の筋をものがたりて。(守)さて此夢の事につきては任那も其道理を説明して。おやちを諷したといふ事ですが。勿論正夢のある筈はなし。偶中には相違ないが。君のお話がほとんどであれば。随分不可思議な事件ぢやアないかネ。倉瀬は始終の様子を聞て。頻に憫れて居たりしが。やゝあつてまたいふやう。(倉)さう君の方に心當りがあり。むかうにソウ、マツチへあれほど)の證據があつては。いよゝ兎鳥といふ女は君のシスタアに相違はない。迂遠な廣告をするにやア及ばん。僕が一走りかけていつて。始終の様子を知らせて来ようか。(守)い、エサ。さう匆卒にはやられないテ。成程短刀の證據があつては。十分確正だとは思はれるが。何分それツきりの evidence「證據」ぢやア。まだゝ安心が出

〈役員〉

来ない譯だが。トいひつゝしばら マア兎も角も園田の宅まで。この手懸をしらせておいて。(倉)
 園田といふなア何者だネ。(守)園田は同縣の士族ですが。今ちやア〇〇銀行の(社員)で。我輩とは
 少々縁續きのものですから。今度の廣告の一件に就ても。専ら其男に依頼をしたのさ。蓋し我輩
 の名儀で以て。まさか廣告を出しかねたから。園田の別宅の名儀を借てネ。それで廣告をしまし
 たのさ。御覽なさい。かういふ風さ。トかたへの新聞紙をくりかへして。ア、こゝにはないが。
 アノなんです。下谷同朋町〇〇地鈴代常といふ名儀で以て。恰ど一昨日からだしましたが。(倉)
 エ。鈴代常。鈴代常といふ女は。たしか小町田の。(守)さうさ。よく君は御存じだネ。もとは小町
 田のフハザアの妾であつたが。今年の春の事であつたか。園田が引取つて妾にしてネ。たしか近
 近に本妻に直すとかいふ話。どうして君はお常を御存じだネ。(倉)なにさ。五六日前の晩に下谷
 の摩利支天へ小町田と二人で。ぶら／＼義任(いぬの川)ばたをきめこんだが。其時廣小路で偶然
 其レデイ「婦人」に出會したのさ。何か小町田へは内々にて。話がしたさうな様子が見えたか
 ら。用事にかこつけて外してしまつた。(守)ハ、ア。さてはそれからの事だと見えるが。先刻園
 田がやつてきてネ。いろ／＼小町田の話があつたが。(倉)エ。どういふ話かネ。實ア一昨日から
 如何いふ理由か。酷く小町田が鬱ぎだしたヨ。勿論近來は一體に陰氣だが。二三日は格別變だ

が。そも／＼原因がある譯かネ。(守)大にありです。女さかしうて牛賣損ふとは。昔からいふ事
 だが。兎角日本の婦人は困るヨ。前後の得失を少しも見ないで。たゞ一旦の情に任せて。餘計な
 世話をしたり。周旋をするから。君だからお話をするが。實ア一昨日の晩の事だが。其お常とい
 ふレデイ「婦人」がネ。元が小町田とは別懇だし。ソラ小町田のラアブ「戀着」して居た。エー
 あの田の次といふ藝妓の爲には。所謂シスター、イン、ラウ「義理ある姉」といふやうな關係で
 せう。處で先達ての一件から。小町田は斷然心を決して。サア内心はどうかしらんが。兎に角陽
 面は縁を斷つて。さつぱり顔をさへも見せんといふので。例のシンガア「藝妓」は氣をもみだし
 て。お常に腹の中をあかしてはなして。しきりに周旋を頼んだ所が。お常もしきりに憫然がつ
 て。どうがな工夫をして榮爾を呼出し。妹に逢したいと思つて居るうち。不圖ある所でゆきあつた
 ので。(倉)ハ、ア。それちやア廣小路でゆきあつたのが。(守)すなはち其時の事だらうヨ。それ
 からお常が小町田をすゝめて。それとはいはず何となしに。強て引張らうとした所が。其日は小
 町田が堅く辭して竟にゆかないで了つたところが。一昨日表向に手紙をよこして。わざ／＼小町田
 を招いたので。何か用談でもあるのと思つて。一昨日夕刻からお常の處へ。小町田が一人で出懸
 てゆくと。お常は兼ての目論見と見えて。例のシンガアを呼よせておいて。だしぬけに小町田に逢

せたので。(倉)へ、い。それやア然し。悪氣でした譯ちやアなからう。(守)勿論さうさ。お常は全體情ふかい性分であるのに。例のシンガアは子供の時から。自分の眞實の妹のやうに。大層可愛がつて育たのだから。非常に其苦勞を sympathye [同感] して。是非とも小町田にあはしてやらうと。ほんの實意で以てした事だが。底がさ所謂婦人の仁だ。かへつて小町田の爲にもならねば。田の次の苦勞種もます譯だアネ。(倉)何故。い、ぢやアないか。別に不都合はないぢやアないか。僕が見聞した所に因ると。あの田の次といふ藝妓の如きは。中々ホワイトいふ事にめづらしい女だ。Intellect [智識] も中等以上だし。品行は元來端正だし。殊に取まはしも温藉な方だ。彼なら小町田のワイフ「妻」にしたつて別段不都合はなからうぢやアないか。僕の考ぢやア縁を斷つといふのが第一わからん。何の必要があつて縁をたつんだ。今までだまされて居たといふ事か。又は先方に不實があるとか。或は先方が娼妓であるとか。何とか名譽上に關係があるなら。是非なく縁をきるも當然の譯だが。何も其邊も心配がなけりやア。斷然縁をたつは無用の話だ。随分勅奏の官員中にも藝妓を妻にしてる奴もあるぢやアないか。總て徳義のスタンダアド「標準」は當時の輿論で定まるものさ。何もわざ／＼と西洋の徳義を。東洋へ應用するにやア及ばん。それほどシンガアに實意がありやア。今といふ譯にやアいくまいけれど。行末ワイフ

にしてしまふがい、やネ。兎角小町田は苦勞症だから。些細な褒貶を意に介して。快々鬱々として居るから。僕ア自然たくて笑止でたまらず。已に先達ての晩の如きも。僕が小町田を強誘してネ。田の次を聘うとまでした位さ。(守)ハ、。さう君のやうにいつてしまやア。まことに世の中は渡りやすいが。實地はなか／＼さういかんヨ。輿論が徳義の標準を定むるとは。君がいふまでもない事だが。マア能く考へて見たまへヨ。たとへ我國の輿論だからとて。藝妓を上流にはおかないからして。藝妓をワイフなどにする者があると。兎に角賞賈はしない方だヨ。それも町人かなんかでありやア。人も彼是とはいはないけれども。苟にも學者だとか博士だとか。將た政治家とかいはれる身分で。身元もわからない藝妓のたくひを。直に其ワイフにしたといへば。目ひき袖ひきして笑ふが人情。よしやインテレクト [智識] が高からうが。其品行が正しからうが。そこらは一寸見にはわからぬから。玉石混淆して批評をするのが。我日本人の持前だアネ。況んや田の次とかいふ女は。いつかも小町田に聞いた所では。たしか拾ひ子の親しれずで。何の某の子だかもわからず。假親をこさへるのは容易な事だが。また翻つて考へて見ると。其親元のしれないなんぞは。最も世間體のわるいはなし。それも小町田が出世をして。十分身をたてた後であれば。また question [論題] がかはる譯だが。まだ社會へも出さるうちから。藝妓を

斯々だといはれるのは。大に小町田の爲に取らざる所だ。我輩六七ヶ月以前までは。君と同じやうな考があつて。女に貞實な心さへありやア。藝妓でも娼妓でもかまふことはない。納れて妻にして可なりと思つて。已に小町田に意見をすることも。幾分か其主意をいつた事があつたが。社會へでかけてから大に悟つた。社會は決して我友ぢやアない。ほとんど讐敵ともいふべき程。我には薄情なもんだからして。たとへ少々な事といへども。我身に弱點を有して居るのは。蓋し氣のひける基本になるから。處世の大障礙といはざるを得ずだ。小町田の場合に就て考へて見たまへ。例の芳原の一件なんざア。すなはち小町田の「あぶない時」さ。幸ひ新聞にも載せられないで。曖昧模糊の間に風評が消えたは。實に小町田の幸福だけれども。あれが世の中になられて見たまへ。どのくらゐ。小町田の將來の。といひかくるを急にうちけし。(倉)マア待。イエサ。マア待たまへ。君は相かはらず。考へすぎるヨ。兎角君の論は大業過るヨ。人生概して五十年。其五十年の其間にやア。失策もあるし成功もあるし。恥もかく。名譽も得る。七轉八起。一榮一辱。棺に白布を蓋ふにいたつて。初て其名譽が定まるんだ。たとへ二度や三度恥をかかうが。何のそれしきにかまふもんか。芳原の一件なんざア。最も取るに足らん。よしや新聞に出されたからつて。誰が其事に氣をとめるもんか。人が氣を留るやうになりやア。すなはち我

黨の本望だが。中々社會は記憶がわるいヨ。一年そこいらも月日が経過と。すぐに前の事アわすれてしまふ。日本は全體便宜な國さ。名譽も大業には得られぬ代りに。辱も大けさにはかゝない國だヨ。たとへば一事業で失敗してもネ。二年か三年か経た後に。再びそろりツと頭をもちやけて。何か新事業に手を出して。まんまと其事を仕遂げた時にやア。嘗に前辱を雪ぐばかりが大に名譽を博し得べしだ。日本ぢやアどんな事をしたからつても。終身辱を受ける氣遣ひはない。況んや一女子の事なんざア。なにもそれほど心配して。腦を悩ますにやア及ばん事だ。トしやべるを守山おしとよめて。(守)ハ、。また倉瀬君の激論がはじまつた。成程我輩は考へすぎるが。君は極端に走り過ぎて。兎角ラジカル「過激」になるから困るテ。結局君の論の主意といふは。榮辱相較べて見た時になつて。榮譽が多ければそれでよいと。どうやら其様に聞えるがネ。それぢやア所謂任天主義で。放縱手段といふものぢやアないか。As far as possible「できるだけ」手段を講じて。なるべく失敗を避るやうにし。成るべく蹉躓をせぬやうにして。而して我ゴウル「目的」に達するのが。もと世を渡るの定道ぢやアないか。我に不利なりと知りて之を避けず。我に害ありとしりて之を採るは。わざ／＼荆棘を繁茂させて。前途を塞がんとすると一般。随分べらぼうな迂濶なはなしだ。成程一旦は恥辱を受ても。後に名譽をさへ博し得れば。之

を雪ぐことも容易であらうが。もし其恥辱がなからうものなら。ますく其名譽が高からうぢやアないか。已に蒙つた恥辱でありやア。之を苦にするのも馬鹿氣た譯だが。いまだ蒙らざる恥辱であるなら。之を避るのには至當な道理さ。已に小町田が田の次と約して。全く婚姻でもした譯なら。何も彼是と妨げはせんが。現在當人が大に悟つて。田の次と斷縁しようとして居るのを。わざわざ横合から干渉をして。再び雙方の心を動かし。縁を絆がせんと試るのは。誠に間違つた次第ぢやアないか。故に我輩は。(倉)ヲツト待。マア聞たまへ。君は喋々と辯じるけれども。兎角獨斷の議論で不可ヨ。榮辱相償ふとか何とかいふのは。マアく御道理と云ふは。〔許諾〕として。扱其次の議論の如きは。僕ア決して服さないヨ。第一ロジック〔論理〕が間違つて居る。いゝかい。君は藝妓輩をワイフ〔妻〕にするのは。處世の障礙になる。恥辱だといふが。其理が判然とはわかつて居ない。然るに其模糊たる前提を掲げて。直に斷論を下さんとするから。到底正論とはいはれない譯だ。マアサ圖式にして之を示せば。といひながら吸物膳の上へ箸に汗をつけて圖式をかき。(倉)ソラスうなるだらう。

(甲) 恥辱は身を立るの障礙なり。

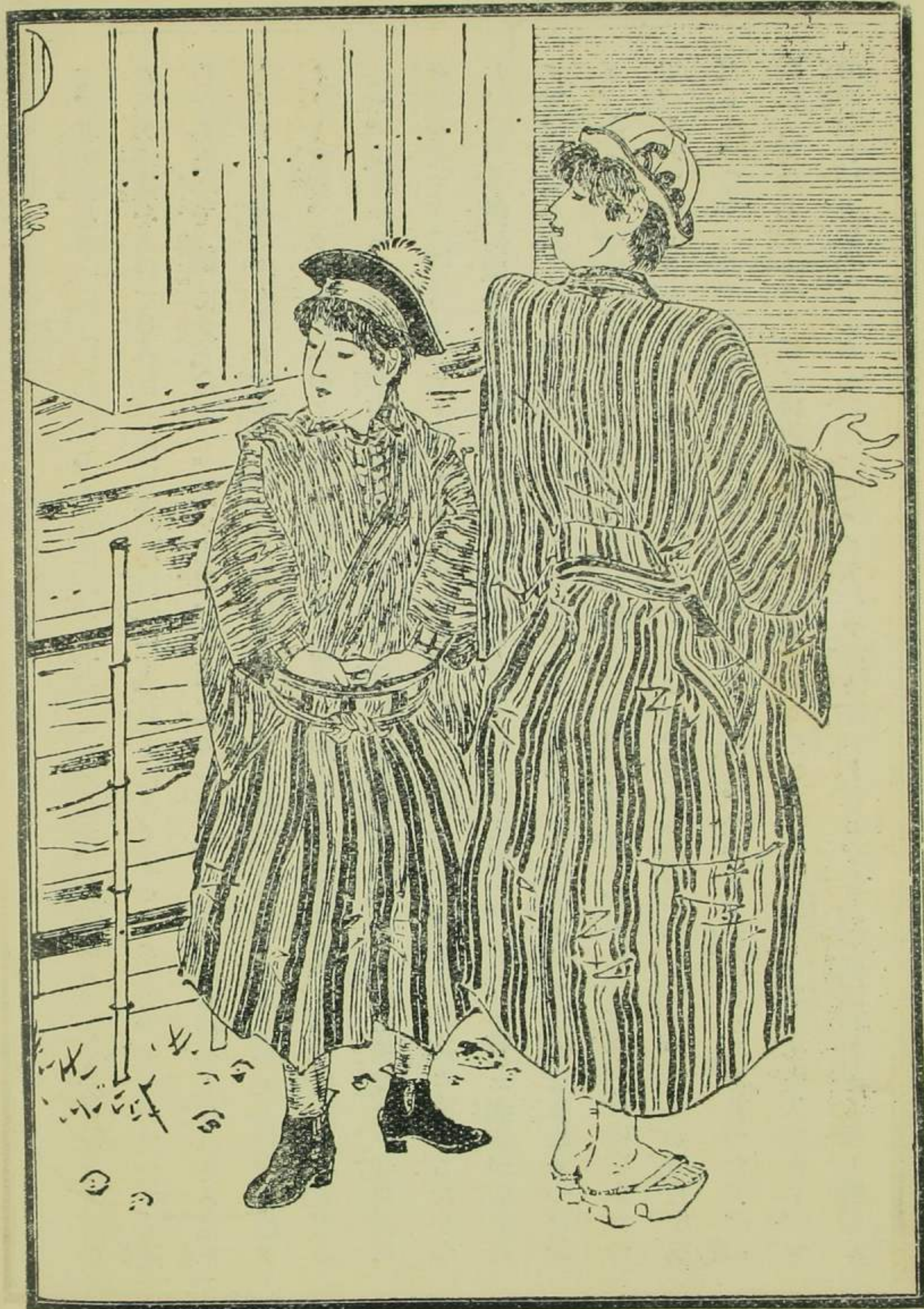
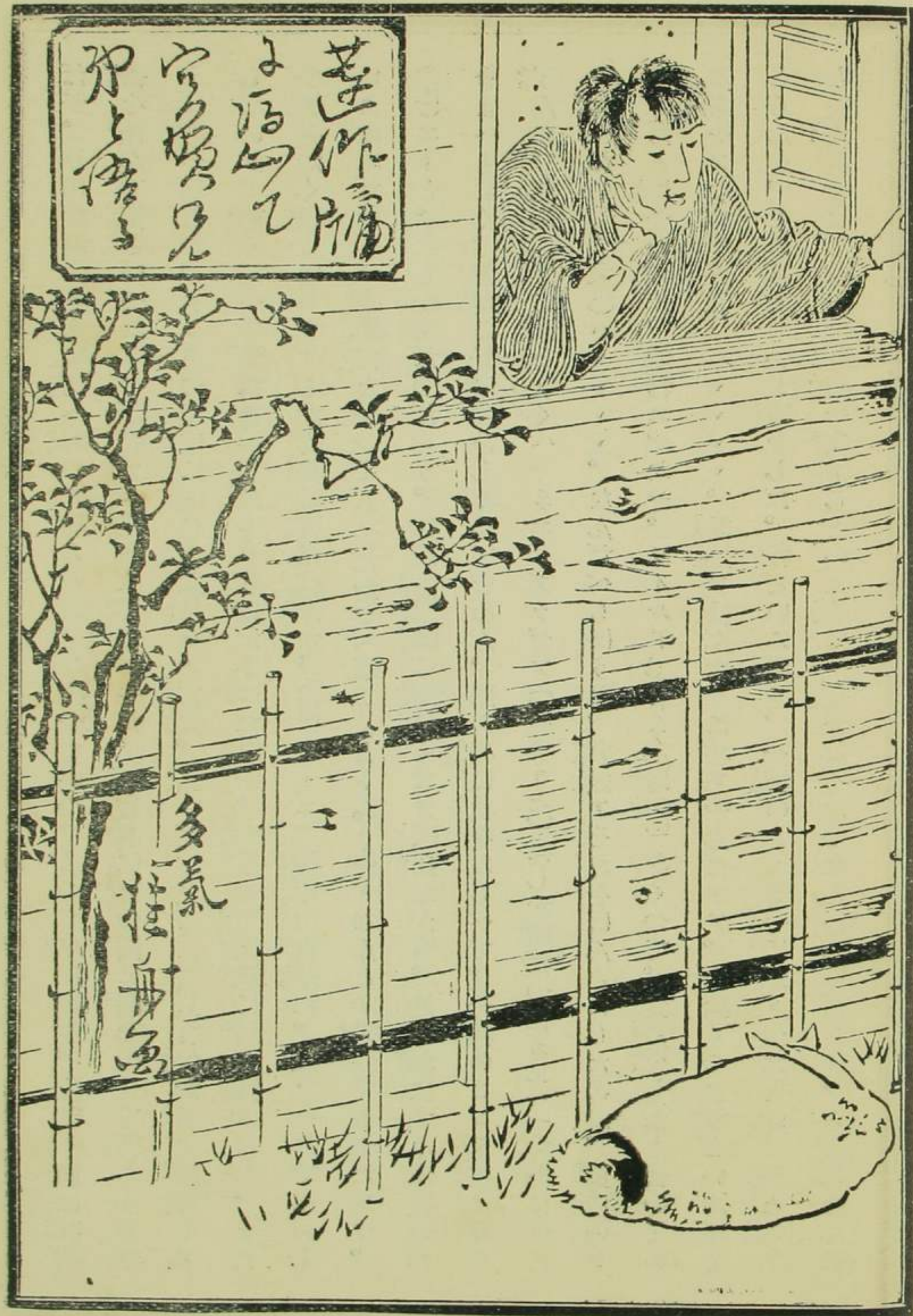
(乙) 藝妓をワイフにするは恥辱なり。

(斷論) 故に藝妓をワイフにするは身を立るの障礙なり。

ネ。斯う三段法に書いて見ると。如何さま御尤と聞えるやうだが。又備と考へて見ると。此(乙)の文が頗る不明だ。何故シンガアをワイフにすると dishonor〔恥辱〕になるのであるか。此ブルウフ〔證明〕が出来ない以上は決して。(守)ハ、。大變な三段法ができたね。其乙文の證明の如きは。已に先刻もいつた筈だが。尙一度 concrete に「實例をあけて」いつて見ようか。トいふ折間の襖を開きて。書生と覺しき一個の男が。(書生)先生。(守)何ですネ。(書生)御親父さまが。只今御着京になりました。(守)エ。親父が参りましたか。アノ。こゝへ。(書生)ハイ新橋から直にお出になりましたさうで。(守)それやア存外に早かつた。只今直に参りますから。アノ戸田書生なるべし。にさうおつしやつて。奥の六疊へお通しなすつて。(書)ハイノ。畏諾しました。ト書生は襖をたてきりて起てゆく。倉瀬は守山に對ひ。(倉)おとつさんが御出京なされたんかネ。(守)ハア。何です。色々家計上の都合があつてフハザアを呼迎へる積にしまして。(倉)ぢやア何ですネ。まるでお轉居の都合で。(守)さやうさ。兎も角も今年中には悉皆移轉うといふ考ですから。それ故フハザアを呼寄せましたが。尤も今度の出京の理由は専ら先刻の妹の一儀で。(倉)成。成。さうですか。それぢやア色々御相談がございませう。僕アもう退堂と爲よう。

(守) マア待たまへ。其シスタアの一件ぢやア。或は君の手を勞しなればならんもしれんし。且はフハザアにもあつてくれたまへ。純たる天保度の人間だから。逢つても面白くはなからうけれども。頗る書生風の氣性だから。却つて我輩より氣は若いヨ。決して氣のつまる老爺ぢやないから。マア兎も角も逢つてくれたまへ。シカシ。一寸失禮して。まづ挨拶をして。來ませう。トいひつゝはたゞと手を鳴らせば。書生はふたゞび襖をひらきて。手をつかへつゝ面さしいだす。(守) アノ尾田木さん。お銚子をかへてネ。そして何か食る肴を。(倉) モウ僕ア澤山です。僕の爲なら廢止たまへ。(守) マアいゝヨ。悠然やりたまへ。○それぢやア一寸失禮。○お銚子を早く。なるべく熱いのがいゝヨ。ト萬事ぬけ目なく世話をやきて。やがて彼方へいでゆきけり。○後に倉瀬はたゞ一個。ほんやりとして坐り居しが。酒も漸く飲あきたるに。先刻よりの贅議論で。いくらか話が理に沈みて。酔も次第に醒たるゆゑ。ますく退屈に困りはてて。一分一日の思ひをして主人の出来るを待てをれど。俄に急要務のできしと見え。書生が銚子を持參しながら。其斷をいひなどす。いつそ歸らんかと心に思へど。主人に沙汰なしに立出んも。あんまり書生風に過るといはれん。しかす今暫く待て居んと。そろく立上りて床の間に近寄り。僞物の山陽の半切を詠めつ。また仰むいて額を見れば。こいつは眞物の鐵舟居士なり。軸も額も見了り

て。其筆法をさへに語じたれど。主人は此時まで出ても來らず。倉瀬は五ツ六ツ欠伸をして。かたへの小窓をあけて見れば。前は横町の往來にて。稀々に人も通るさまなり。天下の尤物でも通行かしと心で。戯に念じながら。ふツと目を開きて向うを見れば。何か語らひつゝ歩みくるは正しくおのが塾の學友なる宮賀兄弟にてありけるゆゑ。倉瀬は急がはしく顔さしいだして。(倉) ナイ宮賀。ナイ何處へゆくか。ト呼かけられて匡は驚き。(匡) ナヤ倉瀬君か。妙な處へ來てるネ。(倉) ナニ妙な處な事があるものか。こゝア守山の事務所だア。「宮賀の弟透は一寸倉瀬に會釋をして。(透) さうだ。こゝは守山君の處だ。(匡) さうか。僕アちつともしらなかつた。(倉) 全體何處へゆくんだ。(匡) 君も大方向するまいネ。繼原の病氣は。(倉) エ繼原が病氣だツて。如何したんだ。僕ア久しく繼原を尋ねなかつたが。(匡) 僕もネ。ちつとも知らなかつたがネ。今日外田の處へ手紙がきたのさ。其手紙を見た所が。野猪とか何とかを食つたのがあつた。それで虎レラ病にかゝつたといふ……。(倉) エ。虎レラだツて。眞實か。いゝ加減な虚喝だらう。(透) それでも確にさう書いてあつたヨ。ネエ阿兄。(匡) ア、正にさう書いてあつたヨ。山村にも傳染したとき。僕ア山村はフレンド「友人」ぢやアないが。繼原は同縣の友人だから。一寸尋ねたいと思つて居るんだが。虎レラぢやア少々閉口したヨ。(透) 手紙は外田宛で來て居るん



だが。外田が叔母さんの宅へ歸つて居るから。今持つていつて遣つて來たのさ。(倉)外田は其端書を読んで何といつたネ。(匡)ナニ外田は留守だつた。「倉瀬は窓の闕に顔をのせて暫し不審さうに考へ居しが。やゝあつて匡に向ひ。(倉)ナイ宮賀をかしいぢやアないか。何か君ア讀違やアしないか。能く考へて見たまへ。虎レヲ病にかゝつた者が。平氣で下宿屋に居る譯もなし。また手紙をかく譯もなしさ。しかし其端書は代筆か。(匡)イ、エ。織原の自筆だ。(倉)それではいよいよ虚喝だ。全體何と書いてあつたか。(透)コウツト。あゝなんとか書いてあつたツけ。(匡)エーと。たしか斯だつたらう。○前略誠に面目もなき次第ながら。例の輕はずみ前後のわきまへもなく。無暗に野猪食ひし報はてきめん。兩人共に枕をならべて。一種のコレヲ病に罹り了んぬ。乞ふ速に來りすくへ。ネエ。ブラザア「おとうと」たしか斯だつたネエ。「倉瀬は覺えず吹い出して。(倉)ハ、、、。なんだべらほうな。君達アそれをほんとにしたのか。眞成のコレラだと思つたのか。(透)エ。なぜ。ワイルド、ボウア「野猪」をくつて。食傷したと書いてあるぢやアないか。(倉)ハ、、、。君達アほんたうに坊ちやんだなア。野猪くつた報といふ事をしらんか。それはネ。いゝ事をした。報といふ事さ。一種のコレヲ病にかゝつたとは。些と六かしい洒落ではあるが。財布の腹下しといふ心で。金がなくなつたといふんだらう。どうだそれに

相違ないぜ。といひつゝアハハハと打笑へば。匡はさすがに間のわるさうに。覺えず顔の色を眞赤にせしが。やうく打笑ひて。(匡)僕もネ。さうだらうかと思つたけれども。あんまり文章が眞地目らしいから。もしやほんとかと誤解したんさ。こいつアほんとに大笑ひだ。アハ、、、。三人が異口同音に打笑へば。倉瀬は向うを打見やりて。(倉)ナイ、宮賀一寸見るべし。アハ、、、。(匡)なんだ。 (倉)あそこへコレヲ病がやつて來たぜ。アハ、、、。(透)ヤ成程。織原君がきた。 (匡)チャ。風評をすりやア影だ。ナイ、織原ア。○織原は只一人。今しも此巷路へ入來りて。たちまち三人と面見合せ。(繼)ヤ。これは倉瀬君。久しく御疎濶。こゝは全體だれの宅だネ。(倉)守山の宅さ。今ネ君に就て奇談があつたぜ。(匡)ナイ、倉瀬。モウ其話は御免だ。 (倉)ハ、、、。何の藏すにやア及ばんこつた。あゝいふ間違ひは随分あるよ。中々愛嬌になる話だ。(繼)ナイ、どういふ理窟だネ。(倉)二階から目薬ぢやアないが。窓から其面をだしてのたまはくぢやア。ちつと惜しツほい種だけれど。仕方がない語つてきかせん。うツけたまはれツ。ド、ン。チヒュヒュウツ。(繼)相かはらネ元氣だなア。僕の奇談たアなんだ。窓の外の立ばなしも。敵手が尤物かなんかであれば。随分下さらない方でもないが。ワキが倉瀬ときた日で見えた日ぢや。蓋し頗恐といはざるを得ずだ。僕は色々の大

事件があつて。今がた學校へいつた處が。外田は下宿して居るとの事故わざ／＼こつちまでやつて来たが。外田はアント「叔母」の處に居るかしらん。(匡)僕もネ今しがた尋ねた所だが。今朝から何處へか出掛て居ないヨ。(繼)チツヤ／＼そいつは閉口。トいひながらいつになく悵然として勢なし。倉瀬は繼原の面を詠めて。早くも其意を推察なし。(倉)チイ繼原。どうしたネ大層塞いでる容體だネ。今も君がかいた端書についてネ。よつほど奇的烈な間違があつたぜ。それは斯様々々しか／＼で。ト宮賀の勘違をものがたれば繼原も覺えホうち笑ひて。(繼)ハ、ハ、ハ、ハ。あんまり落語めいた間違だネ。しかし我輩の現今の境遇は。ほとんど疫病にかゝつたも宜しくだ。マア君。一通りきいてくれたまへ。語るも面なき事ながらだが。近來山村の周旋に任せて。汗牛堂といふ書店からして翻譯物の依頼を受けてネ。凡そ八九十枚なぐりつけたが。其原稿料大にたまつて總計二十圓程になりけりさ。尤も其うち七圓だけは。山村ヒムセルフ「彼自身」の翻譯料だ。(倉)へ、イ。感スに勉強したネ。Necessity is the mother of invention「必要は發明の母」ぢやアない。エーと industry「勉業」の基かネ。ハ、ハ、ハ、ハ。(繼)處がそれからが大事件さ。一昨日其金をうけとる筈だが。マア兎も角も前視に一杯久しぶりで傾くべしといつて。一昨々日の夕方に。ネ。(倉)ハ、相かはらず急激黨だネ。(繼)ナニサ。我輩はいかうといはんが。マウンテイ

山村の事。めが酔つたまぎれに。頻に我輩を誘ふので。(倉)ハ、アそれぢやア出掛たな。(繼)ツイ據なく引張られて。さるところへ久しぶりで進撃したので。とう／＼六七圓浪散財ヨ。(倉)イヨ。ヘイル／＼「おめでたう／＼」。(繼)ヘイル「おめでたう」所の騒ぎぢやアない。翌日ほん平として歸つてくる。と後からお馬はついてくる。お金はお手々に二錢なし。イヤハヤ急々如律令さ。直に馬と共に同行して。汗牛堂へとかけつけると。主人は國元に急用ができて昨日出立した後の祭。何のいひ置もない事故。山車をあける譯には。イヤあける物もだすわけにも。わたしの獨斷ではできません。ト番頭善六めが逃口條さ。そんな違約をされては困ると。二時間舌の根をただらしてネ。やつとこさ。六圓だけ請取つてネ。それで附馬をおつかへしたが。サアそれからがいよ／＼困却。兼て一昨日を期日として舊い借財をいひ延したり。一寸時借をしておいたから。一昨日になつて來るとも／＼。陸續幕なしに責かけたる。Heterogeneous「種々雑多」の借金取。せめて一圓敷二圓もありやア。一寸口塞ぎをする譯だが。純然ヌウ、バア「錢なし」ちふ有様だから。イヤハヤ我輩も實に弱つた。外田に貸した金が三圓ばかりあるが原が青樓での立替だからまさか返せともいはれないから例の端書だけ出しておいたがそれもきのふまでは音沙汰なし。山村はするい奴さ。一昨日晝すぎから逐天して。どこへいつたか行方なし。我輩 俊寛の役をつとめ

て。二階に悄然と藏れてゐると。そろ／＼下宿屋の山の神が。三尺五寸程の書出シを持つて。ど
うかお拂ひをとやらかすぢやアないか。前門に虎をごまかせば。後門に狼婆ア。流石の我輩も
弱り果て。一寸湯屋までと。ごまかしておいて。まづ／＼戸外までは飛だしたが。懐中元來
自ら錢なし。湯錢の準備さへもない譯だから。餘儀なく煙艸屋で時借して。今日の晝飯はバツ
クにソバ屋さいふこき。ですまして。用もない所をぶらり／＼。一まづ outside なるべし事を叩
いた上で。去就を決しようと思を定めて。わざ／＼下町まで出掛てきたのに。それさへ越中とは
情ないネエ。斯くあて事の外れるとは。此勘平の運の末か。チエ、残念や弱つたなア。(倉)それ
やア定めし弱るだらうネエ。僕も御同様の窮の字だが。待たまへ。僕に少しばかり目途があるか
ら。少々其邊で待て居たまへ。今守山に會釋して。僕も戸外へ出て。トはなしのうちに宮賀兄弟
(匡)僕ア外へ回りたいから。兩君こゝで失敬するヨ。(繼)それぢやア失敬。(透と匡)失敬々々。
トいひすてつゝ。二人は彼方へ立去りけり。

此内以前の此家の書生は。臺所よりいできたりて。倉瀬の背の方へ近づきつゝ。頻にモシ／＼と
呼びて居れども。倉瀬は繼原との話にまぎれて。少しも其言葉が耳へ這入らず。(倉)それぢやア
其處に待て居たまへ。「此内書生は傍へよりにて。又モシ／＼と呼かくれど倉瀬は少しも心づかず。

(倉)いゝかア。今直にゆくぞ。トいひさま俄にふりかへりて。走りいでんとしたる程に。たち
まち書生と額合せして。(書)アイタ、、、。(倉)イタ、、、これは失敬。(書)へ、、。どう致
しまして。寔にお待せ申しました。どうぞあちらへ。

第十八回

春ならねども梅園町に心の花の開けそむる
親と女との不思議の再會

ちかごろ風俗改良の説盛んに興りて。上は婦人達の結髪むすみの風より。下は日本下駄ふでんの不便利まで。
人のあけつらふ世の中とぞなりける。寔や風俗は人情の表徴なり。風俗の異やうなるは。人情の
異やうなるを示す。文明相競へる今日こんにちにありては。風俗改良の事。實に等閑に見すべきにあ
らず。目下有志者が相つとめて。衣装其他をも改良なさんと。骨を折らるゝのも故あることな
り。されども人心のさま／＼なる。往々改良の主意をば誤り。只管粧服の龜なるを排して。之を
野蠻となし。之を未開と譏り。無暗に美麗なる洋帽をいたゞき。滅多に高價なる洋服を被り。質
を八に置き。苦に澁を重ね。以て得色たがるしれものもありけり。是豈滅法なる間違ひにあらず

や。装束の價貴き。元來文明の徴標にもあらねば。開化の招牌にもなりがたかるべし。然るにいたづらに美を衒ひて。三四百圓の財産をば。平生身に纏ひて意氣がる族は。蓋し装束の何物たるをば。未だ通知せざる野暮天とやいはまし。夫れ装束といへる者は。自然天稟に享得たりし。容姿の足らざるをば補ふが爲に或は醜きをば掩はんが爲に。加役に借用ふる方便にしあれば。強ち華美ならんを要せざるなり。言葉を換へて之をいへば。衣服は見る人の心を動かし注意を牽く爲の者にあらず。寧ろ見る人の心持をば。不快になさざらんが爲の者なり。されば他人に見えたる時見苦しからざる様粧ひ得たらば。それにて事足れりといふべきのみ。色の黒き人白き人丈の高き人低き人。肥満たる人瘦たる人。其性質はいろ／＼なれども。詮する所は人おの／＼。其身に適合ふやうに粧服するをば。其本分ぞと思ふべきなり。生中に奇を好みて。異様未曾有の粧ひをなし。華奢無比類の衣裳を着して。揚々誇る氣色あるが如きは。僮服の似合ひたるに劣りて醜し。往昔外國に懶惰者あり。曾て説をたゞいていひけるやう。人は極端だに粧ひ飾らば。最中は醜くとも苦しくなし (Extremes justify the means)。ナンノカンノと勝手に附會。頭に美麗なる帽子を戴き。足に高價なる長靴を穿ちて。襪襪を體に纏ひてあるきしかば。見る人目ひき袖ひきして。嘲り笑ひしとか聞たりしが。此しれものいひける事。またく道理なき事とも思えず。總

じて物事には急所のあるなり。其急所だに修め得たれば。其餘は大概にして棄置てもすむべし。しかして其急所の何處にあるやは。其人品によりても異なるべければ。容易に取極るは難けれど。概して胸部より上の方にあるべし。男に就て之をいへば。帽子なり。襟飾なり。帽子襟飾が華麗ならんか。其餘はそれに應て華麗なるべし。されども。下の方へ赴く程。其度を低うするも都合なからん。畢竟恰好が第一なるゆゑ。甚しき不平均は最も忌避すべき事ぞと思はる。かく急所のみを大に飾りて其餘を漸々に儉約せば。容姿おのづから見易うして。自然にイヤミなども尠かるべし。之を要するに性來の。醜所短所をのみ専ら飾りて。其餘を大方にして置きても不可なし。我國の俗が。粹な容姿などといふも。或は粹とすべき所を探りて。其處のみいと巧に粧ふをいふ歟。所謂粹な人の粧服を見るに。衣服必ずしも高價にあらねど。たゞ何處ともなくイヤミ氣尠く。いとふさはしくも思はるゝぞかし。英の傳奇家沙翁(シェイクスピア)が嘗て臺辭のうちにて。

「御身が囊裡に貯金あらば。あくまで高價の衣裳を求めてこれを身に纏ふもさまたげなければ。わがおろかしき妄想をば見すかされぬやう粧はれよ。よしや驕奢に粧へばとても。華奢にすぐるはいと醜し。蓋し衣裳は動もすれば其人品をば表すものゆゑ。肚を見られぬ用心し

て。身に適ふやう粧はれヨ。云々。

と綴りし文句は寔に是金を殺して美服を着する。野暮が頂門の一針なるべし。さはいへ翻して之をいへば。衣裳は衣裳なり肚は肚なり。一二歩退いて音羽屋を氣取り。グツト反身にて考ふれば。兎角假焼刃は。脱やすきものなり。衣服で一旦は瞞着するとも。到底あらはるゝは自然の沙汰なり。よしや洋服きて博士ぶるとも。假令束髪して貴女めかすも。お腹に見識が乏しからん歟。表裏と内外とが相かなはず。刀鍛冶の勉強ならねど。トンチンカンにて恰好をかしく。自然見ツともなう見ゆるぞかし。娼妓はいかほどに素人めかして。頗る上品なる衣服を着して。遊ばせ言葉を吐くといへども。一目瞭然お里がしれ。其心さまも見らるゝならずや。他なし其肚のうちが下劣なるゆゑ。いかほど其外面を飾るといへども。思うちにあれば色外に現る。けに争はれぬ表裏の反對。なまなか品格にあらぬ衣服をきるのは。見にくき物のうちの随一とやいはれん。時に十月の半なりしが。是も其種類の人間とおほしく。身装と品格とが折あはねば。流石に御當人は得意のかほつき。新らしい黒塗の人力車で。ところは下谷梅園町。とある格子戸の家のまへへ。二人相乗にてガラ／＼ガラツ。

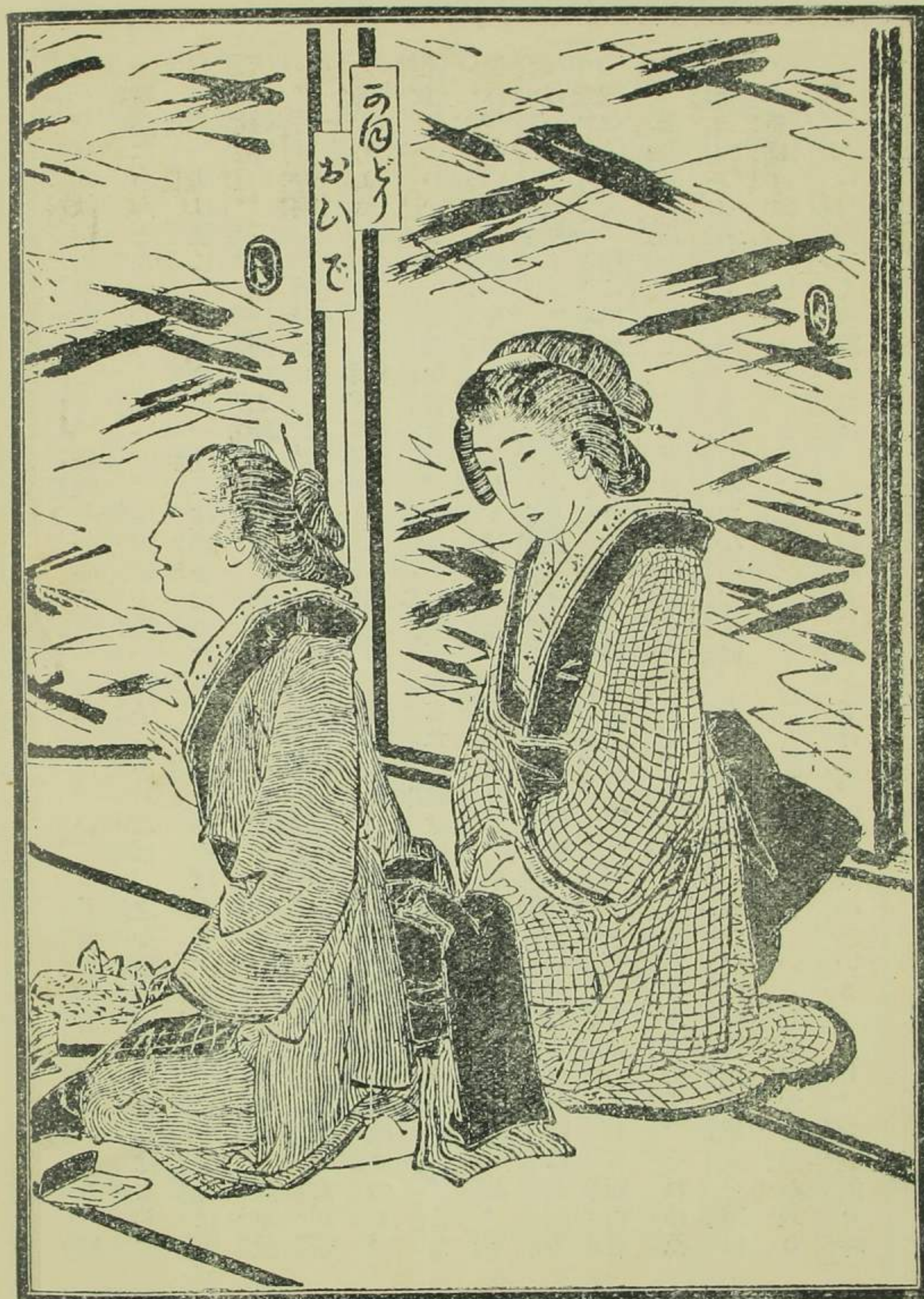
○一個は年のころ二十あまり。瘦がたにして丈高くといふ容姿にあらねど楚々などとは稱かぬ

れど。當世むきの圓顔出にして。愛嬌淋漓として。たつぷり備はり。眼は可愛くして口ほどに働き。口はやさしけれど家庫をも呑むべし。色は雪白とはまるらねども薄化粧の匂ひいと麗しく。頗る御前的の品物なり。額は若きに似すぬけあがりたるを。鬢のゆるいにてごまかしたる。當時流行のガツクリ島田。其髪飾は如何にといふに。根掛はお定まりの珊瑚の上等。利休牡丹の櫛に本甲の小釵。前へは小形の玉のついた銀簪一本。上被は紺地茶の萬筋のお召縮緬。藍の縦横縞八丈の下被を被て。銀鼠の襟のついた。中形縮緬の長襦袢といふ打扮。丹線梵字の丸帯をお太鼓に結んで。後圓疊附の衤に。黒天の鼻緒の附た駒下駄をひっかけ。ちよろ／＼そろ／＼と歩む足元。どうやら輕さうに思はるゝは。果して如何やうなる原因による歟。下駄より重いものをつねづねから。穿なれたものとは思はるれど。何を穿なれたか急にはわからず。今一個は年の比四十あまり。よく／＼目を留めて再検査すれば。四十四五歟とも見らるゝ化物。瘦形にして背スラリツと高く。鼻筋通り色白く。眼にすこしばかり銳威あるゆゑ。どこやら音羽屋の年増めきて。少々スゴミある兎附なれども。むかしは嘸かしと思ひやらる。今は老木の櫻木にて。色香ふたつながら消失せられたれども。たゞの素人とは受取られぬ。曰く蓋し附きの怪し人物。銘線の小袖に。南京繻子に博多の腹合せの帯を結めて。絲織の前垂を結びし容體。いよ／＼を

かしらしき人品なるが。手に絹張の蝙蝠傘と。長さ一尺ほどありぞと見えたる。ふくさに包みたる品物をもちたり。

○件の兩人は車を下りて。やをら格子戸を押開きて。御免なさいヨ。トいひ入るれば。ハイと簡單な返辭をして臺所よりかけいでたるは正しく此家の下女と見えて。年比十五六の小女なり。○被爲入まし。どなたまさでございます。年増の女は小腰を屈めて。(年増)エー。あの私共は水野と申します者でございませうが。鈴代お常さまと申しますのは。こなたさまでございませうか。(下女)ハイ手前でございますが。(年増)それでは直接お目にかゝつて。是非ともお話し申したい事がございまして。○アノ新聞の廣告の事につきまして。色々うけたまはりたい事がございまして。水野と申すものがまるつたとさう被仰つて。(下女)ハイ。しばらくお待ちなさいまして。トいひつゝ不審さうに二人を詠めて。下女は奥の方へ立去しが。程なく再び出來りて。(下女)どうぞ此方へおあがんなさいませ。(年増)さやうなれば御免なさいませ。アノお民さん。マアおあがりなさいませ。ト後をふりかへりて順を譲れば。年若き娘は言葉にしたがひ。年増と諸共に奥へ通る。こゝは客の間と見えて八疊敷なり。床には華山の山水を掛け。花瓶には菊の花を挿したり。總て座敷のさま所謂雅俗折衷にて。月琴と琴をうやうやしく床の片隅にたてかけたたるは。

どうやら娼妓のお座敷らしく。絨氈を一面に敷つめたるは。いくらか洋風の客の間めいたり。庭も洒落たらんと奥ゆかしく思へど。生憎硝子張の障子にあらねば。之を窺ふべきたよりはなし。右の方一間は壁にして。残る一間には襖をはめたり。おしきあそばして。ト持いでたる敷物は唐天の綿澤山。二人は一向にお時儀をして。わざ／＼敷物をよけてすわりつ。下女が持出る煙草盆を。一寸會釋して引寄せつ。年増の女は懷中より。懷中煙草入を取りだして。若き方の女が帯の間よりぬきいだせる。象牙の筒つきたる黒棧の女煙艸入を。わざ／＼おのが方へ請取りつ。煙管をとりだして煙艸を含ませ。やがて吸附てかなたに渡せば。彼方は請取て吸終りつ。こたびは身みづから煙艸をつめて。ふたゝび火を點じて吸をはりて。やをら年長たる女に與へぬ。年増は右左を見回しながら。煙草を息長く吸終りて。ハタと煙壺へ叩き入れたる。其時に右の方の襖を開きて。靜に出來るは鈴代常にて。以前は小町田の權妻なりしが。今は故ありて銀行社員。園田某の妾となりて。已に近きほどにおもてだちて。其本妻にもなるべき身の上。それゆゑ其眉毛もそり落して。おつと昔じみた小形な丸髷。ぢみな銘線の袷衣へ。薩摩飛白の單衣を重ねて。唐繻子の丸帯をキリ、ツと結び。粹妓の果ぞとは思はれぬまでに。いとしとやかに進み入りて。二人に打向ひて會釋すれば。二人は諸共に頭をさけて。初對面のあいさつより。定規通り時



分柄の口儀などあるべし。此うち小女が次の間より茶菓子を持ちづることもあるべし。年増は少しばかり膝を進めて。(年増)さて突然に伺ひまして。定めて御不審でございませうが。一昨日讀賣新聞を拜見いたしました所。たしか此方さまのお名前。尋ね人の廣告が出て居ましたので。此方に心當がございます事ゆゑ。直接に御様子を取らうとわざ／＼窺ひました事でございますが。(常)チャ／＼。さうでございますか。新聞の廣告の事。只今もつけたまはりましたゆゑ。さだめし守山の一條だと私もぞんじました事でございますが。それでは何かお心當が。(年増)ハイ。其には色々込入りました譯柄がございまして。といひながら年若き女を見かへり。(年増)このお方は。アノ只今では吉原の角海老樓のおいらんで。兎鳥と申しまして。本名は水野民と申しまして。又わたくしは此おいらんの梳櫛で。お秀と申します者でございますが。アノ守山亮右衛門さまとおつしやるお方は。此方さまの御親類でいらつしやいますか。「お常はさてはといふ顔色にて。覺えず小膝をすませつゝ。(常)ハイ。其守山とおつしやるお方は。私共の少し縁つゞきの方でございまして。ちやうど今日も新聞の事。宅へお出なすつてでございますが。それぢやアおまへさんがお袖さんの。「お秀は飲あましたる煎茶を飲ほし。(秀)ハイ。其お袖さんと申しますのは。といひつゝ、兎鳥を一寸見かへり。(秀)此お民さんと申しまするのが。其お

袖さんの事でございますが。斯う唐突に申しましては。定めておわかりにはなりませんまい。これにはいろんな來歴もございまして。證據も手前方にございまして。どうか直接にお目にかゝつて。おはなしたうございまして。ならう事なら守山さまに。といへばお常はうなづきつ。(常)幸ひ奥の間においでですから。早速さう申して参りませう。たたんとしたる次の間より。(守山友定)イヤ様子はわかりました。直々來歴を取らうと申せう。といひつゝ友定が立いづれば。此方の二人は席を改め。兎鳥は兩手をつき。(兎)はじめましてお目にかゝります。アノわたくしは。といつたツきり跡は口の中でモグ／＼。何をいふのか少しもわからず。(友定)ヤ。これははじめまして。といひつゝ、兎鳥を右視左視。またお秀をば右視左視。(友定)あらまし次の間にて承知いたしました。シテお民さんとやらの來歴は。どういふ譯かな。なんぞ證據があるなら見せてもらひませうか。エ。其證據といふは。マアどんな物ぢや。マア出してお見せなさい。ト入齒もる聲いそがはしく。膝をすゝめて問ひかれば。お秀はしづかに會釋をなし。(秀)それではあなたさまが守山亮右衛門さまでいらつしやいますか。(友定)ハイ左様ぢや。わしが亮右衛門ぢや。もつとも今の名は友定といふが。マアそんな事はあとも宜しい。あのお袖イヤお民さんとやは。今まで何處に如何してをつたのぢや。そしておふくろはなくなつた

か。(秀)サ。その來歴は長い事でございますヨ。マア一通りおはなしをいたしませうト。

これより第十六回にて倉瀬が友芳へ物語りたると同様の筋を語る。此物語のうちには、折々友定が其折々の事情に關して、いろ／＼問をかくる事あるべく、兎鳥みづからが其間に應じて。さまざま答辯する事あるべし。お秀と兎鳥はかたみがはりに。其來歴を語り終りて。

(兎鳥)只今申しましたやうな次第で。とう／＼角海老へまゐりまして。(秀)一昨年以來此事ばかりを。始終氣にかけてでございますが。別に手が／＼りもございませす。たつた一度一昨年の春に。トいひかけしが心附きて。少し口隠りしお秀の様子を。其と察してうちうなづき。(友定)たしか一昨年の春の頃に。伴が友人に誘ひせられて。一度まるつたといふ事ぢやが。(秀)ハイいらつしやつたさうでございますが。直に座敷ざりで。ネエおいらけいひかお民さん。お歸りになつたのでございましてツケネエ。(兎)ハア。(秀)そのやうな譯でございしますので。さつぱり手懸りもありませんでしたところ。先日御息さまのお友達とやらで。倉瀬さんとおつしやるお方が。同じ御紋のついたお羽織をめして。(友定)それらの事は昨日伴からききました。シテ證據になる品といふのは。マア其品をみせさつしやえ。トいひつゝ兎鳥の兎をながめて。頻に膝を進ませれば。お秀は携へたるふくさを開きて。一個の短刀をとりいだして。(秀)これはお見覚えがござ

いませうか。トいひつゝ友定の前へ直せば。守山は手に取あけ。(友定)これやア相違のないわしの家の物ぢや。元はわしの母の守がたなであつたを。妻につかはしたものであつたが。トいひつゝ涙を目に浮べて。兎鳥の兎をうち見やりぬ。お秀は懷中より古錦襦の。ちひさき巾褌をとりいだして。これをも友定の前へ直して。(秀)これはお見覚えがございませうか。袖ちやんの腰にそへてございまして守袋でございますが。(友定)チウ／＼。これも見覚えがある。たしかに友芳が守袋と同じ切レでこしらへたのぢやテ。どれ／＼。トいひながら手に取あけて中を改め。(友定)まがふ方なきお袖の臍の緒。かういふ證據があつて見れば。疑もなくおまへは。トいひかけておほえす嬉し涙はや兩眼に溢れきたるを。そつと手の平にて押拭ひて。(友定)大層苦勞をさせたノウ。(兎鳥)それぢやあなたが家尊君でございませうか。ト片手を疊についてさしうつむく。お秀は嬉しげに聲くもらし。(秀)コレサ。おいらん。アノお袖さま。モットそちらへいつて。おとつさまにお手をお見せなさいな。ほんに／＼わたしやア嬉しくつてなりませんワ。ネエモシ。御新造さま。お常。わたしやアネ。ちやうど今年の三月から。このおいらんの處へあがりましたから。悉しい御様子はいふ事なら何故早ツくからおいひなさらん。證據がない事なら仕方ないが。假に

も證據物がある譯だもの處々へ手を廻して尋ねたなら。ちつたア手懸りができさうなもの。早くしらなかつたが残念だ。ト種々愚痴をこぼしましてネ。ヲホ、、、。このわらひはなんでもわらふそれから心がけてをりますところへ。ソラあの新聞の廣告でございませう。二人で飛あがつて嬉びましてネ。急いでうかゞつて見ました所が。かうすつぱりと事がわかつて。(常)ほんとに斯申しちやアなんだけれども。芝居か艸冊子かにありさうな事で。○お袖さん。さぞお嬉しうございませうネエ。(貞)ハイ定に夢の様でございませう。(友定)實に何にしろ芽出たい事だト彼一句我一句。互に別後の物語。なきつわらひつゆくりなき。此對面を祝しあふ。親子が心いかならん。拙き筆には得も盡さず。看官宜しく察したまへ。

是より話すこし前に戻る。白鳥お秀等が友定に向ひて其身の來歴を語り初めたる時刻と思ひたまへ。

守山友芳は倉瀬蓮作と相乘にて此家の門前迄來し時。(友芳)タイ〜五助のこころなるべし。こゝだ〜。(倉)ヤア中々頗酒落の宅だネ。見越の松に黒板塀とは。すつかり御註文とできて居るネ。只恨らくは格子戸がまづいな。もちつと氣取つてくれ〜ばい〜に。このうちくるまやばかぢな(友芳)五助ツ。○中へ這入つてまつてるがい〜ぞ。どうせ今日は手間がとれるから。○サア〜

倉瀬はひるべし〜。(倉)マア君から這入たまへ。(友芳)それぢやア失敬。サアすつとこちらへ。○チャだれかお客があるな。女下駄が二足と。ハテナ誰がきてゐるんだか。○頼まう。(下女)ハイトいひつゝ臺所より立いで。(下女)チャいらつしやいまし。先刻からおとつさんがお待兼で。(友芳)誰かお客があるかい。(下女)ハイ。たしか吉原の。(友芳)エ。(下女)大層別品さんでございますヨ。ホ、、、。(友芳)エ。それぢやもしや角海老の。(下女)よつと御存じでございませネエ。アノそれでございますヨ。(倉)チャ〜それぢやア何だネ。(友芳)モウ廣告を見たのかしらん。(下女)たしか新聞の事で參つたさうでございます。只今守山さまが其女中にお逢なされる所でございます。(倉)そいつア奇妙だ。早くあがつて見たまへ。(友芳)マア待たまへ。それではト。タイお清さん。おれの來た事は奥へはしらせんで。そつと臺所から通してくれ。少しおれの方に考があるから。(下女)ハイ〜承知いたしました。それぢやア此方からおあがんなさいまし。(友芳)倉瀬君。こちらからきたまへ。少し陰に居て様子を見るから。(倉)こいつア面白くなつてきたぞうト。倉瀬は芝居でもする氣になつて。頻に獨で面白がり。守山友芳の後について。下女の案内に随ひつゝ。臺所より奥に通る。

○此奥の間といふは。即ちお常が居間と思しく。押入ありて床の間なし。近頃新に買求めたといふ

簞笥。一方の壁に對してたち。今ぬぎすてたといふ銘線の半纏。衣架の片隅にぶらさがれり。繪入新聞の讀殻は。綺麗に綴合せて。歌舞伎新報の合本と重なり。木地の針箱と相並びて。簞笥の上安置せらる。長火鉢の邊猫こちよけに眠り。三味線懸るところ鏡臺燦然として存す。子なき世帯故といひながらも。取亂したる風情もなくして。流石に奥ゆかしう思はれたり。下女は茶をつぎてさし出しながら。(下女)モシあなた。こゝはあんまり取散らして御座いますから。奥の四疊半へいらつしやつて。トいふをうちけし手をもて制して。(友芳)ナイ。静に。隣の話を書いている處だ。矢張りこゝでなくちや。都合がわるい。〇いゝからかまはないでほつておきな。トいひつゝ頻に耳をそばたて。倉瀬と何かさゝやきながら。直に次の間なる客座敷の。兎鳥お秀の物語を。息をこらして聴居たり。友芳は小聲にて倉瀬の袖を引うごかし。(友芳)ナイ倉瀬。今いつた話の様子は。少し君の話と違ふぢやアないか。君のきのふ話したところでは。守袋はなかつたといふぢやアないか。(倉)さうナ。成程。少し違ふヨ。いつか兎鳥が。(友芳)コレサ。小さい聲をしていひたまへ。くらせば聲を。(倉)アレニネ。(友芳)きだして。そんなに氣取らなくツてもいゝ。(倉)色々な事をいふ人だ。なにも氣取りやアしない。プロに直接にきいた時には。たしかに守袋はなかつたといつた。(友芳)こいつア少々不審だな。ソシテあの女は梳櫛かネ。我輩

がいつた時には見えなかつた女だ。(倉)さうだらう。ありやア今年から來たんだもの。(友芳)一癖ありさうな面をしてるネ。(倉)どうして。中々喰へない品物さ。(友芳)さうだらうヨ。あの面がまへぢやア。ト二人はしきりに耳語うなづき。襖を細目に押ひらきて。彼方の様子を窺ひ居る。やゝあつて友芳は再び倉瀬の袖を引て。(友芳)ナイ短刀を持出したぜ。成程宅の紋と同じことだ。(倉)チャ。巾褌を取だしたヨ。(友芳)チャ成。古錦欄だ。〇守袋に相違ないぜ。(倉)なるほど。こいつア少し妙なやうだが。然し其事は兎も角もシイ「あの女」はたしかに君のシスタア「妹」に違ひないヨ。こなひだりleit「物語」した様子なんざア。けつして偽言たア思はれんもの。(友芳)さうネエ。君にきいた話の様子はやまさかあの女は偽でもなからう。只をかしいのはあの年増だ。トいひかけしが息をのみて二人もろとも身うごきもせず。只一心にかなたの話に。耳かたむけて窺ひるる。

○折柄またもガラ。格子戸開きて入くる客あり。下女取次いでこなたへと。招する人を誰かと思れば。是なん讀者が發端にて。たゞ暫しが程見受けたりし。彼の銀行の社主なりける。三芳庄右衛門といふ人なり。三芳は年にも似ぬ氣輕な人ゆる。遠慮もなくつかつかと奥へ通る。もつとも此家は其以前は。三芳が所有せし家なりしを。ちかごろ故ありて社員の園田へ。そ

つくり貸與へし事とぞ聞えし。守山友芳は急がはしく。形を正して會釋をなせば。三芳も急がはしく禮を返してひそめに聲を。 (三)モシ。友芳さん一寸。トいひつゝ。そつと友芳の袖を引て。此方の縁側のほとりへ來りて。何やら暫しが程打さゝやけば。友芳は聞く事毎にうちおどろき。(友)それぢやア先刻鳥八十で。(三)わたしや意外だからおどろきましたヨ。それゆる途中から園田にわかれて此方へ推かけてまるつた譯だが。マア兎も角もお任せなさい。私が一應あひますから。

○倉瀬は始終ほんやりと。二人が様子を打見やりて。合點ゆかねば黙々の天神。兩手をついて火鉢の傍。つくねんとして居たりけり。三芳はやがてつかつかと襖のほとりへ立寄つゝ襖をさつと押開きて。友定お常に一寸會釋し。お秀に向ひて。突然と。(三)お秀久しぶりだのう。

第十八回の下

前回いまだ終らざれども。暫く其話を中絶して。同日同時刻の他の物語にうつる。【看官其心して讀みたまへかし。】

○紅葉のすぎし昔は柳橋と。肩をならべた空蟬の。意氣地と張でしられたる。花の巷も此頃は。

たゞ金を見て眼のかはる。淺まし猫のすみどころ。たてば芍薬すわりては。牡丹畑と唄女の。仇の姿を其儘の。異名ぞいとゞ雅びたる。ペラだにあれば四海みな。同朋町の藝者巷。其濁江の泥水に。染まぬ蓮と清き名を。江一格子の一構。内ぞゆかし軒先には。神も佛も一様に。惠みたまへとゆふだすき。かけてぞ禱る提燈の。紋ぢらしにはあらねども。さていろ／＼な人心。蛇の目の丸き容あれば。井けたの如く角立て。腹たちばなのねち上戸。石榴の赤き實なくて。天狗團扇のフラ／＼と。たのもしけなき座敷でも。稼業大事と一面に。野暮も無粹も春風の。柳に受る柳村屋。是なん田の次が住居なる。時は三時を過たれども。物思ふ身はなかくに。誰がためにか飾粧り。たれが爲にか梳らん。田の次はひとり悄然と。身を箱火鉢によせかけて。ながめがちなる折しもあれ。格子戸ガラ／＼急がはしく。開けて入來る一個の佳人。(女)田のちやんうちかい。「田の次は覺えず莞爾うちゑみ。(田)チャ誰かと思つたら小年姐さん。どうしたんですエさう／＼しい。(小)聞かして喜ばせる事があるから。大急ぎでかけて來たんだヨ。チャ母堂は居ないの。(田)ア、今しがたお湯へいつたの。(小)さウ。ア、苦しかつた。早くお茶でもおくれなネエ。(田)ほんとに姐さんはいつでも元氣だヨ。チャなんだらうネエ。新聞を驚握につかんでサ。(小)サア此新聞の事について。おまへに喜ばせる事があるから。それで馳て來たんだアネ。

ホラ此間の一件ネ。御覽ヨ。とう／＼新聞にだされたヨ。氣味がいゝぢやアないかネエ。マアちよいと讀んで御覽ヨ。トいひつゝ投だす「いろは新聞」。田の次はとりあけおし開きて。(田)何ですとエ。此間の一件だツて。それぢやアあの辨吉さんの。(小)ア、。(田)チヨイと何處に。(小)アレサこゝだアネ。とさし示せば。田の次はたちまち眼をとめて。小聲ながらに讀もてゆく。其文言はいかにといふに。

ものいふ花をうへ野下。同朋町の大あねえ。山に五百年海に五百年。都合千年屋の辨吉といふばらがき猫は。追ひ／＼霜枯に向ひたるに。兎角風の荒が烈しくして。頗る下漁なるをかこつ折から。兼々さしみだとか馴染だとか。多少來歴ある自稱通人。おこゝろ吉住とかいふ代言さんが。圖らず久し振りでかけてきたゆる。是奇貨居べしと爪をとぎたて。まんまと待合へくはへこみて。チン／＼おたのの眞最中。どつと時ならぬ風の音に。二個はあわをくつて逃だすて。吉住は誤つて。裏二階の階子を踏はづして。眞さかさま頭に大怪我の大イタ／＼。辨吉猫は直に拘引。是も十圓の大イタ／＼。時分柄定におきもじさま。

(田)チャ／＼可愛さうに。すつかりだされたのネエ。(小)ナンノ可愛さうな事があるもんかネ。いゝ氣味だアネ。もつと不斷からの穴を穿つて。長く面白くかけばいゝに。「いろは」のにしちや

ア珍らしく端折ツてかいたヨ。探トウがゆきとどかなかつたのかしら。(田)さうネエ。辨吉さんの是非はほんとにこんなこと所ぢやないワ。(小)さうとも／＼。ホラいつうかの醫學校の書生さんの一件なんぞは。(田)さう／＼。何とかいつたネ。あのお客は。(小)たしか野々口とかいつたツけ。トはなしの折柄格子戸をば。またガラ／＼と引開けつゝ。(男の聲)チヨイと伺ひます。柳村屋田の次さんは此方でおいでなさいますか。「田の次は立出て障子をあげ。(田)ハイ。田の次はわたしで御座いますが。トいひつゝ其人の姿を見るに。年の比は四十五六。曾て見たことのない人物。衣服は總て二子づくめ。言語といひ。恰好といひ。どう見てもたゞの町人とは見えす。なんでも吉原か根津の邊の。貸座敷などの人間と見えたり。(田)わたしが田の次ですが何か御用で。トいはれて其男は。田の次の面をばしばし打守りて。覺えずうちゑみ。(男)およしさん。モウお忘れなすつたらうネ。わたしは大工の源作ですが。トいふに此方も打驚き。眼を定めてよく見れば。見覺のある額の切瘡。さてはと驚く田の次より。彼方はしきりに悦びつゝ。一別以來の口儀をのべ。其恙なきを祝しなす。田の次も喜び且ついぶかりて。(田)マアお珍らしいこと。兎も角もおあがんなさいましな。それぢやアおはなしが出來ませんから。(源)わたしがかうしてやつて來たには。色々來歴もある譯だが。マアゆつくりと話ませう。それぢやア眞平御免

なさい。ト上にあがりて火鉢のそば。小年に一寸會釋をして。すわれば小年はたちあがりて。
 (小)田のちやん。それぢやア後にくるヨ。(田)マアいゝぢやアないか。介意やアしないヨ。ほん
 の内輪のお客だから。(小)わたしも少し用があるから。イ、エ。また後にでなほしてこようヨ。
 左様ならツ。と棄せりふ。小年はいそがしく會釋して。小棧かゝけて立歸りぬ。田の次は急須
 の茶を酌て。源作の前にいだしなから。(田)寔に思ひよらすお久振で。あなたにお目に懸りまし
 たんで。何からお話をしていゝやら。「源作はしきりに頭を掻きて。(源)いやどうも面目ない次第
 で。こんな様體になり下つた譯ですが。大概わたしの身の上の事は。(田)ハア。大略はうけたま
 はりましたが。寔にもうとんだ事で。(源)イヤハヤ一生の心得違ひで。赤いべゞまでも被ました
 がネ。やつと放免になつてからも。流石に元の所へは歸りにくく。車を曳いて見たり。配達夫にな
 つて見たり。色々さまゝの眞似をしまして。擧句の果が貨座敷の若い者。よしやおまへさんの
 所在がしれても。面のだせたア義理ぢやアないが。今がた思ひよらす鳥八十の二階で。おまへさ
 んが藝妓になつて。此處に居なさるのを聞いたからして。是非とも知らしたいと思ふ事があつ
 て。(田)チャ／＼さうでしたか。それぢやア妾の身の上の事は。(源)すつかり今しがた聞きました
 がネ。わたしの方ぢやア今日が今まで。○斯いつちやア縁起でもないが。おまへさんはなくなつ

た事と思つてネ。○尤もさう思ふも無理はない譯で。先月の中頃であつたか。思ひよらす二年振
 で。桶川の友達にあつた所が。其友達がわたしにいふには。あのお芳ばうといつた娘は。可愛さ
 うに六七年あと。家をかけたして東京へいつたが。それツきり行方かしのいふ事だ。大方
 おめえを便にしていつたのであらうに。おめえが居ないから。力を落して。氣の小さい子供心
 に。思ひつめて死んだのではないか。と斯う友達がいひやすからネ。成程事によるとさうかもし
 れねえ。ア、貧すりや鈍すると下世話にもいふが。心にもない心得違ひで。女房ばかりかお芳ば
 うまで。ア、可愛さうに罪な事をと。悔んで見た所が後の祭り。せめて是からは身を慎んで。と
 思ふは氣ばかりで身は治らず。殊には居る所が獸商賣。悪い水にやア染やすく。けふまでグズ
 グズして居やした所が實は譯があつて娼妓の伴で。○唐突に斯いつても。おめえさんにやア解せ
 なからう。わたしが今居るのは中廊の角海老。樓に兎鳥といふ娼妓があるがネ。其娼妓の身の上
 の事についてけふ大切な用事があるので。わたしが伴について出てきやしたが。先刻中食をしよ
 うといふので。廣小路の八十へ登つて。おいらんやしんぞと三人でおまんまを喰て居ると。隣
 室に二人連のお客があつてネ。これも中食をして居るやうすさ。聞ともなしに聞いて居ると。其
 話はおまへさんの身の上の話ヨ。娼妓もしんぞも氣がつかないが。わたしにはそれぞと氣がつい

たから。聞耳をたてて全然聞取。是ぢやアかうして居られないと。おいらん新造にやア虚言を吐いて。八十から出ると其儘に別れてやつてきやしたがネ。あんまり不思議な事だからして。よく氣を静めておききなさい。喫驚しちやアいけねえぜ。トいひつゝ小膝を進ますれば。田の次は何とも解かねつゝ。(田)不思議な事だとおいひなさるのは。マアどのやうな事ですエ。ト覺えず眉根を擧ますれば。源作は莞爾と打笑み。(源)ナニ氣づかうには及ばんこと。おまへさんの出世の門口。これも平生おまへさんの心掛がいゝからして。天道さまのお恵だらう。悉しくいやア長い事だが。ざつと搔摘んで話しませう。ト咳拂ひして源作が。説いださんとする折しも。湯よりあがりて表より。今歸りくる田の次の老母。いと大儀さうに格子戸の。闕をやをらまたぎながら。(母)イヤどつこいシヨ。チャ／＼無用心な。なんだなア。格子戸を開放しにしてさ。ガラガラピツシヤリ。

是より話また前に戻る。

さる程に。三芳庄右衛門は。間の襖を押開きて。ツト客の間に立出つゝ。お秀に言葉をかけたたりける。思ひよらざる振舞に。お常は更なり友定まで。合點ゆかすとふりかへる。中にもお秀はふりあふむき。顔見て喫驚色を失ひ。たゞチャマアといつたきり。逆も得やらすさしうつむき。穴

へも入たき風情なり。此體を見し兎鳥も。共に面の色を失ひ如何に成行く事やらんと。思ふ氣色のあらはれて。さしうつむきたる半襟が。縮緬ぶるへにふるへるとは。ちと六かしき警ぞかし。庄右衛門は従容と。お常の傍に座をしめつゝ。再びお秀に向ひていふやう。(三)思ひ出せば十五年。はや一昔となつたる故義理人情をも忘れた手前は。モウ見忘れたかと思ひの外。おれを見覚えて居るといふは。流石に手前も人間並。其性根ならちつとやそつとは。條理がわかるまいものでもない。今更ふりい事をかつぎだして。不埒を責たところが後の祭り。過さつた事は詮もない譯。また二ツには老年をして恥かどやかしく。昔時の是非をば若いお仁たちに聞かせるのも。どうやら間の悪い詮義だから。昔はむかし今はいま。スツカリ帳消シとしてしまふが。只おれの目にとまつたからには。少々聞たどさにやならない事が。○手前はお新を何處へやつた。イヤサ女はどうしました。聞けば全次郎はあの騒ぎで。とう／＼殺されてなくなつたとやら。トいひかけかたをみやり。このお常さんといふ婦人は。あの全次郎の實の妹。兄の放埒と手前のお庇で。いろ／＼さまざまの苦勞艱難。今ぢやア立派としたお細君だが。此お常さんの物語で。手前の不所行は。一から十まで。すつかりおれの方にしれては居るが。たゞわからぬのは女の成行。それも目が醒て考へれば。全く全次郎の種とはしれたが。兎も角陽面はおれが女。あらまし成行をきくのは當



然。一々はなして貰ひませうか。實は今しがた。こゝの旦那と事なり。少し商用で浅草までゆき。ちよつと中食をしようと思つて。上野の鳥八十へあがつて居たところ。手前は大方氣がつくまいが。おれは手前たちを見掛た故。ハテナ素人ぢやアないやうだと。何心なく襖の間から隣を覗いて見て思はず喫驚。直にひつとらへて女の事を。と實は其時には思つたけれども。いくらか園田さんの手前もあれば。暫く様子を窺つて居ると。小聲ではなす故にしかとはしれねど。たびく梅園町といふし。また守山とか。鈴代とか。こゝの町所をしやべつて居るゆゑ。いよくますく不審でたまらず。園田さんにも委細をはなして。猶も様子を窺つて居ると。手前はちは食事をすまして。梅園町まで車を備つて。直に出掛てゆく様子だから。これには譯のある事であらう。もしや先達て風評にきいた。新聞廣告の一件ではないか。守山さんの關係か。と心附いたゆゑに。其旨をば園田さんにもおはなしして。少々氣にかゝる事もあれば。と途中からしておれは別れて。今こゝへきて聞いて見れば。手前は此節では貸座敷の梳櫛をして居るとかいふ事だが。全體女にはどうして別れた。其譯明細にきゝませう。ト膝を進めて問ひかくれば。テモ不思議なる對面や。と驚く友定覺えすも。歎息つきつゝ默然たり。お常も始終の三芳の言葉に。始めてお秀の履歴を知り。扱は我兄全次郎が。三芳の眼を忍びくゝに。いひかはしたる女子といふ

のは。此年増にてありけるか。と且驚き目惘れて。只茫然とお秀の面を。打まもれるのみ言葉もなし。兎鳥もまた先刻より。お秀の背後にひきさがりて。三芳の言葉を聞居たりしが次第に面色土の如く。さしうつむきつゝ言葉はなく。只時々にお秀の面を。盗むが如くながむるのみ。一室俄に蕭然として。あなたにかけたる柱時計の。音のみ高く聞えける。

○お秀は重さうなる頭を擡けて。やうくにいひけるやう。思ひがけなき旦那さまに思はぬ所でお目にかゝり。何とお詫をしてよろしいやら。寔にお面目もございませぬ。今更どのやうにお詫をしたとて。六日のあやめ。十日の菊。なまなかだくしう申しましては。結局申譯のやうにも聞えて。かへつて失禮でもございませうから。旦那さまのお慈悲にあまえて。くだくしうは申しませぬ。又お常さまとやらにも。○寔に申譯もございませぬが。トいひかけるを三芳は打消し。(三)そんなくだらない事をいつても。今更取返しなるものではない。此方の聞たいのは女の身の上。また二ツには手前の來歴。どうして貸座敷へ奉公したか。逐一かいつまんで話すがい。(秀)それをお話し申しますれば随分長々しい事ですが。トいはんとしたる其折しも。間の襖を押開きて。ツト立出る守山友芳。(友芳)イヤ其履歴は聞くには及ばん。妹の所在も母の行方も。モウすつかりとわかりました。嚴父君も三芳さんも。御安心なすツて下さいまし。トいはれ

て驚く友定。三芳。友定は進みいでて。(友定)女の所在はわかたれども此お秀どのの履歴をきくのは。(友芳)イヤ其處に居る兎鳥とやらは。尋ねる妹ではございませぬ。其女子こそ三芳さんの。(三芳)エ。(友芳)サア令嬢でございます。トいはれて彌驚く友定。お秀は覺えず色をかへて。(秀)エ。何とおつしやいます。それぢやアあなたはおいらんをば。アノ。お妹子で……(友芳)ハテ盗人たけくしい。證據人はこちらにある。ナイ源作さん。おまへ此處へ來てはなしてやんな。ト襖の彼方へ聲をかくれば。ヘイといらへて次の間より。田の次を伴ひ立出る彼の源作の姿を見るより。アチャと驚く兎鳥お秀。互に面を見合すのみ。言葉はなくて尻退する。事の不思議に友定。三芳。お常も共に惘れ果て。皆一同に源作田の次。又友芳の面をのみ。打まもりつつ茫然たり。(此段の結句第二十回にいたりてわかる。)

第十九回

全篇總て二十回脚色もやうくに
塾部屋へ倉瀬の急報

静寂とせし塾部屋の。廊下傳ひに入來る少年。けふ出來たての洋服姿。とある一間の障子を開き

て。うちを覗きて會釋をなし。(少年)小町田君どうだね。御病氣は。「机によりかゝりて。書を読居たりし小町田は。ふりかへりて。(小)チャ。宮賀君か這入たまへ。モウ全然癒のさ。(宮)それやアいゝネ。トいひつゝ窮屈さうに片膝たてて坐りながら。(宮)君のブレイン「腦」が平癒つたと聞いちやア。此間の復讐をしなくちやアならん。(小)チャ復讐とは何んだ。(宮)ソラ。干渉論の續きさ。(小)ヘン。もうあの議論は廢止たまへ。コントの糟粕を荷ぎだしたツて晝餅だヨ。(宮)いゝや今日は決してまけない。此間は君が病氣だと思ふから。まけておいてやつたんだ。○それはさうと。昨日任那から手紙が着たが。君と連名だから持つて來た。相替らす中々 Interest-ting「おもしろい」だヨ。マア読んで見たまへ。トいひつゝボツケツト「かくし」をかきさぐりて。西洋紙の Letter「てがみ」をとりいだす。(小)此間寄送してから間がないやうだに。どうも筆まめな男だネエ。今度は何を書いてよこしたかね。先達ては大變な慷慨だツけが。(宮)さうさ先達の Letter には。頻に Oxford (大學)の整頓してゐるのを稱めて。日本の學校の悪口をいつたツけが。今度は少し其反動の氣味と見えて。多少悪口がまざつてるやうだ。始の處は廢止で。マア此邊から読んで見たまへ。(小)へ、い。いや書いたく。相替らす長いぞく。トいひつゝ手紙を因云。此手紙の文章は横文の筈なれども。讀者の爲に煩はしからむと思ひて。故意となだら

かに意譯なしたり。讀人其心あるべし。

(上略) 想ふに東洋の文明と。西洋の文明と。其度の相異なる所以のものは。全く進化の理の然らしめし所なり。今にして徒に之を歎くは。親の癩病を遺傳したる男が。他人の無病なるを羨むにひとしく。寔に詮なきの限といふべし。只我將來に希望すべきは。彼が長を採りて我短を補ひ。一日も早く彼に追つき。肩をならぶるやう致したき事なり。

(宮) ハ、。相替らず剽輕な議論だネ。

されば。大學の組織の如きも。匆卒今日の有様を見れば。寔に羨むべく。尊むべく。さながら我國の大學などとは。丸で品柄が異なるが如く。非常に立派さうに見られるれども。又退いて考ふれば。英に今日の大學あるは。多年幾般の變遷を経て。竟に今日に至りしものにて。決して造化翁が依怙最良にて。突然此地にのみ。好大學を。今日造りだせし譯にてはなし。

(小) ハ、。例の如く馬鹿をいつてる。

我東京の學校の如きも。今より二三十の年數を経なば。恐らく此國の大學にも優れる善美の大學となりなん事敢へ疑ふには及ばざるなり。我東京の學生は。柔弱にあらざれば。儼然にあらざれば病人。或は花柳界にあくがれあるきて。學生の本分を誤るものあり。或は磊落を粧

はんとして。輕躁過激なる振舞をなすあり。瑕なき完美なる玉の如きは。殆ど見いだすに由なきなり。されども是はこれ一時の弊のみ。力めて矯正せば年経て醫すべし。小子近頃閑暇の折柄。二三の小説を繙讀して。ナックスホルド大學のむかしを知り。其變遷の著しきに驚き候。或は御存知かも圖られねど。別封の小説幸便に任せ。お送り申上候。御一讀なされ候はば自然大學のむかしも知られて。頗る興あらんとぞんじ候。

【"Tom-Brown at Oxford." (小説の名)

"Pendennis." (同前)

"Adventures of Mr. Verdant Green." (同前)】

小子が當大學の來歴をしりしは。特り是等の小説にのみよりたるにあらず。別に學友某の物語によりて。彌其前代の有様を知りたり。過去現在將來の三の者は。事物を論ずるに必要なりと思はるれば。こゝに其略を申述べて。以て御参考の一助となすべし。むかしは當大學の學生には。富家良家の子弟多し。之を要するに當大學は紳士の子弟の一大 club の如き有様なりし。蓋し其頃には權門富豪が。子弟を當校に入學させるは。専ら立身の便宜となるべき。知交を得せしむるにありしかと承り候。故に貧賤なる子弟にして。偶此校の學生となれば。往々

貴公子の翫具となり。侮嘲されしことも多かりしと歎。甚しきに至りては。權家の子弟と貧家の子弟とは。同じ校中にありと雖も。其食物の品を異にし。其服制をも異にせしとか。自由を尊重する英國の大學にして。僅に二十餘年の昔に於ては。かゝる惡慣習ありしかと思へば。實に驚歎に堪へざる次第に候。

今より二三十年以前は。學生の品行も随分醜猥なりしとの風評なり。Tom-Brownなどを熟讀いたし候ても。屢いかゞなる情事の形跡。其物語中に隠見いたし候事也。村莊の中に妾を圍ひ置候などは。其比通常の事の様に聞及び候。されども學生の間に於ても。決して此般の振舞を以て面正しき事とは見做さざる故。互に此般の不品行あれば。着々其罪を弾じて。相罵り候由なりし。我國の通人的學生諸子の如く。公然花柳界に荒忙して。人に驕るが如きことは。其頃よりして之なかりしやに承り候。

(宮)ハ、。山村や繼原に讀ましてやりたい。きびしい頂門の一針だ。

體操運動は今日よりも盛なりしやに承り候。Boat-race [端船競漕] Horse-riding [馬騎] swimming [游泳] Fencing [擊劍] 等其尤なる者なりしやに聞及び候。我國などにても。従前の習慣の反動にて。大に體操を獎勵いたされ候傾向有之。寔に結構には候へども。あまり過激

に過ぎるやう。注意有之度。と思ひだして痼氣を病候次第也。蓋し體操と研學とは。まるで相反する性質の者に候へば。深沈なる講學に伴ふに。過激なる運動を以てするは。或は當を失したるに非るか。ブレトウ翁の如きも。曾て體操と講學の併立し難き旨を論ぜし事あり。今より二三十年以前の事とか。ある博學が此大學に來遊されし折。諸學生の平常の舉動を見て。被申候には。此大學に眞の哲學家を出せし事の少きは。あまり多分に物を食ひ。多分に筋肉を勞する故にあらずや云々。と被申候とか。テックスホルドの大學に於ては現今體操もモデルイト [穩當] に相成候故。此リマアク [注意] も不要に候へども。我國の學校家などは。多分参考して宜敷事と存候。畢竟するに體操の盛に過るは。害にもなり益にもなり候。害とは何ぞや。動作おのづから兪暴に流れて。學生の氣象荒々しくなり。折々街頭にて争鬭などを引起し候事なり。Town [町人] と Town [學生] との喧嘩はあまり下さらぬものにて候。利とは何ぞや。五感の銳利に過る者を鈍くし。架空の想像をおさゆる事是なり。神經の過敏に過るを防ぐは。體操より外に良法無之と存候。加之身體強堅によりて。精神の作用を佐くるの大益あり。我國の學生の如きは。従前體操を怠りしが故に。顔色どれもこれも憔悴して。宛然幽靈を見るが如し。此大學の學生の如きは。今日と雖も遙に我國の學生と異なり。肥滿り脂みちて。いかさ

ま強さうに見受られ候。

(宮)實に任那は筆まめだネエ。くだらん事まで細々書いてよこすぢやアないか。(小)ヤレ／＼まだ中々長いぞ。是からあとには如何な事が書いてあるか。(宮)それからが可笑いヨ。日本の學校を頻に稱揚てネ。随分ヲツクスホルドを凌駕する事もできる。甚だ *Hotaru* 「末たのもしい」な組織だから。十分悪い所を改良して。世界の最良大學にするがよい。其改良の點は云々だ。ト例の得意の辯舌を以て。書いた事／＼。(小)相替らすいたづら書の空論だらう。しかし兎も角も讀んで見よう。ト讀つゞけんとなす折から。障子越に。(倉瀬蓮作)ナイ。小町田急用だ／＼。木戸までぢやアない。應接所まで急用／＼。

此段いまだ盡さず即ち第二十回につゞく。

第二十回

大團圓

三脚の長腰掛は。四字の形をなして圓形の古卓子を圍繞し。鐵製の丸火鉢は卓子の眞中に安置せらる。是なん某校の應接どころ。疊十ひろを敷つむべき床を板の間となしたりしは。流石に

物なれたる主幹の用心。和洋兩様の來訪人共に其便利を感じつべし。さる程に倉瀬蓮作は。きのふ一宵守山友芳の家にとどりつ。今日友芳ともろともに。おのが學校に歸り來りて。守山を應接所に俟せおきて。おのれはいそがはしく塾舎におもむき。俄に小町田を呼たてしかば。榮爾は何事ぞと不審みて。讀かけたる手紙をかたへにさしおき。急ぎ部屋の外に立いつれば。倉瀬蓮作は待兼つゝ。(倉)ナイ／＼小町田。何をしてゐるんだ。マア早く來たまへ。靈妙不可思議。珍奇的烈。前代未聞咄々奇怪。あやしく奇しきミステリイ「不思議な事」が。きのふ突然と持あがつたが。君にやア淺からざる關係があるから。Mr. Moriyama と一所に今君へ知らせに來たんだ。早く應接所まで來たまへ／＼。「小町田は呆氣にとられて驚きながら。(小)なんだ。また始まつたヨ。實に君は騒々しい男だ。さうして昨夜は君何處へ泊つた。學校にやア居なかつたぢやないか。(倉)ヲット意見めいたる事。御無用に候ツ。今日の倉瀬は。吳下の舊蓮作に侍らすツかし。それはさうと。今日君に告る事は。君の舊ラブ「情婦」に關する事だヨ。(小)ハ、ハ、。又始まつた。モウあの一件は御免だ。取消し／＼。(倉)イ、ヤ。さういふ譯ぢやアない。あのシンガア「藝妓」の身の上について實に思ひよらん事が興つた。(小)エ。(倉)ナニ心配するにやア及ばんこつた。(小)ナニサ。心配をする譯もないが。何だか君のいひ方が變だからさ。(倉)マア應接

所へくるべし。守山が先刻から待て居るから。倉瀬は小町田をこもなひつゝ、待兼たりける守山友芳一寸たちあがりて會釋をなし。(友)小町田君。その後は暫く。「小町田は禮をかへし。(小)こなたこそ久しく失敬を。(倉)マアそんな事は後にして。守山君。出ようぢやアないか。どうせ例の一件は。此處ぢやア話せないヨ。(友芳)さうですネエ。それぢや直にでかけませう。○小町田君。少々お話の筋があるが。今直にでられますか。(小)ア、参りませう。シカシ一寸袴をはいてきますから。へいひつゝ、小町田は倉瀬はあとを見送りにて。(倉)相替らず謹直な男だ。あの位堅い男だが。田的の的にやア。急守山のかほをながめて。守山は笑を含みながら。(友)放蕩遊惰といふ點からいやア。すつと小町田より甚しいのが。随分學校にもあつたであらうが。眞地目で一女子に溺れたばかりで。遊蕩連の領袖のやうに。人に思はれたも小町田の不幸だ。ダガ倉瀬。學校の氣風はよほど替つたネ。此頃ぢやア。先刻から氣をつけて見るに。出入ともに袴姿だネ。我輩が居る頃と違つて。被流連なんぞは一個も見えない。全體被流しといふ容姿は。日本でも略服だから。實に見つともない卑陋な姿だテ。品柄は粗末でもいゝから。學生だけはどうか洋服にしてしまひたいネエ。(倉)我輩も實は其説だテ。此間も學生服裝論について。須河が演説をした所が實にをかしい事があつた。其譯はどうかといふと。須河の演説の主意といふ

のは。別に不條理でもないやうであつたが。内々珍奇的の理由があつて。須河が桐山に悪まれて居るんで。其演説をした日なんざア。あとでやられた事。須河めさんくゝに桐山にやられて。(友)ハ、アやられたとは。(倉)ナニサ。須河の議論の根據は例の如く盜物さ。處で桐山めが意趣があるから。わざと其ナリジナル「本據」を荷ぎ出してネ。唯今須河氏のいはれた所は。一分は其の議論だ一分は誰の説だ。と一々其出所を表示した上で。滅茶めちやゝに駁撃をしたが。須河め。一言辯駁も出来んで。面を眞赤にして引込んだが。實に依然として意氣地のない男さ。(友)へ、イ。不思議だネ。須河と桐山とは。莫逆だといふ話だつたが。(倉)どうして莫逆所ぢやアない。今まで親しくして居たのは。全く須河が桐山に媚て居たからさ。所謂知音ぢやアなかつたのさ。而して交情の悪くなつた原因が可笑いテ。君は大方御存じぢやアなからうが。先日噴飯的の珍談があつてネ。須河が桐山と草津の温泉で出會したといふ事件があるが。(友)成程だれかに其話は聞いた様だ。たしか桐山が眼鏡をなくして。(倉)それ。それが可笑い譯で。實はある時に須河の野郎が。眼鏡を板の間で拾つたさうだが。桐山が居るのに氣がついたからして。見つけられぢやア大變だと思つてか。故意と知らん振で居た所が。イザ歸るといふ時に臨んで。覺えず其眼鏡をおつことしたので。それが元で隠謀露見。桐山が眞憤になる。須河は退怯

る。よつほど奇妙珍不可思議だつたさうだ。シカシ雙方とも弱身があるから。其日はグズグズで
すんださうだが。それから後は敵同士同様。随分抱腹な珍事が多いよ。(友)ハ、ハ、ハ、。そいつア
面白い後談だつたネ。ト話なかばへ小町田繁爾が。衣服を被かへて出来れば。さらばと計り三人
が。急で學校をたちいでつゝ。兼て門前にまたせおきし車に守山が乗うつれば。小町田は。之に
相乗なし。倉瀬は別に車をやとひて。やがて之に乗うつりつ。守山は倉瀬に向ひて。(友)オイ倉
瀬君。すこし遠くつてお氣の毒だが親父を呼寄せる都合もあるから。新橋の方まで来てくれた
まへ。ナイ車夫新橋まで歸つてくれ。(車夫)へい。ガラ。ガラ。ガラ。

○車の上にて小町田は。守山に打向ひ。(小)倉瀬が餘り急ぐからして。何も理由を聞かせんで
したが。全體けふは何の御用ですか。僕に用事でもある譯ですか。(守)イヤ別の事でもないの
ですが。實に不可思議な因縁からして。屢君にもお話し申した。シスタア「いもと」の所在も解
りましたし。又其事の關係では。君にも幾分か縁故があるから。實は賀宴めいた席を開いて。君
をも招待しようと思つて。(小)エ。さうですか。それは實に賀すべしです。シテどうしてわかり
ました。或は過般の娼妓といふのが。(守)イヤそれについても奇談ありさ。親父が夢に見た架空
の事蹟と。事實と似て居るといふも不可思議な譯です。娼妓はシスタアではありませんでした

が。母が流れ丸に當つた事から。谷中のほとりでなくなつた事は。夢と符節をあはすが如しさ。
正夢といふ者は。無論あるべき筈でないが偶中といふ事は随分ありうちの事と見えて。我輩も
曾て麻クレオン名教師なるべしに聞いた事があるが。ある英國の紳士が米のワイオミン州に
住居して居た頃其細君が三度つゞけて。土蠻が我家を襲ひ來つて。夜中に火をかけたと夢に見た
ゆゑ。何となく安心ができません。竟に夫に強てすゝめて。俄に其家を移寓してしまふと。果して其
晩に土蠻が來て其家を焼うちした。といふ話だつたが。當るも八卦中らぬも八卦で。人間もたま
には。事を前知するものと見えるテ。(小)何にしても。夢で行方がわかるといふのは。稀有な出
來事といはざるを得ずだネ。それぢやア君のシスタア「令妹」といふのは。今まで何處に何をして
おいでなすつたネ。(友)その妹といふのは。○即ち君が御熟知の。○田の次です。(小)エ、。○
馬鹿をいひたまへ。ハ、ハ、ハ、人を馬鹿にして。(友)い、エ。ほんたうです。何だか小説か假作のや
うで。我輩も殆ど信じかねたが。色々様々と證據を採つて。漸く其實を確定めた譯です。(小)エ。
それぢやア事實ですか。それは全體どういふ譯で。(友)悉くいつちやア大變だが。只概略はか
ういふ譯さ。ト第十九回の大略をはなし。竟にお秀が懺悔ばなし。并に源作が物語りし。本篇骨
髓の事實話に及ぶ。

以下また讀者の煩を思ひて。地の文の如くにもものしたれど。其實は守山の言葉をもて寫すべき筈なり。讀者宜しく諒察あるべし。

第十九回の末に於て。源作田の次等が一間をたちいで。お秀兒鳥等と面をあはせて。互に辯論をなすに及びて。お秀竟にあらがふこと能はず。すつかり白状せし其身の經歷ならびに田の次の身の上の子細は即ち下に略述るが如し。

○慶應四年(即ち明治元年)五月十五日まだ早天程なりけり。俄に上野の彰義隊と官軍の間に戦争起れり。上野最寄の町人等は俄急の軍に狼狽して。西へ東へと逃まどへり。お秀はこれよりさき此事あるをば。全次郎より聞得てしりつ。其騒動こそ好機なれ。我る妾宅を抜いだして。上州高崎の知音の方まで。男と諸共に走らばやとて。兼て用意したりしかば。イザ戦争となりたる折にも。もとより本心には驚かざれども。故意と狼狽たる面地して。全次が馳來るを見ると其儘。かねて取纏めて置たりける。荷物各手に携へつゝ。お秀はお新(この時三歳)を背におひて。今降しきる雨をも厭はず。彼方此方に逃まどふ男女の中にたちまじりて。全次の後に随ひつゝ。あへぎ／＼て根岸なる三島前まで逃いだせる。時しも戦争は最中にして。松源または雁鍋の。二階よりして官軍が釣べ放てる大砲の。響はさながら雷の如く。華嚴を極め

へれて。

へなまよみの。

し中堂に。何時しか其火が燃移りて。焰々として燃上る。猛火の勢すさまじく。台兵しきりに亂れだちて。臆病未練の輩は。此時已に勢挫けて。五人六人忍び／＼に。路なき樹木の間を潜りて。はや落行くも多かりけり。煙のしたに逃迷ひ。また泣叫ぶ老幼の。中をくゞりて全次とお秀が。落ゆく後の方よりして。ドットわめきて逃くる台兵。官軍にや追はれたりけん。血及右手に引提しまゝ。三人あまりあへぎ／＼て。此方をさして走くるにぞ。あなやと騒ぐお秀と全次。お秀はお新を負ひたりける。半纏の紐の解けたるをば。結ばむ程もあら／＼しく。馳くる浪士に突當らへれ。あなやと叫びて前の方へ仆るゝ拍子に。半纏ゆるみて。お新はキヤツと叫びもあへず。半反ばかり後の方へ。とんほがへりて擲だされぬ。こは如何にせんといふ間に。又走りくる一個の女房。仆れしお秀にけしとんで身を横さまに臥轉びし。重にうたれて鼻先をば。お秀は痛く摺破りて。鼻血おびたゞしく流れ出つ。殆ど痛にたへがたけれど。辛うじて起あがりて。泣まつはれる小兒をば。奪ふが如く搔抱きて。彼方をきつと打見やれば。向うへ走りて馳ゆく男は。正しく全次と思はれしかば。チウイ／＼と呼たてながら。亂りがはしき我姿をつくらふ暇(なまよみのみか)腕の痛み鼻先の。疵をおさへて走りゆく。夢路をたどる心地してこけつまるびつ漸々に谷中間近く來る程に。台兵已に破れやしけん。をめき叫びて戦ふ

聲。岡のあなたに高く聞えて。林をもれて飛來る彈丸は。暴風にまじる雨霰。お秀はそれさへ事ともせず。全次にやうやく追ひ近づき。ヤヨノウウ〜と呼ぶ聲に。全次もはじめて心づきてふりかへらんとする折しも。たちまち飛くる一個の彈丸。無残なるかな全次郎の。額の眞中に中りしかば。急所の痛手に争でか堪らん。アツと一聲叫びもあへず。仰天さまに臥伏れて其儘息は絶果たり。お秀は之に膽消えて。覺えずハタと平伏しが。元來氣丈の女なるゆゑ。たちまち心を取直して一先全次を扶け起して叶はぬまでも將てゆかんと。や、立上る後の方。又もやキャツと女の聲。あなやと喫驚ふりかへれば。武家の妻女と思はれたる二十五六の中年増が。三歳ばかりなる女の子を。搔抱きしまゝ仰天さまに。今仆れたりし有様なり。こも流丸に當りしか。と思へば俄に怕氣だちて。全次を扶ふのいとまなく。お新を倒にかきいだきて。雲を霞と逃のびつゝ。板橋道へと出たる頃には。已に眞晝近き頃にやありけん。雨もやうやう小休になれば。爰に至りて我にかへりて。情おのが身を願れば。髪は亂れ衣服は破れ。泥は雨の爲に洗はれたれども。身の中濕はざる所もなし。お新は今朝がたより雨にうたれて。持病の蟲氣などが起りやしけん。鬼色土の如く變り果て。息も絶々なる有様なり。あな憫然やと抱しめて。つく〜見れば這は如何に。こは抑いかに。こはいかに。伴ひ來りし此小兒は。我子お新には

あらざりけり。身には中形縮緬の單物を被て。綺羅やかなるヨダレ掛をかけた其様良家の愛子と覺しく。腰には古金襴の切レにて製りし。一個の巾着をぞさけたりける。あまりの事に膽つぶれて。且驚き且悲み。さては先刻三島のこなたで。臥轉びし折うらたへて。他人の女の子をば搔抱きて。其儘夢心地で走りたりけん。今更思へばあの折しも。我身につまづき仆れし婦人も。正しく小兒をば抱きし様なり。さあらんには此少女はあの女房の愛子にやあらん。又氣を静めて思案すれば。谷中下にて小兒をば。抱きしまゝにてあへなくも彈丸に中りて果たりける。彼の女房こそ同人にて。抱かれ居しはお新にあらずや。若しさなりせば。お新の身の上。心元なやあな悲しや。悔しき事をしてけり。と足摺をして歎くと雖も。また今となりて詮方なし。せめて此女子の由縁をしりなば。お新にめぐり逢ふ便宜にもなるべし。此巾着には守袋も。または臍の緒もあるべき事よ。と紐をとく〜開き見れば。果して臍の緒も守札も。別に黄金さへも納め置たり。二分金といふ貨幣にて。およそ八兩あまりあるべし。思ふに母親が俄の騒ぎで。家を逃いづる其折しも。深く意を用ひて納れおきしものや。臍の緒の包を開けば。何年何月生る。守山亮右衛門の女そでとあり。へこれにて其由縁を得知りたりとも。全次の身の果もたしかならねば。汚目々々立返らんやうもなければ。其日は板橋にて中食して。尙も其女の

子を搔抱きて。其夜は桶川までたどりつきて。其處に泊るべしと思ふにつけ。又つらくと思ふやう。我子にあらぬ此女の子を。何時まで伴ひゆきたればとて。急に江戸へかへる我身にもあらねば。由縁へかへしてやる便宜もなし。殊にお新の身はいかになりし歟。死生變つながらわからぬのに。此方ばかりにて慈悲三昧此子を養ふのも餘計な事なり。いつそ此邊へうつちやつて。ト地金の無慈悲なる心を興して。とある棒端の家の戸口へ。そつと。おそでをば置去にして。直に立去らんと踏いせしが。俄に思ひだして立戻りつ。おそでが腰につけし巾着をば其儘奪ひとりて肌身に着け。急ぎ其處を立のきつゝ。ある旅籠に其夜は宿りて。翌日朝まだきに其處をもたちいで。目を經て高崎まで赴きつゝ。おのが相知れる家をたづねて。色々身の上をいひこしらへ。およそ二月も其家において。空しく厄介人となりるものから。氣隨三昧にして暮せし身體は。其處にも居惡き事數々生じて。竟にある人にそゝのかされて。再び東京へは歸り來しが。程なく其男に誑かれて。吉原の或青樓に身を沈めぬ。去程に明治三年といふ年。解放の令官より下りて。娼妓は悉く自由の身となり。各其宿元へ歸されしが。お秀は歸るべき宿元もなければ。兼て懇に語らひたりける。仕事師某に引取られて。往る十二年の冬の頃まで夫婦となりて連添ひ居しが。夫に死なれて後。たつきを失ひ。又もや泥水の海にた

だよひ。或は二階のお婆さんとなり。或は座敷持の梳櫛となりて。甲樓乙臺と渡りあるきつ。竟に海角老の二階に雇はれ。娼妓兎鳥の新造となりしは。正に此年の三月にぞありける。然るに短刀の紋の事より。不圖兎鳥と身の上の談に及び。第七回の末を見るべし。其來歴を聞くに及びて。はじめ兎鳥は其むかし。三島前にて取違へし。我實の子のお新と知り。打驚く事大方ならず。其短刀の持主こそ。おそでが實の母親なるべし。御身の母はわなみなり。其事の由は斯様々々と。三島前の騒動より。谷中下の物語まで。事詳細に語りしかば。兎鳥もヒタと惘れて。泣きつ笑ひつ取すがりて。共に涙にくるゝ程に。お秀はたちまち。よからぬ心を。此時胸の中に案じいだして。頻に兎鳥に説いていふやう。親子恙なう十餘年振にて。斯めぐりあふは嬉しけれども。そなた許かわたしまでが。こんな淺ましい苦界の勤。前借金も尠からねば。盲龜の浮む瀬はいつの事やら。お先眞暗にて當にはならず。其紋所の證據ぞ幸ひ。飽まで守山の女といつはり。おまへは以前通り澄しておいでな。短刀といふ證據ばかりか。不思議な事には巾着まで。今尙わたしの手に持て居るから。由縁の人達だに見つかつたなら。室町源氏のお茶番ぢやアないが。女天一はやさしく出来るヨ。倉瀬さんの言葉もあり。又二ツには守山何某と。さきの名前までわかつて居るから。是からさきはわたしが承知だ。あとで發露たつてかま

ふことアない。一日も早くこんな處を出して貰ふのが上分別だ。よしか。さうおしな。ト吹込ても。根が正直なる娼妓貞鳥。兎角決しかねて吞込まぬを。やつと押へつけて吞込ませし。親子が上の間での密々話を。樓下源作が全然聞とり。翌朝お秀に強談かけて。兼て桶川の姉「お芳が養母」より聞たる。お芳「田の次の前名」が身の上をのべたてつ。昨夜立聞せし所によれば。お芳は疑ひなくお秀が棄たる。守山某の女と思はる。姉が拾ひ取りし其折柄。見たりしといふ衣服の品さへ。昨夜聞たりしに寸分違はず。殊に處さへも同じ棒端。日も刻限も同一なれば。それに相違ないは無論なれども。肝心要なるお芳が居らねば。それを述たても無駄な事だ。魚心ありやア水心。なにも餘計な邪魔はせぬが。トあちからんで強談かけられ。「第十五回を見よ。」お秀も殆ど困り果て。餘儀なく八圓ほど金子を遣はし。竟に源作をも味方に引込み。第十八回に見えたる如く。彼の廣告を口實にして。お常が住む家まで尋ねゆきしが。源作圖らずも途中に於て。お芳の身の上を聞たるより。俄に本善の心に復りて。始終逐一に裏切して。お芳の田の次に告たりしかば。お秀の謀計喰ちがひて。殊には思ひよらぬ元の旦那。三芳庄右衛門に面會して。流石の鐵青皮惡婆といへども。争でか胸を冷さざらん。終に身の罪を白狀して。其こしかたの事實を語りぬ。

(友)チイ〜車夫。こゝらでいゝのだ。話に浮れて大變に來過た。(車夫)へいさうでございまして。たか何方へ。(友)イヤ待つてくれ。一旦事務所へかへらう。親父は宅に待つて居るもしれない。(車夫)それではお宅へ。(友)ウン。かへつてくれ。

○車はやがて守山が事務所の前にぞ着たりける。友芳は倉瀬と小町田を伴ひ。奥の一間にうちとほれば。書生は急がはしく出迎へて。火鉢煙草盆など持いでたり。(友)親父はまだ参りませんか。(書生)只今一寸用をたしとくと被仰つて。お出掛になりました。(友)左様ですか。○それぢやア兩君。マアお茶でも。○お茶を早く。(書生)かしこまりました。トたつ。小町田は友芳に向ひ。(小)只今のお話は。實に思ひ寄らん事計りで。何だか incredible な「信じがたい」位ですが。○どうも奇な事があつたものですネ。○それぢやア君のマザアは。其折には矢張谷中の方へお逃なすつた譯ですネ。(友)思ふに母の方ぢやア。子を取違へた事に氣がついたので。お秀のあとを追ふつもりで。怖い恐しいも忘れ果て。後を慕つたのかもしれないヨ。(小)アノ田の次。イヤお芳さんの身の上の事は。王子で逢つた時に聞きましたが。君にそのやうな關係があらうとは。今日が今までも知らないで居た。ソラいつか君に向つて僕が *confess* 「懺悔ばなし」した時なんぞも。委しくお芳さんの履歷をのべたが。君も氣がつかねば僕もしらず。(倉)世の中の事は皆んなそん

なもんさ。鼻の前にぶらついてるても。わからん時にやアわからないものだ。(小)さうして兎鳥とお秀とやらは。それから如何しました。(友)其兎鳥といふ女は。全次の種だには違ひないが。いくらか三芳には關係があるし。殊にお常さんとは叔母姪の中だし。まさか其儘で追放す譯にもゆかず。三芳からは手切金として若干の散財。園田(お常の旦那)も幾分かやつたとの事。イヤ兎に角に小説めいた話さ。ハ、ハ、ハ、ハ。(倉)しかし何にしる目出たい事件だ。目出たし〜といはざるを得ずだネ。(小)ハ、ハ、ハ、さういふとまるで赤本の結局のやうだ。「折から書生が襖をあけ。(書)先生。老君がおかへりになりました。

○是より守山親子。小町田倉瀬を伴ひ。某樓に登りて盛んなる賀宴を張り。三芳園田をはじめとして。お常田の次などを招きつどへ。互に樂しげに酒酌かはして。其日は夜深るまで其樓にあり。小町田が席上祝辭。倉瀬が諛諂の演説なんども。寫しだしたば興あるべけれど。丁數已に限あれば。作者は本意なくもこれを略きぬ。嗚呼十餘年の星霜を経て。親と子。兄と妹。かくゆくりなうめぐりあひぬ。其樂しさやいかなりけん。況んや其再會の事の次第が。奇異にして更に奇異なるをや。

○本篇の眼目己に終りぬ。骨髓の趣向は己に盡きぬ。また説いださん要なけれど。僅に説洩せし

條を拾ひて。こゝに顛末を結了すべし。

○繼原青造は。多年放蕩の報しるべく。必至に困窮の體となりしも。守山友芳が笑止に思ひて。且つ繼原が學才あるをば。甚だ惜みける由あるゆる。後におのが家に招き寄せて。さながら食客のやうになして。常に其扶助をなしたりしかば。繼原もいたく其義に恥て。翻然行爲をあらためつゝ。再び學校に通學して。専ら學問に心を凝らしぬ。其行末は知る由なけれど。目下の有様を評する時には。hopeful(末たのもしし)と守山もいひたり。

○山村も繼原と同様の有様なりしが。性來辯才に長ぜし故か。いつしか電信の絲にひかれて。遠くある地方の學校におもむき。其教頭に任せられしとか。地方に學者乏しとはいひながら。かかる平凡學者を教頭にするとは。嗚呼地方憫むべし。と倉瀬が時々歎息せしとか。

○宮賀兄弟は依然勉強なり。學業は日々に進めど。ちとも世才なきは氣の毒なりとて。舊放蕩家はひそかにそしれど。世才に富むと借財に富むと。しらす孰れか勝れる。と友芳時々笑ひけるとなり。

○桐山は相替らず。勇壯なり。近頃は奮進黨の新聞に關係して。頻に盡力中なりと聞えたり。國事犯の嫌疑など受はせずや。とひそかに眉をひそめたる友人もありけり。○須河は例の如く知勇

雙つながら缺たり。ある時學校の小使共が蔭にて相語りていひけるやう。須河さんが卒業ができ
るなら。おいらたちだつて學者になれさうなものだト。

○野々口はいかにしけん。池の端以來倉瀬もきかず。放蕩家などと悪くはいへど。野々口の如き
は利發者なり。あの術でお醫者さまになつたる時には。屹度甘くやるに相違ないとは。是又倉瀬
の獨斷論なり。蓋し保證はれぬ話にこそ。

○吉住は待合の失策以來。グット尻子垂たる姿なり。蓋し囊中の冷なるに因るならんとは。恐
らく恨ある者の悪口なるべし。近々代言をやめて官途につくといふ風評あり。それか恰好とは
是又幾分か悪口なるべし。

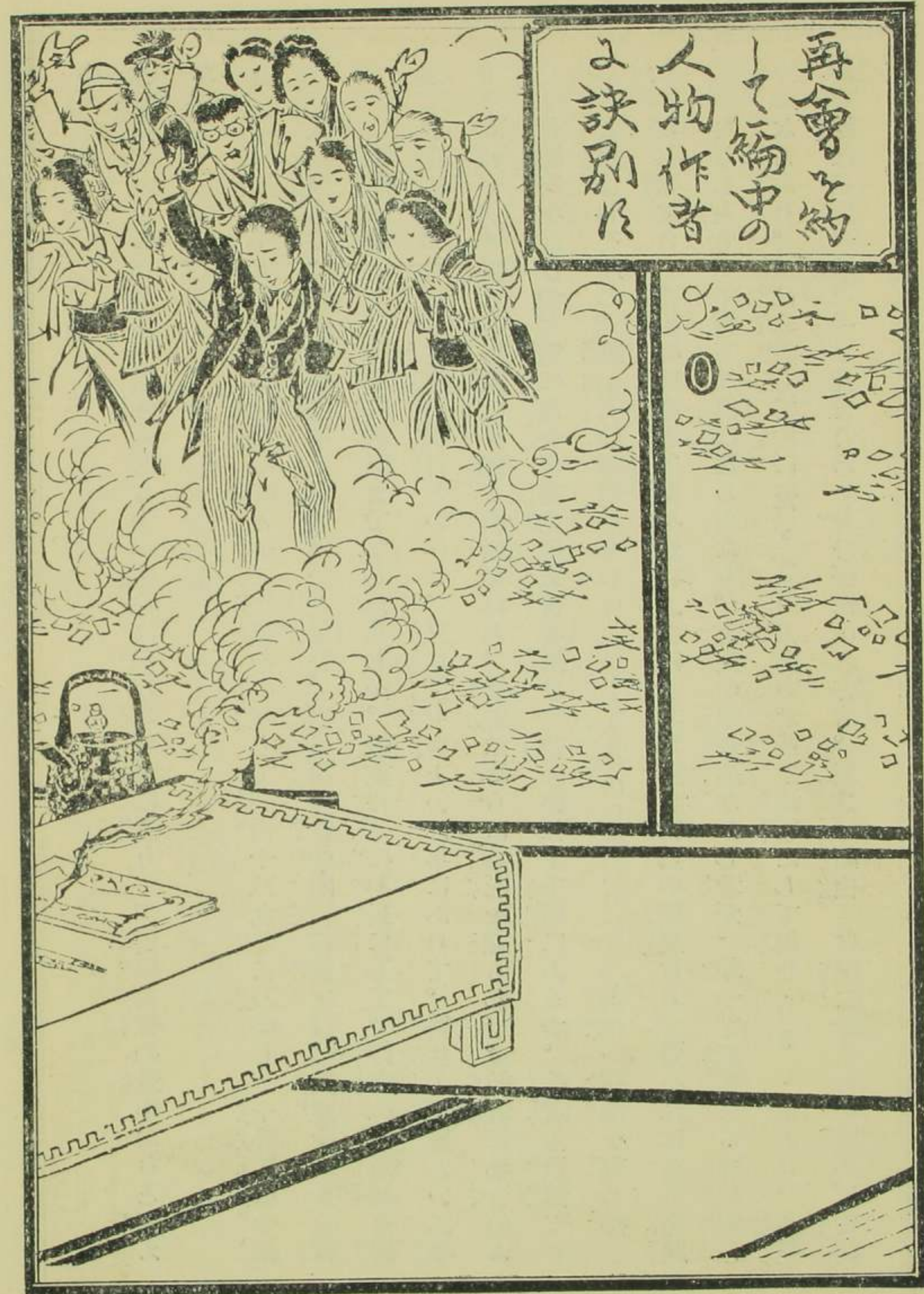
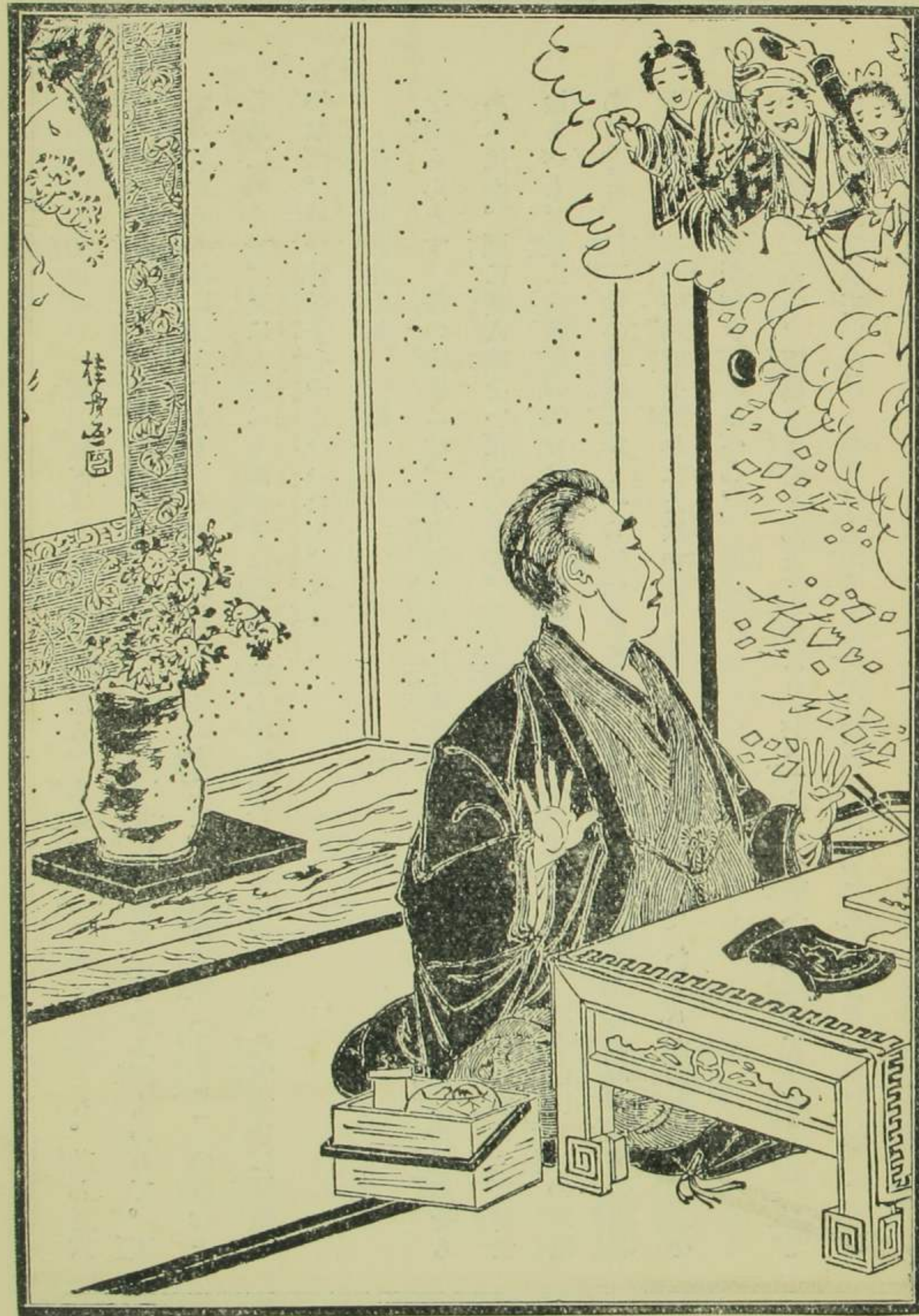
○小年は流行妓。いゝ旦那があるとは疾からの評判。今にひかぬ所を見れば。中位の旦那と見え
たり。辨吉は罰金以來評判いよくわるし。近日は焼酒で日を暮すとの事なり。酒代は誰がだす
かいさゝか御心配なり。

○田の次は守山の助によりて。目出度脱籍して素人となり。守山友定の娘となりしが。いづれへ
縁附くやらきまらぬ由なり。是非とも僕が仲人になる。僕に任して置たまへ。イ、エ當人は兎も
角も。僕が熱心に懇願する。ト倉瀬がだしぬけに友芳にいひければ。友芳は覺えず吹出したりと

の事なり。

○お豊はいかにせしか。作者もしらす。任那は一昨年獨逸に渡りて。哲學研究の最中なりと聞え
ぬ。

【因に云。作者のはじめ此篇を綴るや。談話を引延して明治十八九年に及ぼし。十分情態の細
微を穿ちて。兼ては變遷をも示さばやと思ひ。已に第九號の附言に於ては。其意をあから様
に讀者に傳へて。立派に約束までなしたりしが。紙數存外に不足にして。作者の本意通り綴
る能はず。殊には當篇の眼目といへば。兄妹再會といふ事にありて。書生の氣質といふ事
にあらねば。其表題には背くに似たれど。作者は専らに意匠を凝らして。前者に都合のよ
き趣向を設けつ。爲に當今の書生の氣質を漏なく描きいだす手順にあらず。作者も遺憾なり
と思ひしぞかし。就中最も殘をしきは。作者が本來の目的なりける。書生の變遷を寫し得ざ
りし事なり。書生の變遷とは何をかいふ。曰く其習癖其行爲の變遷なり。譬へばはじめ輕躁
なりし人も。年經て沈着になる事なり。書生の頃放蕩なりし者が。却つて老實なる實際家と
なるあり。或は卒業して用いたゝざる人あり。或は淺學にして用ひらるゝ事あり。其變
轉は萬態千狀。一々此ところに言ひがたけれども。寫さば面白さは限なからむ。譬へば當篇



の小町田の如きは。一個の見すほらしき神経質なる。未練の少年に過ぎざれども。若し五六年の経歴を積みなば。如何に變りゆくか知るべからず。世には神童などいふ例もありて。天稟英智なるも稀にはあれども。それらは常例の外の者にて。主實神史家 (Realist) の好むところにあらず。兎にも角にも憾多きは此理を寫し得て止むことにぞある。作者幸ひに間暇を得なば。再び管城子をやとひいれて。他日

續當世書生形氣 一篇

を綴らんとす。件の續篇には。小町田守山。任那倉瀬。お常田の次。吉住兒鳥等の後談をもあらはし。別に新人物をいださんとす。新人物は主にして書生なり。舊人物は客にして紳士なるべし。故に此續篇の如きは。書生形氣兼紳士形氣を以て見るべし。作者已に多少の腹稿あれども。目下他の著述にかゝづらひたるをもて。暫く其起稿を猶豫するのみ。四方の讀者もし幸ひに拙著の題目を忘れたまはずは。他日續篇のいでけん折。いくらか舊知交の消息をば。聞たまふが如き感あるべし。

かく書終りたる折。原稿を取去らんと。先刻よりして一枚々々數へて待居たりし書肆の小僧。につたり打笑みていひけるやう。先生第九號の口繪の一件はどうなりましたか。(臚)ナンぢ

や口繪とは。(小僧)ヘン。此繪は全篇の骨子なり後回に至りて明詳なりツ。あの人殺の譯はちつとも詳でございませぬね。(臚)エ。ナニ。あれは。なんぢや。あれは愛嬌に添たばかして。所謂讀者をして驚かしむるの法ぢや。西洋の滑稽本なんぞにやア。屢あゝいふ洒落があるテ。文章の滑稽や脚色の滑稽は。已に陳腐ぢやによつて。わしが新趣向で虚唱を用ひたのぢや。ナントあの事が立消になつて。眞地目で見て居つた讀者諸君を驚かした手際は妙であらうな。小僧は返事もせず縁側にたちいで。

(小僧)ヘン隠居めイ。負惜みをいやアがらア。]

一讀 當世書生氣質 大尾

附録一

當世書生氣質の批評

半峰居士

其一

支那人の批評は讚美を主とし、西洋人の批評は刺
 衝を専らとす。されば支那人の著述は具眼者の評語
 を得て九鼎大呂より重しと爲すも、西洋人の著述は
 批評者の刺衝に勝へずして空しく蠹魚の餌食となる
 もの尠からず。而して今熟考ふるに支那人の讚美
 主義は往々流れて詔諛となるのみならず、毫も批評
 の實効を現はさず、其略なるものは常に艶麗の文字
 を並べて著者を賞揚したるに過ぎずして、其詳なる
 者は人の識易からざる妙所を穿ち、人の看るに易か
 らざる要點を露はすに止り、所謂コンメンタリー即
 ち註釋に過ぎざるなり。批評の要は切礎に在り、批
 評の要は琢磨に在り、西洋の批評家屢々其尖鋭なる
 毛穎を弄して少壯の著述家をして綿々絶ゆるの期な
 き怨恨を懐かしむるが如き甚だ酷なるに似たりと雖

も、能く批評家の職分を盡したるものと謂つ可し。
 惟みるに西洋の文學駁々として日々に進み、能く
 世の中の進歩に伴うて敢て後れざる所以のものは、
 批評家その職分を盡して怠らず、揚ぐ可きを揚げ抑
 ふ可きを抑へ、毫も假借する所なきが爲めなり。東
 洋の文學遑遑退歩の色を現はし萎靡として振はざる
 所以のものは、批評家其職分を怠り、徒に詔諛の文
 字を臆列して其責を塞ぐが爲めなり。嗚呼批評家の
 責任重うして大ならず哉。且つ彼の文學なるものは
 實學と異にして、世の中の進歩と共に上進すべきも
 のにあらず。文學は情を基とし、實學は道理を基と
 す。道理は経験を積んで益々發達する、情は道理の
 爲に制せられ経験の爲めに遮られ、彼其發達を遲鈍
 にするものなり。故に西洋に在りては、蒲マル、烏
 アツル再び出でず、支那にありても、韓柳歐蘇李杜
 の匹復た見るを得べからざるなり。慈カンソン嘗て
 美ルトンを疑うて思らく、詩頗る巧みなりと雖も、
 後世に生れて以て、先輩の大作に則るを得たるが故
 に蒲、烏と匹敵すべからずと。麻コウレイ大に之を
 駁し、其の後世實驗の世に生れ、而かも天賦の詩才を
 存するが故に美ルトンの技倆彌々顯著なりといへり。

斯の如く文學は社會蒙昧の時に當りては隆盛を極め、其進歩に隨ひて漸く衰頽に赴くの傾向あるものなれば、須らく之を維持して甚だしく衰頽せしめざるの方便なきを得ず。これ批評家の因て起る所以にして、批評の已むを得ざる所以なり。

批評家の責任斯の如くそれ重く、批評の事斯の如くそれ大なり。故に批評家を以て任ずるものは其心を公明にして批評の事に従はざる可らず。然り而して批評家の批評の事に従事するに當りてや、其困難辛酸は決して尠々に非ず。批評家は實に著者の述作を批評して其怨恨を買ふのみならず、身躬ら公衆の爲めに批評せられて其罵詈訛口の目的ならざるべからず。著者は批評家の公明正大の筆を揮うて己れの著作を非難するを看て色を作して曰く、彼れ何人ぞ敢て乃公の名著を非難するや、彼れ能く我が著作を非難するを得ば必ずや、我が著作に優る可き一大著述を爲すを得ん、請ふ刮目して其技倆を觀る可きなり、彼れ若し自ら著作するの技倆なきに切りに他人の著述を非難するが如きあらば、僭越の罪決して免るゝを得べからず。世間公衆は即ち批評家が著作を賞揚するに刺衝するに隨ひて悦を異にし、若

し賞揚讚美する時は曰く、此批評家は彼の著述家と平生の交際水魚膏ならず故に其賞揚讚美するも亦宜なり。又曰く此批評家は彼の著述家より暗に依頼を受けたり隱に苞苴を収めたり、故に其の言ふ所信するに足る可らず。今又批評家他人の著作を刺衝して論難する時は曰く、彼の批評家は著述家に舊怨あり、著述者の技倆を妬む者なり、故に其批評や斯の如く不公平にして殘酷なるも宜ならずや。嗚呼世の中に職業多しと雖も、批評家の如き困難にして且難澁なる職業多く之れあるべからず。半峰居士及び居士が同社の諸兄はこの業の斯の如く困難にして且つ難澁なるを識つて而して自ら當らむす、豈勇ならずと謂はんや、豈醉狂ならずと謂はんや。

半峰居士は今や批評の手始めとして、彼の博學洽聞風流洒落多才多藝を以て有名なる春の屋おぼる先生が嘗て物せられし、當世書生氣質を批判せん。而して居士が之を批判するに當りて豫め大方の諸君子とおぼる先生に御断を申さざる可らざる。大方の諸君子よ、半峰居士はおぼる先生と莫逆刎頸の交あるものに候ぞや。半峰居士はおぼる先生と莫逆刎頸の交あれども、然れども居士はいまだ先

生より書生氣質を讚美し給はれさいふ依頼を受けたる事なく、又暗々裏に先生居士の家を訪うて苞苴を懷中より出し居士に給はりたる事もなし。されば半峰居士は平生おぼる先生の交誼を辱うするに拘はらず、單刀直入の法を以て書生氣質を批評し、揚ぐべきは揚げ抑ふべきは抑へて、批評家の職務を完うせんと欲するなり。おぼる先生よ、居士は敢て先生の御依頼を受けず、甚だ餘計のお世話に類すれども、我文學の爲めに先生の高著書生氣質を借用して妄評を試みんと欲するなり。惟みるに居士は敢て批評家を以て自ら居るものにあらずして、而して先生は小説家を以て自ら任ずるの人なり。批評家を以て自ら居ざるの人、小説家を以て自ら任ずる人の著述を評す。先生の迷惑實に想ふべしと雖も、居士が既に前段に説明したるが如く、天下に批評家あらずんば文學終に滅せん。先生にして文學の滅亡を憂ふるこそせんか、居士をして郭隗の故轍を踐ましむるは素より當然の事なりとす。且や先生博識にして洽聞なる、居士が自ら小説を編まざるに切りに高著を批判するを以て、僭越なりとするが如きことあらざるべし。先生も夙に識らるゝが如く、批評家と小説家とは自

ら其職務を異にするものなり。看よ麻コウレイ、慈オンソンの徒、文章に巧みなりと雖も敢て詩賦に長じたるにあらず。然かも古哲の大作を評して其當を得たり。波ズリット、區レイクの輩、文章尙且つ巧妙ならず、然かも謝クスピヤ一の院本を細評して大に喝采を博したり。其他エフレ、加アライル、傳クウエンシー等専ら批評の事に従ひ、文壇に大名を博したるもの一々枚擧に違あらず。彼の六二連、水魚連、見連等の連中は近時演劇の見巧者にして、自笑、其笑の風を轟ひ能く梨園子弟の技藝を品評す。然れどもこれらの輩自ら紅粉を粧ひ、舞臺に登り、菊五然、團十乎として舞踏を演ずる能はず。由是觀之、批評者著述家と自ら區域を異にするこそ昭乎として明らかならずや。

以上の議論はおぼる先生の博識卓見なる、夙に謁識せらるゝや必せりと雖も、世間著述者の多き或は誤見を懷くもの無きを保せざれば、繁を厭はずして叙し侍りぬ。之を要するに、批評の事は頗る重大にして、而しておぼる先生の著作尋常一様のものにあらず。故に居士が初陣に之を批評せんを欲するは所謂蠅に燈心にして、少しく持て餘すことなきを保證

する能はずと雖も、居士は我が文學の爲め進んで堅
を侵さん欲す。大方諸君子並におぼる先生にして
居士の借越を尤むれ莫くんば幸甚なり。

其二

大方の諸君子とおぼる先生とは、能く居士の前段
に開陳したる言を容れ、居士をして獨立不羈の批評
を爲すを得せしめ給ふべければ、いでや是より秃筆
を揮うて書生氣質の批評を爲すべきなり。居士思ふ
に近世小説の著作汗牛充棟皆ならずと雖も、我が書
生氣質の如き、社會の褒貶を蒙りたるものは多く他
にある可らず。是れ將た何の爲めなるか。著者の筆
力強健なるが爲めならざるなきを得んや。熟く考ふ
るに、我が日本社會の讀者は素に冷淡なり、我が日
本社會の小説の讀者は素に盲聾なり。この冷淡なる
且つ盲聾なる讀者にして、書生氣質を褒貶して喋々
措かざる所以のものは、著者の筆力強健にして能く
會社の冷淡者を熱中せしめ、盲聾者の耳目を撓破し
たるに由らずんばならず。然れども當世書生氣質ま
た瑕瑾なしといふ可らず。書生氣質は所謂大醇にし
て小疵なるものなり。

世の書生氣質を評判する者異口同音に唱道して曰
らく、文章巧也と雖も意匠鄙野に近く、毫も慷慨悲
壯の風なしと。又曰く、書生氣質は書生の短所を寫
して長所を寫さず、且つ藝妓の情態を説くに在り
て、世教に害なしといふ可らずと。其の他是といひ
彼といひ、觀察する所同じからず、評する所亦隨て
異なる所ありと雖も、要するに其結構尋常と異にし
るはなし。嗚呼世間小説を讀むの人何ぞ小説を觀る
の眼を備へざるの甚しきや。書生氣質の鄙なるが如
く陋なるが如きは其傑作なる所以なり。書生氣質に
慷慨悲壯の風なきは其著者の高手なる所以なり。居
士は世間の批評家が目して以て堂々たる文學士の著
述たるに似ずとすの理由を假りて、堂々たる文學
士坪内雄藏氏の著述たる所以の證明を爲さん欲
す。

を大別し給はば、編述の目的社會道德を誘掖するに
あるものと、其目的社會情態を寫し若くは之を嘲諷
するにあるものと、二大區別をなし給ふ可きなり。
抑々彼の稗史小説にして其目的社會の道德を誘掖す
るにあらしめば、篇中に設くる所の彼の主人公なる
もの、及び主人公と交り、篇中に現はるゝ所の諸人
物は概れ仁義忠孝の人なるを要し、其行爲は須らく
勇壯にして其言論は須く活潑なるを要すべきなり。
蓋し此類の小説は其主眼とする所、標準とするに足
る可き人物を篇中に設け、讀者をして其行爲に則ら
しむるに在るを以てなり。

夫も廉に、懦夫をして志を立てしむる所のものなり。
大方の諸君子は固より曲亭馬琴の大著八犬傳を讀ま
れたらん。犬江大川を始めとし犬塚大田に至るまで
八人の主人公、一人として仁義忠孝の美德を具へざ
るものあることなく、一人として讀者の標準たらざ
るものあることなし。夫れ須コツト及び馬琴の徒は
小説家の第一種類に屬すべきものにして、其襟大の
筆能く當時と後世とを感化し得て以て讀者をして清
廉純正の美風を發せしめ、功德の偉大なる千部の經
卷に優るものありと雖も、然かも小説家たらんもの
は必ず須コツト、馬琴の風を學び、之を其目的を同う
せざる可からずと爲すは偏見の甚しきものたるを免
る可からず。看よ布ヒールゲン、須モオレットは
英國小説家の鼻祖と稱せらるゝも、以て須コツト、李
ツトンの徒と、其風を同うせず。一九、三馬は我國
小説の大家なるを以て、曲亭と其流を同うせざるな
り。彼の布ヒールゲン、須モオレット、一九、三
馬の徒は諷世嘲俗を以て其主眼とし、其天性のウキ
ツトとヒューモルとを以て悉く義理人情を説き以
て、須コツトと曲亭との如く封建の徳と封建の情と
に依り結構を爲すを屑しとせざる也。之を要するに

須コット、曲亭の小説は時代狂言の如く、布ヒール
ゲンク、須モオレットの小説は世俗狂言の如し。彼
の須コットの小説に心酔して布ヒールゲンク、須モ
オレットの眞味を解し得ざるものは、彼の團十の技
藝にのみこれ偏して、菊五を以て役者視せざるもの
を何ぞ擇ぶ所あらんや。

且つ夫れ小説の變遷上よりして之を觀るに、彼の
第一種の小説即ち洋人の所謂「阿イヂヤル能ベル
(標準小説)」を稱するものは、第二種の小説即ち居
士の私に稱して「曾シヤル能ベル(社會小説)」を稱
するものに比すれば劣等の地位を充すものの如し。
彼の標準小説なるものは固ま中古の羅オマンスより
出でたるものなり。羅オマンスとは我國の兒童が愛
讀する宮本武勇傳を稱する書の如く、中古封建の時
代に當り武人勇士の壯快の事蹟を編述し之に脚色を
加へたるものにして、意匠淺薄、見るに足る可きもの
鮮なし。然れども中古封建の時世は人心尙武に傾け
るが故に、この類の書大に行はれたり。漸く進んで
近世に至り、遍り「布ヒールゲンク」始めて英國に
起り、有名なる社會小説登々慈オマンスを著はし、小
説の體始めて成れり。惟ふに宇オタルタア須コットの

如きは幼にして好古の癖あり、長ずるに及んで空前
絶後の大名を博したるも、其の人實に空前絶後にし
て後世其の風を慕へるもの其神髓を傳承する能は
ず。偶々之を摸倣したるもの如き、羅オマンスの
俗臭を蟬脱する能はざる比々これなり。之に反して
彼の社會小説を以て芳名を博したるもの其數枚舉に
違あらず。術ケンス、佐カレイ、慈オマニス、オツ
トの如く須らく例證をなして可なるべし。要するに
標準小説は其體素まや、幼稚にして時勢に反對する
が故に、須コットの外これに依りて功を奏せるもの
なく、社會小説複密高尚にして時勢に適合するが故
に人多く之に因りて大名を博し得たり。諸君子若し
居士の言を疑はば李ツトン侯の著述に就て見よ。其
數十卷の著作中加クストンの批判特に噴々たるに非
ずや。又術ケンス翁の著作に就て見よ。肥イクウキ
ツクの傳他に超えて批判較著なるにあらずや。惟ふ
に標準小説にのみ心酔して、社會小説の却て之に過
ぐるものあるを識らざるの人は、未だ小説の滋味を
解し得ざるの人なりと斷言して可なり。

坪内雄藏先生、Allas 春の屋おぼる大人の物せら
れたる當世書生氣質は所謂社會小説なるものなり。

社會小説の粹なるものなり。能く奴イケンズの輕妙
ま佐カレイの精密を混和したるものなり。書生氣
質は固より愛バンホオの如くならず、素より八犬傳
の如くならず雖も、加クストン、肥イクウキツク
に似て而かも繁雜に過ぎず、梅曆、辰巳の園の艶麗
を奪うて而かも姪佚ならず、膝栗毛、浮世風呂の諧
諷に則りて而かも野鄙ならざるなり。今我國の小説
を愛讀する者を見るに、關羽、張飛、魯智深、李逵
なきの書を小説視せざるものあり、犬塚信乃、犬田
小文吾なきの書を小説視せざるものあり、濱路、雛衣
なきの書も亦小説視せざるものあり、甚きに至ては
篇中政治上の主義を包含せず、政治上の議論を載せ
ざれば小説視せざる者あるなり。斯の如く幼稚なる
斯の如く識見なき讀者をして當世書生氣質を讀まし
むるは、豈勿體なき次第ならずや。豈猫に小判、ア
イノに八百善と謂はざるを得んや。

且つ夫れおぼる大人の著述中、特に其大膽なるを
賞揚せざる可らざる點ありて存するなり。何ぞや、
曰く、其主公なきの小説を作りたること是れなり。
昔時英國の佐カレイは宇アニテイ布エヤーを稱する
小説を著し滿天下を嘲罵したるに當て、別に題して

A novel without a hero (主人公なき小説) といひ、
大に世間の喝采を博したりき。願ふにおぼる大人蓋
し之に倣へる歟。書生氣質の篇中一人の主人公を設
け給はず、彼の小町田榮爾を稱する少年は篇中の主
人公なるが如き地位を占むるも、素まこれヒボ
コンデリヤ(心經疾)の一少年たるに過ぎず。其不
完全にして主人公たる能はざる點に至りては、彼の
佐カレイの著述中に現はれたる志ヤア夫人と相讓
らず。おぼる大人の之を以て主人公と爲すに意なき
や識るべきなり。吁嗟乎おぼる大人は小説文壇に初
陣として現はれたる若武者にありながら、其謀略老
將佐カレイと相讓らず。書生氣質を目して意匠野鄙
なりとし、慷慨悲壯の風なしとして嘲弄する論者
は、抑々如何なる野暮なるぞや、抑々如何なる盲目
ぞや。

其三 (上)

一揚一抑は固より批評家の特權内にあり。扱居士
は前段に於て數千言を臚列し、當世書生氣質を批評
して且つ口を極めて之を讚美したれば、其著者たる
春の屋の隱居先生は定めし其高からざる鼻を高くし

且つ之をうごめかして、我れ知己を得たりと號び、手の舞ひ足の踏む所を識らざる程に喜び勇み給ふ可けれど、半峰居士も中々人悪るなれば、褒めた切りには措かぬ積に御座候なり。否半峰居士は批評家なれば、役目に對し候ても悪く謂はざるを得ざる次第に御座候也。

俯して考へ仰で惟みるに當世書生氣質の瑕瑾一にして足らず、うち疵あり、きり疵あり、鐵砲疵に似たる刀疵あり。今一々之を暴露して大方の諸君子に示すあらば、彼の江戸のおやぢに勘當を受けたりと稱する與三郎其人の如く、徳川の四天王に左る者ありと識られたる、神原康政も斯やあらむと思はざる、こゝ居士の保證する所ながら、今悉く其瑕瑾を擧げて諸君子に示し奉らんも、餘り由なき事に似たれば、其最も恕がせに爲す可からざる者に就て論駁を試み此一段を終らんす。

當世書生氣質の第一瑕瑾は其人物にあり。書生氣質に就て居士の最も不満足を唱ふる要點は、人物の構造宜しきを得ざるにあり。君見すや、書生氣質の中に現れたる數個の人物、平々凡々たるに非ずんば、必ず奇癖あるを。凡そ一部の小説中に二三四五の

平々凡々たる人を出すは蓋し止むを得ざるの事なりとす。平々凡々の人書生氣質の中にあるは固より恕すべし、其主要の地位を占むるの人物一人として奇癖あらざるもの無く、且つ勢力頗る薄くして幽靈の如くなるに至りては、居士頗る脱して作者の拙劣を大笑せざる可らざるなり。惟みるに、春の屋おぼる又名坪内雄藏ぬしは、小説家兼文學士におはせば、定めし泰西諸名家の批評をも讀まれたらん。彼の御存知の麻コカレイが陀アブレエ夫人の小説を批評したる時如何なる説を爲したりや。其人物に奇癖あらざる無きが故に、これを目して小説家の第二流に在る者と謂はざるを得ずと斷言したるにあらずや。夫れ小説家が篇中の人物を構造するに當りてや、これに付するに一奇癖を以てする時は其舉動を叙するに當て頗る容易なるが故に、往々易きに泥みてこの弊に陥ることあり。豈慎まずして可ならんや。

斯の如く論ずる時は、春の屋大人必ず嘴を突らして謂はん、咄汝の言皆非なり、汝識らずや術ケンス、佐カレエ、李ツトンの徒皆な奇人を其篇中に出すを。居士冷笑して更に之を對へて謂はんとす、春の屋大人の言實に是なり、佐カレエ、李ツトン奇人を

出せりと雖も、篇中の人物悉く奇と凡とを免かる、能はざらしめたること無く、其奇人の如きも其奇癖の外に數多微妙の氣質を備へ、おぼる大人の奇人の如く若し其奇癖を除く時は木偶一般なることあらざるなり。入道一或黨ハホ論といふが如きことばあらざるなり。居士また更に思を凝らして西洋小説の人物とを比較するに、啻に西洋小説の人物は厯密にして、東洋小説の人物粗雑なるのみならず、東洋小説の人物は一々作者の口上に依りて、其如何なる性質なるやを現はし、西洋小説の人物は自己の舉動に由りて其性質を示すの差あるを發見したり。若しこの區別にして果して之ありせば、おぼる大人未だ東洋小説家の臭氣を脱せずと謂はざるを得ず。蓋し小説中の人物をして完全ならしめんと欲せば、之をして賢なるが如く剛なるが如く柔なるが如く、冷淡なるが如く熱心なるが如くならしめ、恰も、人情の解し難く、人心の測り難きが如くならしめざる可からず。先づ之を爲して而して之に附する各人物特有の性質を以てせば始めて、全きを得可きなり。おぼる先生も既に識らる、如く、彼の謝ケスビヤ一院本の人物中に最上の地位を占むる波ムレットは、狂な

るが如く狂ならざるが如く、永く心理學者の問題となれるに非ずや。米國有名の小説家奈サニエル蒲チソカンの如きは、他の小説家と自ら流儀を異にし、人物の心事を解剖して讀者に示すも、然も書生氣質中の人物の如く、只に癖のみにして心なきものを作爲せざるなり。南無春の屋おぼる大人、居士は大人に請求す、大人若し次ぎに小説を作り給はば、奇癖と平凡とのみを合併せず、少しく厯雜緻密の Powerful character を作り出し、麻氏の所謂第二流より第一流に進歩して、我日本のデモ小説のみならず、歐米諸國古今の稗史家を壓倒し給はんことを。大人の小町田は架空癖にして人物ならず、大人の桐山は腕力癖にして人物ならず、大人の須河は卑劣癖にして人物ならず、其他は大概平々凡々なるのみ。大人の人物は其性質に密緻と勢力を缺くといふは敢て居士の私論にあらず、遠からずして天下の公論とならんとするなり。

其三 (下)

當世書生氣質の第二の瑕瑾は、愁嘆と談諧との權衡宜しきを得ざるにあり。居士熟く書生氣質二十章

十七篇を通讀するに、其中談話の分子頗る多く、能く人の頸を解くの妙有るも、人情切迫して愁嘆極りなき悲哀的の分子に至りては、曉天の星の稀なるが如き憾なき能はず。書生氣質は頗る Humour 及び Wit の元素を含蓄するに雖も、Patos に於て大に足らざる所あり。能く Comedy の趣を備ふるも、Tragedy の分子を含むこと尠し。斯く云はばおぼる大人は定めし憤怒の形相を現して對へ給はん、半峰居士は自ら小説の批評家を以て居りながら、何ぞ偏見の甚しきや。觀よ居士が平生噴々賞讃して措かざる所の浮世風呂、膝栗毛等の諸小説を觀よや。卷中何れの所にか悲哀の元素ありや、何れの所にか愁嘆の分子ありや。之を讀むもの當に臍沸き頸脱るゝの快を覺ゆるのみにして、毫も痛苦も悲哀も感ぜざるなり。然り而して天下の廣き、讀者の多き、誰か一九二三馬を嘲笑する者あらんや、嗚呼おぼる大人にして若し斯の如き言を爲し、書生氣質も浮世風呂、膝栗毛に比して以て悲哀的の元素無き責任を免かれんことを爲し給ふことあらば、居士謹んで鄙言を足下に呈し、其妄を辨ぜざるを得ざるなり。居士考ふるに、彼の浮世風呂、膝栗毛等の小説は A novel without Plan

即ち趣向なき小説とも稱す可きもの也、是れ蓋し趣向なき小説とは趣向全く之無くして、支離滅裂見るに足らずといふには非ず、彼の通常の小説の如く、甲男と乙女との離合集散を説き、惡漢と善漢との勝敗榮辱を談じ、篇中に出したる人物の顛末を讀者に報道するといふが如き、勞を執らざる小説をこれいふなり。今假りに演劇の語を借りて之を言はんか、浮世風呂、膝栗毛等の小説は所謂淨瑠璃所作事とも謂ふ可きものにして、Comedy (喜體演劇) 若くは Tragedy (憂體演劇) の部類に屬す可き者に非ざるや明らかなり。春の屋おぼる大人の書生氣質は浮世風呂、浮世床の如く、單に湯屋結髮床の噂話を記せるものに非ず、又膝栗毛の如く東海道五十三次の旅日記にもあらざるなり。若し書生氣質にして旅日記の如く趣向なきものならしめば即ち止まん、若し然らずと爲すあらば、居士は斷じて愁嘆元素の鮮少にして且つ薄弱なるを尤めんと欲するなり。おぼる大人と讀者諸君とは能く居士のいふ事を聞け。彼の稚ヤールス術ケンスが肥イクウキツク傳を著すに當てや、其の趣向を主とするに非ざるが故に、

毫も愁嘆の元素を交へずと雖も氏の著作に至りては則ち然らず、其談話の天才を専らにするに拘らず之れに交ふるに悲哀の元素を以てし、讀者をして或は腹を抱へ或は腸を斷たしめたり。又謝クスピヤーの院本を述作するや未だ嘗て此悲喜相交ふるの原則に背きたる事はあらず、心理學者の恒に唱ふるが如く悲喜憂樂は素と相關の者なれば悲甚しければ喜も亦甚しく、憂甚しければ樂も亦甚し、故に交り用ひて以て相對さしむれば小説始めて活動し、魂飛び魄散じ手舞ひ足踏むを悟らざるの快味を覺ゆるに至る可きなり。且つ夫れ書生氣質中愁嘆の良材料ありて、而しておぼる大人之を利用し給はず、抑、如何なる故に候ぞや。居士惟ふに、彼の小町田と田の次の情話は、用ひて以て愁苦悲哀の材料と爲すに足るべく、用ひて以て讀者をして斷腸の思を發せしむるに足るべき也。おぼる先生の趣向、こゝに出でず、輕々筆を着けて子供の色事の如く爲し給へるは豈遺憾千萬ならずや。是れ蓋しおぼる先生の、情事を解せざるに因るか、將た又、筆力の勁健ならざるに因る歟。書生氣質の瑕瑾は以上述べたるものに止まらざるこゝ、居士が前段に於て讀者諸君に豫告したるが如

しと雖も、餘り長きは御退屈と編輯局の心配も無理ならず、居士も亦自ら御退屈の氣味なきにしもあらざれば、好加減にして御免を蒙らんと欲するなり。嗚呼おぼる先生は幸福の人なる哉、若し讀者諸君にして退屈せず、半峰居士にして御退屈を爲さずんば、其惡る口と出放題とは究極する所を識らず。おぼる大人をして恰も稚アルス一世が長久議院の閉期を俟てるに、同一の感想を懷かしむるに至る可きを。この一段を終るに臨んで、居士が豫め論ぜん欲したる箇條を叙列して讀者の判斷を乞はん欲するなり。

第一。書生氣質の談話は随分面白く、眞正の Wit 及び Humour たるに協ふもの尠しと爲さざるも、俗にいふ地口口調即ち Puns の部類に屬す可きもの亦尠からず。大に五月蠅を覺ゆ。地口は我國の發句師も頗る厭ふ所にして、西洋の修辭家亦甚だ之を重んず。Pun is the lowest form of wit (地口は談話の最下等なり) といふ語あるに由りて徴すべし。

第二。書生氣質の中、英語を交へられたるは、時節柄頗る好き御考案なるのみならず、書生の

談話なれば餘り角立たずと雖も、少しく屢々なるに過ぎて五月蠅し。西洋の學者が希臘羅甸を引用するに倣ひて、止を得ざる場合にのみ用ひ給ふならば、反て味ひ深からん。

其他は劔山と大達との勝負の如く預り置く者也。

其四

居士は角力行司の辭を假りて前段を終りたれば、又是角力行司の辭を假りて此段を始めんと欲す。曰く番數も段々御覽に入れたる間、此角力一番にて、否段數も段々御覽に入れたる間此一段にて、今般の批評を終らんと欲するなりと。

扱居士は前段に於て喋々嘯々書生氣質の瑕瑾を擧げ、殆んど之をして奈落の底に墜墜せしめたるが如き姿あるも、今又蹶て沈思默考すれば、書生氣質は決して通常一様の小説に非ずと斷言せざるを得ざる也。居士が前段に於て書生氣質を嘲罵したるは、東洋の小説に比較して之を嘲罵したるに非ざるなり、西洋の小説に比較して之を嘲罵したるに非ざるなり。西洋平凡の小説に比較して嘲罵したるにあらず、古今獨歩

の大作高著に比較して之を嘲罵したるなり。今若し當世書生氣質は我國從來の小説に比較せんか、三馬、一九、京傳、春水の著作と遠く相譲らざるや固より論なけん。居士竊かに惟ふ、書生氣質は明治一新以後唯一の小説なりと。書生氣質の疵瑕多き恰も與三郎の如しと雖も、宮地芝居の與三郎にあらず、市川才牛九代の後胤堀越團州の相勤る與三郎たるに相違なきなり。書生氣質の疵瑕多き恰も康政の如しと雖も、徳川家康四天王たる榊原小平太たるに相違なきなり。書生氣質は實に小説たるに愧ぢざる著作と謂ふ可し。雖然我春の屋大人の技量に未だ俄に書生氣質を以て、推窮するを得ざるものあり。今其所以を説明する前に當り、大人の嘗て自叙せられたる言を引用して用て駁撃の材料と爲さん欲す。大人書生氣質第九號に叙して曰く、

(前略)本篇の語譚を以て悉皆作者の經歷より成れる者なりと云ふ評判是なり。是また小説家の何物たるを知らざるが故の妄評なり。(中略)京傳が章臺に浸入りて娼婦の内幕を穿ちしが如きは是れ京傳がツニヤス(天才)に非ざる證なり。知らず論者は自家が實驗せざる事實は決して穿

ち難きものみや思へる。(下略)

嗚呼春の屋大人は何ぞ好んで牽強附會の言を爲すや。讀者諸君よ居士は前段にも御斷を申せし如く、春の屋大人と莫逆刎頭の交あるものに候へば、能く春の屋大人の履歴を存じ居り候ぞや。讀者諸君よ、大方の諸子よ、春の屋大人は如何に高慢の顔を爲すも、此間まで書生たりしに相違なく候ぞや。春の屋大人の書生の情態内幕を御存知なる事、京傳が章臺の内幕に通曉したるに優るも決して劣らざるは居士が保證する所なり。既に其内幕に通曉す、之を穿つ難からざる固より論を俟たざるなり。然れども春の屋大人にして自己の經驗を其儘に寫されんか、大人は日記家にして小説家にあらず。大人素と小説家なるが故に、己れの實驗を利用して一部の小説を編むに至れり。然らば則ち居士が、大人の技量未だ俄に書生氣質を以て推窮する能はずといふも、豈宜ならずや。若し夫れ大人にして居士の言を以て當れりと爲さず、悔しさつらさ遣る方なしと思ひ給はば、別に第二の著作を爲して、敢て實驗の力を假らざるも、椽大の筆能く巧妙の小説を著作するを難んぜざるの證明と爲し給へと云爾。

半峰居士云く。書生氣質全篇の中、かげぼふしの縁切を始めとし、新奇の妙案頗る多しと雖も、今悉く之を掲げて讀者を煩はさず。

校訂者記。本文中の引用文に出所不明のもの一二あり。之を作者に質し、二三の先輩にも質したるに、遂に明答を得ざりしを以て、註を附するこゝ能はざりき。

附録一

「梧堂言行録」抄

「梧堂言行録」は岡山兼吉追悼録にして、其の中に「書生氣質」に縁ある記事あり。其の二三を左に抄出す。(校訂者)

拜啓。故梧堂君の言行録の御草稿拜讀いたし、そゞろに過來しかた思ひいでられ、態とは書いてしるさん言の葉も御座なく候。御存知の如く、小弟大學に在りしころは、年に似ぬわらべ根性たわいなく、世のさがもわかまへず、後に小説作者にならんなどいふおほけなき心、いづくよりいでしかと、今更がてんまるらぬ程のうつけ、智恵は半峰兄、磊落は貴兄(註。山田一郎)、浮世の事は梧堂兄と、只ほんやり兄さまと心得、現に書生かたぎ著作の折も、梧堂半峰兩兄をこきませにして、守山といふ人物を作りは作りながら、あはれ實物の影法師ほどにも足らぬあどけなき。其ののち、小弟もやうく大人の數に入り、梧堂兄は法學の世界にて、浮世の中に名高き人となられし後は、外出がちなる彼の君と、ひきこみがちの小弟と、兎角相見るよすが稀れにて、近き

ころの消息は、大かたは人傳手、むかしの事は、上に申し、あどけなき impression の、語るもわらべが自叙傳めきて、此の周到なる御編纂に、一毫をだにやは加へんと思ひながら、尙忘れぬは、彼の君のまめやかなりし面影、ねもごろなりし物ごし、ねえくといふ捨言葉長やかに、皺すこしばかり鼻によせて、一こと毎に安賣の笑ひ聲、ストーブのはたにしゃがみての長ばなし、あやしの煙草入より取り、いづる怪しのきせる、氣長けにつぐ鬼ころし、人の鼻を襲ふその煙の消えてあとなき悲しさ、ことにはそのまめやかなりしも、ねもごろなりしも、其のころ知り得たりしは、尙ほんのうはべにて、心の底までもまめやかなりし君と、今更にさとりしけふは、言行録の上のみ見ゆるこそ悲しけれ。彼の君の上につき、寄附せん材料のなきだけに、残りをしさは一倍と、あはれ察したまへかし。(坪内雄藏より山田一郎宛書翰)

明治十四年春の初めとなりては、昨臘國會開設請願の騒ぎ(註。明治十三年十月、大學在學の加藤高明、鈴木充美その他二十名連署して、國會開設尙早論を元老院に呈したりし一件)一夢に歸し去りつ。四海浪風靜かにして枝を鳴らさぬ難有き御代壽き祝ふ大學生十餘名の連中にて、花の盛りの墨陀堤、往きかふ人の叢る中に雜はりて、竹林的の遊びをなしける。此の連中は主とし

て月一會(註。日本史料を蒐集研究する爲に大學生の組織せし親睦會。岡山兼吉、市島謙吉、山田一郎、三崎龜之助、有賀長雄、關直彦、高田早苗、香坂駒太郎、添田壽一等會員たり)より成立ちたるが、殊に「花曆講」てふ雅名を付したり。講名は、四季折々の眺めを爲すに取りたるものにして、坪内雄藏氏が命ぜる所なり。面々當日の立立ちは、洒落を極むるを旨となしたれば、假面を被ぶれるもあり、焼芋を手にもせり、ベランメー社會と相伍して恥ぢざりし當日の有様こそ怪しけれ。君(梧堂)も此の列に加はりて、例の達磨の茶番(註。赤毛布を被りて達磨の眞似をせるもの)など演じつ、日の山の端に春くを忘れて打興じたりしが、政海湧き情波躍りて、同人の離合も定めなく成り行きたる後年より回想すれば、今は昔の夜ぞ戀しきと君折々に語り出でぬることありし。(山田一郎「梧堂言行録」一節)

品行即ち世俗の所謂品行に就ては、我等當時何れも品行家にてありし。我等親友仲間にては未だ曾て狹斜の巷に出入したることあるなし。只夫れ余と市島氏とは昨冬(註。明治十二年)よりして文學專修となり、高田、坪内の諸氏と同室の間柄となりたれば、詩歌小説都て風流の談柄多き折節には、酒興の催起ること屢となりしかば、當時迄下戸なりし余の如きも、漸く劉伯倫の門下となり、諸氏と打連れて、其の頃我等の馴染なりし神保町の天麩羅屋松月亭に至りては痛飲

浩歌、間々或は婦女子に無駄口きくこともあり。余と同家の下女お濱とは特別の間柄なりと噂立てられ、誰れなりしか、是山是濱、情交見真などと洒落評を下されたり。斯ることよりして有名無實、針小棒大の風説は意外に高まり來り、例の道德演説（註。大學生間の演説）の如きも多くは天麩羅屋攻撃を主として、目的は我等の一連に在りたりと覺ゆ。遂に高田、坪内兩氏は總理補濱尾新氏の説諭を頂戴し、余も尋いで同様説諭を受けたることあり。何ぞ知らん敵は本能寺に在りて、真正の狭斜遊びをなす連中は、規則も守れば門限も堅く、表面は女早りの國に生れたる顔付きして居れる人々の内に有りたれども、例の道德論は此の邊の穿鑿に及ばざりしなり。斯かる中に在りて、君の如きは真正に道德正しくして、又不道德なりとの嫌疑をも受けず、さればとて道德論の説もなさざれば、此の説を爲す人に向つて冷評もなさず、誠に局外中立の眞面目を表裏共に存し得たる君子人なり。（山田一郎「梧堂追悼録」二節）

當時大學の氣風は尙ほ明治初年の遺俗ありて、萬事率直簡易を旨とし、制服も無ければ制帽も無く、麻裏草履を穿ちて、寄宿に在るの定めなれども、それさへ或は略するもあり。土足下駄の儘にて副課室寢室に上下するのみか、果ては講堂に迄も下駄の儘にて出入することあり。その色

氣なきこと殆んど亂暴といふべき程なりしかば、衣服調度に思ひを凝らし、婦女子の機嫌をとる杯のことは思ひも寄らず、品行正しきと言はんよりは寧ろ色氣なき方にてありしが、君亦この種の品格を代表すべき磊落率直の人として知られぬ。（山田一郎「梧堂言行録」一節）

「天下之記者」(山田一郎言行録)抄

實をいふと、此の松月といふ天賦羅屋は決して曖昧屋ではない。先づ其の家の構造は只の追込みの聊か發達したもので、表通から一直線の中庭を通ると、奥に凡そ二十疊ばかりの明放しの一室がある。普通の追込み同様に高が葦簾や衝立が立つて居るばかり。表の道路を通行しながら奥がよく見える建方であつた。そこへ漸く酒を飲み始めたばかりの山田君は、一味の豪傑連五六人と一所に行つて、時としては二合徳利の十本も並べて天ぶらを食ひながら、哲學、政治などの大議論、傍の客は嘸驚いたらう。それで長い時は三時間も喋舌る。さりとて亂暴して、坐り相撲といふのでもなく、ごく／＼無邪氣なものであつた。これは山田君ばかりでない、一同の様子がさうであつたのだ。書生氣質に出る任那といふ人物は、山田君の外形を寫したのである。總體に當時の大學生は磊落落洒脱な風で、凡て打明けて云ふことを得意としてゐたから、情婦があるとしても云ふやうな事を誰かに云はれると、苦い顔をするよりは、我輩も一人二人は有るよと、無い者ま

で有るらしく言ひ觸らす傾向であつたので、表から見通しの追込に情婦などが有らう筈は無い。

(坪内雄藏談)

校訂者云。 明治二十年四月、松成堂發行、藤田武城編「文明實地演説」に「近時學生の情態」なる一文あり。筆者京橋生の何人なるや不明にして、又何處より採りしかも不明なれども、後の風俗史家の爲に左に轉載す。

曩に文學士春の屋麿氏の書生氣質をものされしや、洛陽の紙價をして爲めに高からしめし程なりしが、素より一條の小説に過ぎざれば之によりて學生一般の實狀を知るに由なし。(註。「書生氣質」を以て其の發刊當時の學生を寫せしものと速断せしに由る。)蓋し東京は全國文學の中心にして、苟くも見識のある學者は悉く都下に集合し、且つ官立私立の論なく、高尚なる學校甚だ多ければ、國中の書生は學資の有無を思はず、争つて笈を負ひ來るを以て、府下に留學する書生の數は年々に増加し、殆ど萬を以て數ふる程なり。されば今日最も繁昌なるは下宿屋にて、毎戸八九人の書生を止宿せしめざるもの無し。され共此多數の書生中、高尚なる學術を修め、大學まで昇進するものは甚だ僅少にして、未だ高等中學へすら入る能はざるに早已に蕎麥屋行か牛肉店行と變じ、矢場遊びか女郎買と進化して、故郷を出づる時分の目的は何處へか消え失せたり

と云ふべきもの少なからず。或は又螢雪の功を積みて高等中學校に入るも體質の虚弱なるが爲めに學業未だ半ならずして廢學するもあり。目下大學に在るものは僅かに四百名内外に過ぎずと云へり。而して此四百餘の學生は、種々の艱難を堪へ盡して首尾能く茲に到りし者なれば、素より相當の資金もあり、才能と勉強力とにも富みて、全體より評せば先づ玉揃ひの才子なり。去々茲に愁ふ可きは、學生が資本の供給を仰ぐ地方の父兄は連年の不景氣にて金融意の如くならざる上に、本年虎拉病の流行劇しかりしが爲め商法も愈々振はず、之に加ふるに地方によりては數度の暴風雨ありて一層の困難を加へたれば、子弟の爲めに資金を送致するこゝも思ふ様になり難き狀あり。然るに大學にては近來月謝を引上られ、先年よりは三倍方の増加をなしたるのみならず、若し日限内に上納せざれば即日昇校を禁止せらるゝを以て、其日限までに國元よりの送金なければ俄に親族知己の許に駆け付けるか然らざれば衣類書籍を典して其急を免れざる可からず。加之本月二十日より學生たる者は一定の服を着用す可き嚴命ありたれば、是れ亦た是非共新調せざるを得ず。去りて學術上必要な書籍は軍人の兵器と一般、如何に高價なるも購求せざる可からざるが故に、資金の泉源は已に業に涸れ盡して其必要は日々に増加するの勢あり。是に於てか或は諸官省若くは諸會社等の貸費生を志願する者多く、又た共同して英語學校を設け又は獨立學舎を開く者もあり。又た諸方の私立學校へ雇はれて洋學の教授に従事する者あれば、知己の周旋にて洋書の翻譯に着手する者も少なからず。學生の骨折は非常に増加したる模様なり。去れば自家の學術は其進歩自ら宜しからざるの聞えあるも亦た已むを得ざるの結

果と云ふ可し。併し一利一害の諺の如く、金融の斯く不十分になりし爲めか將た世教の然らしむる所か、數年以前の如く學生にして花柳社會に流れ込み、金錢を浪費して其目的を誤るが如き者は甚だ少なく、近く根津に解語の花を賞し、遠く芳原に陽臺の夢を負ふの徒ありて、學友の書籍什器を質に入れ、或は知己親戚等を欺きて金錢を借り入れ、擧げ句の果て借金山の如く、目的と名譽を失するに到る如き者も、多數の學生中更になしとは斷言し難けれ共、先づ全體上より觀察を下せば如斯惡風は地を掃ひしのみならず、専ら體智徳の三育に心を傾け、春秋二期に開く端舟競争會の外新たに運動會を組織し、渡邊總長を推して會長となしたるが如き、又た何會何社とて學術研究或は演舌討論の爲め同盟せしもの太だ多く、殆ど毎週二回位の開會あるが如き、是れ皆な智育と體育に就て大効あるべし。斯の如く書生の氣風一變せし上に、前日來は寄宿舎、公認下宿所等設けありて尙ほ其品行徳義上に關涉せらるゝこゝとなりたれば、其徳も亦た一層の改良をなすべきか。以上は一般大學學生の情態を寫したるものなるが、其細點に到りては記す可きこゝ澤山あり。それは後日に譲らん。

附録四

私の學生時代

高田早苗

英語學校の同窓

私は叔父なる人の勸告に依つて、英學を學ぶこととなり、萬世橋の共立學校に入學したのであるが、間もなく東京英語學校に轉校した。當時の英語學校は東京を始め、大阪、名古屋、廣島、新潟、仙臺、長崎の七箇所に政府が立てたものであつて、今日で謂へば中學校程度のものであつた。何しろ當時はまだ中學校といふものは無かつたのである。私の東京英語學校に於ける同窓生には田中館愛橋、藤澤利喜太郎、佐藤昌介、新渡戸稻造、市島謙吉等といふ人々があつた。其の中で目下北海道帝國大學總長である佐藤昌介氏や、新渡戸稻造氏等は北海道に札幌農學校が出来たので、其の方へ行くこととなり、田中館、藤澤、私などは東京大學豫備門に入學することとなつた。其

の時は確か明治九年であつたと記憶する。當時大學豫備門に入學した人は、東京英語學校の出身者ばかりではない。他の英語學校からも、相當澤山來たのであつて、名古屋からは坪内雄藏、三宅雄二郎氏、大阪からは有賀長雄氏等が來た。

水夫上りの米人

當時共立學校に於ても、東京英語學校に於ても、また大學豫備門に於ても、教師の凡ては概ね西洋人であつた。其の中でも最も多いのが米人で、英人は其の次である。共立學校の如き英語を習ふ學校には随分如何はしい教師が多くて學生を困らしたものである。英語學校で私が就いて居た教師でフリームといふ米人教師は水夫あがりか何かで、餘り素養のない人の様に見受けられたが、極めて嚴格な人であつたから随分恐ろしかつた。英語の會話を誦讀させて若しそれが出來ない場合には零點を附げらるゝか、或は掌を出して教師の持つて居る棒で打たせるか、孰れか一方を選ばなければならぬ約束になつて居つたので、私は零點を附けらるゝよりは寧ろ體刑の方を望んだ。他の生徒も皆同様であつた。教師は力一杯打つから生徒の掌は紫色に腫れ上つた事がある。此の教師は頗る煙草が好きで、教室内でも一向構はず水夫が用ひる大きなパイプに煙草を一杯詰めて、

スバ／＼吸つて居たのである。

酒呑みの卷舌先生

同じく共立學校の英人教師で其の名は忘れたが大變な大酒飲が居た。常に酒臭くて、朝から酔
ばらつて教室に入つて來るといふ始末であつた。此の先生は卷舌の人で殊に「R」といふ字を發
音する時には特に大卷舌であつた。處が其の先生はロンドン生れであると非常に自慢して居つた
が、日本の江戸子も卷舌であるから、恐らく英吉利のロンドン子も同じく卷舌であるのであらう
と頗る敬服して居た。然し英語學校へ入學してからは教師は餘程上品であつた。第一級の受持は
スコットといふ米人で、第二級はレーシーといふ米人であつたが、何れも師範學校出身でもあつ
たかと思はれて、相當に教授法も心得て居るらしかつた。スコット先生は後に布哇中學の校長に
榮轉した。私が先年外遊の歸途布哇に立寄つた折、其の人に久振りで對面して往事を談じたこと
があつた。

日本人の先生

大學豫備門の教師には流石に學者らしい人もあつた様である。ドクトル某といふ學位のある先
生も二三人はあつた。然し其の人達も大概は宣教師あがりで見受られたのである。我々が教はつ
た日本人の大學教授には、外山正一、鳩山和夫、矢田部良吉などといふなか／＼錚々たる顔振が
居た。私が豫備門に入學した翌年に菊池大麓、穂積陳重等の諸教授が歸朝されたが、其の人々の
講義は聽かなかつた。

月六圓の給費

前にも話した通り私の家は極めて貧困であつたから大學教育を受けるなどとは私としては全體
出來ない筈であつた。然るに此頃に英學を治め、進んで大學教育を受けんとする者は極めて稀で
あつたから、政府は殊に青年をして高等の教育を受ける事を奨励して學費を給與したのである。
私が大學教育を受けることが出來たのは全く給費制度のあつたお蔭である。當時の給費額は毎月
六圓であつた。それだけあれば學校へ月謝を拂ひ、教科書を購入したり、賄料を仕拂つたりして
尙其の上の一週に二度位は牛肉店へ行つて酒を飲み牛肉を食ふだけの餘裕はあつたのである。當
時の物價の今日に比較して廉なること推して知るべしである。當時の學生は大體から見ても

質朴であつて、衣は肝に至り、袖は腕に至るといふ風采であつたから、白足袋でも履く心得違ひの者があると忽ち仲間同士から弾劾されて了ふ様であつた。

濱尾さんからお目玉

私の仲間である坪内雄藏、關直彦、石渡敏一、市島謙吉、山田一郎などの連中が、一週に一度位、神田神保町のでんぶら屋へ出かけては酒を飲んだり、てんぶらを食つたりして居たが、此の事がいつしか當時の大學總理補である濱尾新氏の耳に入つたので、我々連中一同は呼び付けられて散々お目玉まで食つた事がある。濱尾さんから、一體君達はてんぶらを食ふのに、一人前幾ら錢を使ふかと尋問された時、一人前二十錢づゝでありますと恐縮して答へた事を記憶してゐる。

借物のフロックコート

明治十五年七月に私は東京大學を卒業した。然し其の卒業式に出席する洋服がないので、已むなく叔父さんのフロックコートを拜借して卒業式に間に合せた。其の年の十月から私は東京専門學校、即ち今日の早稲田大學の講師となつて、爾來早稲田學園の世話を續けてゐるのであ

る。

小型のボート

私の學生時代は今日の如く一般社會の進歩しない時代であつたから、學生の興味を引く様な事も極めて少なく、隨つて今日まで記憶に残つて居ることも餘りない。例へば運動の如きも、今日盛んであるベースボールも、庭球もなかつた。況やフットボールやゴルフ等の如きものは全くなかつたのである。故に運動會といつた所で、只酒樽（當時は花魁酒といふのが幅を利かせてゐた。）と煮べを携へては飛鳥山邊へ出かけて、櫻花の下で飲食をする位の事に過ぎなかつた。何しろ當時は綱引をして喜んでゐた幼稚な時代であつた。ボートなども私の學生時代にはなく、友人砂川雄峻氏の發起で醸金して小型なボートを一艘作製し、之れを飛鳥丸と名づけて隅田川を盛んに漕廻つた位の有様であつた。

演說會の起原

當時學生の最も熱中したのは演說會であつた。學生は種々の會を組織して盛んに演說の稽古を

した。演説といつても私の大學豫備門に居る頃漸く始まつた位のもので、當時福澤諭吉先生が三田の慶應義塾内に講堂を建てて一週間に一度其處で演説をされた。私共はよくそれを聴きに三田山上に出かけたものである。東京大學でもそれと前後して小さなホールが出来て、其處へ西村茂樹といふ先輩學者が来て演説即ちスピーチとは何ぞやといふ講釋をされて、我々は始めて演説の何ものなるかを理解した譯である。其の後間もなく雄辯家馬場辰猪、江木高遠といふ人が来て西洋のエロキューションの様な演説をして聴かせたので、我々學生は大いに心酔して前述の如く學生が演説の組合を作つたのである。其の中で戊寅社といふのは山田喜之助、有賀長雄等の作つたもので、晩成會といふのは私達が作つた演説の會であつた。その當時私は本郷の進文學社といふ學校へ教へに行つた事があつたが、其處に居た小川爲次郎といふ人の紹介で小野梓さんに面會することとなつた。

小野氏は當時の大藏卿大隈重信其の人の片腕ともいふべき人物で土佐出身の人であつた。小野さんは英國に暫く留學して歸朝してからは大隈大藏卿に重用されたのであつたが、此の人は學問もあり識見も相當高い人で、立憲政治の建設に大いに力を盡した人である。此の人に面會してからは屢々遊びに行く様になり、私は友人を誘つて橋場の先の眞崎といふ小野さんの住居に屢々往

來して盛んに議會政黨に關する研究をしたのである。その連中には大學の演説會の幹部連中が澤山ゐた。即ち岡山兼吉、山田一郎、市島謙吉、山田喜之介等の連中である。當時小野さんの居宅の傍に鷗の渡といふのがあつたから我々共の會合を呼んで鷗渡會といつたのである。

附録五

書生氣質の芝居

市島春城

いつであつたか時は忘れたが、(多分明治三十年頃であつたかと思ふ。)私が幹事で一ツ橋時代の帝大の同窓會を東臺の櫻雲臺(後に梅川樓)に開いたことがあつた。學生時代に世話に成つた有斐閣書店の主人や、某唐物屋の主人などを客分に請待したのであるが、其の際紅葉君は私を助けていろく周旋されたが、餘興に伊井蓉峰に書生氣質をやらせてはどうか、幸に櫻雲臺には舞臺もある、蓉峰とは懇意だから寄附的にやらせる、別に報酬は要らぬとあるから、喜んで山人に任せた。伊井も快諾して門人數名を伴うて登場し、確か西瓜を割るあたりをやつたが、これは意外であつた。面白からうと期待したのが全く裏切られて全然失敗に歸した。何分吾々時代の大學生の氣合と可なり違つてもゐて、伊井の肚に入り兼ねたのも無理はなく、兎角明治十四五年頃の大學生の風を寫し出すことが出来なかつた。座中には此の書生氣質の作中の人物も甲乙丙丁居並

んでゐた。確か西瓜割りの本尊三宅雪嶺君は舞臺に接近して見てゐた。此の小説の作者坪内君も席にゐた。めいくのことを時代違ひの書生から成り上つた俳優が演ずるのだから、いろくのアラが現はれて、十分も経つか経たぬに、皆々退屈を生じて、早く止めよ、あれよりお互ひがやる方がましだなどいふものもあつて、蓉峰には氣の毒であつた。

其の會の案内状は、これも紅葉山人の發案で、同門下の堀紫山の作つた長詩を一枚刷にしたものであつた。初めは知合ひの連中へだけ配る積りであつたのが、摺物が残つたので、誰もよからう彼もよからうと云ふので、方々へ配つた。其の一枚が紅葉山人の手から鷗外漁史の手許へも行ったのであらう。處が郵便に出し後れた爲め、間に合ふやうに配達されなかつたと見えて、折返して斷り狀に代へて、紫山の詩に次韻して寄越したのが次の寫眞の通りである。筆蹟から見ても一氣に走筆したものらしい。鷗外漁史のものとしては珍らしいものであらう。紫山の原詩の摺物が見つからないので、併せ掲げることが出来ないのは遺憾である。

讀報守一橋同密會
 新事次
 為表什物乃三年、候
 將與元壽及將不匪
 在珠場言朋結武由來
 不知莫使與得伴
 經平生唯願為真食
 散燈行抹流心事
 賜雅與世與友事
 聞說一橋同密會可理
 無效逆當時創立一會
 制橫濱手巖橋風評入耳
 兩山發之欲以投系收投

是幹事懇懇機牙三會
 亦志之與手數一皆此禮
 似亦精豈不深如機會
 不可失會則會外吞春舟
 如常日果行員仔細講
 台靈焉、概是三日之所
 本八月下出既四日即
 且吾有先約區應取、印
 後之日無與底事達名
 機者與幹事不都命、直
 秀華州及郵
 四月十七日
 瀧原橋主

附録六

作者餘談

逍遙遊人訂

神代種亮記

『書生氣質の下繪が残つて居つたとは全く驚いた。いよ／＼舊惡露顯に及んだ次第で。實は書生氣質を書き始めてから、四人ほどやつて來た人がある。私は「來る者は拒まず」流だが、此方から尋ねて行くなるといふ事はしない方で、みんな向うからやつて來た人である。長原君も向うから見えた。あの頃長原君は神田孝平さんの書生どころをして居られたが、書生氣質の五號までの挿繪を見て「あれではいかん。もつと新らしいものでなくてはいかん。私に書かせて下さい。」といふ話で、それは何よりだと思つて喜んで此方から頼んだ。私は大へん面白い繪だと思つて居つた。ところが、長原君にはお氣の毒であつたが、新らし過ぎて、どうも世間受けがしなかつた。あの頃は矢張り浮世繪流の挿繪でないと新聞でも喜ばれなかつたやうな有様で、残念であつたけ

れども一枚だけで中止して貰つた次第である。』

『あの頃の大學生にはウブナ、アドケナイ、上品な所があつた。私立學校の書生とはそこが大へんな違ひで、そのウブナ、アドケナイところを兎も角も寫した積りである。魯文の書いた書生などは丸きり違つて居る。作の方では私塾生としてあるけれども、その實は大學生であつて、本當の私立學校の書生はあんなものでなかつた。大學生の中には三十分の休時間に一ツ橋から上野まで風を揚げながら往つて還つたといふやうな人が居つた。ずつと後に、明治三十年頃であつたか、東京大學の同窓の集りがあつて、會場は梅川亭だつたかと思ふが、伊井蓉峰が書生氣質をやつた事がある。三宅（雄次郎）君も高田君も來て居つた。其の時に私は、伊井がやつて居るのが全く見るに堪へないので、仕舞まで面を背けてばかりゐた事がある。ウブナ、上品な味がちつとも出てゐなかつた。あの頃官學と私學との相違は著しかつたものだが伊井一座は其時分の事を丸きり知らないで、物になつてゐなかつた。』

『モデルは或程度まで有るけれども、それは外面的のベキュリヤリチだけであり、而も三人を集めて一人にしたり、二人を一人にしたりしてある。小町田は高田といふことに世間ではなつてゐるが、事件も虚構、性格も似てゐない。任那のベキュリヤリチは山田一郎が立派にモデルである

といへる。山田は廣島の人で、あの頃から多少山陽氣取りで、おしやべりの健筆家で、滑稽味の勝つた一種の天才者であつた。或意味に於て須河のモデルになつた人は、非常に秀でた學才ある人であつたが、亡くなつた。桐山を三宅君だと世間では思つてゐるらしいが、それはあの頃の同君の頭からの推察であらう。あゝいふ頭の人はまだ何人も居つた。勿論それは頭だけの話で、私のモデルにした、後頭の禿けてゐる男は、法科にゐた。私との交際は少しも無かつたが、奇人であつた。三十分の外出時間に風を揚げて池ノ端から駈け戻つたのも其男であつたかと思ふ。つまり親しくないでモデルに借用したのであつたらう。もつとも性格上の類似は無い。但し、あゝいふ腕力組は少なくなく、同性愛は中々盛んであつた。一等老成人らしい守山は、故岡山氏と關直彦氏とを一つに集めて拵へたものともいへる。「梧堂言行録」編纂の時に、私から山田に遣つた手紙に「梧堂半峰兩兄をこきませにして守山といふ人物を作り云々」と書いたが(別項参照)、あれは態とあゝ書いたのであるらしい。小町田を高田といふ評判が高いので、氣の毒さに其れを緩和する積りで書いたのであらうと思ふ。岡山は生きて居れば多分大臣になつて居たらう。それから、そゝかしくてよく食ひよく喋舌る男は、或程度まで死んだ或友人と私自身とを一つにしたやうなものともいへる。』

『表題は初め「遊學八少年」と題したのである。其頃同志と鴻ノ臺などへ遠足する事が屢々あつた。其際駄洒落まじりに小紀行を書綴つたり何かした。言はば、さういふ戯文を同志が彼れ此れ云つたのが本で、圖に乗つて戯作三昧に入つたのであつた。初版本の十號に、本文に無關係の口繪が附いてゐる形に成つたのも、つまり最初から明かに立案が無かつた爲である。』

校訂者云。第十二回に見ゆる翻譯仕事の一條に就きては、作者の曾て「山田一郎言行録」に寄せし談話あり。

『大學時代の山田君の文章は一言以て之を蔽へば達筆であるだけに又冗漫であつた。殆ど平常の言葉と文章との間には、言文一致體と雅俗折衷體との區別がある外何等の差違も無いと言つてよかつた。其頃學校でやらせた西洋雜誌の翻譯(註。大學より發行せし學藝志林の原稿のこと。文部省より給費額を減少せし埋合せに、大學にて學生に割當てて翻譯料を得しむるやう取計らひしなり)は、十行二十字一枚五十錢といふのであつたが、君は忽ちに十枚位書く。他人の分迄も書く。而して其の秘訣に曰く、君等は「何々すべし」と書いて居るから駄目だ。「何々せざるべからざるものたることを斷言するを憚らざるなり」と書くべしだ。五

六枚は只束の間に綴りおほせ侍るなりだらうと。此の流儀で君は同窓三人分を一人で翻譯して、其の翻譯料を懐ろにして飄然遠足などをしたのである。』

一讀當世書生氣質附錄 畢

12163

著者所有



大正十五年三月三日印刷
大正十五年三月十二日發行

明治文學名著全集 第一篇

當世書生氣質 定價金貳圓五拾錢

著者 坪内逍遙

校訂者 神代種亮

發行者 大野孫平

東京市神田區表神保町三番地
株式會社東京堂代表者

印刷者 沖田瀧次郎

東京市小石川區戶崎町七十二番地

發行所 株式會社 東京堂

振替東京二七〇番

明治文學名著全集書目

(第一篇)	坪内逍遙	當世書生氣質	定價 貳圓五拾錢
(第二篇)	幸田露伴	風流佛其他	定價 壹圓參拾錢
(第三篇)	坪内逍遙	小説神髓	同
(第四篇)	河竹默阿彌	島衛月白浪	同
(第五篇)	假名垣魯文	高橋阿傳夜及譚	同
(第六篇)	森田思軒	死刑前の六時間	同
(第七篇)	尾崎紅葉	色懺悔其他	同
(第八篇)	須藤南翠	新粧の佳人	以下近刊
(第九篇)	菊亭香水	悲風世路日記	同
(第十篇)	松村春輔	小開明春雨文庫	同
(第十一篇)	山田美妙	胡蝶其他	同
(第十二篇)	神代種亮編	明治初期新體詩選	同

(以下續々刊行)

附錄

三十六ノ五

に及んだ。

に及んだ

本文十七ノ十三欄外ニ入

註。アン
ドール
Under-wood: A Hand-book of English Literature.
英文大家
文章は、あ
るは、恐
らくは、英
文大家
の誤文
集の記
ならむ。

(第十篇)	松村春輔	開明小説	春雨文庫	同
(第十一篇)	山田美妙	胡蝶	其他	同
(第十二篇)	神代種亮編	明治初期新體詩選		同
(以下續々刊行)				

「當世書生氣質」正誤並補記

	(頁)	(行)	(誤)	(正)
解題	一ノ四	一ノ四	一讀	「一讀」
同	一ノ五	一ノ五	三歎	三歎
同	三ノ四	三ノ四	三四年	四五年
同	三ノ四	三ノ四	三類	四類
本文	二ノ欄外	二ノ欄外	藤八五門奇妙丸賣	藤八五文奇妙丸賣
同	二十四ノ欄外	二十四ノ欄外	註。香箱製造のぬれむり。(脱字)	
同	九十ノ一	九十ノ一	中	中(旁訓)
同	百三十六ノ十四	百三十六ノ十四	主張	主張(旁訓)
同	百五十五ノ九	百五十五ノ九	向島の植半に。	向島(水神の八百松)に。
同	百五十五ノ欄外ニ入	百五十五ノ欄外ニ入	(への植半)	
同	百六十八ノ十二	百六十八ノ十二	失敬	失敬(旁訓)
同	百八十三ノ五	百八十三ノ五	するか	するか
同	百八十三ノ十一	百八十三ノ十一	女	女(旁訓)
同	百八十九ノ五	百八十九ノ五	冗長	冗長(旁訓)
同	百九十八ノ四	百九十八ノ四	へうれしがる)人があるんさ。へうれしがる人があるんさ。	
同	二百六十六ノ十四	二百六十六ノ十四	瘦がた	瘦がた(旁訓)
同	二百八十三ノ十一	二百八十三ノ十一	切瘡	切創
同	三百十ノ十三	三百十ノ十三	鐵青皮	鐵面皮
附録	三十六ノ五	三十六ノ五	にに及んだ。	にに及んだ

本文十七ノ十三欄外ニ入

註。アン
マルウー
Under
wood. A
Hand-
book of
English
Literature.
英文大家
文章は恐
るは、あ
ら、くは、
文家、英
集の誤記
ならむ。

同
百三十六、十四

無類遊。當時創立第一會。大

開橫濱千歲樓。風評入耳

浦山敷。久欲以投名狀投。忽

主選
禿筆艸返郵。

四月七日夕

灌頂樓主人

一當...

附錄三十四、三十五頁 鷗外漁史の詩

見幹事懇飛檄。第二會

讀檄寄一橋同志會

開忍之岡。千載一時此之謂。吾

幹事次韵

雖不精豈不浮。好機會兮

蕎麥汁粉乃至牛。健啖會

不可失。食則食牛吞吞舟。

誇無匹儔。又將杯酒澆何物。

不知當日果何日。仔細讀來

磊塊一名肝積球。由來兩

指空樓。檄是三日之所作。云

刀稱難使。吾獨併得附鼻

來八日可出頭。既曰八日即明

謳。平生唯厭嗟來食。況

日。吾有先約匪應求。消印認

敢膝行拜於流。心事如伴

得七日發。底事這般為踟躕。

與誰語。世無友達最堪憂。

擬責幹事不都合。直揮

聞說一橋同志會。可謂近頃

秃筆艸返郵。

無類遊。當時創立第一會。大

四月七日夕

開橫濱千歲樓。風評入耳

灌頂樓主人

浦山敷。久欲以投名狀投。忽

一會書...

